

大河内遺跡
稻穂遺跡
下坂遺跡

一般国道374号（美作岡山道路）
道路改築に伴う発掘調査 2

2 0 0 8

岡山県文化財保護協会



大河内遺跡 縄文時代草創期の石器

卷頭図版 2



1 大河内遺跡 尖頭器



2 大河内遺跡 石器および剥片



1 大河内遺跡 遺跡周辺遠景（南上空から）



2 大河内遺跡 弥生時代遺構全景（北上空から）

卷頭図版 4



1 大河内遺跡 竪穴住居11（南から）



2 大河内遺跡 竪穴住居11出土土器



1 下坂遺跡 遺跡周辺遠景（北上空から）



2 下坂遺跡 横口付製炭窯1（西から）

卷頭図版 6



1 下坂遺跡 製鉄炉 1 (西から)



2 下坂遺跡 製鉄炉 2 (西から)

序

本報告書には、岡山県勝田郡勝央町黒上に所在する大河内遺跡、美作市稻穂に所在する稻穂遺跡、美作市位田に所在する下坂遺跡の発掘調査成果を収録しました。

岡山県では、県内を循環する高速道路網の整備、および県東部地域の発展を目的として、中国縦貫自動車道と山陽自動車道を南北に結ぶ地域高規格道路「美作岡山道路」の建設を進めています。

岡山県教育委員会では、この事業の計画段階から、路線内に所在する遺跡の取り扱いについて関係部局と協議を重ねてまいりました。その結果、現状での保存が困難な部分については、やむを得ず記録保存の措置を講じてきました。勝央町内では、平成14・15年度に南東部の丘陵上に位置する国司尾遺跡・坂田遺跡ほかで発掘調査を実施し、その成果については『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』197として刊行いたしました。本書に収録する3遺跡は、これに引き続いて平成16年度から18年度にかけて発掘調査を実施したものです。

大河内遺跡では、局部磨製石斧、有茎尖頭器など縄文時代草創期の石器類が剥片を伴って大量に出土したことから、当時の石器製作地の可能性が指摘されており、岡山県内はもとより西日本においても類例の少ない遺跡として、大きな注目を集めました。また、弥生時代、古墳時代、中世の各時期の集落も良好な状態で検出されています。稻穂遺跡では、奈良時代末から平安時代初頭にかけての大形掘立柱建物群が検出され、公的な性格の強い施設と考えられています。下坂遺跡では、古墳時代後期の製鉄炉と製炭窯が隣接した状態で発見され、当時の製鉄作業の実態を解明するうえで貴重な成果が得られました。

これらの成果を収録した本書が、学術研究に寄与するだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶための資料として広く役立つならば幸甚に存じます。

最後に、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方に有益な御助言と御指導を賜り、また関係各位から多人な御協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 高畠知功

例　　言

1 本書は、一般国道374号（美作岡山道路）道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県美作県民局（平成16年度までは岡山県勝英地方振興局）の依頼を受け、岡山県古代古墳文化財センターが発掘調査を実施した、大河内遺跡・福地遺跡・下坂遺跡の調査報告書である。

2 大河内遺跡は岡山県勝田郡勝央町黒土・福地遺跡は美作市福地（調査時は英田郡美作町）、下坂遺跡は美作市位田にそれぞれ所在する。

3 上記の3遺跡のほか、美作市殿所に所在する堂下散布地でも確認調査を行ったが、遺構・遺物が検出されなかったため、その結果については第2章で触れるにとどめた。

4 試掘・確認調査は、平成15年度に柴田英樹が大河内遺跡を、16年度に大橋雅也が福地遺跡を、17年度に柴田由下坂遺跡・堂下散布地を担当して実施した。

発掘調査は、平成16年度に岡本寛久が福地遺跡を、17年度に二宮治夫・岡本泰典・和田剛が大河内遺跡を、18年度に二宮・岡本泰・石田為成が大河内遺跡・下坂遺跡を担当して実施した。

5 発掘調査および報告書作成に際しては、「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委嘱した。委員各位からは、終始有益な御指導・御助言をいただいた。記して深謝の意を表する次第である。

角南勝弘（美咲町教育委員長）

富岡直人（岡山理科大学総合情報学部）

野崎貴博（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）

間壁忠彦（倉敷考古館）

6 本報告書の作成は平成17・18年度に実施し、岡本泰・石田が担当した。

7 本書の執筆は、調査・整理担当者で分担して行い、章ないし各項目の末尾に文責を記した。また、第4章については岡本寛が編集・執筆を行い、全体編集は岡本泰・石田が行った。

8 本報告書に関わる遺構・遺物の一部について、次の諸氏に分析あるいは同定・鑑定等を依頼した。記して御礼申し上げる。

調査指導　高橋　謙（元岡山県文化財保護審議会委員）

地形の考察　中村唯史（島根県立三瓶自然館）

石器石材同定　鈴木茂之（岡山大学大学院自然科学研究科）

胎土分析　白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

鉄滓分析　大澤正己・鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ）

熱残留磁気測定　時枝克安（法古データ）

9 本報告書に関わる遺物の一部について、次の諸機関に分析あるいは同定・鑑定を委託した。

炭素14年代測定　（株）古環境研究所

（株）パリノ・サーヴェイ

環境考古研究会

樹種同定　環境考古研究会

- 10 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 11 美作市在住の山下鉄雄氏からは、植穂遺跡に関する所蔵資料の掲載を快諾していただいた。記して感謝の意を表する次第である。
- 12 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高である。各遺構図の方位は平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。抄録に記載した経緯度も世界測地系に基づく。
- 2 本書に収載した遺構・遺物図の縮尺は、主なものについては一部の例外を除いて以下のとおり統一し、各図にも明記している。
遺構　堅穴住居：1/60　掘立柱建物：1/80・1/100・1/120　土塙・土塙墓・溝断面：1/30
遺物　土器：1/4　石器・石製品：2/3・1/2・1/3　土製品：1/3
- 3 遺構配置図において遺構名称を省略する場合は、次のように表記している。
堅穴住居：住　土塙：土　土塙墓：墓　掘立柱建物：建
- 4 土器以外の遺物については、材質を示す次の記号を遺物番号の前に付している。
石器・石製品・鉄鉱石：S　土製品・かわ壁：C　金属製品・鉄滓：M
また、大河内遺跡の縄文時代の石器については遺物番号横に括弧付きで調査時の遺物取り上げ番号を併記している。
- 5 掘載土器のうち、中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径の復元が不確実であることを示す。
- 6 遺構図における、被熱範囲、炭化物の分布範囲については、下記のトーンで表現し、そのほかのものについては、個別に掲載している。



被熱範囲



炭化物範囲

- 7 土層断面図などに使用した十色の表記は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものと、各調査者の記述によるものがある。
- 8 第2・3図は国土地理院発行の1/50,000地形図「津山東部」・「周匝」を複数のうえ、一部改変したものである。
- 9 本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用した。

目 次

卷頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過	5
第1節 発掘調査の経緯	5
第2節 試掘・確認調査の経過	6
第3節 本調査および報告書作成の経過	7
第4節 調査および報告書作成の体制	8
第3章 大河内遺跡	11
第1節 調査区の概要	11
1 概要	11
2 遺跡の層序と遺物の出土状況	12
第2節 縄文時代の遺物	23
1 概要	23
2 遺物出土分布状況	24
3 出土遺物	24
第3節 弥生時代の遺構・遺物	37
1 概要	37
2 勝穴住居	39
3 十軒墓	72
4 土壙	79
5 溝	83
6 その他の遺構・遺物	84
第4節 古墳時代の遺構・遺物	88
1 概要	88
2 勝穴住居	89
3 十軒	93
4 火廻	93
5 遺構に伴わない遺物	94
第5節 中世の遺構・遺物	95

1	概要	95
2	掘立柱建物	96
3	土壠	100
4	溝	110
5	その他の遺構・遺物	115
第6節	まとめ	122
1	縄文時代草創期の遺物について	122
2	弥生時代の遺構と遺物について	124
3	中世の遺構と遺物について	126
第4章	稲穂遺跡	129
第1節	調査区の概要	129
第2節	古代の遺構・遺物	132
1	掘立柱建物	132
2	溝	138
3	落ち込み	139
4	包含層出土遺物	140
第3節	弥生時代以前の遺物	143
第4節	遺跡内採集遺物	143
第5節	まとめ	144
第5章	下坂遺跡	145
第1節	調査区の概要	145
第2節	製鉄関連の遺構・遺物	147
1	概要	147
2	製鉄炉	151
3	土壠	155
4	その他の遺構	157
5	製鉄関連遺物	158
6	横口付製炭窯	163
第3節	その他の遺構・遺物	166
1	概要	166
2	遺構・遺物	166
第4節	まとめ	168
1	製鉄炉について	168
2	横口付製炭窯について	170
付載	自然科学分野における鑑定報告	
付載1	人河内遺跡の地形の概要（中村唯史）	171
付載2	大河内遺跡出土サスカイトの産地分析および土器の胎土分析（白石 純）	173

付載 3 下坂遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査 (大澤正己・鈴木瑞穂)	177
付載 4 下坂遺跡の製鉄炉 3 基と製炭窯 1 基の地磁気年代 (時枝克安)	190
遺構一覧 (観察) 表	
遺物一覧 (観察) 表	
大河内遺跡 3 区出土遺物一覧表	
新旧遺構名対照表	
写真図版	
報告書抄録	

図 目 次

第 1 図 遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第25図 出土石器③ (1/2)	35
第 2 図 周辺道路分布図 (1/50,000)	2	第26図 出土土器 (1/4)	36
第 3 図 予定路線と対象遺跡 (1/50,000)	5	第27図 弥生時代遺構全体制図 (1/700)	37
第 4 図 室下敷布地トレチ配置図 (1/1,500)	6	第28図 弥生時代主要遺構全体図 (1/400)	38
第 5 図 調査区およびトレチ配置図 (1/1,200)	11	第29図 壁穴住居 1 (1/60)・出土遺物 (1/2)	39
第 6 図 大河内遺跡全像図 (1/800)	12	第30図 壁穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)	40
第 7 図 調査区上層断面図① (1/60)	13	第31図 壁穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/4)	41
第 8 図 調査区土層断面図② (1/60)	14	第32図 壁穴住居 4 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	41
第 9 図 遺物分布および測量図 (1/400)	15	第33図 壁穴住居 5 (1/60)・壁穴住居 5 の変遷 (1/200)	42
第10図 遺物分布図<調査区北西部> (1/150)	16	第34図 壁穴住居 5 a・b (1/60)・壁穴住居 5 出土遺物 (1/4・1/2・1/3)	43
第11図 遺物分布図<調査区東部> (1/150)	17	第35図 壁穴住居 5 c・d (1/60)	44
第12図 遺物分布図<調査区南西部> (1/150)	18	第36図 壁穴住居 6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	46
第13図 遺物分布図<調査区東部> (1/150)	19	第37図 壁穴住居 6 の先遷 (1/250)・ 壁穴住居 6 a (1/60)	47
第14図 遺物垂直分布<Xサイン> (横軸: 1/400、縦軸: 1/40)	21	第38図 壁穴住居 6 b (1/60)	48
第15図 遺物垂直分布<Yライン> (横軸: 1/400、縦軸: 1/40)	22	第39図 壁穴住居 6 c・d (1/60)	49
第16図 出土石器① (2/3)	26	第40図 壁穴住居 6 e・f (1/60)	50
第17図 出土石器② (2/3)	27	第41図 壁穴住居 7 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	51
第18図 出土石器③ (2/3)	28	第42図 壁穴住居 8 (1/60)・出土遺物 (1/4)	52
第19図 出土石器④ (2/3)	29	第43図 壁穴住居 9 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	53
第20図 出土石器⑤ (2/3)	30	第44図 壁穴住居 10 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	54
第21図 出土石器⑥ (2/3)	31	第45図 壁穴住居 11 (1/60)・中央穴 (1/30)・ 出土遺物① (1/8)	56
第22図 出土石器⑦ (2/3)	32	第46図 壁穴住居 11 出土遺物② (1/4)	57
第23図 出土石器⑧ (2/3)	33		
第24図 出土石器⑨ (2/3・1/4)	34		

第47回	堅穴住居11出土遺物③ (1/4)	58	第85回	土塹6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	82
第48回	堅穴住居11出土遺物④ (1/4)	59	第86回	土塹7 (1/30)・出土遺物 (1/4)	82
第49回	堅穴住居11出土遺物⑤ (1/4)	60	第87回	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	83
第50回	堅穴住居11出土遺物⑥ (1/4)	61	第88回	溝2・3 (1/30)	83
第51回	堅穴住居11出土遺物⑦ (1/4・1/2)	62	第89回	溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	82
第52回	堅穴住居12 (1/60)	63	第90回	下がり廻面回 (1/60)・出土遺物 (1/4)	84
第53回	堅穴住居12出土遺物 (1/4)	64	第91回	造構に伴わない遺物① (1/4)	85
第54回	堅穴住居13 (1/60)	64	第92回	造構に伴わない遺物② (1/2)	85
第55回	堅穴住居14 (1/60)	65	第93回	造構に伴わない遺物③ (1/2・1/3)	87
第56回	堅穴住居14a (1/60)	66	第94回	古墳時代遺構全体回 (1/700)	88
第57回	堅穴住居14b・c (1/60)	67	第95回	堅穴住居17 (1/60)	89
第58回	堅穴住居14出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	68	第96回	堅穴住居17ママド・土塙1・2 (1/30)	90
第59回	堅穴住居15 (1/60)・出土遺物① (1/8)	69	第97回	堅穴住居17出土土遺物① (1/4)	91
第60回	堅穴住居15出土遺物② (1/4・1/3)	70	第98回	堅穴住居17出土土遺物② (1/4・1/5・1/2・1/3)	92
第61回	堅穴住居16 (1/60)・出土遺物 (1/4)	71	第99回	土塹8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	93
第62回	土塹墓1～14 (1/80)	72	第100回	火通1 (1/30)	93
第63回	土塹墓1 (1/30)	73	第101回	造構に伴わない遺物 (1/4・1/3)	94
第64回	土塹墓1出土遺物 (1/4・1/2・1/3)	74	第102回	古墳造構全体回 (1/700)	95
第65回	土塹墓2・3 (1/30)	75	第103回	掘立柱建物1出土遺物 (1/4)	96
第66回	土塹墓4 (1/30)	75	第104回	掘立柱建物1 (1/120)	97
第67回	土塹墓5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	75	第105回	掘立柱建物2 (1/100)・出土遺物 (1/4)	98
第68回	土塹墓6 (1/30)	76	第106回	掘立柱建物3 (1/100)・出土遺物 (1/4)	99
第69回	土塹墓7 (1/30)	76	第107回	土塹9 (1/30)	100
第70回	土塹墓8 (1/30)	76	第108回	土塹10 (1/30)	100
第71回	土塹墓9 (1/30)	76	第109回	土塹11 (1/30)	100
第72回	土塹墓10 (1/30)・出土遺物 (1/4)	77	第110回	土塹12 (1/30)	101
第73回	土塹墓11 (1/30)	77	第111回	土塹13 (1/30)・出土遺物 (1/4)	101
第74回	土塹墓12 (1/30)・出土遺物 (1/4)	77	第112回	土塹14・15 (1/30)・出土遺物 (1/4)	102
第75回	土塹墓13 (1/30)	78	第113回	土塹16 (1/30)	102
第76回	土塹墓14 (1/30)・出土遺物 (1/4)	78	第114回	土塹17・18 (1/30)・出土遺物 (1/4)	103
第77回	土塹墓15 (1/30)・出土遺物① (1/4)	78	第115回	土塹19 (1/30)・出土遺物 (1/4)	103
第78回	土塹墓15出土遺物② (1/4)	79	第116回	土塹20 (1/30)・出土遺物 (1/4)	104
第79回	土塹1 (1/30)・出土遺物① (1/4)	79	第117回	土塹21 (1/30)・出土遺物 (1/4)	104
第80回	土塹1出土遺物② (1/4)	80	第118回	土塹22 (1/30)	104
第81回	土塹2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	80	第119回	土塹23 (1/30)・出土遺物 (1/4)	104
第82回	土塹3 (1/30)・出土遺物 (1/4)	81	第120回	土塹24 (1/30)	105
第83回	土塹4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	81	第121回	土塹25 (1/30)	105
第84回	土塹5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	82	第122回	土塹25出土遺物① (1/4)	106

第123図 土塙25川土遺物② (1/4)	107	第159図 振立柱建物 2 (1/80)	132
第124図 土塙26 (1/30)・出土遺物 (1/4)	108	第160図 振立柱建物 3・溝 1 (1/80)	133
第125図 土塙27 (1/30)・出土遺物 (1/4)	108	第161図 振立柱建物 3山土遺物 (1/4)	134
第126図 土塙28・29 (1/30)・山土追跡 (1/4)	109	第162図 振立柱建物 4・溝 2・3 (1/80)	134
第127図 土塙30 (1/30)	109	第163図 振立柱建物 5 (1/80)	135
第128図 土塙30川土遺物 (1/4)	110	第164図 振立柱建物 6 (1/80)	135
第129図 溝 5 (1/30)	110	第165図 振立柱建物 7 (1/80)	136
第130図 清 6 (1/30)	111	第166図 振立柱建物 8 (1/80)・出土遺物 (1/4)	137
第131図 清 7 (1/30)	111	第167図 溝 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	138
第132図 溝 8 (1/30)	111	第168図 清 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	139
第133図 清 9 (1/30)・出土遺物 ① (1/4)	111	第169図 溝 3 (1/30)	139
第134図 溝 9 出土遺物② (1/4)	112	第170図 溝 4～7 (1/30)	139
第135図 清 10 (1/30)・出土遺物 (1/4)	112	第171図 落ち込み 1 (1/80)・出土遺物 ③ (1/3)	139
第136図 溝 11 (1/30)・出土遺物 (1/4)	113	第172図 落ち込み 1出上遺物④ (1/4)	140
第137図 清 12 (1/30)	113	第173図 北河原区南半中段包含層出土遺物 (1/4)	141
第138図 清 13 (1/30)・出土遺物 (1/4)	113	第174図 北河原区出土遺物 (1/4)	142
第139図 清 14 (1/30)・出土遺物 (1/4)	114	第175図 南渡査区出土遺物 (1/3・1/4)	142
第140図 清 15 (1/30)・出土遺物 (1/4)	114	第176図 表面採集およびトレンチ出土古代遺物 (1/4)	142
第141図 清 16 (1/30)・出土遺物 (1/4)	114	142
第142図 柱穴 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	115	第177図 沢谷時代以前遺物 (1/2・1/4)	143
第143図 その他の柱穴出土遺物① (1/4)	116	第178図 道路内表面採集遺物 (1/2・1/4)	143
第144図 その他の柱穴出土遺物② (1/4)	117	第179図 発掘調査区全体制 (1/400)	144
第145図 道筋に伴わない遺物① (1/4)	118	第180図 渡査区およびトレンチ配置図 (1/1,000)	145
第146図 道筋に伴わない遺物② (1/4)	119	第181図 下段道路全体制 (1/600)	146
第147図 道筋に伴わない遺物③ (1/4・1/3)	120	第182図 製鉄炉連鎖配置図① (1/120)	148
第148図 道筋に伴わない遺物④ (1/3)	121	第183図 製鉄炉連鎖配置図② (1/120)	149
第149図 岡山県内の攜持時代草創期遺物出土地	122	第184図 渡査区上層断面図 (1/80)	150
第150図 先生土器の縦年表 (1/18)	124	第185図 製鉄炉 1・排水溝 (1/60)	151
第151図 京都系の杯 (1/4)	126	第186図 製鉄炉 1 (1/30)	152
第152図 伝播途跡周辺地形図および発掘調査地図 (網掛け部分) 位置図 (1/3,000)	129	第187図 製鉄炉 2 (1/30)	153
第153図 伝播調査全トレンチおよび本調査発掘区 (網掛け部分) 位置図 (1/3,000)	129	第188図 製鉄炉 3 (1/30)	154
第154図 北渡査区造構配置図 (1/200)	130	第189図 製鉄炉 3 排溝溝割面図 (1/30)	155
第155図 北渡査区中央付近土壌断面図 (1/80)	130	第190図 土壌 1～3 (1/30)	155
第156図 南渡査区造構配置図 (1/200)	131	第191図 土壌 4～7 (1/30)	156
第157図 南渡査区北西部上層断面図 (1/80)	131	第192図 牛塚 8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	157
第158図 振立柱建物 1 (1/80)	132	第193図 たわみ断面図 (1/60)	157

第203図 振立柱建物 I (1/80)	166	第205図 その他の遺物 (1/4)	167
第204図 造状遺構 I (1/30)	167	第206図 岡山県内の製鉄炉 (1/120)	169

表 目 次

第1表 文化財保護法に基づく提出書類一覧	10	第3表 岡山県内の縄文時代草創期遺物一覧	123
第2表 石器組成表	23	第4表 勝央町内各遺跡における弥生時代の遺構数	125

写 真 目 次

写真1 3区作業風景	20	写真7 壁穴住居14作業風景	66
写真2 水洗泥別作業風景	23	写真8 1・2号作業風景	71
写真3 壁穴住居5作業風景	45	写真9 振立柱建物1作業風景	95
写真4 壁穴住居6作業風景	48	写真10 製鉄炉作業風景	147
写真5 壁穴住居11作業風景	55	写真11 桜口付製鉄炉1作業風景	165
写真6 壁穴住居11実測風景	55		

卷頭図版目次

卷頭図版1 大河内遺跡 縄文時代草創期の石器	2 大河内遺跡 壁穴住居1出土土器
卷頭図版2 1 大河内遺跡 矢頭器	卷頭図版3 1 下坂遺跡 通過型過塗壁（北上空から）
2 大河内遺跡 石器および剣片	2 下坂遺跡 横口付製鉄爐（西から）
卷頭図版3 1 大河内遺跡 道路周辺風景（南上空から）	卷頭図版6 1 下坂遺跡 製鉄炉1（内から）
2 大河内遺跡 弥生時代遺構全景（北上空から）	2 下坂遺跡 製鉄炉2（西から）
卷頭図版4 1 大河内遺跡 壁穴住居11（南から）	

図 版 目 次

大河内遺跡	
図版1 1 道路風景（北から）	2 振立柱建物1・3・溝9（北から）
2 道路風景（南東から）	図版4 1 3区石器出土状況（南西から）
図版2 1 5区全貌（南東から）	2 3区東側断面（西から）
2 弥生時代の集落・土墳墓群（北東から）	3 有茎尖頭器（S15）出土状況（南西から）
図版3 1 振立柱建物1～3（北東から）	図版5 1 有茎尖頭器（S7）出土状況（南西から）
	2 石器（S39）出土状況（西から）

3	楢文土器(5)出土状況(南西から)	国版26	弥生土器④
国版6	1 垂穴住居2(南から) 2 垂穴住居5(北西から) 3 垂穴住居7(西から)	国版27	弥生土器⑤
国版7	1 垂穴住居9(南から) 2 垂穴住居6(東東から) 3 垂穴住居11遺物出土状況(北西から)	国版28	弥生時代の石器①
国版8	1 垂穴住居11・12(北から) 2 垂穴住居14(南から) 3 垂穴住居15(南から)	国版29	弥生時代の石器②
国版9	1 土塙1~14(南から) 2 土塙2(南から) 3 土塙墓5(東から)	国版30	古墳時代の出土遺物
国版10	1 土塙墓6(東から) 2 土塙墓12(東から) 3 土塙墓15(南東から)	国版31	中世の出土遺物①
国版11	1 垂穴住居17(東から) 2 垂穴住居17カマド(東から) 3 垂穴住居17内土壤1(東から)	国版32	中世の出土遺物②
国版12	1 土塙18(南西から) 2 土塙25(南から) 3 土塙28(北西から)	国版33	中世の出土遺物③
国版13	1 土塙30(南から) 2 漢9断面(南から) 3 灰火1(北西から)	国版34	中世の出土遺物④・土製品
国版14	楢文時代の石器①	種類遺跡	
国版15	楢文時代の石器②	国版35	遺跡発景(南から)
国版16	楢文時代の石器③		2 北調査区全景(北から)
国版17	楢文時代の石器④	国版36	3 北調査区 混立柱建物1(南から) 4 北調査区 混立柱建物2・3・溝1(南から)
国版18	楢文時代の石器⑤		1 北調査区 混立柱建物3・溝1(西から)
国版19	楢文時代の石器⑥		2 北調査区 混立柱建物4・溝2・3(南西から)
国版20	1 楢文時代の石器⑦ 2 楢文土器		3 北調査区 混立柱建物7・8(北から)
国版21	弥生土器①	国版37	6 南調査区 混立柱建物5・6(西から)
国版22	弥生土器②		1 南調査区 全景(南から)
国版23	弥生土器③	国版38	2 出土遺物①
国版24	弥生土器④		3 出土遺物②
国版25	弥生土器⑤	下板遺跡	
		国版39	1 遺跡発景(内土塁から)
			2 製鉄炉全景(南西から)
		国版40	1 製鉄炉1(西から)
			2 製鉄炉2(南西から)
			3 製鉄炉1に伴う溝(西から)
		国版41	1 製鉄炉1の周溝(南東から)
			2 製鉄炉2画面(西から)
			3 製鉄炉3焼土検出状況(北東から)
		国版42	1 製鉄炉3(西から)
			2 土塙6(南から)
			3 距骨層断面(西から)
		国版43	1 調査区上層断面(南から)
			2 排溝場(北から)

	3 猿忠器（4）出土状況（北から）		2 横口付製瓦窯① 第4 横口断面（南から）
図版44	1 横口付製瓦窯①（北から）		3 壁穴住居①（西から）
	2 横口付製瓦窯① 壁造（南から）	図版46	1 猿忠器
	3 横口付製瓦窯① 握出し穴石組の基部と 壁造房（北西から）		2 鈴懸・鉄蓋石①
図版45	1 横口付製瓦窯① 断面（南西から）	図版47	鉄鋤石②・鉄滓土
		図版48	鉄滓③・黒鉄化木炭・鉄塊共遺物

第1章 遺跡の位置と環境

本書に掲載する大河内遺跡は岡山県勝田郡勝央町に、稲穂遺跡・下坂遺跡は岡山県美作市（旧英田郡美作町、以下「旧美作町」と表記する）に所在する。いずれも岡山県の北東部にある。

勝央町は、中国山地と吉備高原との狭間に開ける津山盆地の東部に位置する。町域は、最大標高260mの間山山塊によって南北に二分され、町の北西部には、那岐山塊南麓の日本原台地や、そこから南方へのびる後筋もの丘陵尾根の先端部が及び、町の南部は第三紀層や古・中生層の丘陵が占めている。大河内遺跡が立地するのは、町南部の流域沿いに広がる勝間田平野の東端付近にあたる。旧美作町は、吉井川の支流である古野川が町内を貫流し、谷底の各所に平野が形成されており、最大的ものは現在の町中心部にあたる林野地区である。稲穂遺跡・下坂遺跡は、いずれも旧美作町南西部、古野川の支流に面する丘陵上に立地する。

調査地周辺における遺跡の分布状況を見てみると、第2図に示すように現在の市町境となっている丘陵地帯を境として、勝央町の勝間田平野にきわめて濃密な遺跡分布がみられるのに対し、稲穂遺跡・下坂遺跡周辺は対照的に遺跡の希薄な地域であり極端な差がある。これは、広大な平野に恵まれた前者と、吉井川沿いの狭長な平野しか有しない後者との条件の違いが反映されているのであろう。

勝央町・旧美作町内では、現在のところ旧石器時代の遺構・遺物は確認されておらず、最古の資料は今回報告する大河内遺跡の縄文時代草創期の石器群である。また、勝央町の金鶴塚遺跡では早期の横円錐形土器・勝央町の虫尾遺跡では縄文時代と思われる落とし穴が検出されている。しかし、明確な集落遺跡は未だ検出例がない。

弥生時代前期の遺跡も未発見であるが、大河内遺跡では前期後葉の土器片が若干出土しており、近辺に集落の存在が示唆され注目される資料である。中期後葉～後期になると遺跡数が急増する。美野平野では、北縁の低丘陵上に弥平治遺跡をはじめ多数の集落・散居地が所在し、南縁の間山山麓にも能部遺跡・清實遺跡などが点在する。勝間田平野では、北縁の間山南麓に小中遺跡などの大規模な集落が立地し、南縁の低丘陵上には田司尾遺跡・坂田遺跡などがあり、各平野に面する丘陵上に集落が営まれていた状況が確認される。小中遺跡の立地する丘陵には、実態は明らかでないが他にも長尾遺跡・八幡遺跡など弥生遺跡の分布が知られている。また、岡山には田井ちこ池遺跡・田井たれをず遺跡など、山頂～山腹の高所に集落の存在が知られ、山上の集落として注目される。一方、從来明確でなかった平野部の状況については、大河内遺跡で中期後葉の集落が検出されたことで、その一端が明らかとなった。



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- 1 大河内遺跡
- 2 稲穂遺跡
- 3 下坂遺跡
- 4 堂下散布地
- 5 愛宕山古墳
- 6 大平門塚跡(1分)
- 7 女大岩塚跡
- 8 間山丘孫塚
- 9 田井中二池遺跡
- 10 菊山高福寺跡
- 11 間山古冢群
- 12 間山古墓群
- 13 高原山塚群
- 14 平辻跡
- 15 勝利口塚跡
- 16 石佐上塚跡
- 17 勝利口陣塚跡
- 18 峰平山古墳群
- 19 堂山古墳群
- 20 間城跡
- 21 小口塚跡
- 22 白道古墳群
- 23 小中古墳群
- 24 岩井外古墳群
- 25 上和遺跡
- 26 大年古墳群
- 27 宗友遺跡
- 28 企仙寺遺跡
- 29 錦ヶ遺跡
- 30 上屏遺跡
- 31 八糸遺跡
- 32 黒土陣塚跡
- 33 並塚遺跡
- 34 小池谷遺跡
- 35 小池谷塚跡
- 36 及道跡
- 37 長尾道跡
- 38 片山古墳群
- 39 田中塚跡
- 40 小矢田城跡
- 41 宮ノ上道跡・宮ノ上古墳群
- 42 坂田延跡・坂田塚跡群
- 43 因元塚跡
- 44 荻11古墳
- 45 戸倉城跡
- 46 城谷塚跡
- 47 逆上谷塚跡群
- 48 大河内古墳群
- 49 塚ヶ塚古墳群
- 50 三三城跡
- 51 七山野谷古墳
- 52 北山古墳群
- 53 摂原塚跡
- 54 丸山遺跡
- 55 守山古墳群
- 56 別所古墳群
- 57 林野城跡
- 58 大塚古墳群
- 59 蜂峰塚跡
- 60 林崎遺跡
- 61 神山遺跡
- 62 池有山古墳
- 63 塚山古墳
- 64 間の坊古墳
- 65 鶴間城跡
- 66 月摩古墳

第2図 局辺遺跡分布図 (1/50,000)

古墳時代に入ると、両町内各地に多くの古墳が出現するが、特に勝央町北部の美野平野と南部の勝間田平野をとりまく丘陵上において顯著であり、両平野の生産力の高さを物語っている。前期においては、特に美野平野周辺部で首長墳に前方後方墳が多く採用されているのが特徴的である。美野平野の西側丘陵には、美作地方最大の規模を誇る植月寺山古墳（全長約91m）をはじめ、美野中塚古墳・田井高塚古墳などの前方後方墳が、勝間田平野に望む間山南麓には、琴平山古墳・岡高塚古墳などの前方後円墳が染かれている。間山山塊の高所に位置する岡東高塚古墳は、全長50.5mを測り、筒形銅器をはじめとする副葬品が出土している。一方で、稻穂遺跡・下坂遺跡の近辺にはこの時期の古墳はみられない。

中期の首長墳には、前期に比較して傑出したものがみられず、前期の首長系列は一旦途切れたよう見受けられる。この時期の調査例としては、大河内遺跡の対岸の丘陵上に立地する落山古墳・宮ノ上古墳群があり、宮ノ上1号墳からは獸面鏡・内行花文鏡各1面が出土している。国司尾遺跡では初期須恵器を廟墓が検出され、被葬者と渡来文化との関わりが注目される。

後期に入ると、各丘陵上には多数の群集墳が染かれるようになる。勝央町の畠ノ平古墳群や小中古墳群などが代表的であり、主体部に陶棺を内蔵し豊富な副葬品を有するものが多くみられる。このような群集墳に並行して、小規模な前方後円墳ないし帆立貝式古墳も散見され、勝央町のよつみだわ2号墳や旧美作町の大年1号墳がその例である。稻穂遺跡・下坂遺跡周辺でも、丘陵上を中心に散発的な古墳の分布が認められるものの、その大部分は未調査のため詳細な時期や内部構造は不明である。

以上のような古墳の動向に対し、集落の実態は未解明の部分が多い⁵、勝央町の福吉丸山遺跡・宮ノ上遺跡・大河内遺跡などでは、主として後期の集落が検出されている。

古代の遺跡としては、勝間田平野の東部にあり、勝田郡閻連遺跡と推定されている平遺跡・勝間田遺跡が著名である。大規模な建物群のほか、「郡」の文字を押印した土器、墨書き土器、陶硯なども出土している。このほか丘陵上の小中遺跡では、奈良時代の倉庫群と推定される掘立柱建物群が検出されている。また、旧美作町の豊国平野北東部には白鳳時代の植原庵寺が建立されている。さらに勝間田平野近辺の丘陵上では、須恵器の窯跡などの存在も知られる。以上のように、現在の勝央町南部地域は、政治・宗教・産業などの諸領域にわたり重要な役割を担っていたことが理解される。一方、從来明確でなかった旧美作町南西部においては、今回の調査で稻穂遺跡にて奈良時代末～平安時代初頭の大形建物群の存在が判明し、官衙的な性格が指摘されている。

古代末から中世初頭にかけては、勝間田平野の南北両側の丘陵を中心として、中世須恵器の一種である勝間田焼⁽¹⁾の生産が盛んに行われた。戸岩窯跡や進上谷窯跡などの約50基が存在し、県南の備前焼や龜山焼と並ぶ中世須恵器的一大生産地となっているが、鎌倉時代後半には衰退したようである。大河内遺跡の北側に位置する及遺跡では、平安時代末～鎌倉時代初頭の粘土探掘場が多数検出されており、勝間田焼の原料となる粘土の探掘が行われていた可能性が高い。高福寺の所在する間山山頂周辺には「門山高福寺」と呼ばれる寺院跡があり、信仰の場として重視されたことがうかがわれる。付近からは瓦経を埋納した経塚も検出されている。この経塚は、鳥取県倉吉市大日寺瓦経と類似することから、11世紀末頃の造営と考えられる。一方、勝央町の美野平野では広く条里造構が遺存し、部分的な調査ではあるが条里地割りが中世まで残ることが確認された。現在の勝央町内には植月莊・小吉野莊・鷹取莊・勝田莊の四つの莊園があったといわれ、古代末～中世段階における大規模な耕地面積を物語るものといえる。

また、勝間田平野の周辺には、糸山筑紫城跡や東吉田城、美作の守護職である赤松氏が築城したとされる戸倉城や小矢田城、旧美作町にある三星城・大谷城・勝間城など、戦国の戦乱を物語る山城も多く残っている。これらの多くは考古学的な調査がなされておらず、その実態の解明は今後に負うところが多い。

江戸時代に入ると、現在の勝央町・旧美作町域は宇喜多・小早川氏の支配、津山藩領、天領を経て、その後は各地の大名領として細かく分割され、複雑な変遷をたどっている。勝央町の勝間田地区は、近世に整備された出雲街道のルート上に位置するという交通上の重要性から、本陣が置かれるなど宿場町として発展していった。また、旧美作町は古野川を往来する高瀬舟の寄港地として重要な位置を占めていた。

(岡本泰典)

註

- (1) 「勝間田焼」に関しては、この用語が提唱された時点では、同じ読みで「勝田焼」と表記されていたが、現在では「勝間田」の表記がかなり一般化しているため、ここではそれに従った。

主要参考文献

- 『勝央町誌』 勝央町 1984
『美作町史 資料編Ⅰ』 美作市 2006
『中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査4』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県教育委員会 1975
『中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査5』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975
『橘原庵寺跡緊急発掘調査報』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告。13 岡山県教育委員会 1976
『大年古墳群はか』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』103 岡山県教育委員会 1995
『小中遺跡 白盃古墳群 小中古墳群 湯ヶ盃古墳』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 岡山県教育委員会 1997
『川井たれをす遺跡 川井ちご池遺跡 四東高塚遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』171 岡山県教育委員会 2003
『田井ちご池遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』185 岡山県広域水道事業団・岡山県教育委員会 2004
『土居遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』195 岡山県教育委員会 2005
『因司尾遺跡 収田遺跡 収田墳墓群 宮ノ上遺跡 宮ノ上古墳群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』197 岡山県教育委員会 2006
『福吉丸山遺跡』『勝央町文化財調査報告』4 勝央町教育委員会 1999
『因司尾遺跡』『勝央町文化財調査報告』5 勝央町教育委員会 2002
『平成11年度文化財特別展 幻の陶器 勝間田焼』 勝央町教育委員会・勝央町郷土美術館 1999
『美作・勝央発掘ものがたり』岡山県古代古墳文化財センター 2006
『美作・勝央発掘ものがたり 報告会発表資料～町教委分～』 勝央町教育委員会 2006

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

岡山県は、県政の最重要課題の一つである県内循環高速道路網の形成を積極的に推し進めるなかで、既存の中国縦貫自動車道・山陽自動車道・岡山横断自動車道路岡山米子線に、主要地方道佐伯長船線道路改築および美作岡山道路建設、さらに一般国道374号改良を加え、岡山市瀬戸町（山陽自動車道）から勝田郡勝央町（中国縦貫自動車道）区間の整備計画を策定した。

本報告書で取り扱う一般国道374号改良に伴う予定路線内に存在する遺跡には、国司尾遺跡・坂田遺跡・坂田墳墓群・宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群（197）、下坂遺跡（美作市）が周知されており、平成13年度以降、上記遺跡群の調査を実施してきた。

大河内遺跡は、平成15年度、宮ノ上古墳群の調査時に淀川の左岸側予定路線地内での遺物の発見を発端に、急遽遺跡の有無を確認すべく試掘調査を実施し、弥生時代と中世の遺構が確認された。この取り扱いについて、県教育庁文化財課と県美作県民局勝央支局との間で協議が重ねられ、これにより調査を実施することとなった。

稻穂遺跡は、道路橋梁を支える橋脚工事部分にあたることが判明、平成16年度の確認調査によって遺跡の範囲・性格の一部様相を確認した後の平成16年9月から本調査に入った。

下坂遺跡は、本線側道および工事掘開範囲が下坂遺跡の所在する丘陵に掛かることから調査の対象となり、平成17年6月から確認調査を実施。その結果、製炭窯の一部と鉄滓等遺物の存在が確認されたので、翌平成18年4月から調査に入ることとなった。（島崎　東）



第3図 予定路線と対象遺跡 (1/50,000)

(数字)は既刊の『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』番号

第2節 試掘・確認調査の経過

大河内遺跡では、勝央町および岡山県の遺跡地図の刊行後、周辺の水田に遺物の散布が判明したため、3本のトレーナーを設定して試掘調査を行った（第5図）。T 1・3では遺構は確認されず、T 2では地表下60~80cmで上面を削平された黒色砂質土が検出された。この層は地山の砂礫層上にあり、堅穴住居などの埋土で弥生土器を含む。地山の砂礫層からは遺物の出土はなかった。黒色砂質土の上層では溝が確認され、勝間田焼や土師器片が出土した。以上の点から、用地区内に弥生時代や中世の遺構が存在することが明らかとなった。

(柴田英樹)

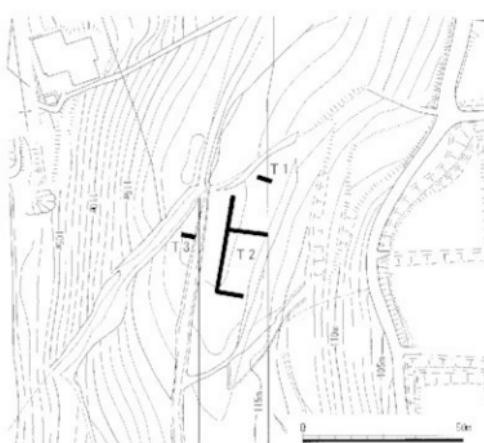
稻穂遺跡は美作市稻穂に所在し、南西に向く緩斜面に位置する。以前の分布調査により遺物が採集されたことなどから遺跡の存在が想定された。調査はトレーナー4本を設定して行い（第153図）、その結果T 1・3・4で土壤・柱穴・溝を確認した。T 1・3の西側は畑地造成のためか遺構は検出されなかつた。T 2でも擾乱のため遺構は未検出である。土壌からは平安期の須恵器・土師器が出土した。柱穴もこの上層と近似する埋土で、同時期の可能性が高い。以上の所見から、工事予定範囲では、西側の一部を除き、平安時代を中心とする時期の集落が展開すると考えられた。

(大橋雅也)

下坂遺跡は美作市位田に所在する。尾根筋や斜面、谷部に5本のトレーナーを設定した（第180図）。尾根頂部のT 1では遺構や遺物は確認されなかつた。T 2・3の北端で、幅180cm、深さ60cmを測る溝（古道？）が検出された。西斜面のT 4では、斜面上方の東端付近で横口付製炭窯が検出された。T 5は斜面から谷部にかけて設定した。遺構は確認されず、谷埋土からは遺物も出土していないが、現在の耕作土中に須恵器片が確認された。なおT 4西端やT 5東端で切妻壁や鉄津がわずかに出土した。以上の結果から、当地点では西斜面を中心に遺構が残存することが明らかとなった。

(柴田)

堂下散布地は美作市殿所に所在する。平成17年度に下坂遺跡の確認調査を実施する際、同遺跡から



第4図 堂下散布地トレーナー配置図 (1/1,500)

北に約1km離れた路線内にも遺跡が存在する可能性が地元から指摘されたため、下坂遺跡と併せて試掘調査を行った。調査では、尾根筋や斜面に3本のトレーナーを設定した（第4図）。調査面積は75m²である。T 1・2では、ほぼ全域で現在の耕作土直下で地山層が確認され、T 2南端のごく一部で間層に灰黄色砂質土が認められた。

この上が埋土となる辺りが確認されたが、形状から木の根などの痕跡と考えられ、遺構とは認められない。西斜面のT 3ではごく薄い表土層直下は地山層で、遺構や遺物は確認されなかつた。（柴田）

第3節 本調査および報告書作成の経過

大河内遺跡では、平成17年度には路線用地のうち北端部を除く約4,000m²（北半を1区、南半を2区と呼称）が本調査の対象となり、4月から9月まで実施した。表土層を重機で除去した後、遺構面を精査する過程で、遺構は1区の北側（3区と呼称）へと延びていくことが予想された。これを受け、北側に4本のトレンチを掘削したところ、少數ながら遺構が検出され、遺跡の北側への広がりが確定となった。この3区については平成18年度での対応となつた。

1区では、遺構は標高の高い西半部において密で、特に柱穴がおびただしく検出された。柱穴の中には掘立柱建物になるものもあり、平安時代末～鎌倉時代初頭頃の鉢跡の可能性が考えられた。また、1区南西部および2区では、弥生時代中期後葉の堅穴住居や土壙墓が重複した状態で多数検出された。

調査中の7月7日には埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、委員の方々から多くの御教示を得た。8月20日には、勝央町教育委員会の後援を得て現地説明会を開催し、約130名の見学者があつた。

平成18年度は3区の調査を6月から10月まで実施した。堅穴住居などは皆無であったが、調査区南東部の埴山面を精査中に出土した石斧が、岡山大学大学院の植田孝司教授の御教示により、縄文時代草創期の局部磨製石斧と判明したのを皮切りに、同時期の石器や剣片類が次々に出土し、岡山県内はもとより中国・四国地方においても類例の少ない遺跡であることが判明した。調査期間中の8月3日および9月26日には埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、委員の方々から多くの有益な御教示を受けた。10月5日には県庁にて報道機関に調査成果を発表、14日には現地説明会を実施し約300名の見学者が訪れた。さらに、調査終了直前の10月28・29日には、勝央文化ホールにて「美作・勝央発掘ものがたり」と題し、国道374号関連の一連の調査成果を紹介する展示および講演会を町教委との共催で実施し、多くの来場者があつた。

また、調査終了にあたっては現状保存の観点から、これ以上の工事掘削は行わないこととし、石器出土位置をベグでマーキングの上、石器出土範囲を真砂土で被覆し保護する措置をとった。（岡本泰）

稲穂遺跡では、平成16年9月1日に本調査を開始した。調査区は南北に並ぶ橋脚の基礎掘削部分2か所で、北調査区・南調査区と呼称する（第153図）。両調査区の表土（現耕作土）を重機で除去した後、北調査区から調査を開始した。

北調査区は緩やかな傾斜面をなしていたが、南西端部分は近世に墓地が造成され、埴山の岩盤を掘削して平坦面が形成されていた。また、道路斜面下には水路が走り、調査区の北西部で墓地へ下る浅い小谷が刻まれていた。果樹園の造成土を除去すると古代の段状の地形が現れ、下の段の平坦面上には雨落ち溝を伴う掘立柱建物が検出された。生活道路から東側については、トレンチを2本設定して掘り下げた。道路はもともとの斜面に盛り土して造られたもので、遺構は検出されず、遺物も僅少だったことから、北東部分の調査はこれで終了とした。

南調査区の調査も北調査区と併行して進めた。南調査区では果樹園の造成が削平を中心としたものであったためか、北調査区で検出されたような古い段状の地形は確認されず、暗渠が縱横に走っていた。また、調査区の南端では、やはり埴山の岩盤を掘削して畠地が造成されていた。南西部分は川岸の崖面となっていて、調査地から除外した。調査区の中央で大形の掘立柱建物が検出された。

調査中の10月7日には埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、委員の方々から有益な御指導を得た。

また、10月23日には現地説明会を開催した。60名程度の地元の方々が参加され、郷土の歴史についての理解を深めていただいた。10月29日には調査を終了し、発掘資材の収集を行った。（岡本寛久）

下坂遺跡の本調査は平成18年4月から7月まで実施した。調査区の大部分で表土剥削の後にすぐ地山面が露出し、遺構や包含層は希薄であった。その後の遺構検出の過程で、予想通り中央部で製炭窯を検出、北端部では木炭や鉄滓などを含む黒褐色土の広がりが認められ製鉄造構の存在が確実視された。そのため調査区を北側に拡張し、製鉄遺構の全域を調査対象とした。結果的に、3基の製鉄炉と関連造構および礎上付製炭窯が検出され、当時の製鉄遺跡の実態に迫る成果が得られたといえる。また、調査区南端付近で礎穴住居が1軒検出されたため、生活道路や家屋跡を避けた位置に追加の調査区を設定したが、近世以降とみられる柱穴や溝などが検出されたにとどまっている。

製鉄炉・製炭窯の検出という調査成果は注目を集め、6月17日に現地説明会を実施したほか、学識経験者の来歴も相次ぎ多くの御教示を得た。

大河内遺跡・下坂遺跡の報告書の作成は、平成17年度は調査終了後の10月から半年間、平成18年度は11月から5か月間、岡山県古代吉備文化財センターにおいて担当者1名が専従して行った。大河内遺跡では、遺構・遺物を縄文・弥生・古墳・中世に区分し、各時代について遺構配置図等の作成を行った。縄文時代の石器や弥生土器などの良好な資料を優先的に掲載するため、時期や性格不明の遺構は割愛した。報告書作成開始が調査終了に先行したが、平成17年度内に可能な限りの作業を行い、平成18年度分をそれに付加し、全体としての体裁の統一を図った。下坂遺跡は製鉄遺跡という性格上、遺物は事実上、鉄滓・炉壁片のみであり、全点を持ち帰るのは不可能なため、現場作業と同時に洗浄・選別作業を行い、小片や特徴の乏しい個体などは現地に残した。整理作業においても、実測・撮影はがの形状や製鉄の工程を反映するものに限定している。

備後遺跡については、平成17・18年度内に、調査担当者が他の発掘調査・報告書整理と並行して從事し、各種図面の作成および文章執筆を行った。

（岡本泰）

第4節 調査および報告書作成の体制

平成15年度		次 長	藤川 洋二
岡山県教育委員会		文化財保護参事	松本 和男
教育長	宮野 正司	（総務課）	
岡山県教育府		課 長	中田 哲雄
教育次長	三浦 一男	課長補佐（総務係長）	笏木 弘忠
文化財課		主 任	小坂 文男
課 長	西山 益	（調査第三課）	
課長代理	田村 啓介	課 長	柳瀬 昭彦
課長補佐（埋蔵文化財係長）	平井 泰男	課長補佐（第三係長）	井上 弘
文化財保護主任	尾上 元規	文化財保護主査	柴田 英樹
主 事	浜原 浩司		（確認調査担当）
岡山県古代吉備文化財センター		平成16年度	
所 長	正岡 晴夫	岡山県教育委員会	

教育長	宮野 正司	主事	金出地敬一
<u>岡山県教育庁</u>			
教育次長	笠瀬 司	所長	松本 和男
文化財課		次長(総務課長)	内田 猛
課長	芦田 和正	参事	平松 郁男
参事	田村 啓介	参事	高畠 知功
総括副参事(埋蔵文化財班長)	平井 泰男	(総務課)	
主任	小林 利晴	総括副参事(総務班長)	若林 一憲
主事	秋山 良樹	主任	小川 紀久
<u>岡山県古代吉備文化財センター</u>			
(調査第一課)			
所長	正岡 駿大	課長	岡田 博
次長(総務課長)	内田 猛	総括副参事(第一班長)	光永 真一
参事	松本 和男	主査	柴田 英樹
参事	伊藤 晃		(式捲・確認調査担当)
(総務課)		(調査第二課)	
総括副参事(総務班長)	笏木 弘忠	課長	島崎 東
主任	小坂 文男	副参事	二宮 治夫
主任	小川 紀久		(調査担当)
(調査第一課)			
課長	岡田 博	主任	岡本 泰典
総括副参事(第一班長)	光永 真一	主事	和田 剛
主査	大橋 雅也		(調査担当)
(確認調査担当)			
平成18年度			
<u>岡山県教育委員会</u>			
課長	中野 雅美	教育長	門野八洲雄
総括副参事(第一班長)	岡本 寛久	<u>岡山県教育庁</u>	
		教育次長	神田 益穂
(調査担当)			
<u>平成17年度</u>			
<u>岡山県教育委員会</u>			
教育長	宮野 正司	課長	高畠 知功
<u>岡山県教育庁</u>			
教育次長	笠瀬 司	参事	小林 勝
文化財課		参事	田村 啓介
課長	芦田 和正	総括副参事(埋蔵文化財班長)	光永 真一
参事	小林 勝	主任	小林 利晴
参事	田村 啓介		金出地敬一
総括副参事(埋蔵文化財班長)	平井 泰男	<u>岡山県古代吉備文化財センター</u>	
主任	小林 利晴	所長	松本 和男
		次長(総務課長)	安西 正則
		参事	岡田 博

副 参 事	中島 謙次	総括副参事（第二班長）	二宮 治夫
（総務課）			（調査担当）
総括副参事（総務班長）	若林 一憲	主 任	岡本 泰典
主 任	小川 紀久		（調査・報告書担当）
（調査第二課）		主 事	石田 爲成
課 長	高崎 東		（調査担当）

発掘調査・報告書作成協力者（50音順、敬称略）：稻田孝司・上椿 武・神柱結彦・久保慎二朗・高岩俊文・田中正利・田浪文雄・茶谷 満・椿 真治・橋本久和・藤原好二・馬路兄弟・日次誠一・米田克彦

第1表 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条1項）

番号	文書番号 日付	被頂及び名称	所在地	面積 (m ²)	目的	届出者	相談	主な相手事項
1	文文部 第1007号 平6.12.6	轟布塗 大河内遺跡	豊田郡轟東町字776号ほか	5,600	道路	岡山県教育委員会 教員課長・三地賀	未定	免収調査
2	文文部 第1008号 平7.11.12	御浜間塗 下坂遺跡	美作西条町380号ほか	2,600	道路	岡山県美作農業課長	未定	免収調査

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 日付	周囲・周囲外 被頂及び名称	所在地	面積 (m ²)	原因	②実地の 有無	報告者	担当者	期間
1	同上 第1007号 平6.12.6	轟布塗 大河内遺跡	豊田郡轟東町字776号ほか	120	道路	有	岡山県古代古墳文化財 センター所長	柴田英樹	H16.7.3～ H16.7.10
2	同上 第1008号 平7.11.12	御浜間塗 下坂遺跡	美作西条町380号ほか	138	道路	有	岡山県古代古墳文化財 センター所長	大曾根重	H16.7.3～ H16.7.9
3	同上 第1009号 平7.7.27	御浜間塗 下坂遺跡	美作西条町380号ほか	185	道路	有	岡山県古代古墳文化財 センター所長	柴田英樹	H17.6.27～ H17.7.21
4	同上 第1010号 平7.7.27	轟布塗 下坂遺跡	美作西条町348号ほか	75	道路	無	岡山県古代古墳文化財 センター所長	柴田英樹	H17.7.12～ H17.7.21

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	被頂及び名称	所在地	面積 (m ²)	原因	報告者	担当者	期間
1	同上 第1011号 平7.4.18	轟布塗 大河内遺跡	豊田郡轟東町字776号ほか	4,069	道路	岡山県古代古墳文化財 センター所長	二宮治夫・岡本泰典・ 和田四	H17.4.11～ H18.9.30
2	同上 第1012号 平7.4.19	御浜間塗 下坂遺跡	美作西条町380号ほか	1,394	道路	岡山県古代古墳文化財 センター所長	二宮治夫・岡本泰典・ 和田四	H16.4.1～ H18.6.30
3	同上 第1013号 平8.5.9	轟布塗 大河内遺跡	豊田郡轟東町字776号ほか	2,359	道路	岡山県古代古墳文化財 センター所長	二宮治夫・岡本泰典・ 和田四	H16.6.1～ H18.10.21

遺物見発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

番号	文書番号 日付	被頂名	所在地	出土年月日	発見者	土地所有者	相談者場所
1	文文部 第1173号 平6.3.15	上層（埴輪・土器類・瓶 類・漆器皿）	豊田郡那加町字776号ほか 大河内遺跡	H16.2.3～ H16.2.10	岡山県教育委員会 教育長・吉野正司	鶴見源康司 小矢井義之郎 下坂遺跡	岡山県古代古墳 文化財センター
2	文文部 第1661号 平6.7.16	埴輪器・土器類ほか 上層	津守市佐伯村櫛14号 下坂遺跡	H16.7.5～ H16.7.9	岡山県教育委員会 教育長・吉野正司	岡山縣知事 石井正弘	岡山県古代古墳 文化財センター
3	文文部 第1662号 平6.7.16	上層（埴輪・土器類・灰 器）・石器（石器）	津守市佐伯村櫛14号 下坂遺跡	H16.9.1～ H16.10.29	岡山県教育委員会 教育長・吉野正司	岡山縣知事 石井正弘	岡山県古代古墳 文化財センター
4	文文部 第1663号 平7.7.27	上層・灰器・動浮・土器	美作市西条町380号ほか 下坂遺跡	H17.6.27～ H17.7.21	岡山県教育委員会 教育長・吉野正司	岡山縣知事 石井正弘	岡山県古代古墳 文化財センター
5	文文部 第1664号 平7.7.27	埴輪・土器・須恵器・土器 類・漆器・石器	豊田郡那加町字776号ほか 大河内遺跡	H17.4.1～ H17.7.30	岡山県教育委員会 教育長・吉野正司	岡山縣知事 石井正弘	岡山県古代古墳 文化財センター
6	文文部 第1665号 平6.7.21	埴輪器・瓦器類・灰器 20件	美作市西条町380号ほか 下坂遺跡	H16.4.1～ H16.7.31	岡山県教育委員会 教育長・吉野正司	岡山縣知事 石井正弘	岡山県古代古墳 文化財センター
7	文文部 第1666号 平6.11.6	埴輪器・瓦器類・土器 類・漆器・石器	豊田郡那加町字776号ほか 大河内遺跡	H16.6.5～ H16.10.31	岡山県教育委員会 教育長・吉野正司	岡山縣知事 石井正弘	岡山県古代古墳 文化財センター

第3章 大河内遺跡

第1節 調査区の概要

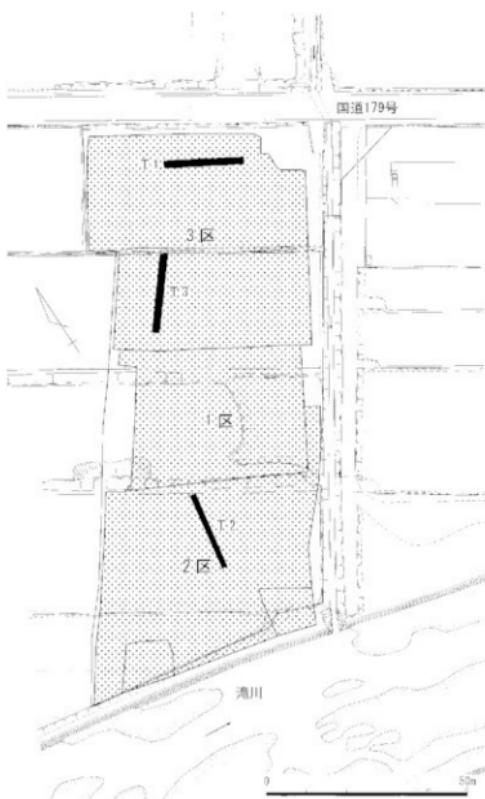
1 概要

大河内遺跡は、勝央町南部を東流する滝川の北岸に形成された河岸段丘上に立地する遺跡である。調査対象となったのは、滝川から国道179号までの道路幅約55m、距離約140mの範囲であり、調査面積は6,396m²である。調査は、南半の1・2区を平成17年度、3区を18年度に実施した。

調査地は近年まで水田として耕作され、圃場整備も実施済みで後世の改変も大きいと思われるが、地形や基盤層序は次のように考えられる。

調査区内の地形は、調査地の北西に位置する丘陵の未造部分にあたるため、全体的に北西から南東へと緩やかに傾斜し、集落などは相対的に高く安定した1・2区に分布する。一方で、東端は低湿地状で居住に不適であつたらしい。特に2区北半から3区南半にかけては、大きな窪み状の地形がみられた。

遺跡の基盤となる層は、多数の拳大～人頭大の礫を含む粘性砂質土であり、滝川の大規模な氾濫によるものと考えられる。基盤層上面は緩く波打ち、基本的に南東に向かって緩く傾斜し、一部は小規模な谷状を呈する。その直上は、小流路の小規模な氾濫による、礫を多く含む粗砂



第5図 調査区およびトレチ配置図 (1/1,200)



第6図 大河内遺跡全体図 (1/800)

2 遺跡の層序と遺物の出土状況

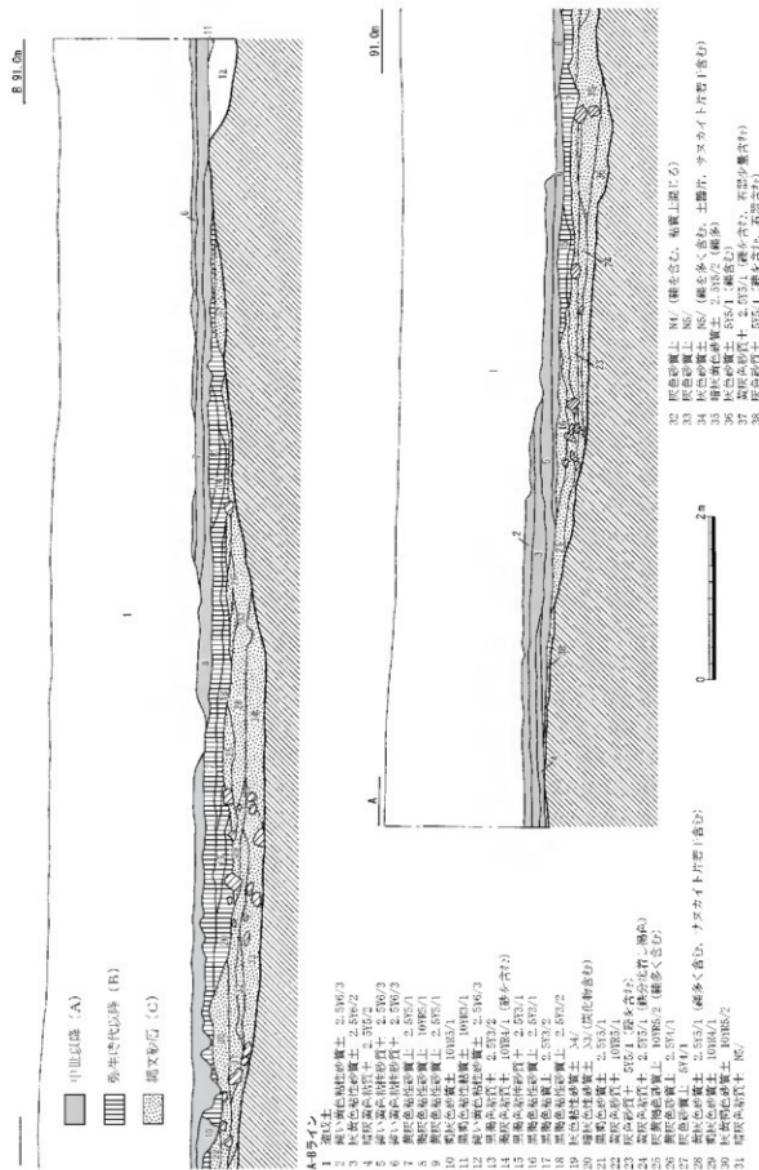
この項では遺跡の北側、平成18年度に発掘調査を実施した調査区（以下、3区と呼称）の地形、層序、遺物出土状況等について述べる。

調査区は、前項でも触れているとおり、調査区南西には澗川が、南東にはその澗川に流れ込む用水路が走っており、両者に挟まれた微高地上に立地している。調査区基盤層（いわゆる地山面）の地形

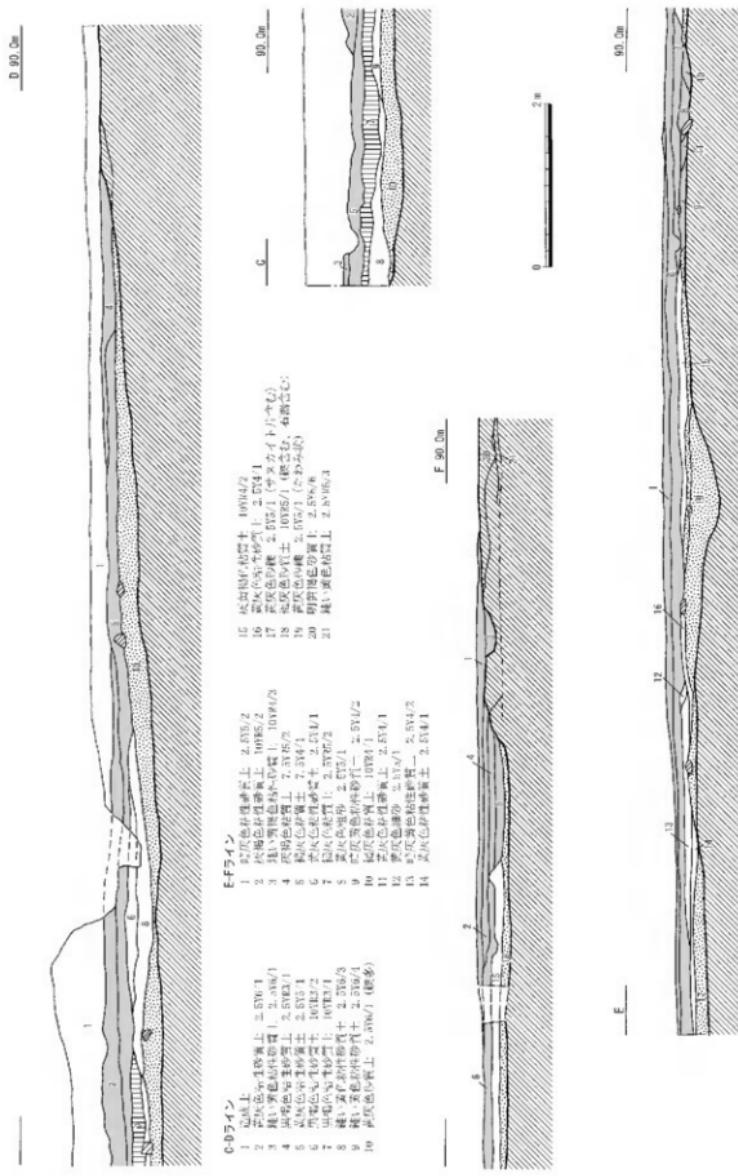
層で被覆されている。この粗砂層は、後述するように縄文時代の遺物を包含し、3区でのみ検出されたが実際はその末端は2区にも及ぶとみられる。これらの基盤層や粗砂層の上面には、弥生時代前～中期の土器を含む黒色土が堆積するが、その範囲は狭く、2区北東部から3区南東部にかけての範囲に限られる。次に、かなり時代が飛んで古代末～中世の包含層が広く堆積し、1・2区ではそれを除去した直後に弥生以降の各時期の遺構がほぼ同一面で検出される状態であった。その上は近世以降の造成・耕作土である。

花粉分析によれば、縄文時代の層ではコナラ亜属の落葉広葉樹林とアカガシ亜属の照葉樹林が分布し、落葉広葉樹が比較的多くやや冷涼な気候、弥生時代以降になるとアカガシ亜属の照葉樹林が増加し水田の拡大が推定され、中世以降にはアカマツ二次林が出現し、水田の集約化と畑の存在が推定されるとのことである。

最後に、遺跡の範囲と本調査区との関係であるが、地形条件と遺構の分布から、調査区は遺跡の東端部の可能性が高い。特に南半の集落については、西側への広がりは明白である。
（岡本奈）



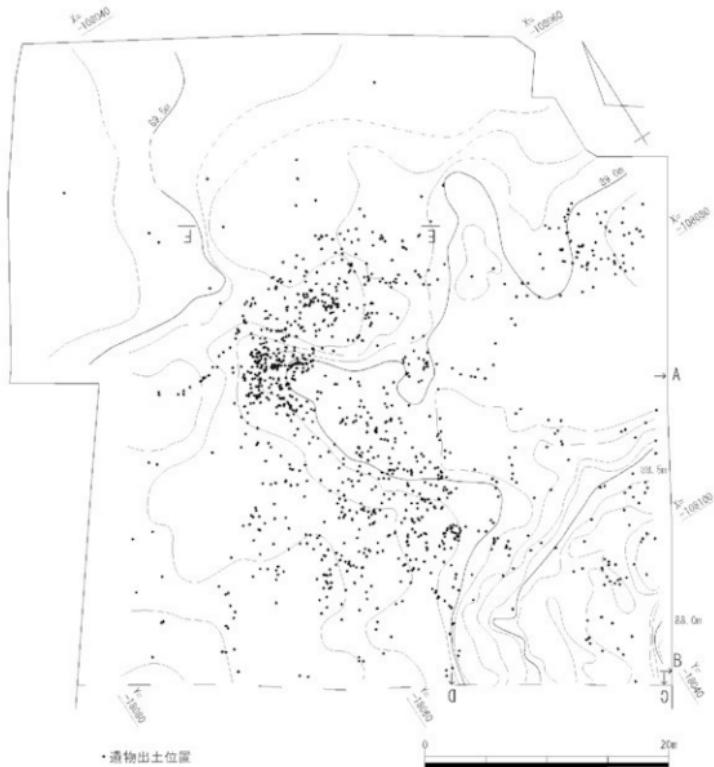
第7図 調査区土層断面図① (1/60)



第8圖 調査区土層断面図② (1/60)

は、北西から南東に向かって緩やかに下がっており、X=-108010、Y=-18060付近が約89.6m、X=-108110、Y=-18040の付近が87.9mの標高を測る。その比高差は約1.7mである。北視的には南東に向かって地形が下がっていくものの、調査区中央のX=-108070、Y=-18050付近および調査区南側のX=-108090、Y=-18050付近では、北西から南東に向けて幅約5m、長さ約10mを測る舌状に張り出した高まり部が認められる。北側高まり部の南北側では89.3mのコンターラインから、南側高まり部の南側では89.1mのコンターラインから、やや急に地形が下がっている。

調査区は、表土層直下に最大で30cmの厚さを測る中世以降の遺物を含む黒色土の包含層（A層）が調査区全域に堆積しており、その下層に滝川起源と思われる人頭大以上の円礫や亜角砾を含むいわゆる基盤層が認められる。A層の堆積状況等から、中世以降に大規模な地形改変が行われたと想定される。しかしながら調査区南東部においては、この地形改変が基盤層まで及んでおらず、A層の下層から弥生時代以降に堆積したと思われる黒色土層（B層）、さらにその下層からは主に縄文時代の遺物



第9図 遺物分布および地形図 (1/400)



第10図 遺物分布図<調査区北西部> (1/150)



石器は遺物取り上げ番号を示し、土器は丸印で掲載番号を示している。

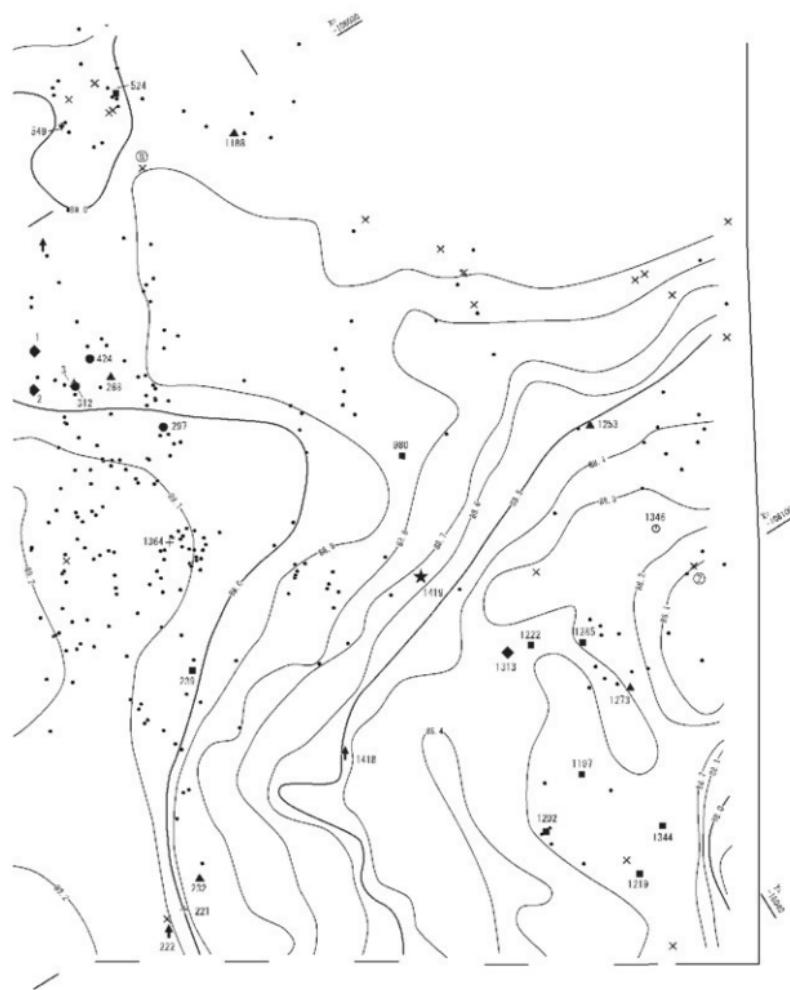
0 4m

◆ 有茎尖頭器	★ 石斧	○ スクレイパー	■ 加工痕のある剝片	□ 磨石
◆ 尖頭器	▼ 模形石器	* 石瓦	● 使用痕のある剝片	× 土器
▲ 石核	◇ 石核	+ 打製石斧（石鐵）	- 剥片・砂片	

第11図 遺物分布図<調査区北東部> (1/150)



第12図 遺物分布図<調査区南西部> (1/150)



を含む粗砂層（C層）が検出された。B層は調査区南東壁側で最大35cm、C層も同地点で最大50cmの厚さを測り、両層とも西および北に向かうにしたがい徐々にその厚さは減じていく。なお、B層は上に89.3mのコンターラインより低い場所のみで確認されているが、C層は調査区の北西側を除いた範囲に薄いながらも検出されたそうである。

第9～15図は、粗砂層（C層）中および基盤層直上から出土したもので、なおかつその出土位置の座標・標高が与えられているすべての遺物を図示している（ただし、座標を与えて取り上げたもの、整理の段階で遺物ではないと認定したものは除いている。また、巻末に掲載した大河内遺跡3区出土遺物一覧表においても同様に削除した）。これらの遺物は縄文時代草創期に帰属する石器（石斧・有茎尖頭器・尖頭器等）が多く認められるものの、縄文時代草創期以外の遺物（縄文時代中期から後・晩期に帰属すると考えられる土器や石器・弥生土器・須恵器等）も認められる。これらの出土層位およびそのレベルは、調査区西手ではC層中（層厚が薄いため、ほぼ基盤層直上として取り扱うべきものと考えられる）から、東半ではC層中およびその上半で検出されたものもあるが、大多数はC層下半および基盤層とC層の境界付近とされている。

さて、第9～15図に関して、本来ならば時期別に掲載すべきであるが、次のような分析作業を行ったものの、短い整理期間では客観的なデータを得られなかつたため、前述の条件に当てはまる遺物を、あえてすべて図示していることをお断りしておきたい。

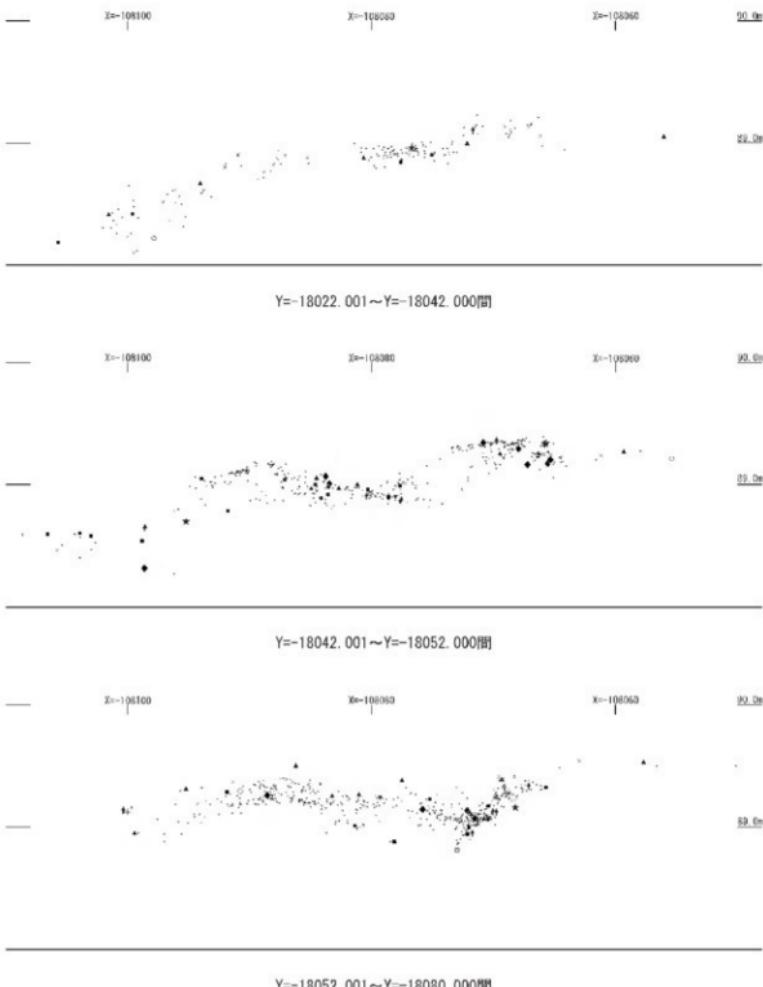
まず、出土位置ないしは出土レベル差から帰属時期の判別を試みたものの、X=-108070、Y=-18060付近から出土した土器を除き、新しいと想定している遺物の出土位置は縄文時代草創期の石器の分布とは重なり、また、出土レベルにおいても明瞭な上下関係を認めることができなかつた。特にC層が薄い西半部においては出土レベルの差はほぼ皆無である。次に、出土遺物にはサスカイト製の有茎尖頭器・尖頭器・石匙・スクレイパー類などの製品のみならず、いわゆるポイントフレークを含む剥片・碎片も大量に出土している。よって、接合作業や母岩分類・類型などの作業を行ったものの、製品と剥片・碎片の接合資料が皆無であったことや、サスカイトで母岩分類・類型を行うことは非常に困難であること、さらに剥片同士の接合資料がない状況における母岩分類等は事実誤認を引き起こす確率が非常に高いことから、客観的なデータの提示ができなかつた。最後に、サスカイトの風化状況から新・旧を判断したが、縄文時代草創期と縄文時代中期から後・晩期の石器を分けることは実際問題として不可能であり、また、風化が進んでいない弥生時代の石器についても、形態から判断することが多かつた。

報告書作成期間中には、以上のように遺物の詳細な帰属時期を判別できなかつた。そのため、次節

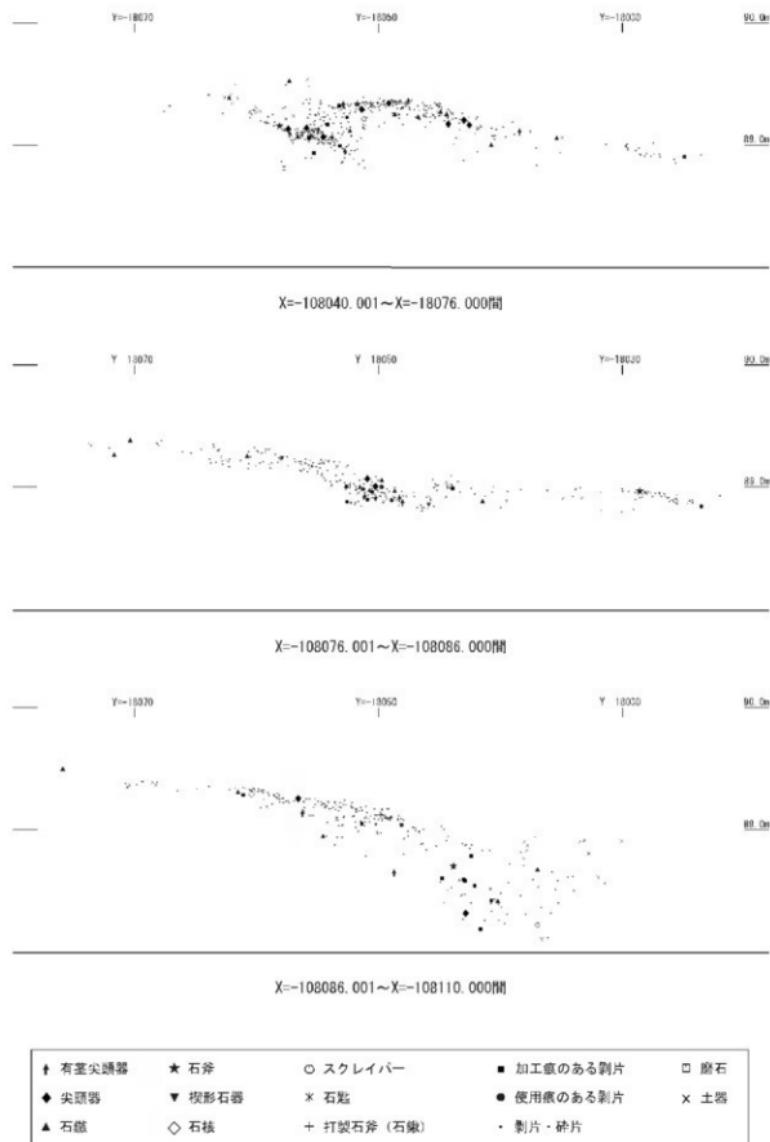


写真1 3区作業風景

では、1～3区から出土した縄文時代草創期および縄文時代中期から後・晩期に帰属すると考えられる遺物を扱っており（包含層中も含む）、縄文時代草創期に限定された飾ではないことを明言する。しかしながら不十分な分析結果ではあるが、出土位置が与えられているサスカイト製石器については、ほぼすべて縄文時代草創期に帰属すると想定している。それに対して、土器は小片のため断定はできないものの、縄文時代草創期に帰属するものは認められない。
（小鷗善邦）



第14図 遺物垂直分布<Xライン>（横軸：1/400、縦軸：1/40）



第15図 遺物垂直分布<Yライン>（横軸：1/400、縦軸：1/40）

第2節 縄文時代の遺物

1 概要

今回の調査では、縄文時代の遺物が大量に出土している。石器は、排土・包含層中のものを含めると1631点出土している。これらのうち、狭義の石器は、神子柴型石斧や有茎尖頭器などの草創期に帰属するものを主としているが、中期以降の石匙や打製石斧(石鎌)が少ないながらも確認されている。上器は主に3区で出土しているが、いずれも小片であり、時期を特定できたものは少ない。

縄文時代、特に草創期に帰属する遺物の出土地点は、3区のみに限られており、平成17年度の調査では後・晚期に帰属する打製石斧(石鎌)などが包含層から数点出土しているにすぎない。前節でも述べているが、草創期の遺物の出土は、主にC層下半およびC層と基盤層の境界付近からとされている。このC層は、3区においては北西部を除いた調査区ほぼ全域から、1区においては3区から続いている下がり部内で確認されているが、3区と1区の下がり部内を除いた境界部分については検出されなかつたとされている。これは、1区が中世段階にC層まで削平を受けた可能性を指摘できるものの、基盤層においては大きな断絶は認められない。

使用石材は、サスカイト・流紋岩・黒曜石・粘板岩などが認められる。これらのうち、剥片石器に関しては、サスカイトがほぼ100%使用されており、流紋岩や黒曜石は数点のみである。

第2表は、3区から出土した縄文時代の石器の組成表である。組成表には、サスカイトの風化状況や石器の形態などから弥生時代に帰属するものを含めないようにしたもの、剥片・碎片に関してはすべて取り除いたと判定はできない。

さて、組成表において、「座標無」の遺物が出土総数のうち約1/3を占めている。これは、微細遺物などの取り上げのため、C層の掘り下げ排土を水洗選別および篩かけを行った結果であり、実際これらによって採集されたものは、2cm以下の大さきの剥片が大多数を占めているが、狭義の石器も多く採集されている。この「座標無」の遺物、特に剥片・碎片類に関しては、石器の長さ・幅等が未計測であるため巻末の遺物一覧表に掲載していない。



写真2 水洗選別作業風景

第2表 石器組成表

	有茎尖頭器	尖頭器	石錐	P.E.	S	石匙	R.F.	U.F.	F1・ch	研核	石斧	打製石斧 (石鎌)	磨石	N
座標付	10	13	24	3	2	1	22	6	580	1	4	4	1	1071
座標無	3	8	16	3	2		18	c.	501	2		1		560
計	12	21	40	6	4	1	40	12	1081	3	4	5	1	1631

*3系器：基盤層未発見も含む R.F.：楕円石器 S：スクレイバーリング

R.F.：加工板のある剥片 U.F.：使用痕のある剥片

F1・ch：剥片・碎片 (碎片とは既さく) とともに1cm未溝の剥片を示す

*「座標付」：選別取り上げ時に汚染高およびX・Y軸の座標をうえたもの

*「座標無」：排土もしくは混合層中

いことをお断りしておきたい。「座標付有」の遺物は、電子平板システム（BLUETREND Field.com：福井コンピュータ株式会社）を使用して、各々海拔高および平面直角座標第V系に基づいたX・Y軸の座標を与え、さらに必要に応じて写真による出土状況の記録を行った。一方、「座標無」の遺物については、大まかな出土位置の想定すら困難である。

(小鳴)

2 遺物出土分布状況

第9～13図を見ても分かることおり、石器は調査区全域に一様に分布していない（前節の定義どおり、縄文時代以外の遺物も含んでいるが、その点数は少ないと想定しているので、分布傾向を読み取ることに関しては影響を受けないと考えられる）。南東側が調査区外であるため不明なもの、X=-108084、Y=-18034付近を空白域とした、楕円形を呈した出土分布状況である。分布には相違が認められ、視覚的にはいくつかの密集域、①：南北の高まり部を含んだ長径約30m、短径約20mの範囲、②：調査区東端のX=-108076、Y=-18026を中心とした径約5mの範囲、③：前2者と比べると粗の分布傾向であるが、調査区南端のX=-108100、Y=-18042を中心とする径約10m範囲が認められる。①に関しては地形等の状況から、a：北側高まり部、b：南側高まり部、c：北側高まり部南側の谷部、d：南側高まり部北側の斜面部に細分が可能と思われる。

さて、これら密集域からは各々、①a：S8・S9の有茎尖頭器、S19・S24・S25・S29・S31の尖頭器およびその未製品、S61の石斧、S36などの石鏃、①b：S15の尖頭器、ポイントフレークを多数含む剝片・碎片、①c：S3・S4・S12の有茎尖頭器、S16・S23・S27・S33の尖頭器およびその未製品、S62の石斧、S35などの石鏃、①d：S2・S7の有茎尖頭器、S14・S26の尖頭器、S37などの石鏃、S53・S56などのRF・UF、②：S60の石斧、S52・S57のRF・UF、③：S1の有茎尖頭器、S34の尖頭器未製品、S59の石斧、などが出土している。これらの密集域について、整理期間中に行った石器の接合や母岩分類等の資料分析が客観的データとして提示できる状態ではないこと、絶対量としては少ないと想定しているものの異なる時期（縄文時代草創期以外）の遺物が混在していること、さらに調査担当者の見解として、基盤層直上で検出された遺物については限りなく原位置を留めているが、C層中に含まれている遺物の一部は、滝川へと流れ込む小流路の氾濫の際に付近のものが巻き込まれ動いている可能性が考えられるとしていることから、本報告書では石器ブロックとして認定していない。その他に大形の塊が多数検出されたもの、人為的な配列を認めがたく、配石として認定できるものはなかったようである。

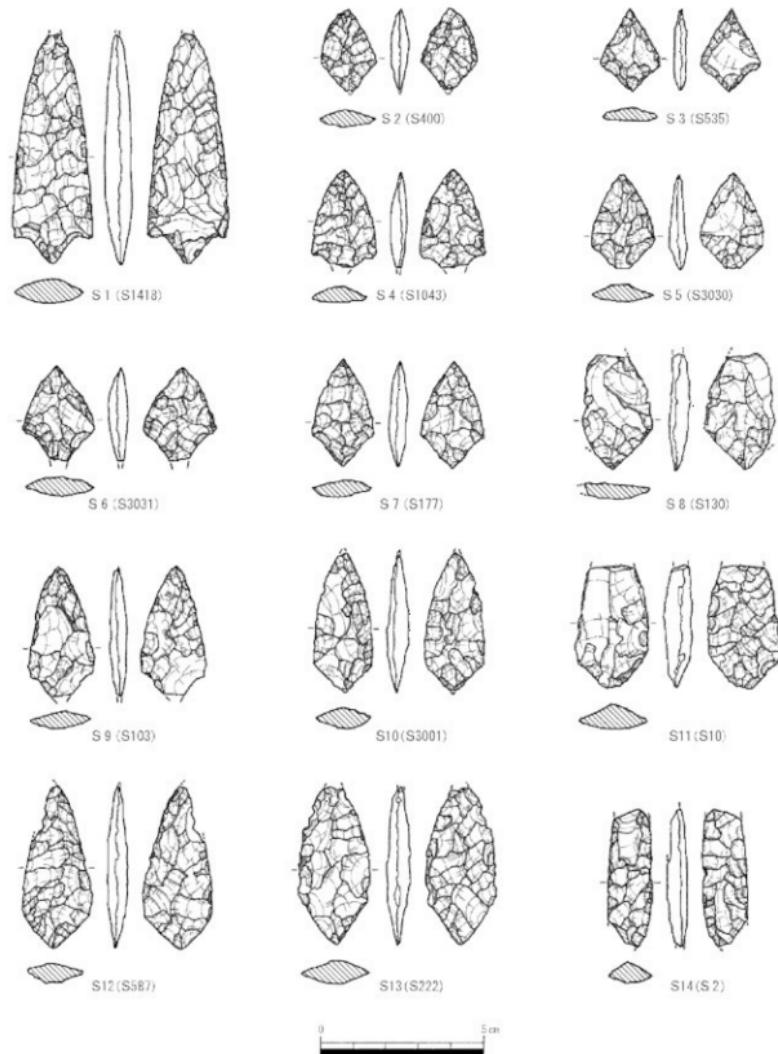
(小鳴)

3 出土遺物

石器（第16～24図、巻頭図版1・2、図版4・5・14～19）

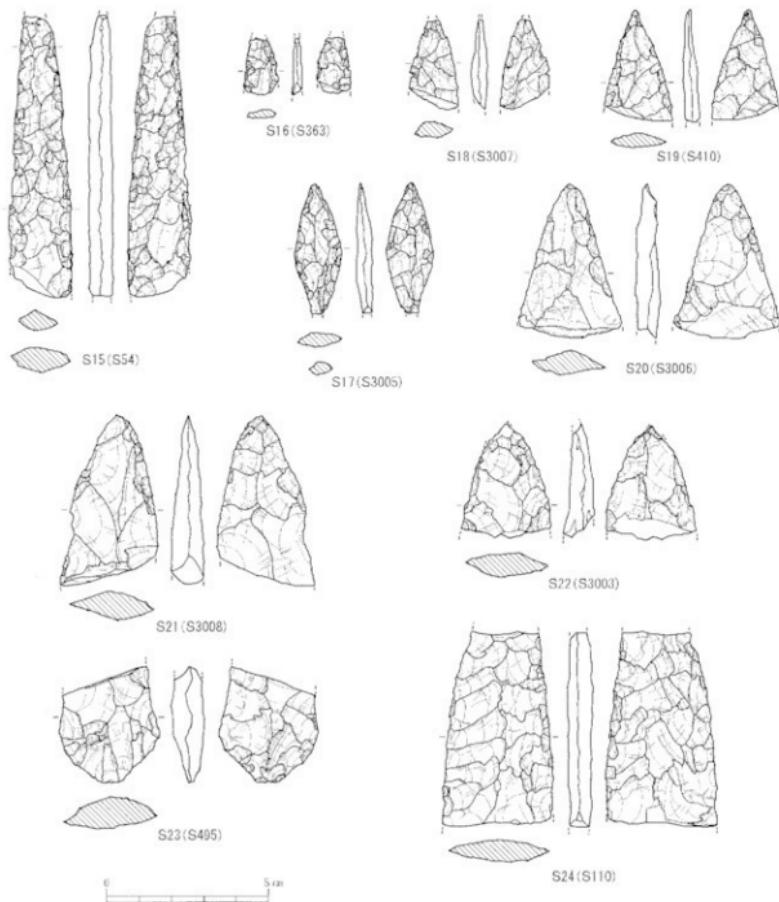
S1～S13は有茎尖頭器である。これらのうち、S2～S7は全長3cm前後の極小型の有茎尖頭器である。S1は先端部を一部欠損しているものの、その全形が分かるものである。側縁はやや外湾し、若干抉り込んだ明瞭な返し部にいたる。返し部からやや内側に入ったところから逆三角形の茎がつく。右・左図の両面ともに斜並行剥離が施されている。S2は左図の左側縁の返し部が一部欠損しているものの、身部長約16mm、茎部推定長10mmを測る極小型の有茎尖頭器である。平面形は、左右非対称であり、左図の身部左側縁が大きく外湾している。茎部はやや内湾した逆三角形を呈し、返し部にいたる。身部を作出したのち、茎部を作出しておらず、茎部作出の際の調整剥離が、身部半ばまで及んでい

るものも認められる。S 3は今回出土した有茎尖頭器の中では最小である。右図には主要剝離面が、左図には素材剥片剥出以前の剝離面が観察される。身部はやや内湾するものの正三角形を呈し、茎部は内湾気味に作出される。調整剝離は周縁のみに施されており、素材剥片の厚さを改变することなく製作されている。S 4は茎部が一部欠損している。身部は外湾しながら、若干抉り込んだ返し部にいたる。茎部は返し部からやや内側に入ったところから作出され、残存状況から小さな逆三角形の形態が想定される。左図には斜並行剝離が、右図には押圧剝離ないしは平坦な調整剝離が施され、さらに、右図の右側縁先端部には斜並行剝離が観察される。S 5は、やや外湾する三角形の身部を呈する。茎部は基端部が水平で、内湾する逆台形を呈している。右図には広く残存した主要剝離面が認められる。S 6は基端部が欠損した、左右非対称な有茎尖頭器である。身部は外湾しながら返し部にいたり、やや強く内湾して茎部を作出している。S 7は基端部が調査時に一部破損しているものの、ほぼ完品の有茎尖頭器である。外湾した二等辺三角形の身部から、返し部にいたり、内湾した茎部を作出している。身部左側縁部からの調整剝離は器体中軸を越えているものも観察される。S 8は先端部から右図の右側縁返し部および茎部まで欠損している。全長は40mmの前半と推定される。右図にはやや幅広な調整剝離が器皿全体を覆うように認められるが、左図には主要剝離面が広く残存している状況が観察される。左図の身部では素材剥片のバルブ除去を意図したと考えられる調整剝離が施されている。S 9は基端部が欠損している有茎尖頭器である。右側縁返し部から茎部にかけては広い・間抜・剝離痕が観察される。身部は先端部から胴部中央にかけて外湾し、胴部中央から返し部にかけては内湾している。返し部から若干内側に入ったところに内湾した茎部が作出される。使用された石材には気泡が入っており、質が良いとは言えない。S 10は先端部および基端部が調査時に破損しているものの、ほぼ全形が判明する推定復元長45mmの有茎尖頭器である。左図の右側縁では斜並行剝離気味の、左側縁では全体的に粗い調整剝離が施されている。右図でも茎部を除き、やや粗い調整剝離が施される。茎部は逆三角形を呈する。S 11は身部の中程から先端部にかけて欠損し、両側縁（特に左図の身部左側縁）も調査時に破損している。左図の身部では素材剥片剥出以前の剝離面が広く残存し、調整剝離がほとんど施されないのでに対し、右図では押圧剝離が施されている。石質は良好ではなく、気泡が多く認められる。S 12は左図の左側縁先端部を調査時に破損しているものの、推定復元長52mmを測る。左図では器軸を越える斜並行剝離が観察される。返し部はそれほど明瞭ではない。茎部は逆三角形を呈し、その側縁は直線的である。S 13は先端部が衝撃剝離により欠損し、両側縁や返し部が調査時に細かく破損している。右図の身部では斜並行剝離が施されている。身部はやや外湾、茎部はほぼ正三角形を呈する。S 14～S 16は身部軸が狭い尖頭器で、すべて先端部および基部が欠損もしくは破損している。これらは有茎尖頭器として器種認定できると考えてはいるが、基部が欠損もしくは破損していることから、分布図や一覧表には尖頭器として取り扱っている。S 14は先端部が衝撃剝離により欠損している。茎部も大部分が欠損しているが、残存状況から逆三角形を呈すると想定したい。両側縁が並行する平面形態であり、左図の器軸中央には棱が認められ、横断面が一舟形を呈する。S 15は先端部が衝撃剝離による欠損、基部が調査時に破損したものである。「ハ」の字状を呈する平面形である。調整剝離は斜並行剝離が施されている箇所も認められる。ただし、右側縁部では階段状剝離が多く観察される。横断面形は先端部がやや三角形、中央部が凸レンズ状を呈する。S 16は両側縁がほぼ並行する形態を呈すると思われる。S 17は弥生時代の有茎石椎に近似しているものの、サスカイトの風化状態やS 2と同一母岩と想定されることから縄文時代草創期の尖頭器とした。平面形態は棒状に近いもの

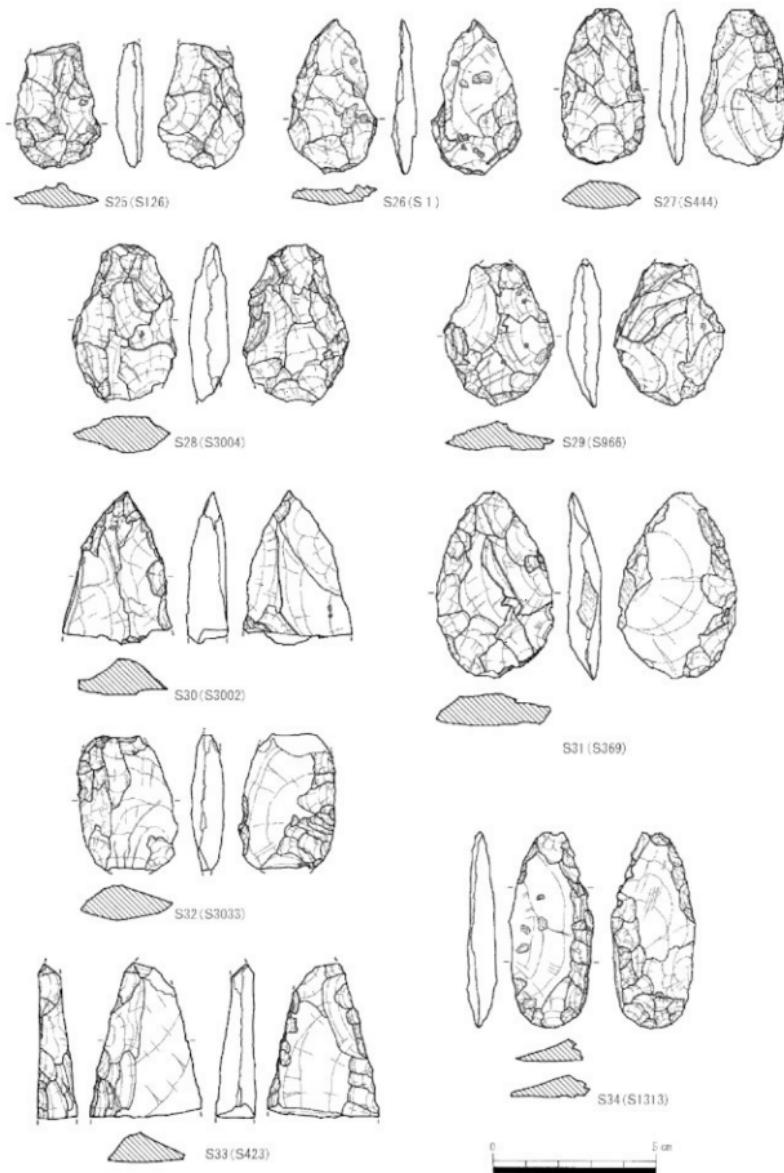


第16図 出土石器① (2/3)

で、最大幅が中央部にあり、基部が長い。S18～S22は尖頭器の先端部である。S18はS2と同一母岩と想定している。調整剝離は残存部を観察する限り、斜並行剥離が施されている。S19の調整剝離は両面ともに斜並行剥離が施され、なかには器軸中央を越えるものも認められる。S18・S19は身部上半部しかないので尖頭器に分類したが、有茎尖頭器の先端部と思われる。S20・S21ともに身部下半部を欠損している。部分的に平坦な調整剝離を施しているものの、器体の厚さは均一ではなく、横断面が凸レンズを呈さない箇所も認められる。S22の先端部および身部下半は調査時に破損したものである。一部、器体中軸を越える調整剝離が施されている。S23は身部上半部が調査時に破損している。

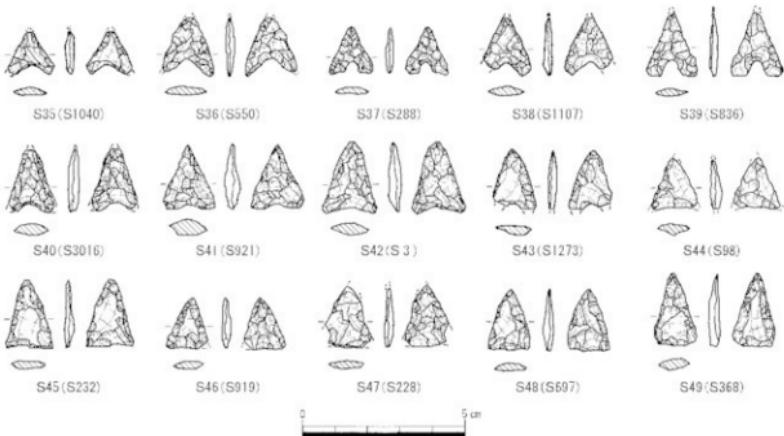


第17図 出土石器2 (2/3)



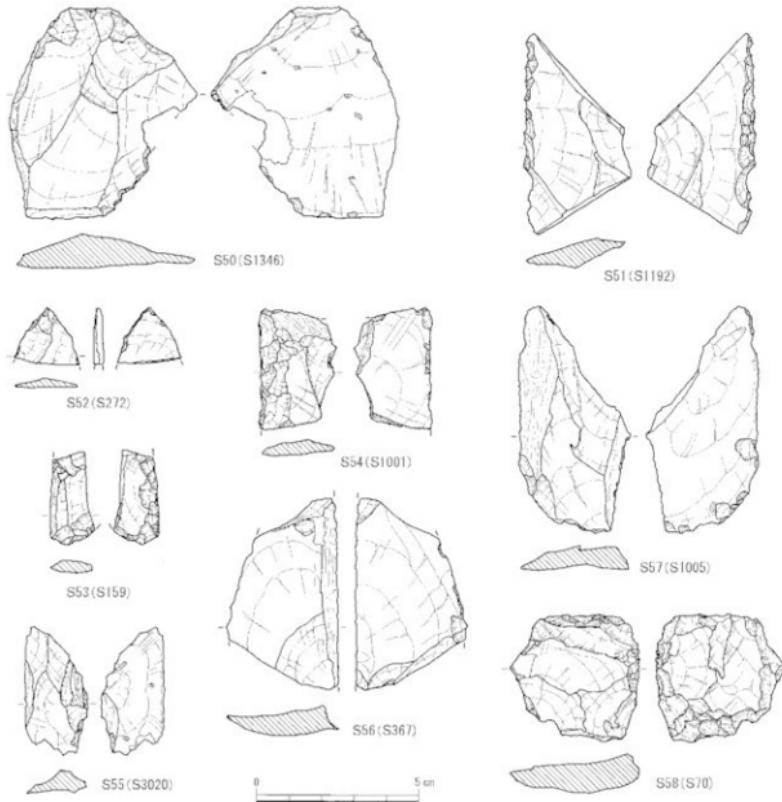
第18図 出土石器③ (2/3)

るものである。今回出土した有茎尖頭器および尖頭器の中では、S23のみが流紋岩で製作されている。石質は緻密であり、剥片石器に適する良好な石材である。残存状況から、最大幅が身部の中央になる形態を呈すると想定される。基端部は水平であり、基部は逆台形を呈する。階段状剥離が多く認められる。S24の先端部は欠損し、下半部は調査時に破損している尖頭器である。ただし、平面形態が左右対称ではなく、左側の左側縁の方がやや強く外溝していることから、いわゆる半月形石器とも捉えられるかもしれない。両面とも丁寧に押圧剥離が施され、特に左側縁では斜並行剥離が観察される。S25の石材は気泡が多く認められ、良好な質ではない。両面とも平坦な調整剥離で覆われているものの、剥離面は全体的に広く、階段状剥離が認められるものが多い。先端部は欠損しており、右側にはそれに伴う剥離痕が認められる。基部は緩やかな弧状を呈し、左側には細かい剥離痕が観察される。S26はS25と同一母岩から製作されていると想定している。基部は平坦な調整剥離が施されているが、身部はやや急角度の加工が施されており、素材剥片の厚さを大きく減ずることなく製品としている。左側には素材剥片削出以前の剥離面が認められ、さらに左側縁基部側には石核作業面が観察される。S27の右図には、広く残存した素材剥片の主要剥離面が認められる。左図では全体的に広めの平坦な調整剥離を施しているが、基部においては腹面側から急角度の加工を施している。右図の右側縁では素材剥片のバルブ除去を意図したと思われる調整剥離や先端部側で細かい平坦な調整剥離が施されているものの、左側縁では2回調節剥離を施したのみで終了している。S28は調査時に周縁部を細かく破損しているものの、全体のプロポーションには影響を与えていない。ただし基部側は欠損している。S25と同一母岩から製作されていると想定される。調整剥離も階段状剥離が多く認められる。周縁部から平坦な調整剥離を施しているが、今回出土した有茎尖頭器のものと比べるならば粗い。S29は先端部が衝撃剥離で欠損している。左側縁基部付近には折れと想定される平坦面が認められる。S25と同一母岩から製作されていると想定される。全体的に調整剥離痕は広く、さらに階段状剥離が多く認められる。S30～S34は尖頭器未製品と考えられる。S30は背面左側縁下部には素材剥片

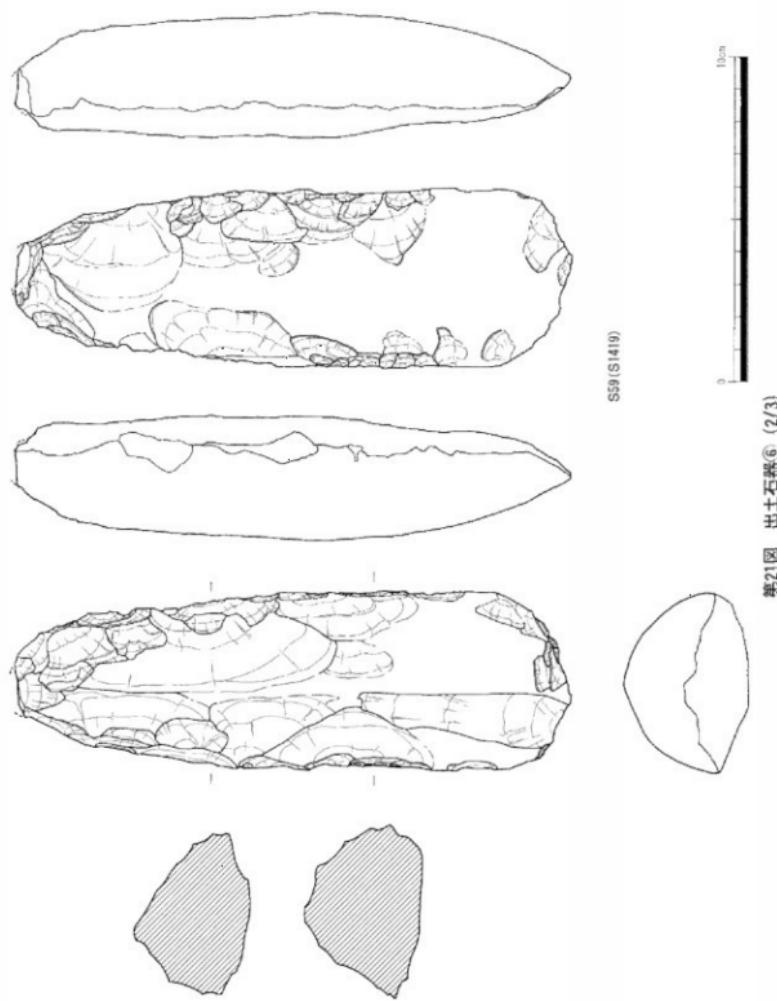


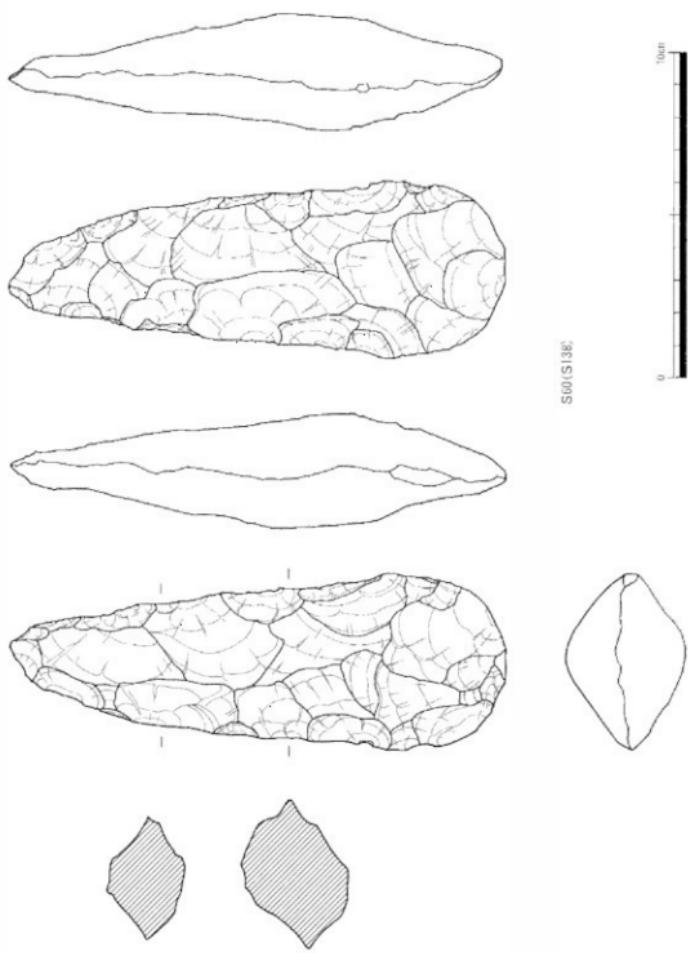
第19図 出土石器④ (2/3)

剥出の際の打面が、右側縁先端部には石核底面とも考えられる剝離面が観察される。背面は先端部のみに腹面からのやや急角度の加工が細かく施されている。腹面側は平坦な調整剝離である。S31は調査時に周縁部を細かく破損してしまったものの、全体のプロポーションには影響を与えていない。背面右側縁中央部には原縫面の打面が、右側縁部には素材剝片剥出以前の剝離面が残存している。右縁には素材剝片の主要剝離面が広く残存し、やや発達しているバルブの除去がなされていない。素材剝片の縁辺となる背面左側縁にはやや急角度の加工が施されるのに対し、腹面側は平坦な調整剝離が施されている。S32は先端部が調査時に破損し、基部側は欠損している。背面左側縁部には、素材剝片の打面となった原縫面が残存している。腹面には主要剝離面が広く残存している。腹面右側縁はバルブの除去を意図したと思われる平坦な調整剝離を施しているが、左側縁にはほとんど調整剝離がなされていない。背面左側縁は、やや急角度の加工が施されている。S33は先端部が調査時の破損、身部

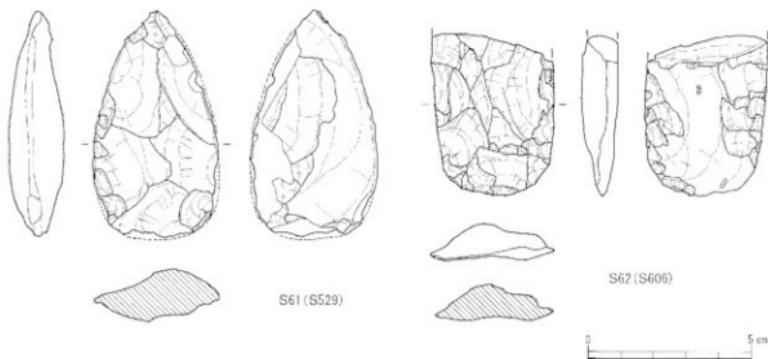


第20図 出土石器 5) (2/3)



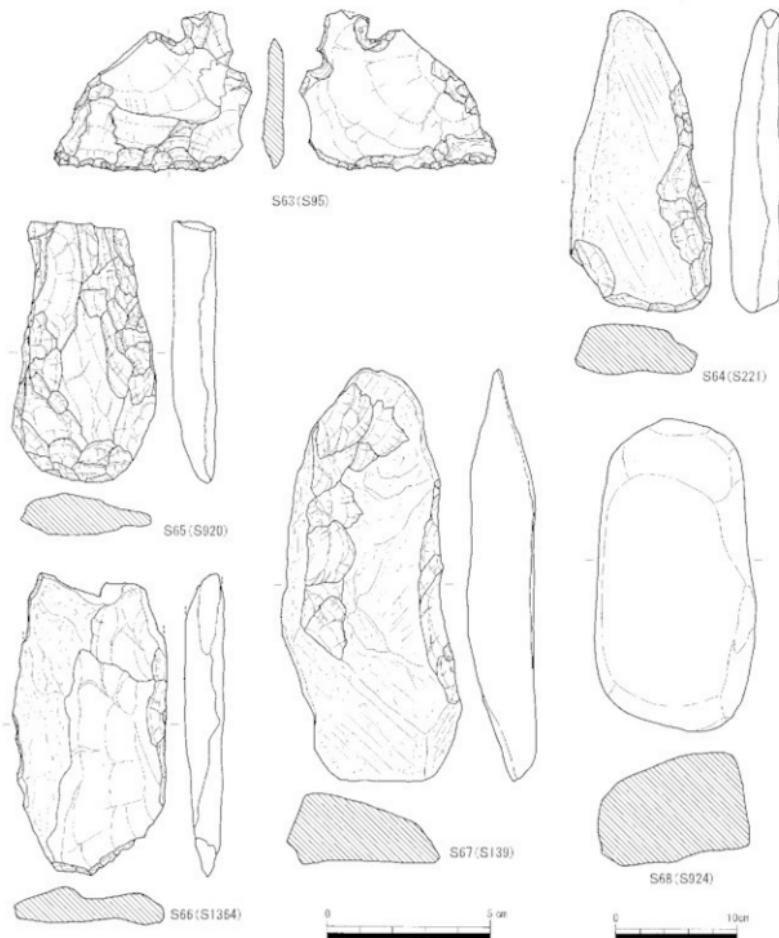


第22図 出土石器⑦ (2/3)



第23図 出土石器 8 (2/3)

下半部が欠損している。背面左側縁には急角度の加工が施され、形態的な特徴としてはナイフ形石器に近いものの、腹面には連続した平坦な調整削離が施されていることから、尖頭器の未製品と想定した。背面右側縁には素材剥片剥出以前の剥離面が残存している。S34の石材は気泡が多く認められ、良好とは言えない。背面の右側縁から底部にかけては急角度の加工が施されている。腹面左側縁から底部にかけてと右側縁先端部には平坦な調整削離が施されている。一見すると背面左側縁を刃部とするナイフ形石器のようにも捉えられるが、腹面には平坦な調整削離や底部作出のための調整削離等が観察されるため、尖頭器未製品として判断している。S35～S49は石核である。いずれもサヌカイト製であり、凹基式と平基式が出土している。器表面全体が押圧剥離で覆われているものや、素材剥片の周縁部のみ調整削離を施し、主要剥離面が大きく残存しているものなどが認められる。S50・S51はスクレイパー類である。S50は背面右側縁部が一部欠損している。背面右側縁には連続したやや急角度の加工が施されている。左側縁部には微細な使用痕状の剥離痕が観察される。打面は單打面である。S51は背面左側縁に連続したやや急角度の加工が施されている。風化状態は草創期の有茎尖頭器と似ているが、形態から繩文時代でも新しい年代に帰属させた方が良いかもしれない。S52～S54は加工痕のある剥片である。S52は背面左側縁が腹面から、腹面右側縁が背面から急角度の加工が施され、一部平坦な調整削離も施されている。下半部は欠損している。尖頭器の先端部または製作中の石核の欠損品のどちらとも判別しがたい。S53は右側縁および上部を欠損している。腹面右側縁のバルブに細かい平坦な調整削離が施されている。石核もしくは尖頭器を目的としていたが、製作中に欠損したため魔棄されたものと考えられる。S54は背面左側縁には細かく平坦な調整削離が施されているものの、背面上部には原礫面が残存している。左側縁および下側縁部は欠損している。S55～S57には使用痕のある剥片である。S55はS2と同一母岩から製作されていると想定される。背面左側縁部には使用に伴うと思われる微細な剥離痕が認められる。S56は上下両縁が欠損している。背面左側縁には素材剥片の打面となる原礫面が認められる。腹面右側縁には使用に伴うと思われる微細な剥離痕が認められる。S57は背腹両面の右側縁に微細な剥離痕が観察されるものの、意図的な加工とは認めがたく、使用に伴うものと判断した。背面左側縁には原礫面が残存している。S58は裏面左側縁上部



第24図 出土石器⑨ (2/3・1/4)

に原縫面が残存している石核である。表裏両面とも4方向から剥片剥離が行われている。現状で観察する限り、目的剥片は4cm大の横広ないしは不定形な剥片であろう。この石核と同一母岩と考えられる石器としては、石鏃のS36・S37・S39・S44・S46などがあり、尖頭器（有茎尖頭器含む）においては認められなかった。S59は、基部および表面右側縁の一部が調査時に破損している局部磨製石斧である。平面形は刃部側がやや広がる披形、横断面はややいびつなD字状を呈す。表面の刃部には、使用に伴う剥離が認められる。表面の研磨は、その研磨方向が不明なもの、刃部から器体中央部に

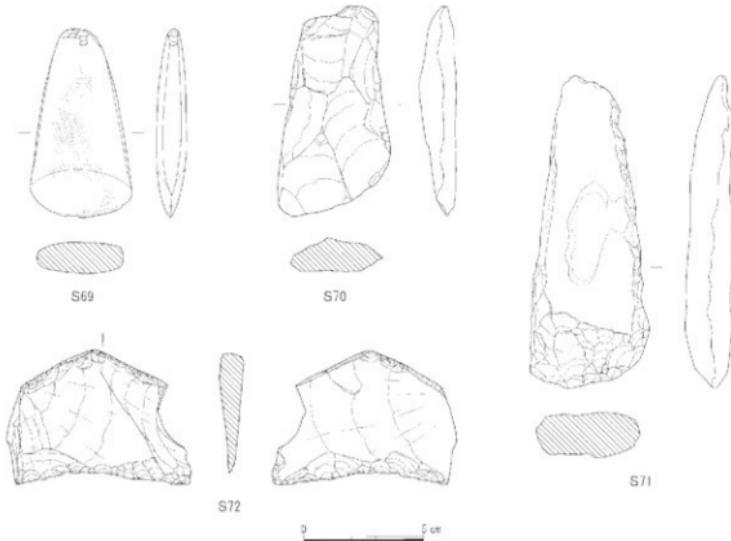
かけて施されている。裏面は、刃部から基部付近まで研磨が施されている。表面には急角度の、裏面は平坦な調整剝離が施されている。S60は全体に調整剝離が施された、撥形を呈した両刃の打製石斧である。器体表面の風化が著しく、研磨痕の有無は確認できなかった。刃部側からの側面観は、レンズ状を呈する。S61は、側縁部が調査時に広く破損しているものの、木葉形を呈する打製石斧である。右図には素材剥片の主要剝離面が大きく残存している。S62は上半部が欠損しているが、石斧の刃部と考えられる。表面の調整剝離は粗く、階段状剝離が多く認められる。裏面は両側縁から平坦な調整剝離を施しているが、素材剥片のバルブが残存している。S63～S68は、座標が与えられている、縄文時代中期以降の石器である。S63は右逃で、つまみ部は一部破損している。S64～S67は打製石斧（石鎌）である。S68は磨石と思われる人形の礫である。これと同じ形態・大きさの礫は多数認められたが、表面が磨滅しているものは確認されていないようである。

(小嶋)

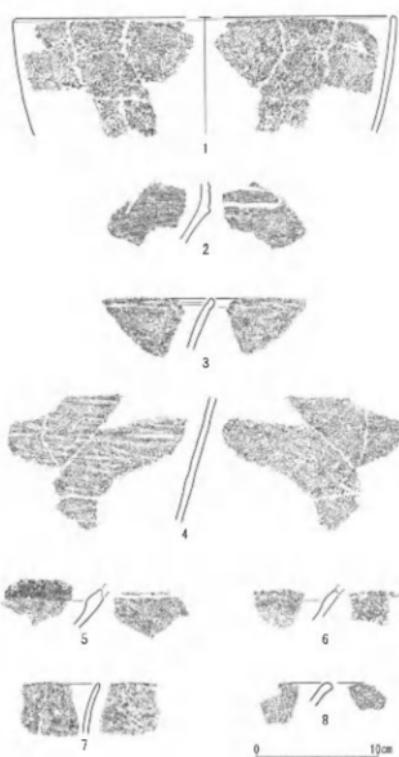
包含層中出土の後・晩期の石器（第25図、図版20）

ここに掲載するのは、縄文時代後・晩期に位置付けられる石器のうち、先に触れた草創期遺物を含む砂層よりも上位に堆積する包含層や、後世の柱穴などから出土したもので、原位置を保っていないものである。S69は2区北部の柱穴（調査時名称：P685）に混入していた、黒色を呈する流紋岩製の磨製石斧で、いわゆる定角式の形態に近い。S70は3区東壁の包含層内から出土した打製石鎌である。表面は風化が進み、稜線が不明瞭になっているが、調修は概して粗雑である。S71は、1区の南端部から出土した玄武岩質凝灰岩製の打製石鎌である。S72は3区出土で、サスカイト製のスクレイバーと思われるものである。

(岡本泰)



第25図 出土石器10 (1/2)



第26図 出土土器 (1/4)

沈線が施されている。津雲A式併行期の土器で縁帯文期のものであろう。3・4は深鉢の破片で直接接合しなかったが、近接して出土しており同一個体である可能性が高い。3は口縁部の破片で、端部内面には1条の沈線が施されている。3・4ともに内面には二枚貝による条痕が認められる。胎土は黄褐色を呈し、やや異質であるが晚期のものと思われる。

5・6は3区中央の窪地状にたわんだ地点に埋まった粗砂層から、尖頭器とともに出土した土器である。接合はしなかったが、胎土は同様で黒褐色を呈しており特徴も共通するので、同一個体の可能性が高い。いずれも口縁部に近い破片であるが、5の上方端部は擬口縁と考えられ、突出したような接合面が認められる。また、5・6ともに内面には明瞭な段をもっている。器種や所属時期については現段階では不明であり、今後の類例を持ちたい。7は小形の深鉢の口縁部になる可能性があるが、他に類例がなく詳細は不明である。8は口縁部の破片で端部は屈曲している。器種、時期ともに確定できないが、鈍い黄褐色の粗い胎土のもので縄文土器と思われる。

(石田為成)

土器 (第26図、図版5・20)

第26図に示した土器は縄文時代草創期の石器類と同様に、基盤層直上もしくは粗砂層から出土したものである。土器はいずれも縄文土器と考えられるが、時期の特定が困難なものも含まれている。これらの土器が出土した粗砂層は、縄文時代草創期のある時期に付近の流路の氾濫によって運搬され堆積したもので、出土した土器はその際に混じったものが大半であると考えられる。粗砂層の最下部より出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果(AMS法)はcalBP4423-4456年前で、粗砂層は少なくとも縄文時代中期～後期前半以降に堆積し形成されたものと考えられる。このことから粗砂層から出土した土器は、一部所属時間が不明なものもあるが、多くは縄文時代後期以降のものであると思われる。

1は粗製の深鉢で、口縁部外面の一部に巻貝による条痕が認められることから、時期は後期の純縄におさめておきたい。2は外面、内面ともに巻貝による条痕が認められ、外面には2条の

第3節 弥生時代の遺構・遺物



第27図 弥生時代遺構全体図 (1/700)

1 概要

弥生時代の遺構・遺物は、調査区南西部を中心に検出されている。特に2区西半部から1区南西部にかけては合計16軒の堅穴住居、15基の土壙墓が集中的に検出された。時期的には、前期後葉から後期初頭までの幅があるが、主体は中期後葉のものである。

住居群は当時の集落域のはば東端に位置し、集落中心部は調査区の西側へ展開する可能性が高い。土壙墓群は、調査区西部の1区・2区境界部で集中的に検出された。うち1基は出土遺物から弥生時代中期前葉に比定され、勝央町内はもとより美作地域でも類例の少ない遺構として注目される。残る12基はおおむね中期後葉に位置づけられるものである。

後期に入ると明確な遺構はなくなり、特に中葉以降には包含層遺物すらほとんど見出されなくなる。このことから、小中遺跡など周辺の丘陵上に居住域が移っていった様子が想定される。

なお、調査区各所から不整形な土壙状の落ち込みが多数検出されている。埋土の点からは弥生時代の遺構に近いが、形状が不安定で出土遺物も皆無に近く、遺構としての認定すら困難なものであるため、全体圖への掲載にとどめたことを了解されたい。(岡本泰)



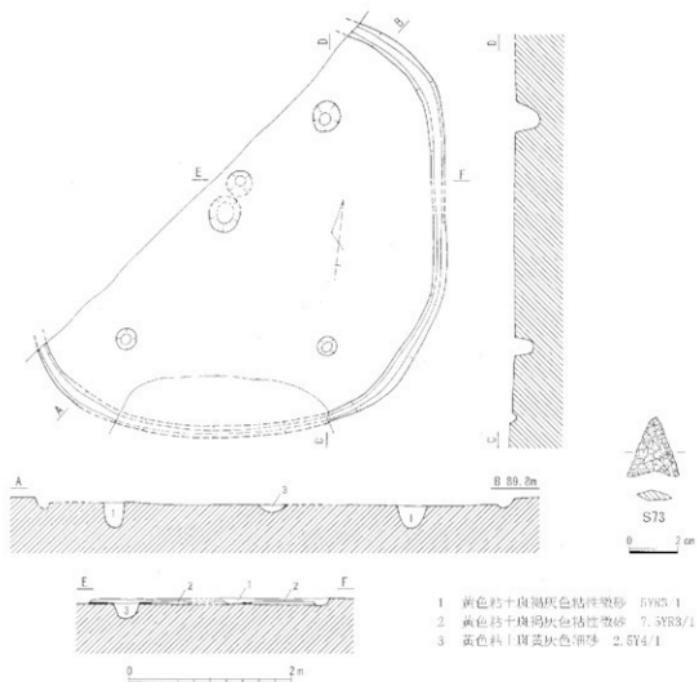
第28図 弥生時代主要遺構全体図（1/400）

2 竪穴住居

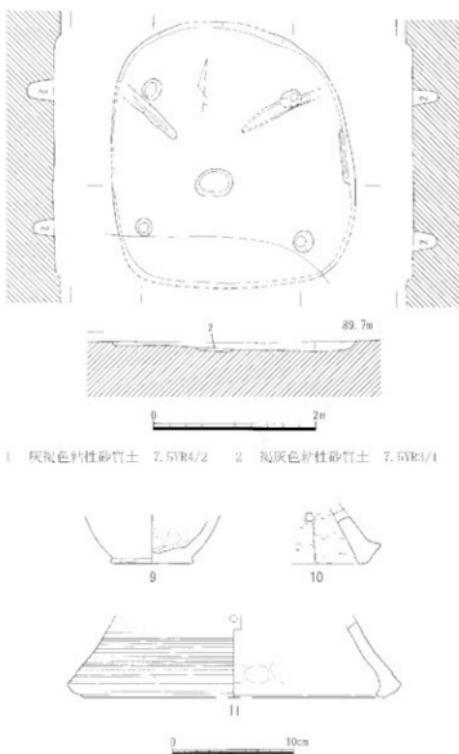
竪穴住居1 (第27~29図、図版27)

竪穴住居群のうち最も北に位置し、かつ、切り合い関係より近接する住居2から4よりも古い。上塙墓2、土塙墓4を切っている。こうした墓と住居の切り合は、時期は異なるが兵庫県佐用町本位田高田遺跡でも見られる。発掘区の境に位置し全容は不明ながら、残存値で長さ、幅とも490cmを測り、その平面は隅丸方形であると考えられる。深さは検出面より6cmを測る。また住居の外壁に沿って幅15~18cmほどの壁体溝が全周する。断面観察によると、地山由来の黄色粘土を含む褐色粘性砂により一部貼り床されていることが分かった。平面での検出に努めたが、地山との判別は、困難であった。柱穴は3個を確認した。柱間距離はP1からP2間で290cm、P2からP3間で250cmを測る。位置関係から4本柱の住居となると考えられる。住居のほぼ中央に中央穴と考えられる柱穴が2個検出された。遺物にはS73の石錐がある。図示はできなかったが、土器小片や他の住居、土塙墓との切り合から、時期は弥生時代中期後葉以降であろう。

(和田 剛)



第29図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/2)



第30図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居3 (第27・28・31図)

竪穴住居2を切り住居4に接している。また、土壙草9、土壙2を切っている。最大長326cm、短辺300cmを測る平面隅丸方形の住居である。深さは検出面より5cmを測り、かなり浅い。壁体溝は検出できなかった。底面のレベルは海拔高で89.56mを測る。柱穴は4個を確認している。それぞれ直径20~28cm、深さ28~32cmを測る。柱間距離は150~192cmである。P3がやや壁寄りで検出されており、柱間はややびつな方形を呈する。住居のはば中央で直径50cm、深さ20cmほどの中央穴が検出されている。埋土には木炭粒などは見られなかった。住居の面積は9m²強であり、今回検出された住居の中では小形に属する。遺物には先の口縁部である12・13がある。いずれも口縁端部を上下に拡張している。時期は、出土遺物や切り合ひ関係から弥生時代中期後葉かと考えられる。

(和田)

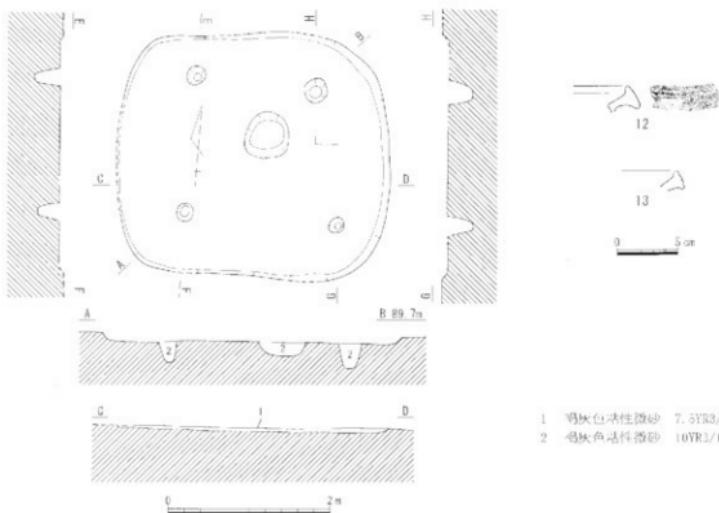
竪穴住居4 (第27・28・32図)

竪穴住居3を切り、一連の住居群の中で最も新しい。また土壙草1および5を切っているとみられた。この住居は全体に残存状況が悪く、復元して図示している。長辺445cm、短辺355cmを測る平面長

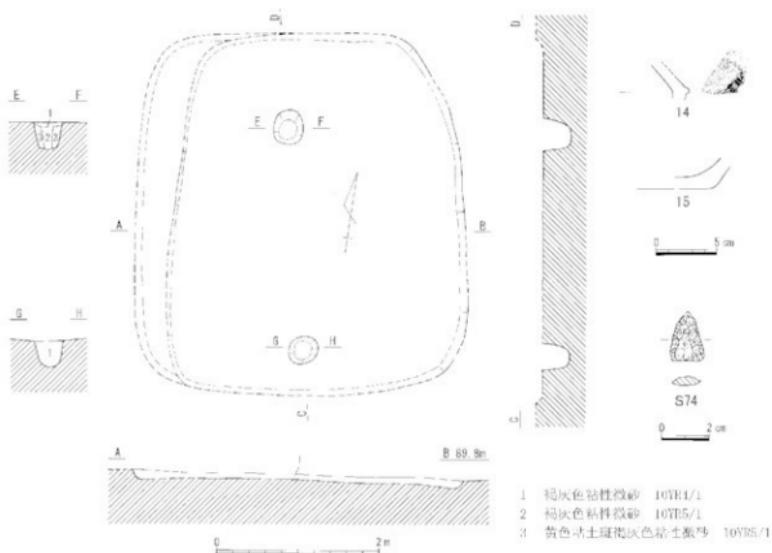
竪穴住居2 (第27・28・30図、図版6)

竪穴住居1の南、竪穴住居3の北に位置し、住居1を切り、住居3に切られる。平面形は最大長322cm、最大幅294cmを測る隅丸方形を呈する。深さは検出面から13cmを測り、残存状況はよくない。底面は海拔高で89.49mである。壁体溝は東辺で長さ60cmほどにわたって検出された。柱穴は4個を検出し、すべて壁際近くに位置する。それぞれ直径22~28cmの円形、ないしは梢円形である。深さは床面より28cmから32cmと浅い。柱間距離は172~180cmを測り柱間はほぼ正方形である。住居中央には長径16cm、短径33cm、深さ4cmほどの浅い窪みが認められ、中央穴と考えられた。また、住居の北東と北西の2か所で屋内溝が検出されている。出土遺物には9の先底部、10の高脚部、11の器台の脚部がある。時期は出土遺物から中期後葉と考えられる。

(和田)



第31図 坑穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

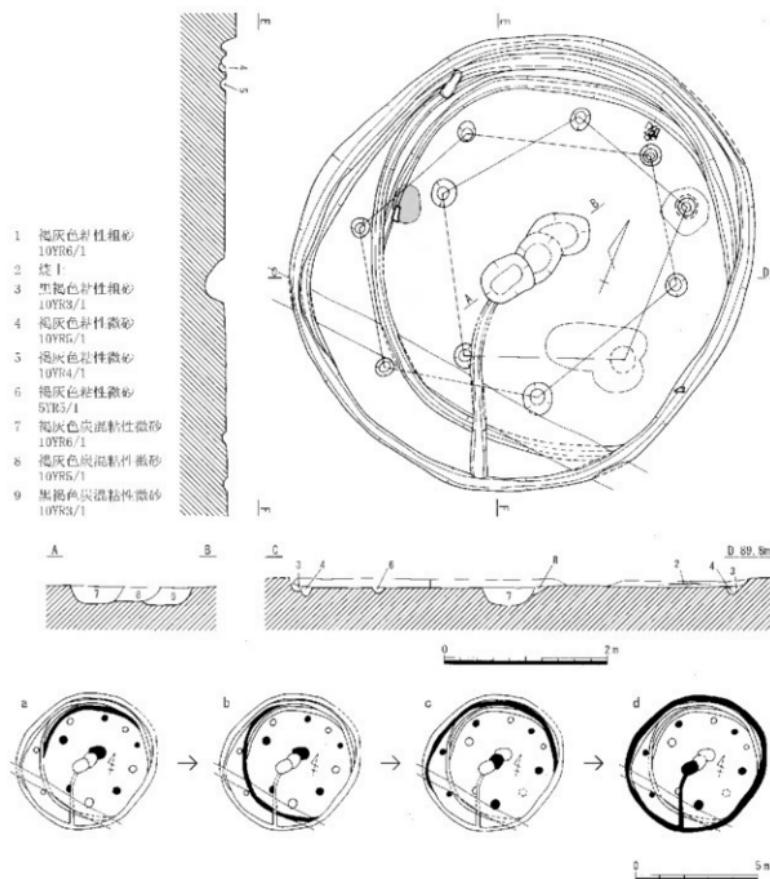


第32図 坑穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

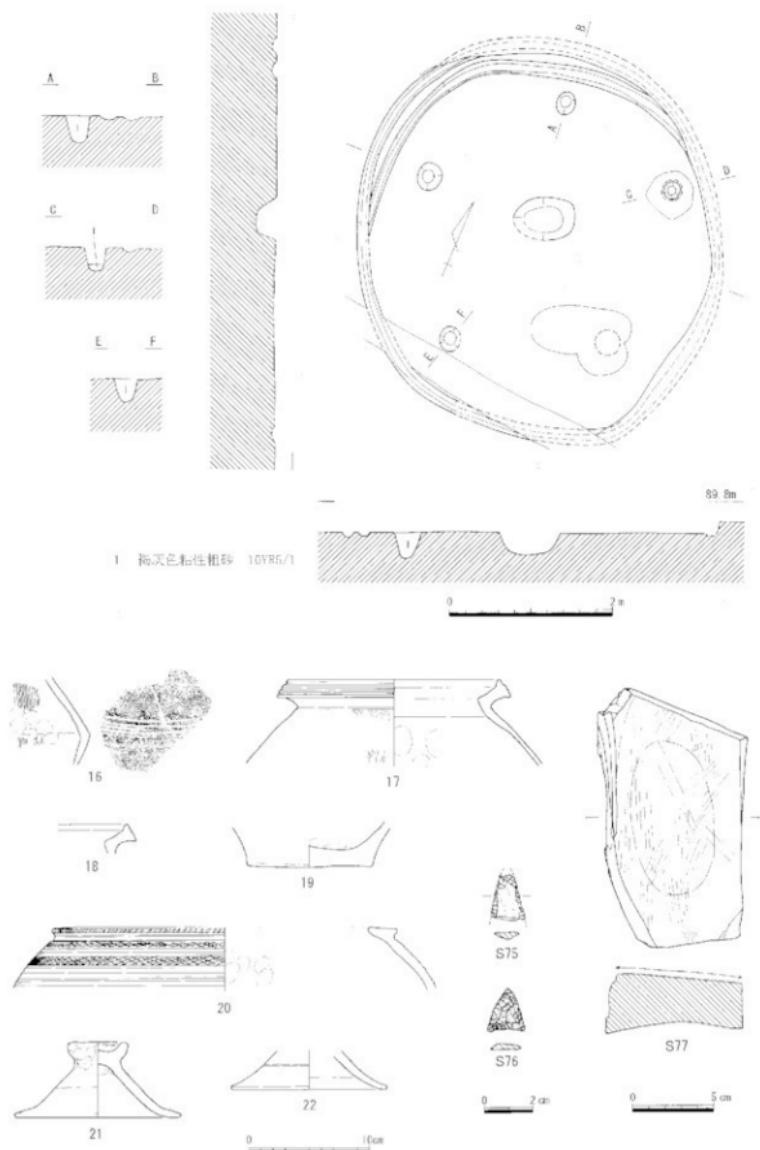
方形の住居であると見られる。深さは検出面より10cmを測り、浅い。壁体溝は検出できなかった。底面のレベルは海拔高で89.52mを測り、住居東側に向かってやや低くなっている。柱穴は2個を確認している。それぞれ直径36cm、深さ32cmを測る。柱間距離は220cmである。遺物には壺の胴部14、壺の底部15、石錐S74がある。時期は、遺物や切り合いから弥生時代中期後葉である。(和田)

豎穴住居5 (第27・28・33~35図、写真3、図版6・21・27・29)

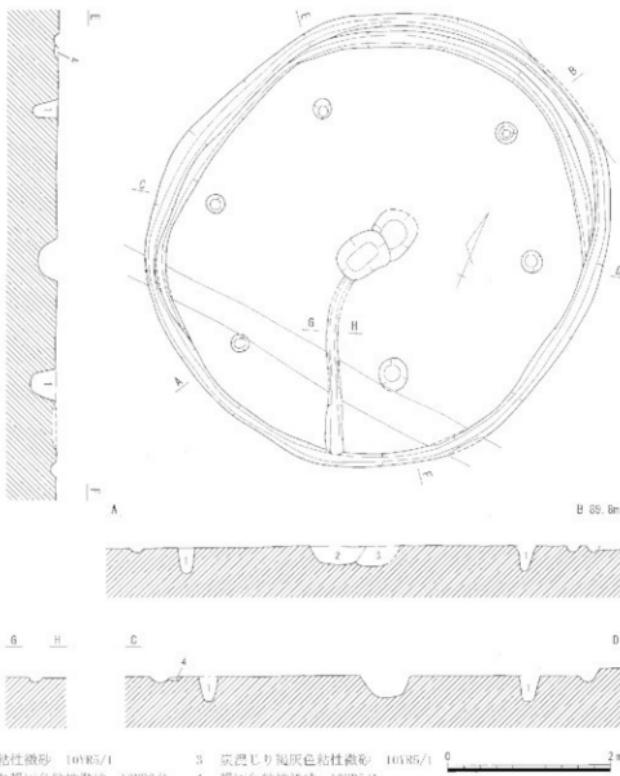
豎穴住居3の南2.1m、豎穴住居7の北1.2mに位置する。長径572cm、短径515cmを測る平面稍円形の住居である。この住居は壁体溝や中央穴の切り合い関係から3回の拡張が確認できた。5個の柱穴から構成されるものが古く、この段階で一度拡張している。その後に6本柱の住居に建て替えられ、



第33図 豊穴住居5 (1/60)・豎穴住居5の変遷 (1/200)



第34図 竪穴住居 5a・b (1/60)・竪穴住居 5 出土遺物 (1/4・1/2・1/3)



第35図 壇穴住居 5c・d (1/60)

最後にもう一度拡張する。位置関係と切り合いから、この建て替えと拡張に合わせて中央穴も掘り直されているとみられる。この過程を第33図に図示している。それぞれ、古い順に壇穴住居 5 a・5 b・5 c・5 d とする。ここでは古いものから順に報告する。壇穴住居 5 a は同住居の中で最も古く、最小の住居である。平面形は長径457cm、短径447cmを測る、いびつな円形の住居であると考えられる。住居の西側の外周に沿って幅15cmから18cmほどの壁体溝を確認している。東側の壁体溝は後述する壇穴住居 c・d の壁体溝がこの部位で幅20cmを超えることから、これに共通し重なって全周していったと思われる。柱穴は4個検出された。位相関係から5本柱の住居になろう。柱穴は直径27cmから33cmを測る。深さは30cmから40cmと浅い。これは今回検出された住居全般に言えることである。この遺跡の基盤層がしまりの強い礫層であることも要因ではあろうが、住居上屋構造の重量とも関連しているものと考えられる。住居中央には長径76cm、深さは床面より32cmを測る中央穴が検出された。埋土には



写真3 壁穴住居5作業風景

平面橢円形の住居である。住居北側で幅18cmほどの壁体溝を住居外周に沿うように検出している。南側の柱体溝は位置関係から壁穴住居5 d のそれに共通していると思われる。柱穴は6個確認されている。柱穴の直径は25cmから40cmと、ややばらつきが認められた。また、深さはほぼ共通で32cm前後を測る。住居中央には復元長径60cmを測る中央穴が検出されている。埋土にはやはり木炭粒が見られる。最後に、この壁穴住居5 c 北半を拡張したものが壁穴住居5 d である。壁穴住居5 d は長径572cm、短径515cmを測り、幅18cmほどの壁体溝が住居外周に沿って全周していることを確認している。壁体溝の深さは検出面より10cmを測り、床面のレベルは海拔高で89.45mである。床面はほぼ水平であった。柱穴は5 c に共通しているが、中央穴は掘り直されている。この中央穴は長径65cm、短径50cmを測る平面扇丸方形で、深さは22cmであった。この中央穴には壁体溝まで続く屋内溝が接続していた。埋土中には木炭粒が散見された。図示している出土土器は壺、甕、鉢、蓋である。右器にはサスカイト剥片が認められた。時期は遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

(和田)

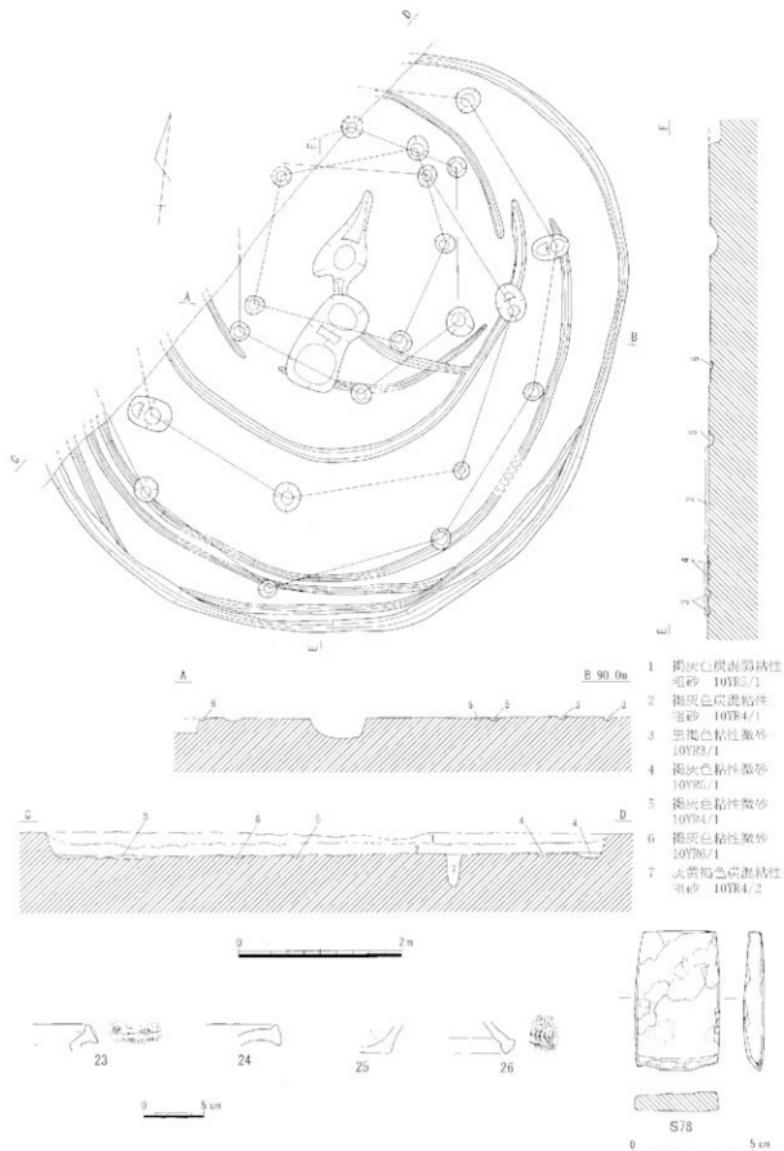
壁穴住居6（第27・28・36～40図、写真4、図版7）

遺跡の南西部、壁穴住居5 から東へ10mの所に位置する。住居の西側は調査区外となり、全形は明らかにできなかった。床面のレベルは海拔高で89.53mである。検出面からの深さは浅く、5cm程度が残存するにすぎなかつたが、調査区西壁の観察によると、少なくとも深さ25cmはあったことが確実である。住居掘り下げ時に床面からは多数の壁体溝と柱穴が確認され複数の住居が重複していることが想定された。検討の結果、位置関係と切り合いから、それぞれ古いものから新しいものへと順次拡張されていることがわかった。ここでは古い順から壁穴住居6 a、6 b、6 c、6 d、6 e、6 fとして報告する。

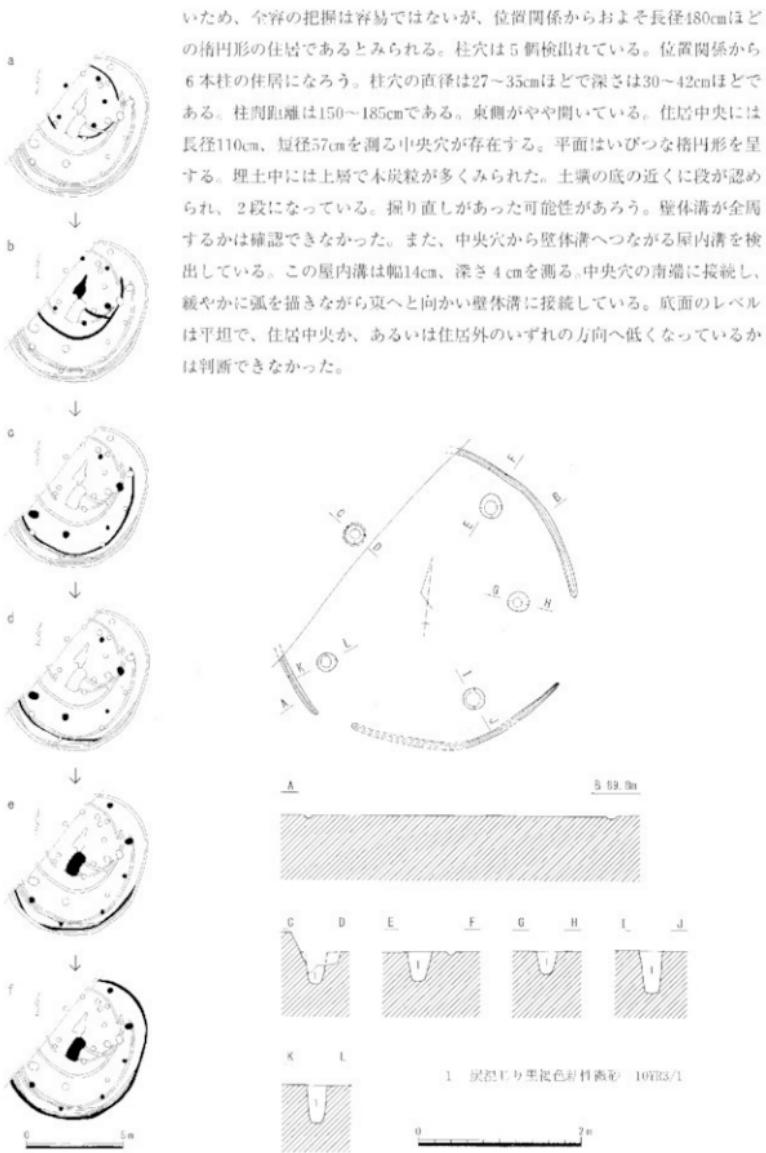
壁穴住居6 a は一群の住居の中では最小のものである。最大径379cmを測り、平面は円形を呈すると考えられる。柱穴は5個確認されている。一部途切れているものの、検出された範囲内では幅8cmほどの壁体溝がほぼ全周しているものと考えられた。柱穴は直径30cmほどで、深さは28cmから52cmとばらつきがある。中央穴は確認できなかつたが、これは後述の壁穴住居6 b と共通している可能性が考えられる。

この6 a をほぼ全面に拡張し建て替えたものが壁穴住居6 b である。壁体溝が北半で遺存していな

本炭粒が散見されたが焼土や被熱痕跡は見られず、火が焚かれたかどうかについては確証が得られなかつた。この壁穴住居5 a では北方向へ壁体溝の拡張が確認された。これが壁穴住居5 b である。壁穴住居5 b は長径500cmを測る。南半の壁体溝や柱穴と中央穴は5 a に共通している。続く壁穴住居5 c はこれまでの5 a、5 b から大きく拡張され、住居の構造も変わっている。壁穴住居5 c は長径554cm、短径510cmを測る



第36図 堅穴住居6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)



第37図 竪穴住居6の変遷 (1/250)・竪穴住居6a (1/60)

堅穴住居 6 b を再び南方向に拡張したもののが堅穴住居 6 c である。これは残存長径612cmを測る平面円形の堅穴住居である。柱穴は5個確認されているが、位置関係から7本柱の住居になるであろう。壁体溝は住居外周に沿って住居南半をほぼ半周するが、北半では検出できなかった。柱穴は径20cmの円形のものと、長径50cm程の楕円形のものの2種類が認められた。楕円形のものの底部は2段になっており、柱の抜き取り穴と考えられよう。深さも42cmから52cmと、これまでの住居よりも深い。柱穴底は平坦であるが礎板などは設けられていない。

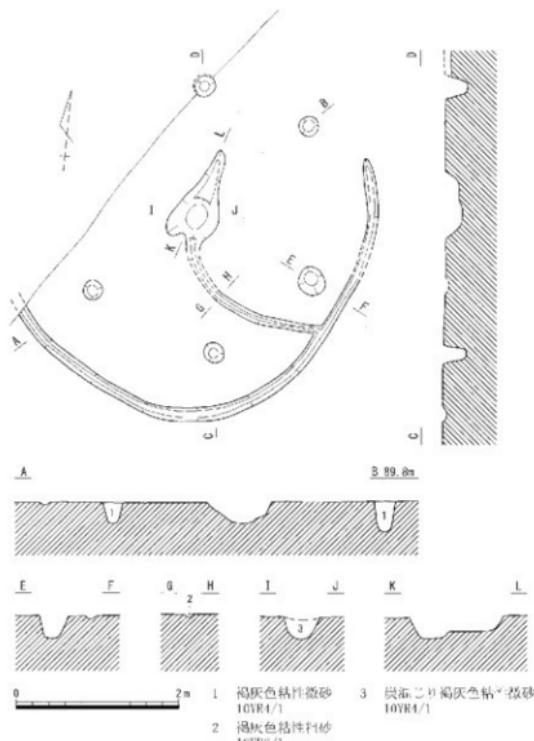
柱間距離は200cmから215cmを測る。中央穴は確認できなかったが、これも後述の堅穴住居 6 c と 6 f と共に共通しているものと考えられる。堅穴住居 6 b に認められた屋内溝はこの住居では認められなかった。

この段階でさらにもう一度南側へ拡張しており、これがが堅穴住居 6 d である。壁体溝が堅穴住居 6 c の壁体溝から6cm離れた位置で確認されている。この壁体溝は東側で堅穴住居 6 e・6 f のそれに合流している。

次に、もう一度南側に拡張したものが堅穴住居 6 c である。壁体溝を一部確認したのみで全形は



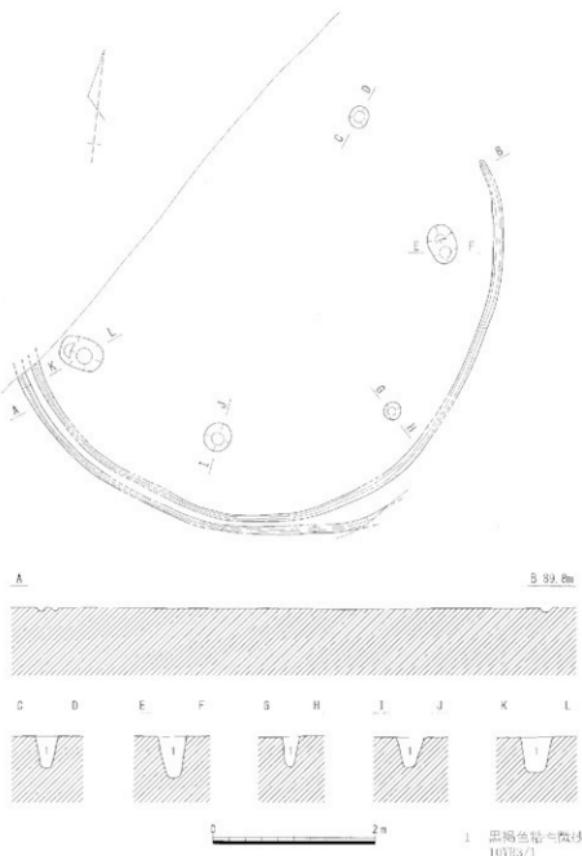
写真4 堅穴住居6作業風景



第38図 堅穴住居6b (1/60)

明らかではないが、平面形は円形を呈するものと考えられる。

この段階でもう一度全体に壁体溝の掘り直しが確認された。これが竪穴住居 6 f である。最大長径は768cm、平面形は円形を呈する。柱穴、中央穴などの屋内施設は 6 c と 6 f の両住居で共通しているものと考えられた。この住居に伴う柱穴は現状で壁体溝にかなり近い位置で 6 個が確認されているが、位置関係から考えて 9 本柱の住居になるものと想定される。柱穴は直径28cmから32cm程度の円形のものと、長径18cmの梢円形のものの二者が認められた。梢円形のものの底部は 2 段になっており、柱の抜き取り痕跡であろうと考えられる。深さは28cmから42cmで、褐色灰色系の埋土で埋まっている。柱間距離は182cmから220cmであり、南側でやや開く。住居中央では長径126cm、短径66cm、深さ20cm

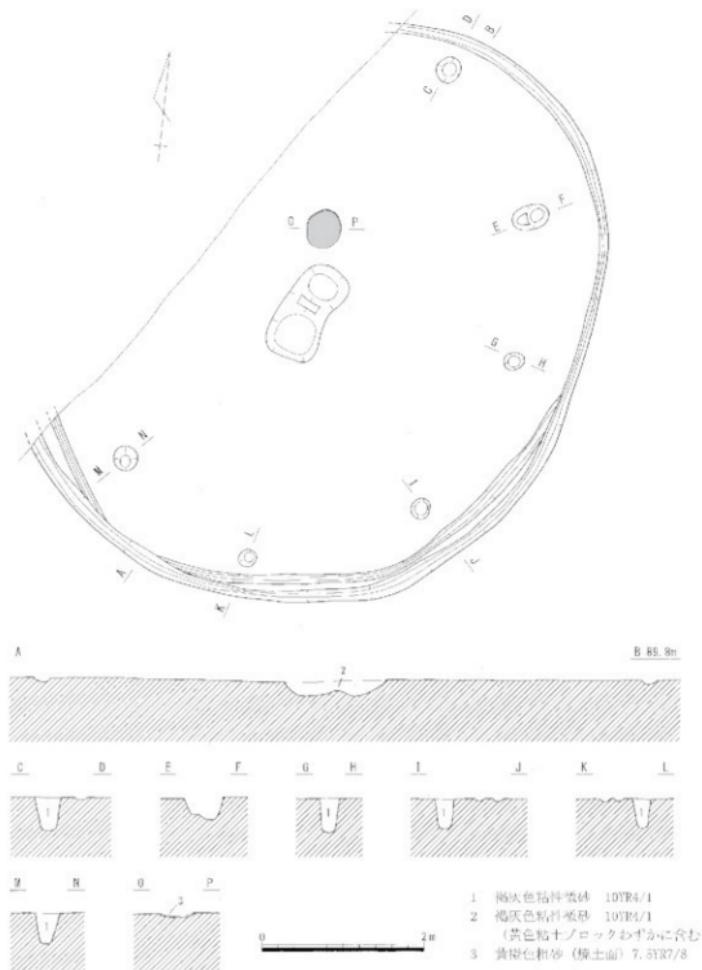


第39図 竪穴住居 6c+d (1/60)

の中央穴が検出されている。中央穴は底部が二段になっている。埋土に木炭粒は観察できなかった。また、北20cmに近接して径48cm程度の被熱面が検出されている。赤褐色を呈しており、焼け具合は甘い。

出土遺物は少なく、しかも細片ばかりである。図示したのは23~25が灰、ないし赤。26は高杯、ないしは台付鉢の脚部か。石器にはS78の扁平片刃石斧がある。時期は遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

(和田)



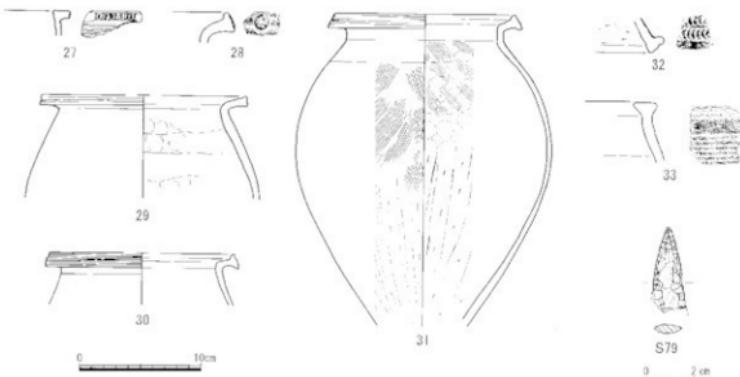
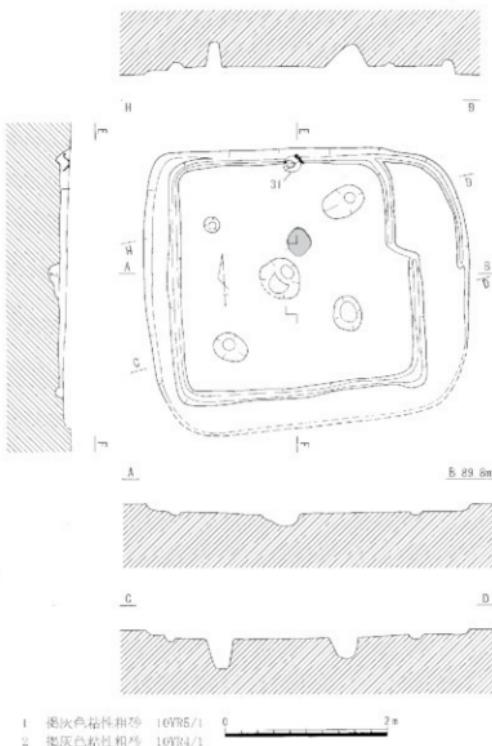
第40図 竪穴住居 6e・f (1/60)

堅穴住居7（第27・28・41図、

図版6・21・27）

2区の北部に位置し、堅穴住居5の南、堅穴住居8の北側で検出された、隅丸方形を呈する堅穴住居である。検出面での規模は、長軸400cm、短軸345cmを測り、南側の底面は削平のため失われているとみられる。検出面からの深さは12cmと、残りは良くない。

住居の北東隅において、壁体溝が二重に巡る点は建て替えの存在を思わせるが、あるいは東・西・南側の壁際に段をもつ住居と理解すべきかもしれない。内側の壁体溝は全周しており、東側では縫の手状に屈曲した箇所がある。柱穴は円形～椭円形で規模は不揃いであり、配置にも均整を欠いている。中央には椭円形の中央穴があり、その北東には不整椭円形の被熱面が認められた。



第41図 堅穴住居7（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

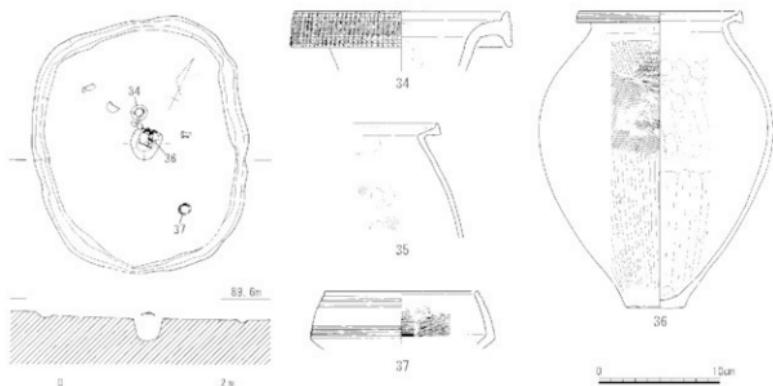
出土遺物には土器と石器がある。27は前期後葉に遡るもので混入品。壺28の口縁部には円形浮文がみられる。29~31は壺で、31は北側の壁際から出土した。32は高杯、33は鉢であろう。石器としては石鏃S79がある。以上の出土遺物から、この住居の時期は弥生時代中期後葉である。(岡本奈)

豎穴住居8 (第27・28・42図、図版21)

豎穴住居7の南西、豎穴住居10の北西で検出された、長径306cm、短径263cmの不整な梢円形を呈する小形の豎穴住居である。削平が著しく、草体溝はほぼ全周するものの壁面はほとんど残存していない。床面で複数の柱穴が検出されたが、配置や出土遺物からみて主柱穴となるものは認めがたく、確実に傳うと判断されたのは中央穴のみである。床面上には土器片が散在しており、中央穴の埋土上層から壺36、中央穴北西側の床面直上から壺の口縁部34、床面南東部から高杯37が出土している。壺36の胴部上半には横方向のタキの痕跡が残る。

この住居の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉に比定される。

(岡本奈)



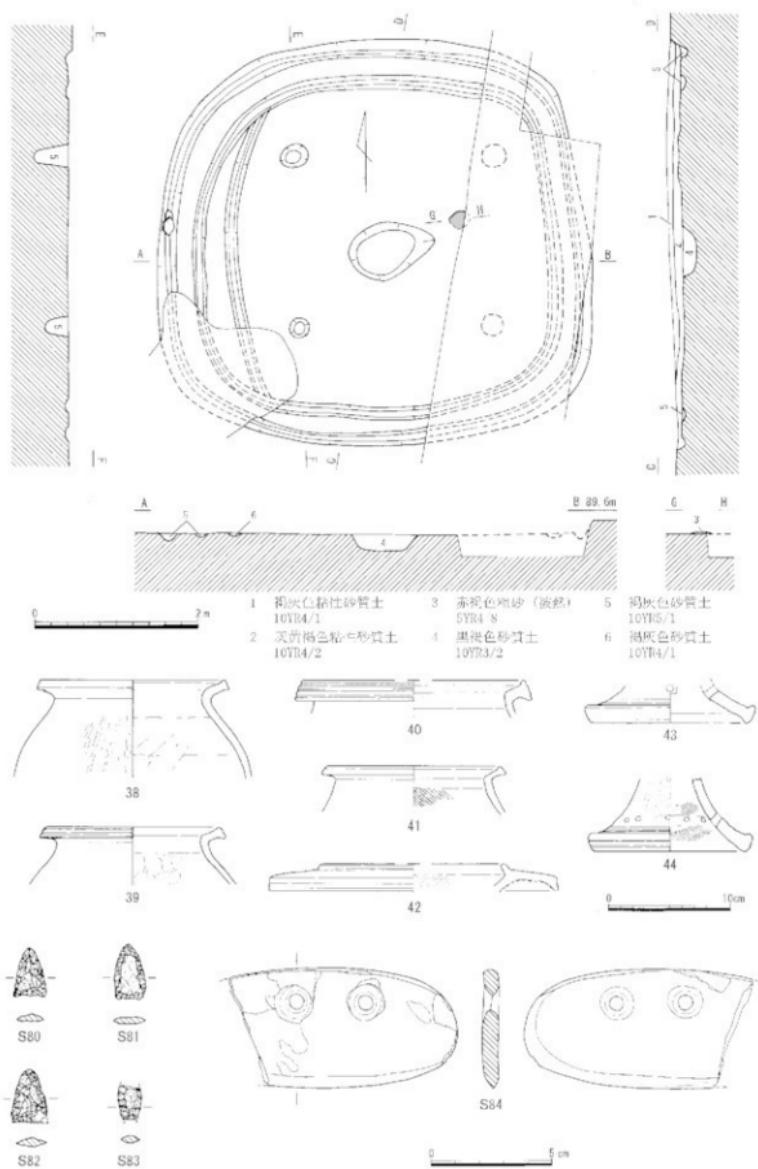
第42図 豊穴住居8 (1/60)・出土遺物 (1/4)

豎穴住居9 (第27・28・43図、図版7・27・28)

平成15年度の確認調査において確認されていた住居であり、豎穴住居7の東約1.5mに位置して検出した住居である。住居の中央の東側がトレンチにより消滅しているが、平面形態がやや変形した隅九方形を呈している豎穴住居であり、特に北西部のコーナーが傾端に丸く掘り上げられている。

住居は全体的に削平され、検出面から床面までは最深で20cm程度を測るものである。住居の現状での規模は長辺532cm、短辺498cmを測る最大のもの(住居9c)から内側の440×421cmを測る住居(9b)が重複し、さらに西辺に古い草体溝(9a)が検出された。ほぼ正方形と考えられる住居が存在していたもので、2回の建て替えが認められる豎穴住居である。この住居に伴う柱穴は本末4個であろうが、現状では2個でその規模は直径16~25cm、深さ20~30cmを測る。また108×69cmの梢円形を呈し、深さ最大20cmの中央穴を確認、その東に赤褐色を呈した被熱部分が確認されている。

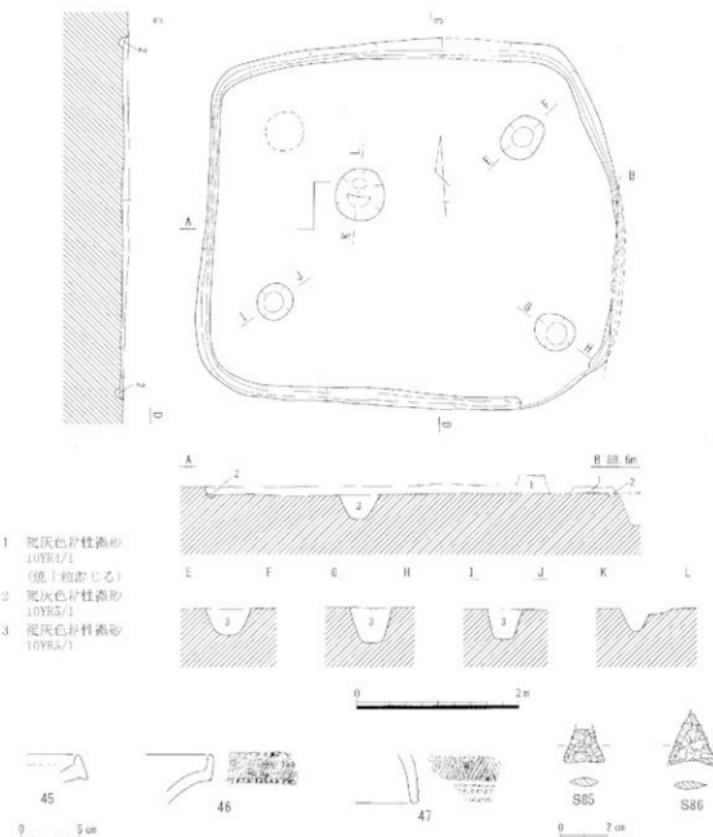
出土遺物には、壺38~41、高杯42~44、サヌカイト製の石鏃S80~S83、砂質片岩製の石包丁S84などがある。住居の時期は、形態・出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。(二宮治夫)



第43図 堅穴住居9 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

堅穴住居10（第27・28・41図、図版27）

堅穴住居9の南西に接するように隣接して検出された住居で、東辺部が異常に膨らむ形状を呈した平面形態の隅丸方形をした住居で、規模は長辺510cm、短辺445cmを測る。検出面から床面までの深さは5~22cmであり、壁体溝も5cm程度の浅いものであり、全周せず南東部隅が続かないものになっている。住居に伴う室内施設としては柱穴が3個、平面形が楕円形を呈するピットを確認した。検出されていない本来あるべき位置の北西部の柱穴は添え柱的な可能性を考える。検出された柱穴は45~60cmの円形~楕円形で深さは30~40cmを測る。さらに北西部の楕円形のピットは65×60cm、最深部で約30cmを測る。遺物には亮または漆の口縁部45、高杯46、器台47、サスカイト製の石器S85・S86がある。住居は検出状況・出土遺物から弥生時代中期後葉に想定されるものと考えられる。（二宮）



第44図 堅穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

堅穴住居11（第27・28・45～51図、写真5・6、巻頭図版4、図版7・8・22～24・28）

2区の南西部、西橋脚の北側で検出された堅穴住居で、前備に重複する堅穴住居12よりも新しい。平面形は、ややいびつで円形に近い隅丸方形を呈する。西壁を除いて、壁体溝が二重に巡ることから、1回の拡張がなされたことが判明するが、柱穴や中央穴については位置が変更された様子は見受けられない。当初のものを住居11a、拡張後のものを住居11bと呼称する。現状での規模は、堅穴住居11aが長径410cm、短径375cmであり、住居11bが長径446cm、短径435cmを測る。検出面からの深さは最大で27cmを測る。

床面から主柱穴が4個検出された。各柱穴はいびつな楕円形を呈し、径は30～40cm程度、深さは25～37cmを測り、柱痕と考えられる第9・10層内には炭や焼上粒が混入している。なお、中央穴の北東に隣接する柱穴も、位置的には不自然であるが、埴土に焼土が含まれる点や出土遺物から、この住居に含めて図示している。

中央穴は円形を呈し、径67cm、深さ30cmを測る。断面形は逆台形であり、壁面には段が認められる。埋土下層（第8層）の上半部からは多数の土器片が出土し、大形の破片が中心であったが、1個体にまとまるものではなかった。その上を本炭層（第7層）が覆い、次いで上面の産みには第6層がレンズ状に堆積している。

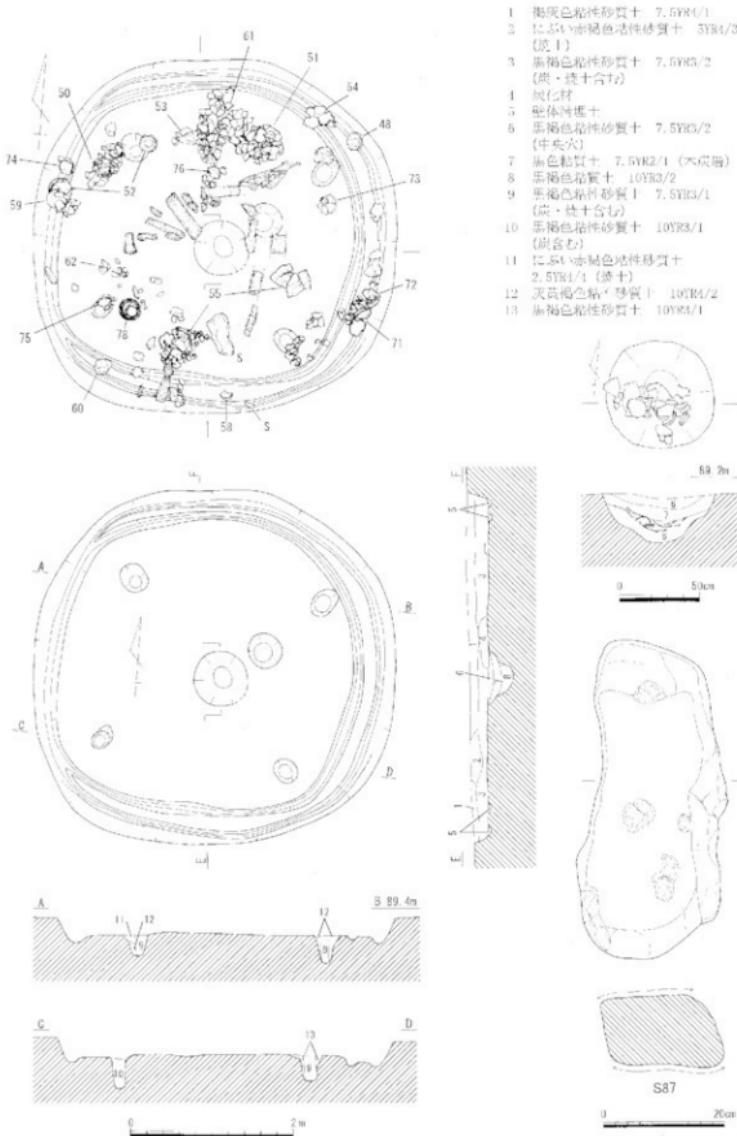
堅穴住居11は焼失住居で、埋土には多量の炭化物が含まれており、特に下半の第3層においてはほぼ全面にわたって炭・灰や焼上塊の分布が認められた。これらの炭・灰層は、屋根材や燃焼しきった建築部材からなると考えられる。また、南東部では炭層の上に大きな焼上塊（第2層）が載っていたが、全体を覆う状態ではないことから、いわゆる土屋根の存在は想定にくく、少なくとも焼失時点では屋根を上で被覆した状態に



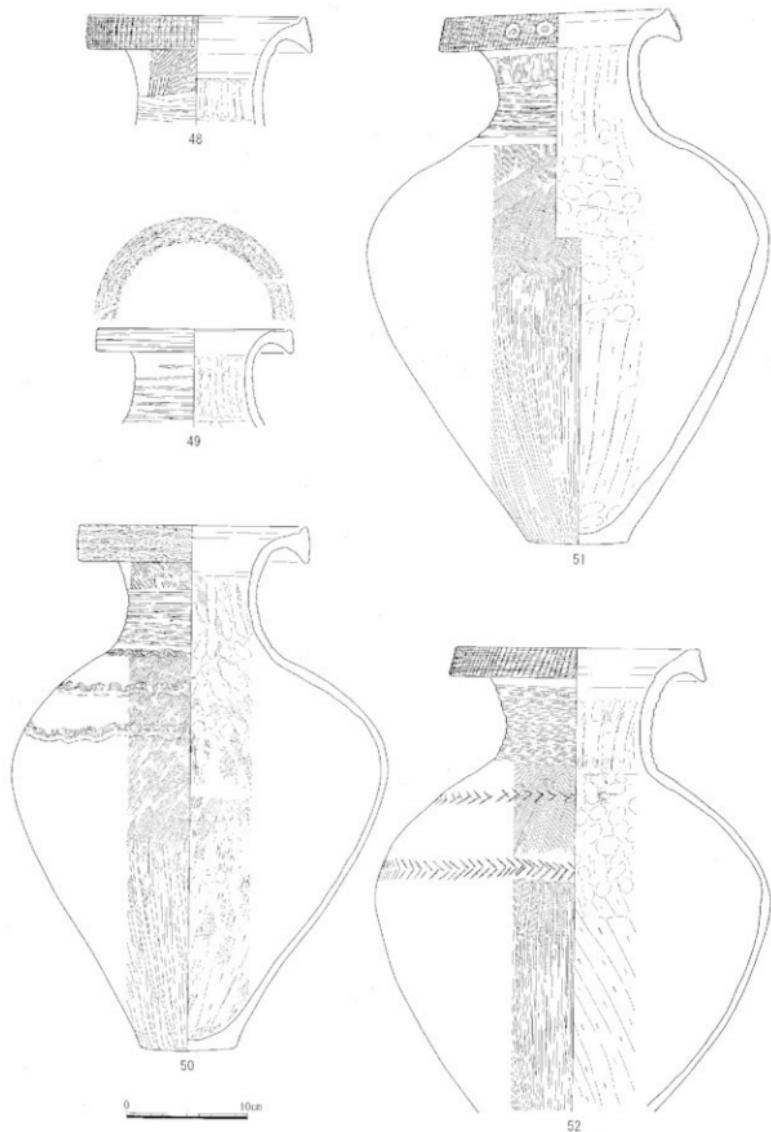
写真5 堅穴住居11作業風景



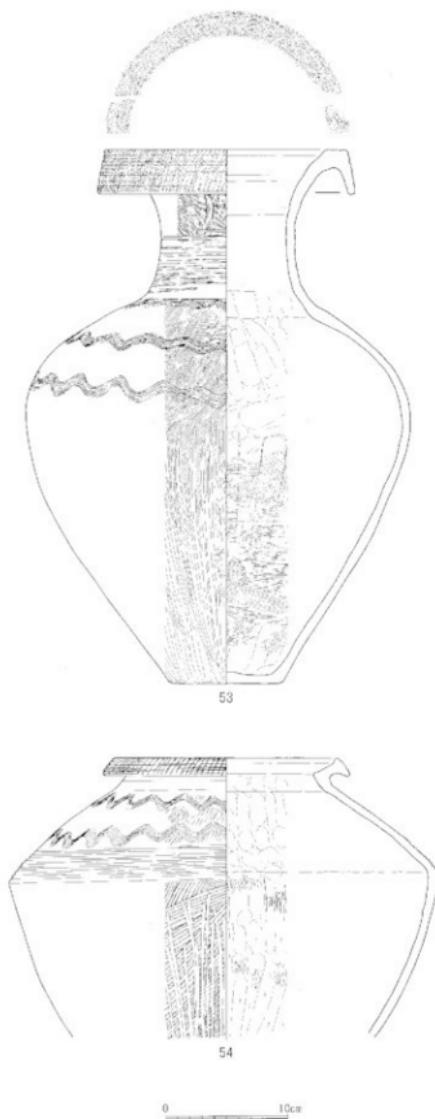
写真6 堅穴住居11実測風景



第45図 竪穴住居11（1/60）・中央穴（1/30）・出土遺物①（1/8）



第46図 堅穴住居11出土遺物② (1/4)



第47図 積穴住居11出土遺物③ (1/4)

はなかったと考えられる。

これらを除去して床面を精査したところ、中央部に炭化材の散布が認められた。炭化材の残りは悪く、上屋構造を復元する材料にはなりがたいが、中央穴の北西側に残る炭化材については、放射状を呈することから重木とみてよいであろう。なお、炭化材の下面に付着した土砂を水洗選別したが、炭化穀物の類は検出されなかつた。

また、中央穴の南側には、長さ52.1cm、幅23.7cmの細長い川原石を用いた台石S87が幅の広い側を北に向けて置かれていた。重量は約24.5kgである。もともと平滑な石であるが、表裏の平坦面は使用により磨減してつるつるの状態であった。平坦面上の数か所に破損が認められるが、使用に伴うものかどうかは不明である。

埋土中および床面直上からは、第46~51図に示すとおり多款の土器類が出土した。小片のみが残存するものも含めれば、総個体数は50個体を上回るとみられる。紙数の都合上、図示した個体はある程度保存状態がよく、出土位置が明確に記録されているものや、特徴的な形態をもつものの中から選定した。実際にはこれ以外にも修理箱2箱分の破片が残っており、部分的とはいえ図示可能なものも含まれていることを断っておく。

これらの土器の出土位置は、床面中央部に空白を残し、壁面寄りや壁体溝の上面に集中する出土状況を示す。個々の土器についてみると、おおむね保存が良好とはいえ、破片が完全に揃うものは少なく、ほとんどの個体に欠落がある。また、52・55のように離れ



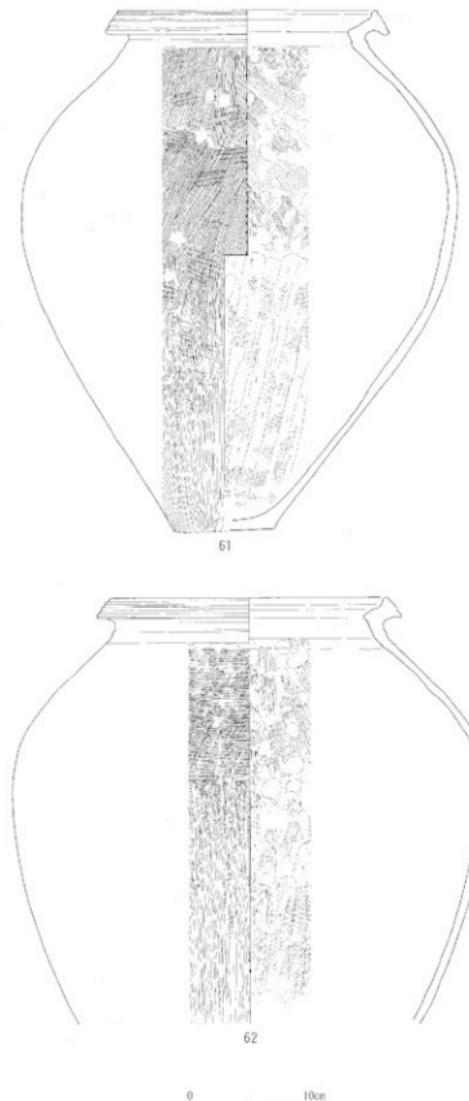
第48図 壇穴住居11出土遺物4(1/4)

た位置から出土した板片同士が接合した例もあることから、不意の出来で持ち出せず、屋内に残されたというよりも、土器を住居内に廃棄した後、意図的に上屋に火を放った結果と解釈するのが妥当であろう。

48~60は壺で、残りのよい個体に着目すると、口縁端部を上下に拡張する48~51、口縁部上面に平坦面をもち、端部が垂下する52~53、端部の外傾が浅く、算盤玉状の胸部をもち亮に近い形態の54・55に大きく分けられる。いずれも、拡張した口縁端部には四線文や効み目、頸部に凹線文が施文される。50の口縁端部は、門線の後、波状文が施されている。52~54の肩部には波状文や刺突文が施る。57は焼成が悪く、器表面の磨耗が著しいが、頸部には凹線文が残存している。

61~70は壺である。大形品は壺同様に拡張した口縁部に門線文を施させ、外面上半はタテハケ、下半はヘラミガキで仕上げる例が多い。61・62・65の胴部上半にはヨコ方向のタタキ痕跡が残る。66は頸部に穿孔がなされている。

71~73は高杯で、いずれもほぼ完形に近いまでに復元された。口縁端部は若干内傾し、門線文が施されている。71・72では脚柱部は無文であるが、短脚の73では沈線文と貫通しない透かし穴が施される。また、72の脚部には大小2か所の焼成後穿孔が残る。



第49図 竪穴住居11出土遺物5 (1/4)

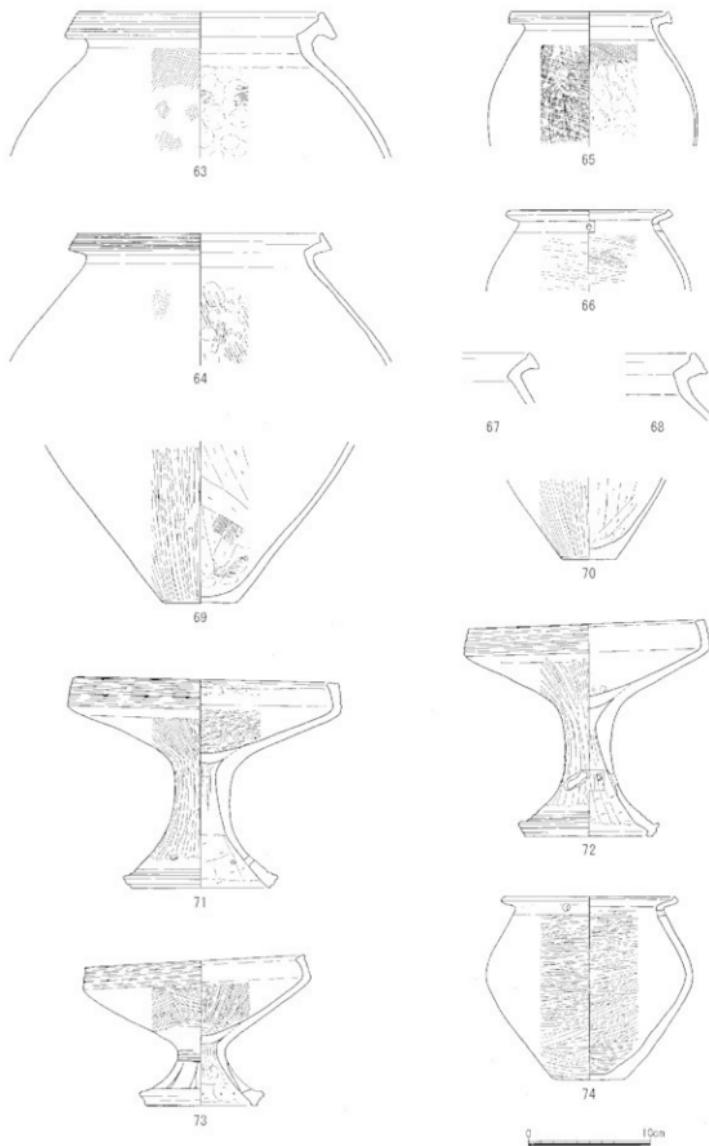
74の鉢は内外面全体がヨコ方向のヘラミガキで仕上げられ、口縁部直下には穿孔が2か所に残っている。75は特異な形態の鉢である。口縁端部はほぼ垂直であり、2条の凹線の後、刻み目に入る。胴部の内面はヨコ方向のヘラケズリ痕をとどめている。

76・77は把手付きの水差形土器である。76は胴部上半から頭部全体にわたって赤色顔料（未同定）の塗布が認められる。外面は四線文と鋸歯文で飾られる。77は残存率が悪く、想定復元したものである。接合しないが同一個体とみられる破片が複数出土している。

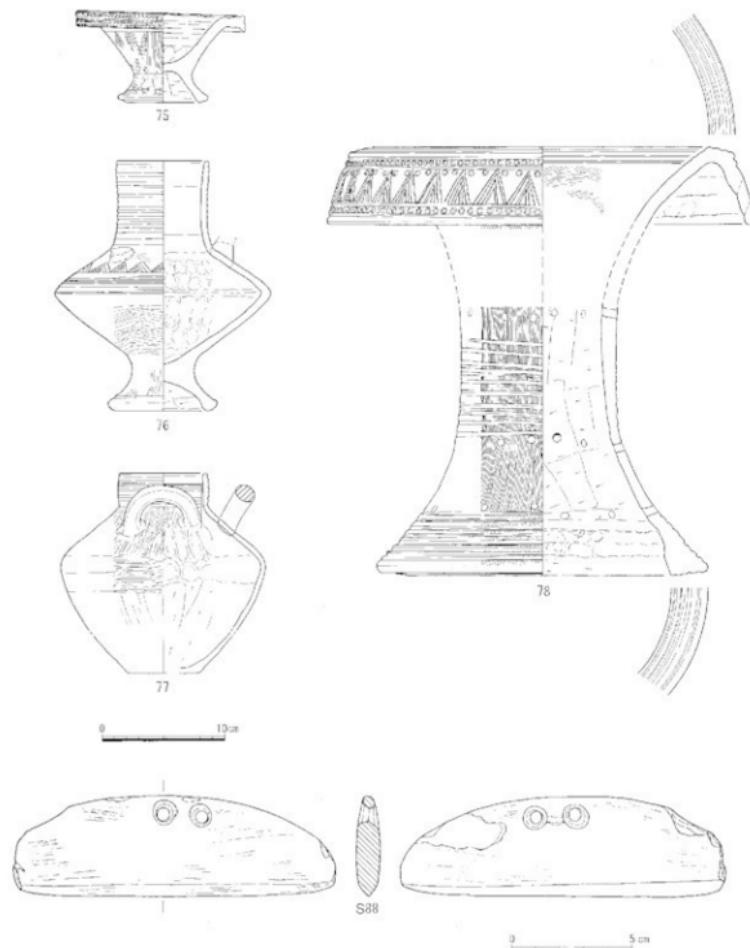
78の器台は、床面の南西隅付近に正置された状態で出土した。下半部はほぼ完存していたが、口縁部付近の残存率は半分以下であり、両者をつなぐ破片も出土していないため図は推定復元である。全体的に装飾が豊富で、胴部は四線文と円形の透かし穴、頭著に垂下する口縁端部は凹線文および鋸歯文・竹管文で飾られる。胴部中ほどとの凹線文は螺旋状をなす。また、口縁部上面のほか、設置時には隠れる脚端部にも四線文が施されている。内面はヨコ方向のヘラケズリで、口縁部付近ではハケ、底部付近では指オサエのままである。

石器としては、南端部の壁体講上面から粘板岩（シルト質）製の磨製石包丁 S88が出土した。

この住居の時期は、出土土器の中に算盤玉状の胴部をもつ壺54・55が含まれることなどから、弥生



第50図 積穴住居11出土遺物 ⑥ (1/4)



第51図 堅穴住居11出土遺物⑦ (1/4・1/2)

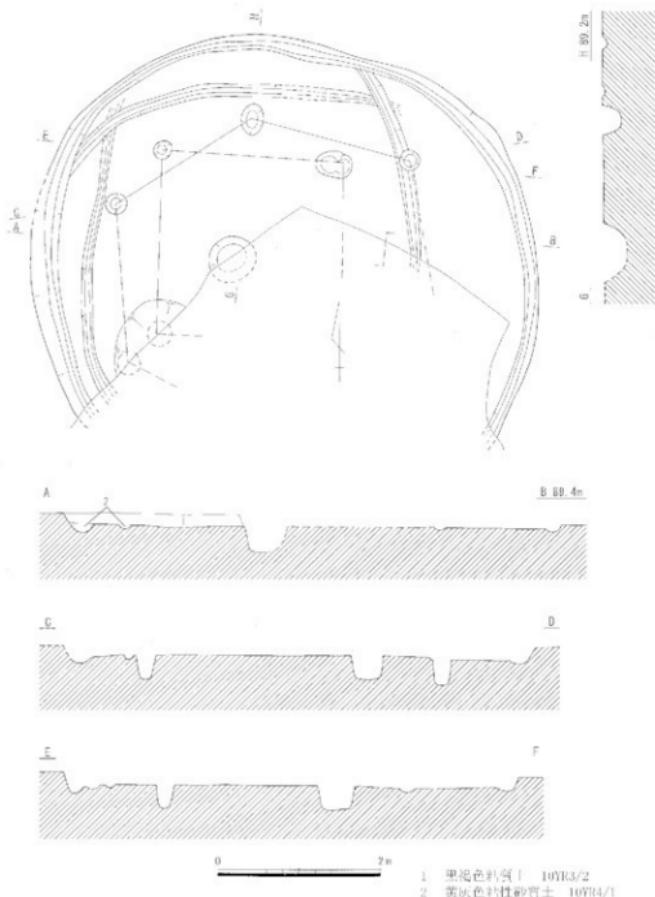
時代中期後葉でも新段階に比定される。なお、出土炭化材3点をAMS法にて年代測定したところ、それぞれ 2σ の曆年代でBC370~100年、BC380~170年、BC360~40年という結果が得られ、いずれも弥生中期末の年代説からするとかなり古い数値を示している。測定手法の問題でなければ、部材に使用された樹木の形成年代と使用年代のずれが一因であろうか。

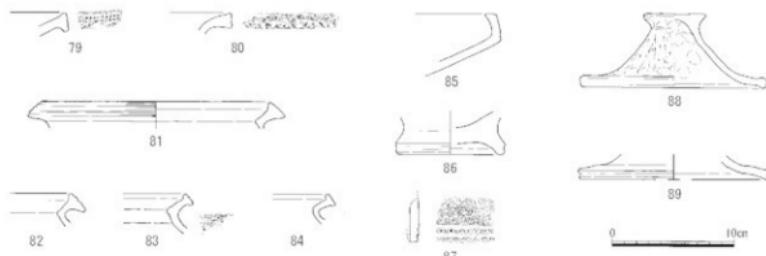
以上のように、この住居からは各器種を網羅した多量の土器が出土し、個々の土器の保存状態も良好であるなど、中期末の良好な一括資料が得られたといえる。

(岡本泰)

堅穴住居12（第27・28・52・53図、図版8・21）

堅穴住居11の南側で検出された円形の住居で、堅穴住居11に先行し、後述の堅穴住居13よりは新しい。南半部が橋脚設置時の搅乱によって失われているため、柱穴の配置状況などは明らかでないが、残った柱穴の配置状況から、当初4本柱のものが後に6本柱に拡張された可能性がある。壁体溝も複数巡っており、その位置関係から、当初は隅丸方形であったものが、3回程度の建て替えを経て最終的には円形になったと想定され、堅穴住居12a～dと呼称する。しかし、壁体溝の切り合い関係も不明確で確認に欠けることから個別図は示していない。





第53図 壁穴住居12出土遺物 (1/4)

第52図に即して説明すると、住居12aは西壁体溝のみが残存する隅丸方形、12bは北壁体溝のみが残存する隅丸方形、12cは東壁体溝のみが残存する隅丸方形で、ここまでが4本柱と考えられる。最終段階の壁穴住居12dは東側へ大きく拡張して円形を呈し、規模は最大径619cm、深さ16cmを測り、6本柱と考えられる。なお、住居の中央からやや西に寄った位置で、過半を失ってはいるが中央穴の可能性のある円形のピットを検出しておらず、深さは30cmであった。この中央穴は、位置から判断して住居12a～cの段階に伴うものであろう。

埋土中および柱穴内から、弥生土器の小片が出土している。79・80は壺の口縁部である。81～84は甕口縁部の小片である。85は高杯の口縁部で、端部外面に4条程度の凹縞文が巡る。86は鉢の脚台部であろうか。87は器台の垂下する口縁端部と考えられる。下端には2条の凹縞間に竹管文が巡り、その上に網目文がヘラ描きされる。88・89は蓋で、88はつまみの上面を平滑に仕上げる一方、外面はヘラケズリのままである。

住居の時期は、遺物からみて弥生時代中期後葉と考えられる。(岡本泰)
壁穴住居13 (第27・28・54図)

2区の南西部、西橋脚の北側で検出された壁穴住居である。大部分を壁穴住居12によって破壊されたうえ、東側が橋脚設置による擾乱を受けたため、壁面の一部のみの残存で、本来の形状は不明である。検出面からの深さは最大で10cmを測る。床面の柱穴1個を図示したが、伴うものかどうかは定かでない。住居の時期は、出土した少量土器片と、壁穴住居12との関係から弥生時代中期に比定される。(岡本泰)

壁穴住居14 (第27・28・55～58図、写真7、図版8・21・28・29)

調査区の南部に位置し、壁穴住居15の東側に接して検出された壁穴住居である。切り合ひ関係からみて本住居のほうが古いと考えられる。上面はかなり削平を受けており、深さは残りのよい北半部でも20cmであり、削平の強く及んだ南半部ではかろうじて壁体溝が部分的に残るのみであった。壁体溝は3条認められたことから、2回にわたる拡張の存在が判明した。ここでは、古い順に壁穴住居14a・b・cと呼称して説明する。

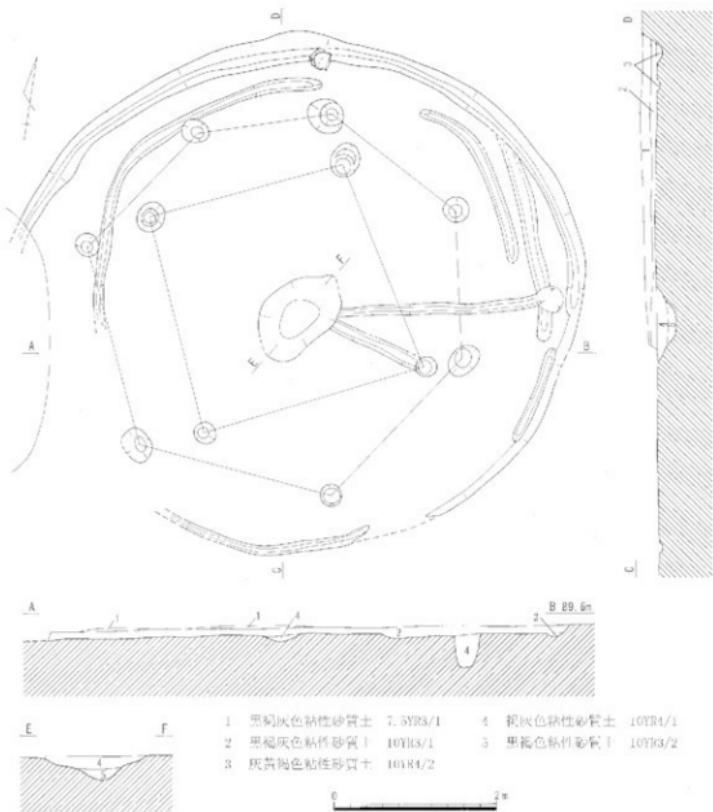
床面には多数の柱穴が散在して検出されたが、他時期のものも多く含まれていたことから、住居に確実に伴うものの特定はかなり困難であった。壁体溝や中央穴との位置関係、出土遺物などを考慮して、壁穴住居14aは4本柱、拡張後の壁穴住居14b・cについては7本柱の可能性を図示している。

第54図 壁穴住居13
(1/60)

いずれにしても図上での判断であり、確実性には疑問が残る。

中央穴は、住居全体でいえば中央よりも若干南側に位置する。平面形はいびつな椭円形を呈し、長径127cm、短径76cm、深さ30cmを測る。壁面の途中に傾斜変換点があり、中央部が一段盛んだような形状である。この中央穴はいずれの段階で設けられたものか明らかでないが、両方に示しているが、柱穴との位置関係から判断すれば後出の竪穴住居14 b・c段階に伴うとみるのが自然なように思われる。

竪穴住居14 aは、柱穴以外には壁体溝の北半部のみがかろうじて残る、隅丸方形を呈する住居である。残存する最大径は525cmを測る。削平が著しく、壁体溝の幅は最大で15cm、深さは5cm内外であり、北東部では途切れるほか、南半部では精査したにもかかわらず検出できなかった。土柱穴は4個



第55図 竪穴住居14 (1/60)

と考えられ、住居内では西側に偏った位置に設けられている。柱穴の規模は径27~40cm、深さ30~42cmを測る。柱穴や壁体溝からごく少量の遺物が出土しているが、図示可能なものはみられなかった。

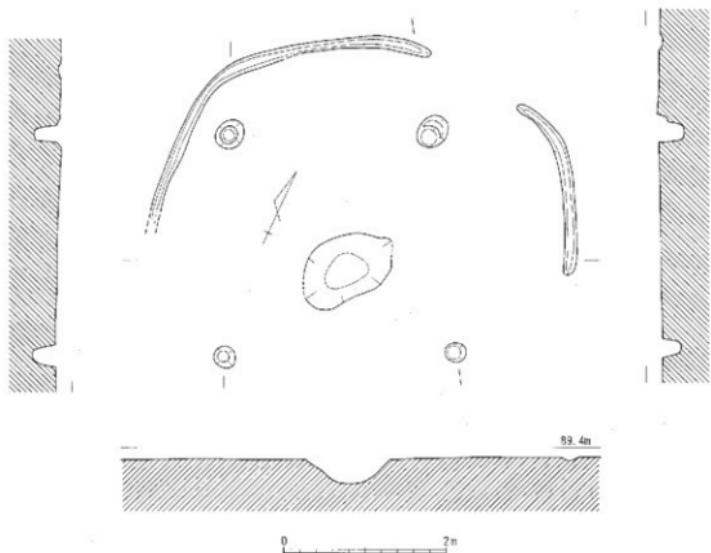
これに續く竪穴住居14 bは、壁体溝のごく一部分のみが、住居14 c東壁の内側で検出されたものである。残りが悪いため個別図は作成せず、住居14 cと同一圖に示した。壁体溝は緩く湾曲し、住居14の壁体溝に合流するような形態を呈するので、東端部以外ではほとんど住居14 cと同じ位置にあったた

とみられ、住居全体としては径約6.5mの円形と考えられる。主柱穴・中央穴も、住居14 cと共にあった可能性が高いが、これらは住居14 cにおいて説明する。

最終段階にあたる竪穴住居14 cは、西端をわずかに住居15に切られるが、残存する長径は664cm、短径636cm、深さ20cmの楕円形を呈する住居である。壁体溝は、前平の著しい南端部での残りは悪いが、北半部では壁面を伴って良好に検出された。主柱穴は7個と想定しており、



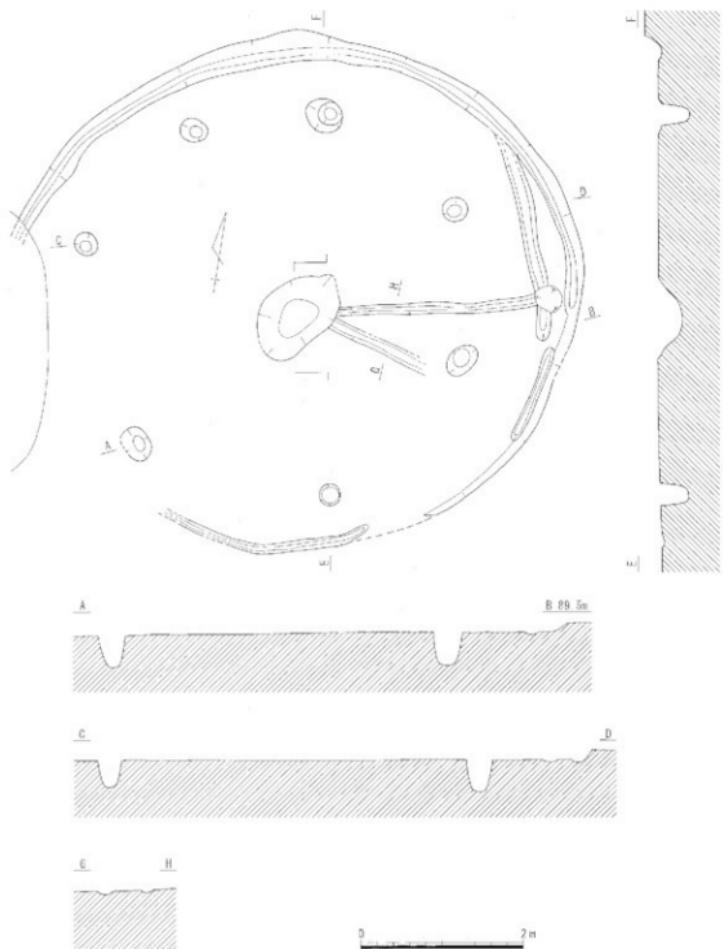
写真7 竪穴住居14作業風景



第56図 竪穴住居14 a (1/60)

それぞれの規模は、径27~46cm、深さ32~43cmである。柱穴の間隔は心々距離で167~250cmと不揃いで、南半部では広くなる傾向がある。

住居のはば中央に位置する中央穴からは、東へ向けて2条の溝が伸びていることが特徴的である。いずれの溝も深さ2~3cm程度の浅いもので、削平や後世の柱穴による擾乱もあり、壁体溝との連結は確認できず、機能なども明らかでない。

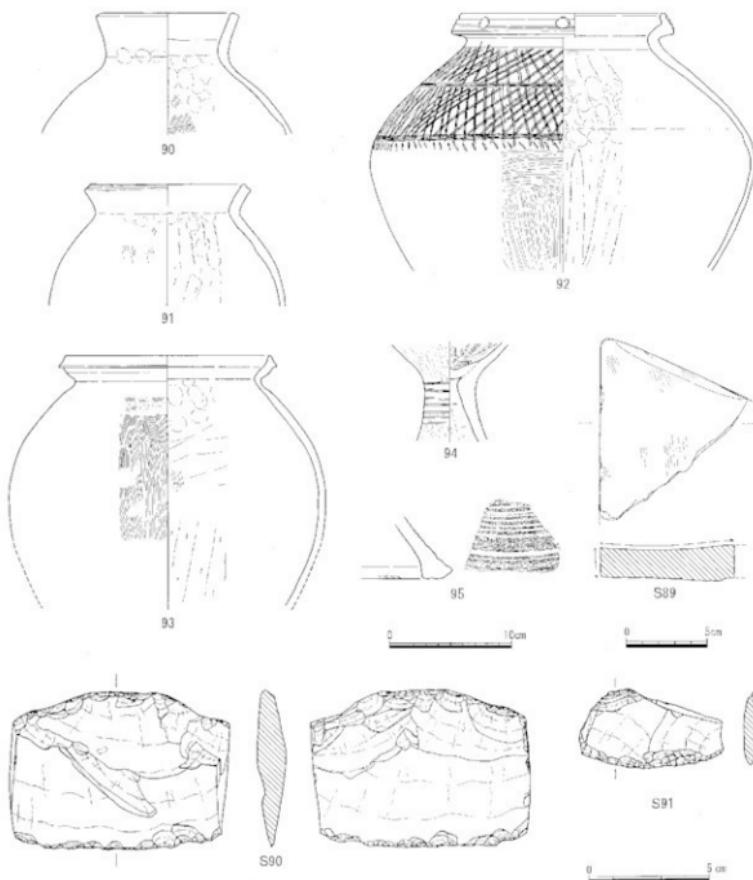


第57図 積穴住居14b・c (1/60)

埋土中および柱穴内から土器片が出土しているが、図示可能なものは多くはない。90~92は壺、93は甕と考えられる。92・93は、住居北端部の床面から浮いた位置で、92を下、93を上にして重なった状態で出土した。口縁部は互いに反対方向を向き、ともに内面を上に向いている点から、偶然とは考えにくく、意図的に配置された可能性もある。91は中央穴から出土した。94は高杯で、ヘラ描き沈線が巡る。95は器台の脚部と考えられ、四線文のほか端部付近に波状文も巡っている。

石器としては、砂岩製の砥石 S89、サスカイト製の打製石包丁と考えられる S90、サスカイト製のスクレイバー S91が出土している。

豎穴住居14の時期は、これらの出土遺物から弥生時代中期後葉に位置づけられる。(岡本泰)



第58図 豊穴住居14出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

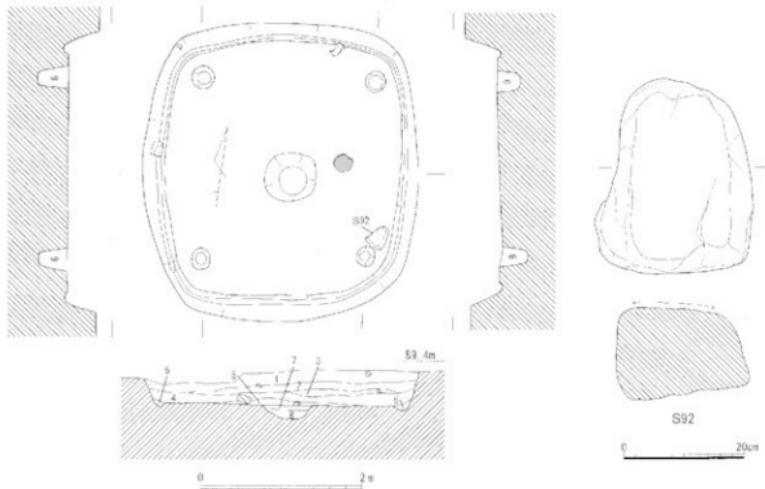
堅穴住居15（第27・28・59・60図、図版8・21・29）

堅穴住居14の西側に隣接して検出された、正方形を呈する住居である。堅穴住居14とはわずかに切り合ひ関係にあり、本住居のほうが新しい。長径363cm、短径335cmを測り、換出面からの深さは最大で45cmと、他の住居に比べて深い。壁際には壁体溝が全周する。床面の四隅に柱穴を有し、各柱穴の径は25cm前後、深さは30~40cm程度であった。中央から若干南寄りの位置に、長径63cm、短径58cm、深さ16cmの中央穴があり、その北東側に焼土面1か所が伴っていた。また、南東隅の柱穴の北側に接して、長さ32.0cm、幅25.5cm、厚さ16.1cm、重量約20.5kgの自然石S92が置かれており、上面にやや磨滅が認められることから、台石として使用された可能性が高い。

96~99は壺である。彫書きの平行文と波状文が施された肩部96は、中期前葉~中葉に比定され混入品と考えられる。100~102は甕で、102の外面にはヨコ方向のタタキの痕跡が顯著にみられる。103・104は高杯の脚部で、裾部には2列の爪形文が巡り、103ではその上に露齒文が施されている。

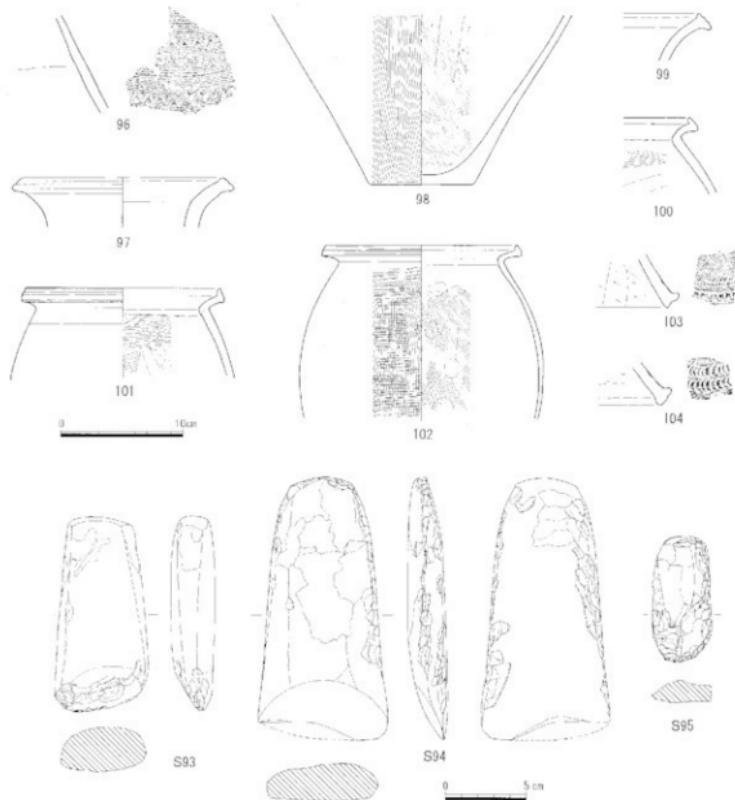
石器は、石斧類が3点出土している。S93は玄武岩質凝灰岩、S94は粘板岩製の磨製石斧、S95は確証に欠けるものの粘板岩製の未製品と考えられる。S93は住居南西隅、S94は北西隅で、いずれも床面から浮いた位置で出土した。S93・S94は、扁平片刃石斧の範疇に入るとと思われるが、基部に向かって狹まる平面形を呈し、断面形も丸みを帯びるなど、典型的なものとは形態がかなり異なる。

堅穴住居15の時期は、以上の出土遺物からみて弥生時代中期後葉と考えられる。 (岡本泰)



- | | | |
|---------------------------------|----------------------------------|--------------------|
| 1 暗灰色粘性砂質土 10YR4/1 (底含む) | 4 黒褐色粘性砂質土 10YR3/1 | 7 福灰色粘性砂質土 10YR4/1 |
| 2 暗褐色粘性砂質土 10YR4/2 | 5 暗灰色砂質土 10YR4/1 | 8 貫褐色砂質土 2.5YR5/3 |
| 3 黄褐色粘性砂質土 2.5Y4/1
(黄褐色土塊含む) | 6 灰褐色粘性砂質土 7.5YR4/2
(焼土塊多く含む) | 9 福灰色粘性土 7.5YR4/1 |

第59図 堅穴住居15 (1/60)・出土遺物① (1/8)



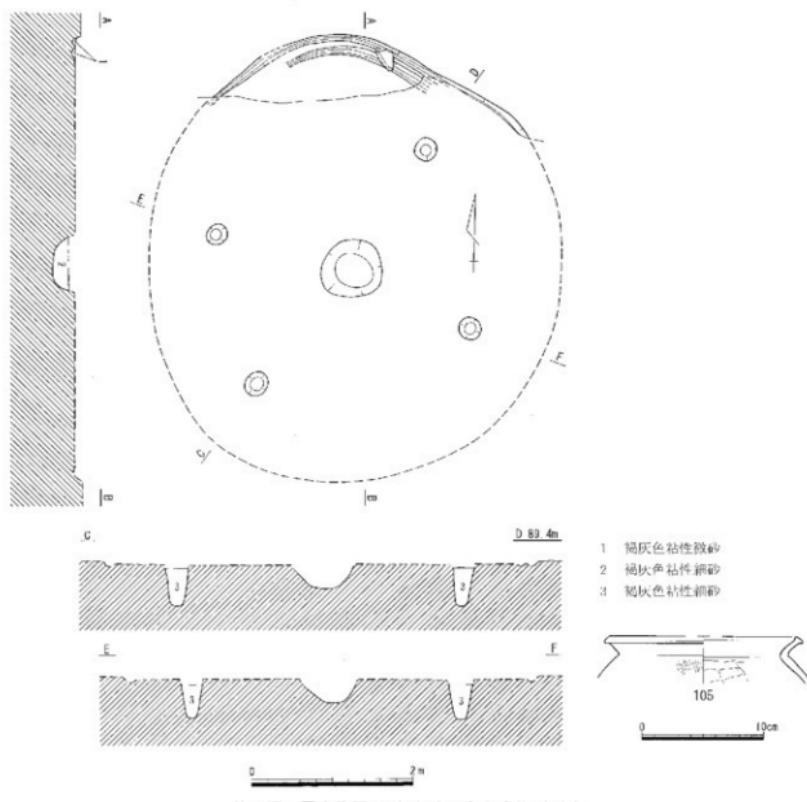
第60図 堅穴住居15出土遺物② (1/4 · 1/3)

堅穴住居16 (第27・28・61図)

調査区の南西部に位置し、堅穴住居15の南側で検出された堅穴住居である。当初、住居北端部の壁体溝の一部が検出され、後に検出された中央穴と合わせてその存在が判明した。壁体溝は二重に巡っており、1回の建て替えがなされたことが想定できる。北端部を除いては中近世の造成によって大幅な削平を受け、壁体溝の範囲を検出することができなかったため、本来の規模や形状、柱穴の配置は不明である。また、周辺には他時期のものも含めて多数の柱穴が分布し、住居に伴うものの抽出も困難であった。一応、中央穴と壁体溝の位置関係をもとに径5.0~5.5mの4本柱の円形住居を想定復元してみたが、確実なものではない。

遺物としては、北端の壁体溝から壺105が出土したほか、同じ位置に台石と思われる平らな自然石も残っていた。住居の時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。

(岡本泰)



第61図 竪穴住居16 (1/60)・出土遺物 (1/4)

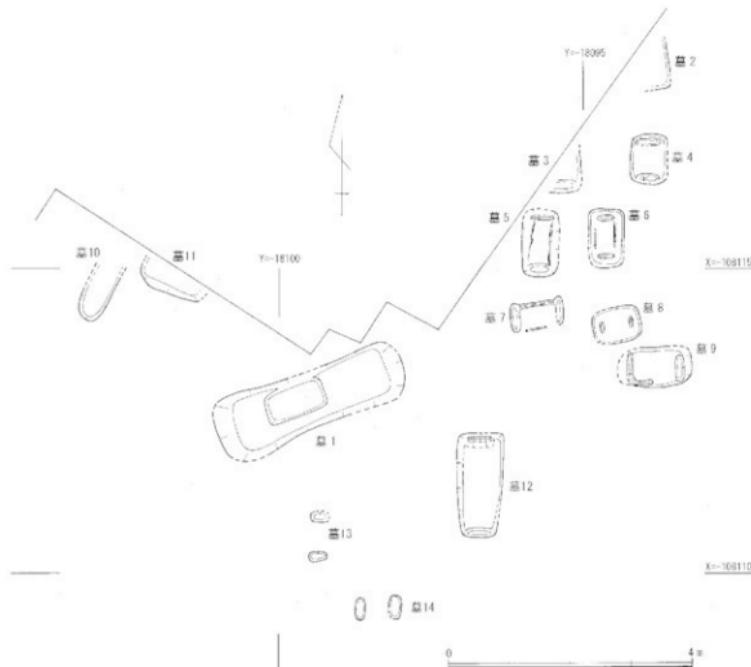


写真8 1・2区作業風景

3 土壙墓

大河内遺跡においては大小15基の土壙墓が検出された。時期は弥生時代前末期から中期初頭のものと、中期後葉の大きさは2時期のものが認められる。形態では全長3mを超える大形のものと、1.6m前後の中形のもの、1mに満たない小形のものの、3種に分類できる。中・小形のものには小口溝、あるいは側板の痕跡を残すものがあり、時期も大半が中期後葉にあたると考えられた。数量的には小形のものが大半を占め、その形態から乳幼児の墓であると考えられる。これは当時の乳幼児の死亡率を考えていく上で重要である。大形のものは小口溝を伴わず、前末期から中期初頭と古く遡る。

最も標高の高い集落北側では、14基の土壙墓が集中して検出された。このうち、前末期から中期初頭の土壙墓11基は特筆に値する。岡山県北部域では類例が少なく、出土した土器は一括資料として重要なである。また、中期後葉にあたるものうち10基が小形のもので、その配列も整然と南北、あるいは東西を軸としている。土壙墓間に切り合いではなく、雑続的、かつ計画的な造墓活動の様子がうかがえる。成人の墓と考えられる中形の土壙墓15基がやや離れた位置に掘削されていることなどから、この地点では乳幼児の墓のみが選択的に掘削されていることが指摘できる。
(和田)



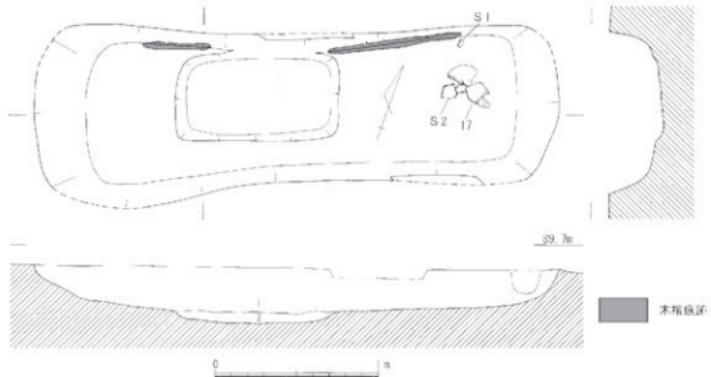
第62図 土壙墓1~14 (1/80)

土塙墓1（第27・28・62～64図、図版9・25・29）

全長321cm、最大幅113cm、検出面から最深で34cmを測る大形の土塙墓である。主軸の方向はN-72°Eである。遺跡西端の14基の土塙墓群のうち、他の土塙墓とはやや距離をおいて掘削されている。掘り下げる際、特に北側壁面に木棺の軌跡と考えられる黒色の変色土壤の染みつきが認められたことから、土塙墓であると判断した。主軸はやや東北東に傾いている。平面形は隅丸方形を呈するが、西側の方がやや開いている。前面は舟形を呈している。埋土中の地山由来の黄色粘土ブロックが、壁際ほど多く認められることから、崩落していることが考えられる。底面は平面と同じく隅丸方形であるが2段になっており、土塙底面中央からやや北寄りに最大長100cm、最大幅54cmの窪みが検出されている。上層の観察によると、この窪み部分のみ埋土の特徴が異なるが、上塙の平面形にはほぼ並行する位置関係から棺床構造の一部と考えたい。実測図中には、特に底面付近で出土したものを示している。検出位置から、これらは副葬品である可能性がある。また、台石S97は枕として用いられたものと考えられる。

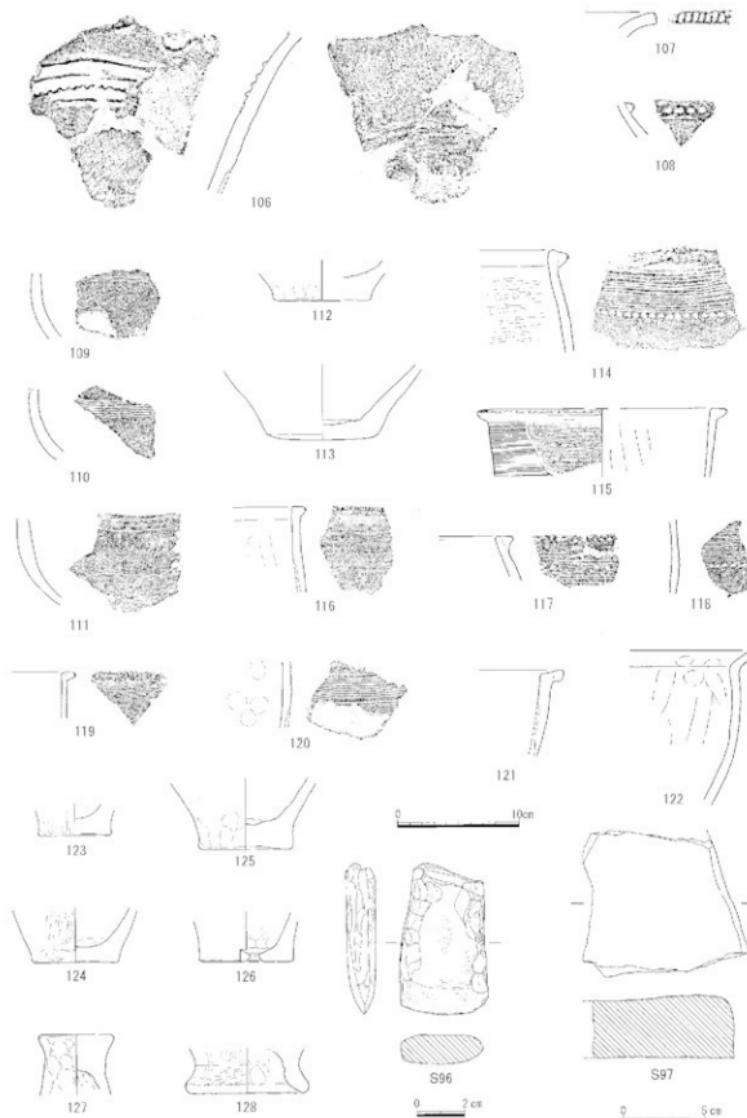
出土遺物には土器と石器がある。106～113は壺である。106は内面に突帯を貼り付け、その一部に刻みを施している。外面は下部に沈線文が見られる。107は口縁、108は肩部の破片である。いずれも口縁端、突带上に刻みを施している。109～111は壺肩部の破片であり、ヘラ描き沈線文と櫛描き沈線文が描かれるものの2種類が認められる。112・113は底部の破片である。114～126までは甕である。甕は3種に分類できる。第1は口縁に断面三角形の粘土帯を張り、その下に10条を越えるヘラ描き沈線文を施す瀬戸内型甕114・117、第2は口縁下に櫛描き沈線文を施す115・116・118～120。第3は口縁が粘土貼り付け、ないし折り曲げによる「く」の字状口縁、そして無文となる121・122である。123～126は甕底部の破片である。126は底面内外より穿孔を行っている。焼成前の穿孔であり、瓶か。127は蓋、128は台付鉢の脚部であろう。S96は粘板岩製の扁平片刃石斧、S97は凝灰岩製台石の破片である。これらの遺物の時期から、この土塙墓の埋没時期は弥生時代前期末から中期初頭の過渡期にあたるといえる。

(和田)

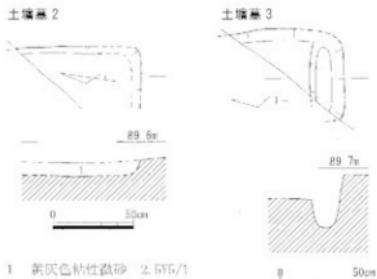


1. 沈灰色粘性微砂 10YR4/1 2. 黄色粘土斑櫛灰色粘性微砂 10YR4/1

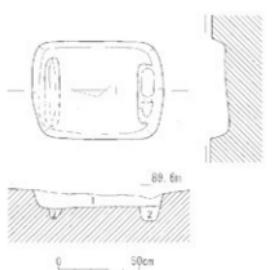
第63図 土塙墓1 (1/30)



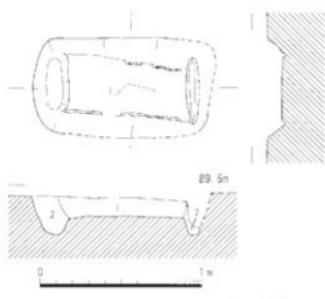
第64図 土壌墓1出土遺物 (1/4・1/2・1/3)



第65図 土壙墓 2・3 (1/30)



第66図 土壙墓 4 (1/30)



第67図 土壙墓 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙墓 2 (第27・28・62・65図、図版9)

軸をN-4°-Wに向いている。残存長77cm、残存幅28cm、最深で8cmを測る小形の土壙墓である。柱穴に切られているために不明だが、小口溝が伴う可能性が高い。時期は弥生時代中期後葉か。(和田)

土壙墓 3 (第27・28・62・65図、図版9)

軸をN-1°-Eに向いている。残存長70cm、残存幅55cm、最深で15cmを測る小形の土壙墓である。小口溝の痕跡を残し、その幅は最大18cm、床面よりの深さで15cmを測る。時期は弥生時代中期後葉か。(和田)

土壙墓 4 (第27・28・62・66図、図版9)

軸をN-1°-Eに向いている。最大長80cm、最大幅61cm、深さは11cmを測る土壙墓である。南北ともに小口溝の痕跡が残るが、深さは10cm程度と浅い。小口間の距離は46cmとなり狭い。側板の痕跡は検出されなかった。小口溝の位置関係から、掘り方はやや広く掘られている。時期は弥生時代中期後葉か。(和田)

土壙墓 5 (第27・28・62・67図、図版9)

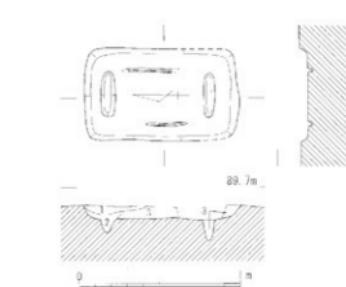
軸をN-2°-Wに向ける。復元長110cm、最大幅61cm、深さ11cmを測る土壙墓である。南北ともに小口溝が残り、さらに側板の痕跡も認められた。これらの痕跡から植の内法は長さ72cm、幅27cmほどの小形のものになるとされる。また小口溝は床面より深さ10cmほどを測る。断面観察によれば、南北それぞれ幅15cmほどの土色の異なる部分があり、これは小口板の痕跡の一部と考えられる。遺物には129の亮片があるが、上層からの出土であり、混入と考えたい。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(和田)

土壙墓 6 (第27・28・62・68図、図版9・10)

軸をN-2°-Wに向いている。長さ95cm、幅56cm、深さは8cmを測る土壙墓である。南北ともに小口溝の痕跡が残り、側板の痕跡も一部検出されている。これらから植の内法は長さ54cm、幅30cmほどの小形のものであると考えられる。時期は弥生時代中期後葉か。(和田)

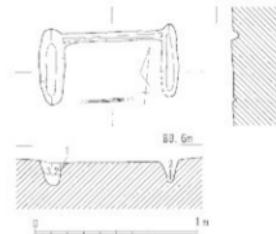
土壙墓7（第27・28・62・69図、図版9）

軸をN-85°-Eに向ける、最大残存長85cm、最大残存幅46cmを測る土壙墓である。堅穴住居4に切られられており、小口溝、側板痕跡を残すのみであった。断面観察により、5cmほどの板材の痕跡が認められた。棺の内法は長さ57cm、幅33cmを測る。時期は弥生時代中期後葉以前と考えられる。（和田）



1. 開灰色粘土 10YR4/1
2. 黄色粗砂 2.5Y4/1

第68図 土壙墓6 (1/30)



1. 開灰色粘土-板砂 10YR4/1
2. 灰色粘土斑状灰色粘土-板砂 10YR4/1
3. 黑褐色粘土板砂 10YR3/1

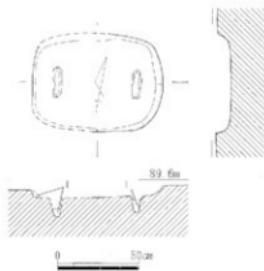
第69図 土壙墓7 (1/30)

土壙墓8（第27・28・62・70図、図版9）

軸をN-89°-Eに向ける、最大長80cm、最大残存幅60cmを測る土壙墓である。西半を堅穴住居4に切られている。小口溝の痕跡を残すが、幅5cmほど、長さ18cm程度で他の例に比べて小さいのが特徴である。側板痕跡は認められなかった。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（和田）

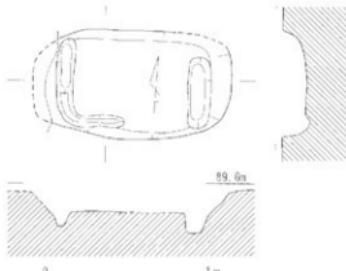
土壙墓9（第27・28・62・71図、図版9）

軸をN-80°-Wに向ける、最大残存長113cm、最大幅67cm、深さ12cmを測る土壙墓である。上記2基の土壙墓同様、堅穴住居4に切られている。東西にそれぞれ小口溝が残っている。また、西側の小口溝の一部が南側へ回り込むように側板へつながるような形状を呈している。これらの痕跡から、棺の内法は長さ72cm、幅47cmとなろう。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（和田）



1. 黄色粘土斑状灰色粗砂 2.5Y4/1

第70図 土壙墓8 (1/30)



第71図 土壙墓9 (1/30)

土壙墓10（第27・28・62・72図、図版9）

最大残存長87cm、最大幅48cm、深さ6cmを測る土壙墓である。北半は不明ながら平面長椭円形を呈する。軸をN-16°-Eに向けており、小口溝、側板痕跡のいずれも検出されなかった。遺物には床面に近い位置から出土した壺130がある。（和田）



第72図 土壙墓10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙墓11（第27・28・62・73図、図版9）

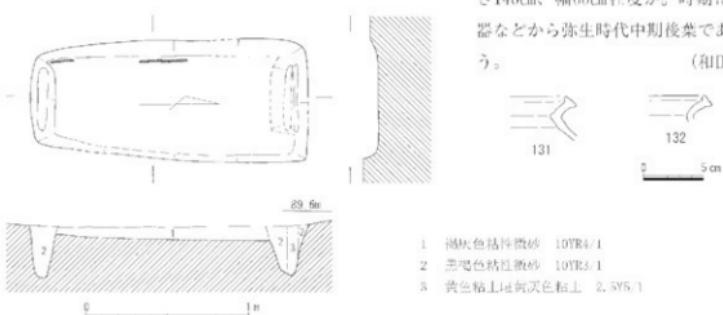
発掘区北西隅で検出された。現状で長さ35cm、110cmを測るが、小口溝などは検出されていない。底面のレベルは89.3mであり、土壙墓1に共通する。底面のレベルや位置関係から、これも前期後葉から中期初頭のものではないか。（和田）

土壙墓12（第27・28・62・74図、図版9・10）

小形の土壙墓群よりやや南西へ3mほど離れた位置で検出された。全長は170cm、最大幅75cm、深さは検出面より9cmを測る。軸をN-1°-Wに向ける。平面は長方形であり、向かって北側のほうがやや開く。小口溝、そして側板の痕跡が一部残存していた。土層観察によれば、小口板の痕跡が残っており、その厚さは5cm以下である。また、側板の痕跡はおよそ幅2cmであった。棺の内法は長さ140cm、幅60cm程度か。時期は土器などから弥生時代中期後葉であろう。

（和田）

第73図 土壙墓11 (1/30)



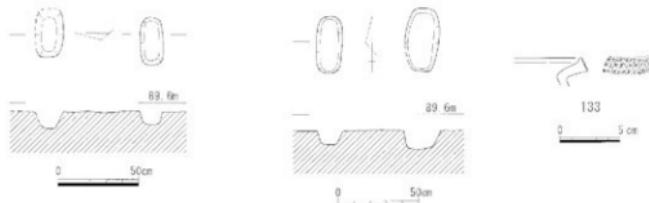
第74図 土壙墓12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壤墓13 (第27・28・62・75図、図版9)

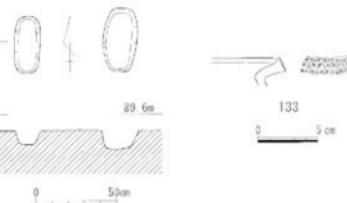
土壤墓12より西2mのところで小口溝のみ検出された。位置関係から、軸をN-1°-Wに向ける土壤墓と推察される。時期は埋土、形態などから弥生時代中期後葉と考えられる。(和田)

土壤墓14 (第27・28・62・76図、図版9)

土壤墓13から南東に近接して位置する。小口溝のみ検出されたが、これも軸をN-89°-Eに向ける土壤墓と考えられる。時期は甕133の時期から弥生時代中期後葉と考えられる。(和田)



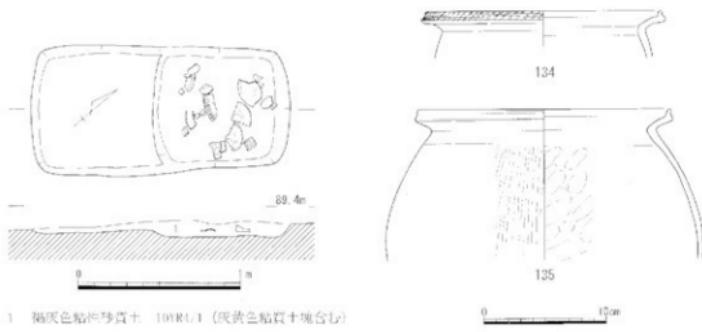
第75図 土壌墓13 (1/30)



第76図 土壌墓14 (1/30)・出土遺物 (1/4)

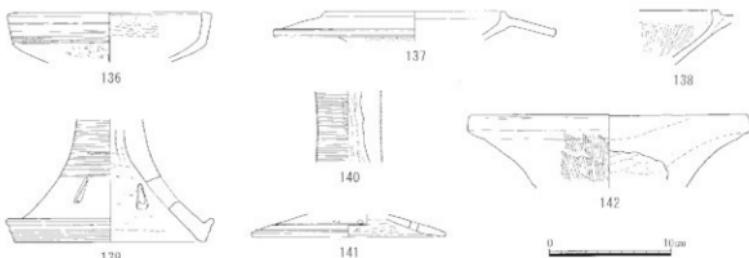
土壤墓15 (第27・28・77・78図、図版10・26)

この土壤墓のみが単独で検出された。主軸をN-42°-Eに向いている。全長160cm、全幅81cm、深さは検出面より10cmを測り、平面形態は長方形となるが、向かって南側の方がやや広がる。小口溝、側板痕跡は検出されなかった。断面は2段となっており、土壤墓底面のはが中央で高さ2cm程度の段差が認められた。北側の低位部は長さ70cm、幅60cmを測り、南側の高い部位は長さ、幅とも70cmの正方形を呈する。いずれも床面自体は平坦である。上器は北側の低い側で底面より2cmほど逆さした状態で検出され、大きな破片が多い。すべてほぼ同一のレベルで検出されており、副葬品であると考えられる。134・135は甕である。いざれも口縁を上方のみに拡張している。高杯は口縁部を上方に拡張し沈線文を施す136と水平口縁となる137・138がある。139・140は高杯の脚部で139には三角形の透かし孔が貫通しており、140と同様にヘラ書き沈線が施されている。141は盃、142は回転台形千字である。時期は遺物から弥生時代中期後葉であると考えられる。(和田)



1 純灰色粘性砂質土 10HRU/I (灰黄色粘土塊合む)

第77図 土壌墓15 (1/30)・出土遺物① (1/4)

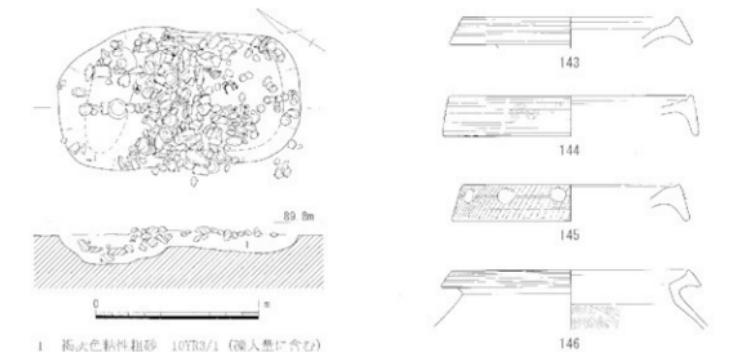


第78図 土塙墓15出土遺物② (1/4)

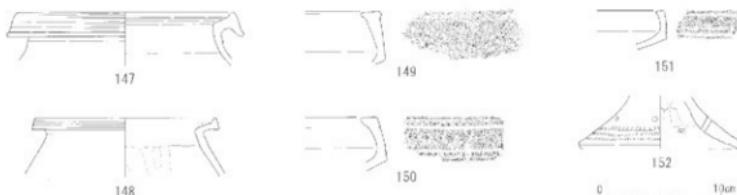
4 土塙

土塙1 (第27・28・79・80図、図版26)

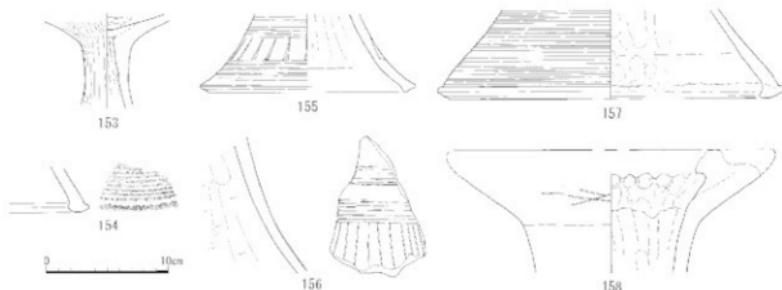
土塙2 の北1.2mに位置し、堅穴住居3および土塙墓8・9を切る土塙である。長辺148cm、短辺86cm、深さは20cmを測り、埋土には大量の礫と土器片が含まれる。礫は5cm以下の拳大で丸い河床礫よりも角ばった礫が多いようであった。土器、礫はともに土塙埋没時に同時に流れ込んだとみられる。土塙・住居を切ることから、土器群の時期はこれらの下限年代を示すものである。壺・甕・高杯・器台のほか回転台形土器158が出土している。時期は遺物から弥生時代中期後葉である。(和田)



1 湖底色粘性粗砂 10YR3/1 (浸入塗に含む)



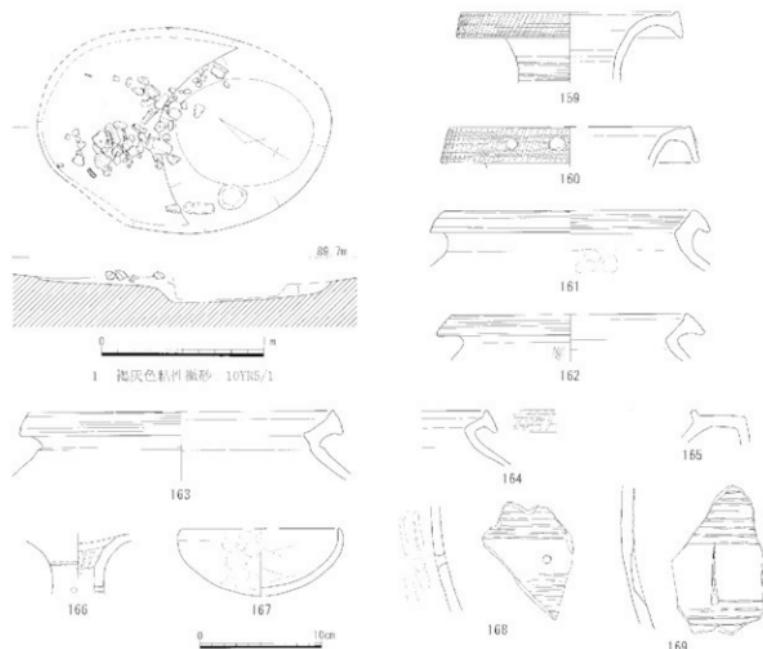
第79図 土塙1 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第80図 土壌1出土遺物2(1/4)

土壤2（第27・28・81図）

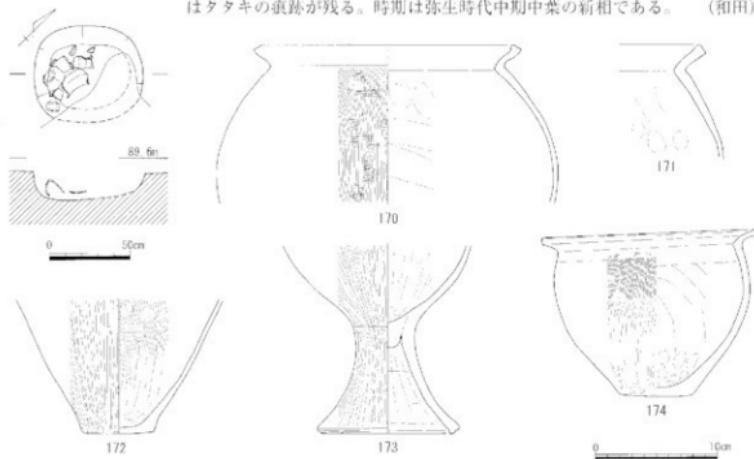
堅穴住居5の北1mに近接し、堅穴住居3に切られる。長径182cm、短径125cm、深さは最大で検出面より16cmを測る。先述の土壌1同様に底面は2段になっている。土壌南側が一部壊されているが、実際は全体にわたって砾がみられた。遺物として、壺、甕、高杯、器台がある。壺160は口縁端部が垂れ下りり、外面に凹線文を描く。時期は出土遺物から弥生時代中期後葉である。（和田）



第81図 土壌2(1/30)・出土遺物(1/4)

土壤3（第27・28・82図、図版26）

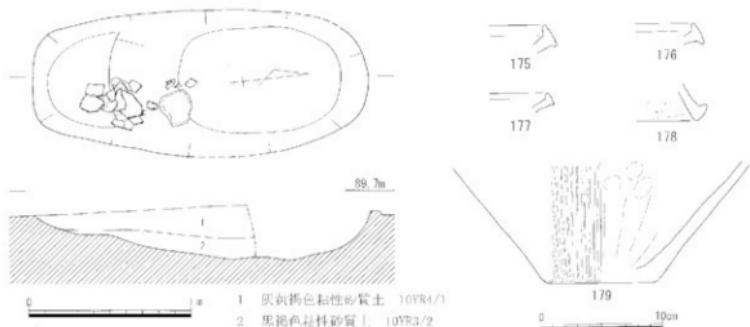
竪穴住居5の北西20cmに接する。同住居の重木の降下点から考えて、当初は住居内施設と想定していたが、時期が異なるため単独の遺構と考えられる。長径67cm、短径60cm、深さは検出面より18cmを測る。南半は大きく改変されているが、残った部分では土器が密集して出土した。出土土器には甕170～172、高杯173、鉢174がある。甕は口縁部をわずかに上方へ拡張し、脛部が大きく張り、外面にはタタキの痕跡が残る。時期は弥生時代中期中葉の新相である。（和田）



第82図 土壌3(1/30)・出土遺物(1/4)

土壤4（第27・28・83図）

竪穴住居5の東側に位置し、長さ207cm、幅88cm、深さ最大33cmを測る長楕円形の土壌である。主軸は南北に向いている。底面は段状になっており、やや高い南側には大形の甕と土器片が集中していた。土壌の時期は出土土器からみて弥生時代中期後葉である。（岡本泰）



第83図 土壌4(1/30)・出土遺物(1/4)

土壤5 (第27・28・84図)

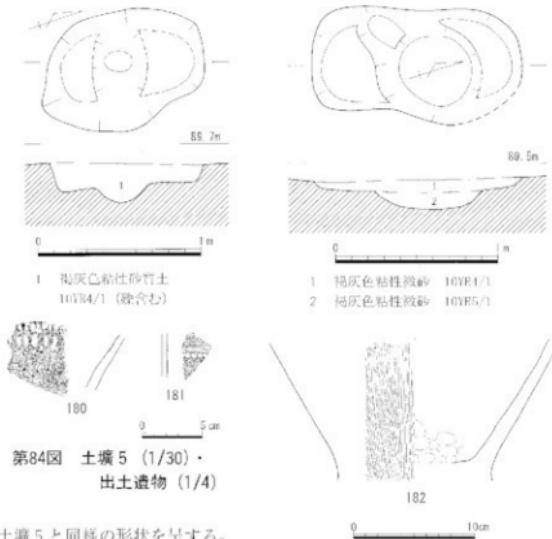
竪穴住居6の南東に位置する土壤である。長さ106cm、幅73cm、深さは最大24cmで中央が窪む。弥生前期後葉の壺180と甕181が出土しているが、混入の可能性もあり、土壤自体は中期に下るかもしれない。(岡本泰)

土壤6 (第27・28・85図)

土壤5の南側に位置する、長さ130cm、幅71cm、深さ19cmの不整格円形の土壤である。底面は土壤5と同様の形状を呈する。壺底部182からみて弥生時代中期後半である。(岡本泰)

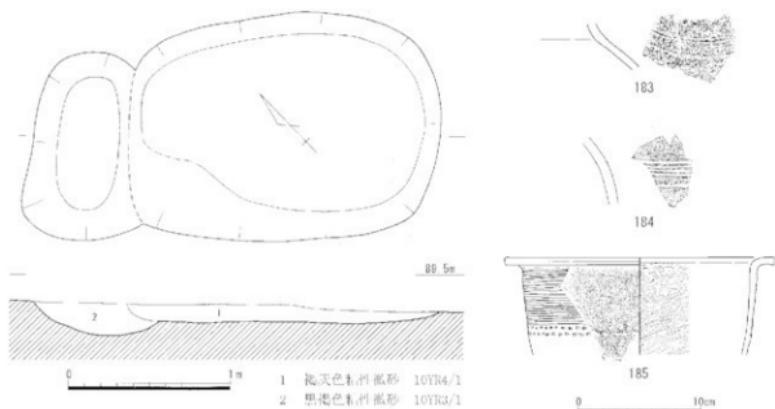
土壤7 (第27・28・86図)

竪穴住居15の西側に位置する、長さ192cm、幅140cm、深さ最大11cmを測る大形の土壤である。西側に隣接する土壤を切っている。埋土中から出土した183・184は弥生時代前期後葉の壺、185は中期前葉の甕で、口縁端部はほぼ直角に外反し、腹部上半の櫛描き沈線の下には刺突文が巡る。(岡本泰)



第84図 土壌5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第85図 土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

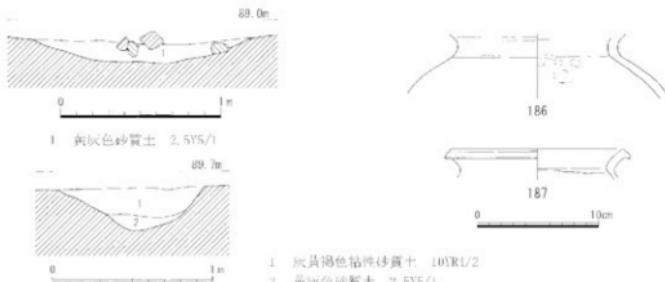


第86図 土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

5 溝

溝1（第27・87図）

調査区北側を北西から南東方向に流れる溝で、西側部分は2条に分岐している。検出長は54.6m、幅40~220cm、検出面からの深さは15cmを測る。溝の底面付近から弥生土器が細片で出土した。図示できた遺物には、壺186、甕187があり、時期は弥生時代後期初頭と考えられる。（石田）



第87図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝2（第27・88図）

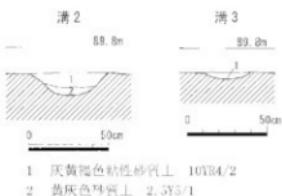
調査区北西隅で検出した南北方向に流れる溝である。溝3を切る形で交差している。検出長は12m、幅70cm、深さ15cmを測る。溝の埋土中から弥生土器片が細片で出土しているが、図示できるものはなかった。時期は弥生時代中期に属するものと考えられる。（石田）

溝3（第27・88図）

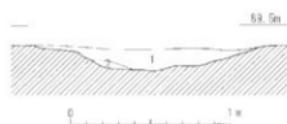
調査区北西隅で検出した東西方向に流れる溝で、溝1・2に切られている。検出長は7.8m、幅30cm、深さ5cmと浅い。出土遺物はなく時期は不明であるが、層位や埋土の状況から弥生時代中期と考えられる。（石田）

溝4（第27・89図）

調査区中央西側で検出した、東西方向に流れる溝である。大部分が削平を受けており、溝の西端部分だけを検出している。検出長は8.3m、幅140cm、深さは検出面から15cmを測り、皿状の断面形を呈している。埋土中から壺188が出土しており、時期は弥生時代中期前半と考えられる。（石田）



第88図 溝2・3 (1/30)



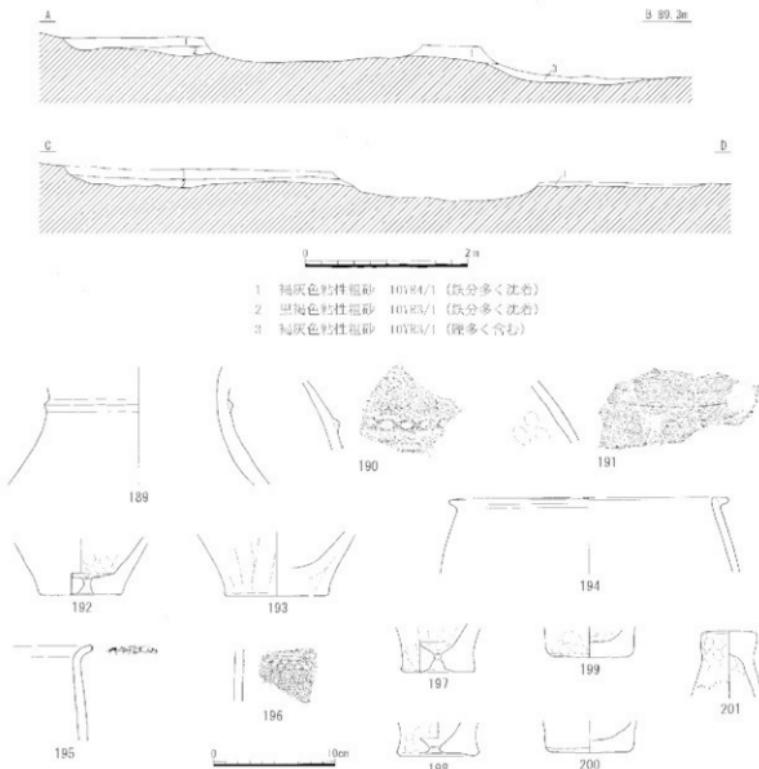
第89図 溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

6 その他の遺構・遺物

下がり (第27・28・90図、図版27)

2区の北東隅では、基盤層が徐々に東側へと傾斜し、基盤層と中世包含層とに挟まれる形で黒褐色～灰褐色系の粘性粗砂が堆積しており、集落が存在した当時には低湿地状を呈していたものと思われる。この層からは、弥生時代前期末～中期中葉の土器が出土した。下がりの北側部分は3区へと続くようだが、その末端は明確にとらえられなかった。189～193は蓋である。189は腹部に突帯が1条通り、190は突帯上に押圧を加えている。以上2点は前期後葉に属すると思われる。櫛描き文が施された肩部191は中期中葉頃のものか。192の底部には焼成後穿孔がある。194～200は蓋、194・195は前期後葉と思われ、195は口縁端部に刻み目が残る。196は口縁直下で、櫛描き文と刺突文をもち中期前葉か。197・198の底部には焼成後穿孔が認められる。201は蓋であろう。

(岡本泰)



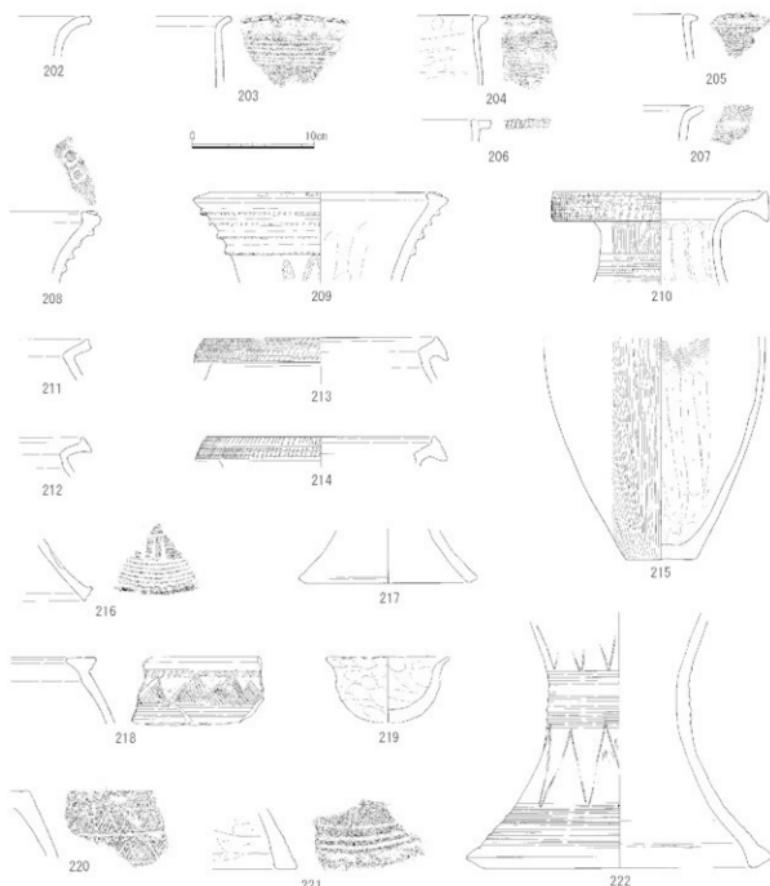
第90図 下がり断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

遺構に伴わない遺物（第91～93図、図版27～29）

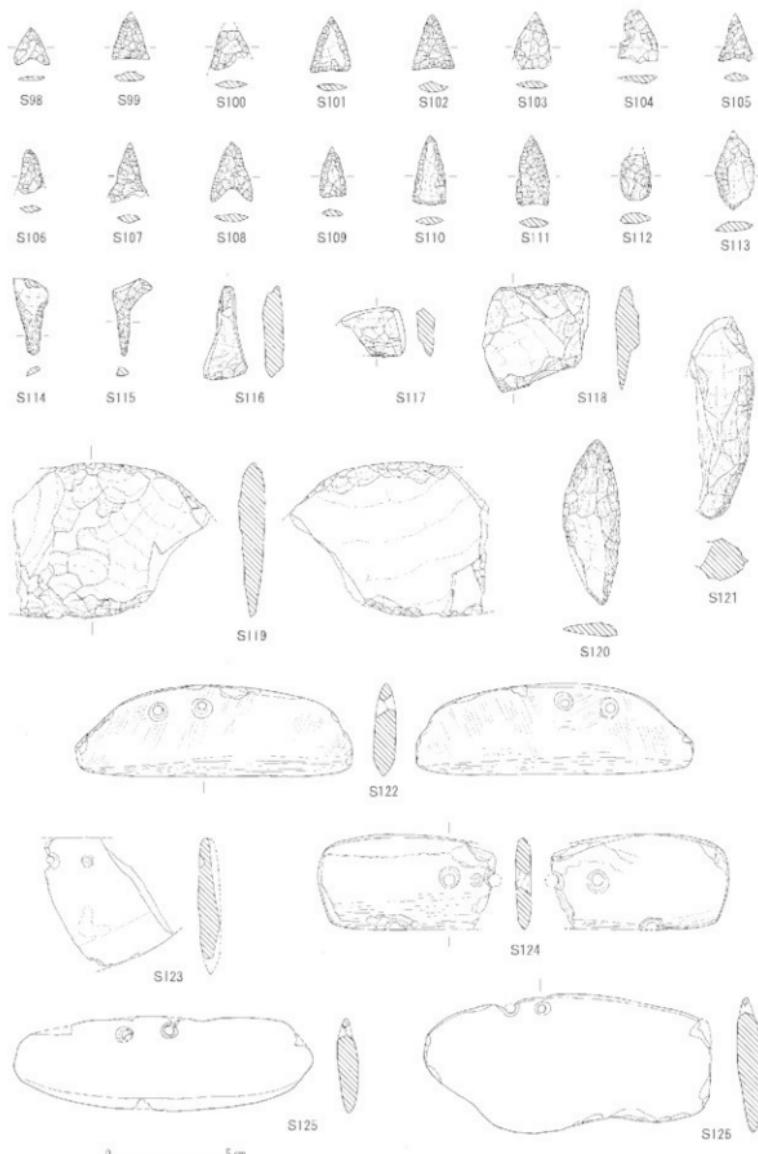
ここでは、弥生時代の遺物のうち、中世の包含層から出土した遺物、他時期ないし時期の不明確な遺構（柱穴など）から出土した遺物、掘り下げ時に避難した遺物等を一括して掲載する。

202～207は前期末～中期初頭の上器である。202は壺の口縁部と思われる。203～207は壺の口縁部であり、203は口縁直下にヘラ描き沈線文、204・205・207は櫛描き沈線文が施されている。土塙墓1出土土器に近似した時期のものであろう。

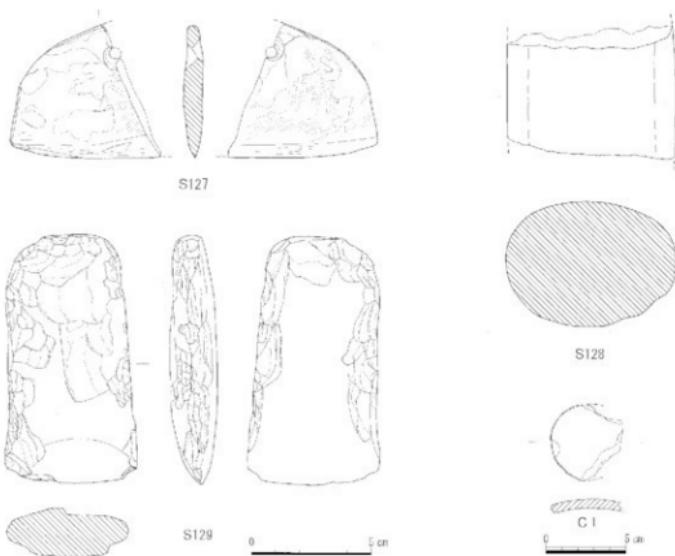
208・209は中期中葉に属する壺の口縁部で、頸部には刺突文のある4条の突帯が廻り、口縁上端の平坦面には円形浮文が貼り付けられている。



第91図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第92図 遺構に伴わない遺物 2) (1/2)



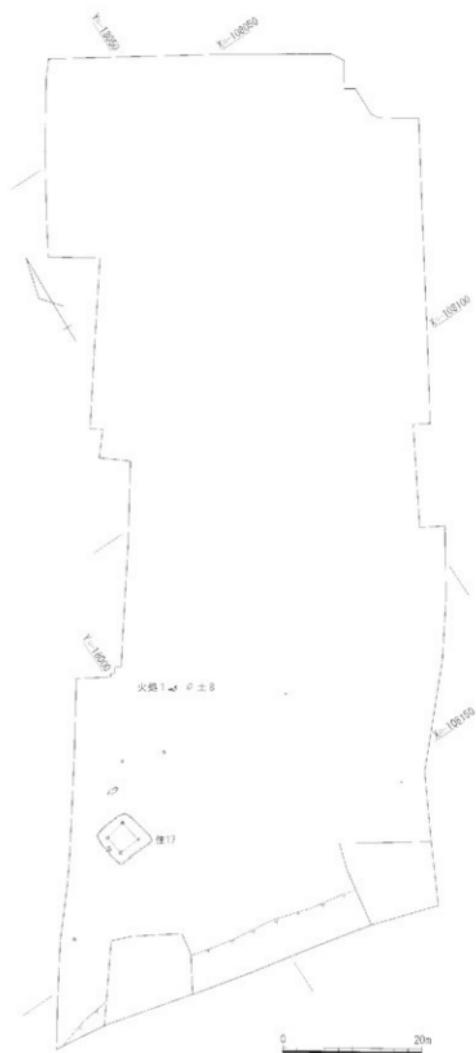
第93図 遺構に伴わない遺物③ (1/2・1/3)

210～222は、堅穴住居などとほぼ同時期で、中期後葉を中心とする土器である。210は柱穴から出土した壺の口縁部である。211～215は壺である。壺215は堅穴住居14内にある柱穴から出土したが、住居自体に伴うかどうかは不明である。216・217は高杯の脚部である。鉢の口縁部218は、口縁直下に二重の鋸歯文が描かれ、さらに表面には赤色顔料が塗布されており装飾性に富む。219は手捏ね成形の小形の鉢である。220～222は器台と考えられる。220の垂下する口縁端部は鋸歯文と竹管文で装飾されている。222は、弥生時代の日立った遺構がみられない3区において、地山面の直上に堆積する砂質土から出土したもので、器表面の風化が著しい。

石器も包含層や柱穴から多く出土している。S98～S113は石鎚、S114・S115は石錐である。S116・S117は楔形石器、S118はスクレイバーと考えられる。以上の石器類は、いずれもサスカイト製である。S119は打翼石包丁と考えられ、石材は粘板岩を用いている。刃部に若干の磨滅が認められる。S120は人形の顎状を呈するもので、石槍の可能性がある。S121は粘板岩製で、器種がはっきりしないが何かの破損品であろうか。S122～S127は磨製石包丁であり、粘板岩製のものが主体である。S123は穿孔が貫通していないため、製作途中で破損して放棄されたものであろう。S128は太型蛤刃石斧の破片である。玄武岩質凝灰岩製の扁平片刃石斧S129は柱穴から出土したものであるが、柱穴自体の時期がはっきりしないためここでの掲載とした。

上製品としては、中期の壺の脚部を転用した劔錘車の未製品と思われるC1がある。(岡本泰)

第4節 古墳時代の遺構・遺物



第94図 古墳時代遺構全体図 (1/700)

1 概要

弥生時代後期に入ると、遺構・遺物数が激減した大河内遺跡であるが、古墳時代前期に至ってもその傾向に変化はなく、遺物の中にごく少量の古墳時代前期土器が見出されるのみである。この地に再び確実な人跡が見出されるのは、古墳時代後期を待たねばならない。

古墳時代後期の遺構は、調査区の南西部で検出された竪穴住居 1 軒と、出土遺物によって時期を判定した若干の柱穴にとどまつており、集落の全体像は明らかでない。ただ、竪穴住居の深さが約 10cm しか残存しない事実が示す削平を考慮に入れても、集落の中心域であったとは考えにくく、弥生時代中期後葉と同じく、集落の東限に近い位置にあったものと判断される。

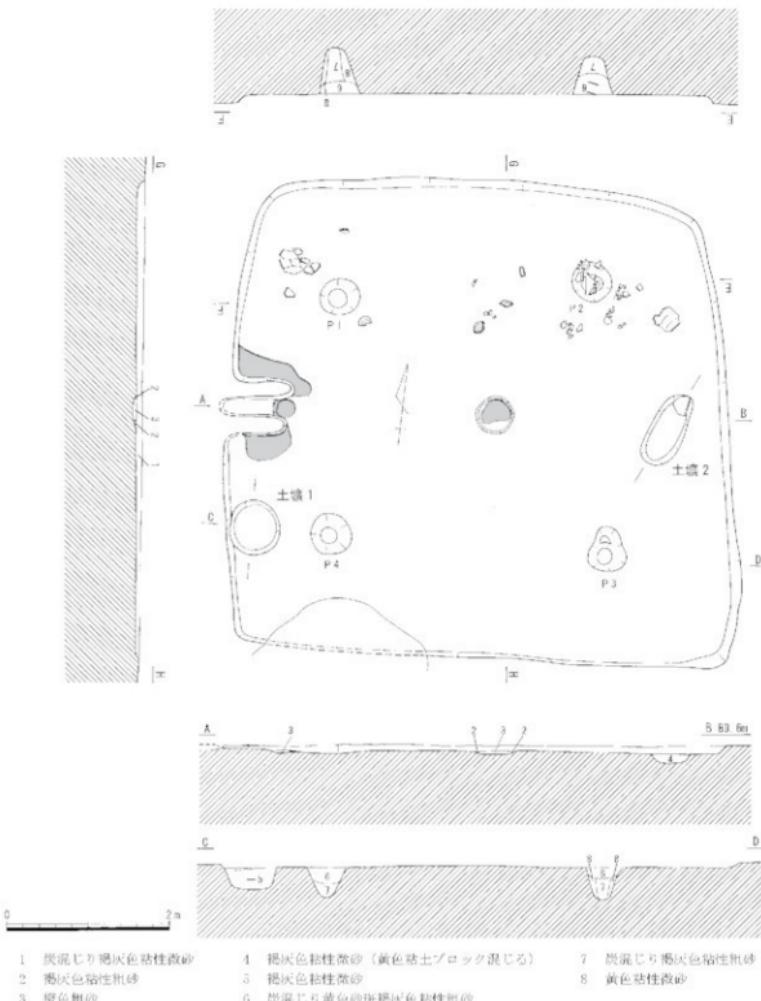
1 軒のみを検出した竪穴住居は、西壁沿いにカマドを有する 6 世紀後半のものである。埋土中から多数の須恵器・土師器とともに鉄鋤・鍔壁片、さらに 1 片のみであるが縫羽口片が出土しており、住居内ではないにしてもこの付近で鍛冶作業が行われたことを実証する、興味深い資料といえる。

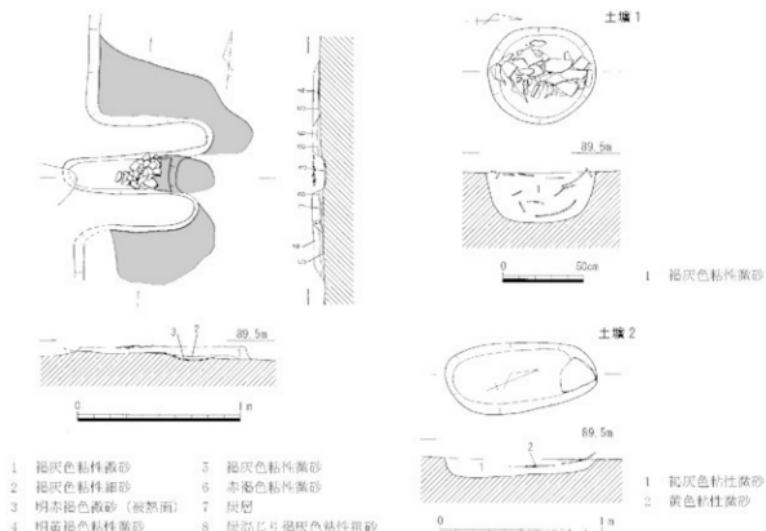
その他に検出された遺構は若干の柱穴のみで、遺物も他時期の遺構への混入品がほとんどである。これ以降、中世まで明確な遺構はみられなくなる。(岡本泰)

2 壁穴住居

壁穴住居17 (第94~98図、図版11・30)

調査区南西部に位置する壁穴住居で、他には同時代の遺構は認められない。しかし、包含層中で同時期の須恵器片が検出されたことから、近辺にこの時期の集落が展開していることは十分に想定でき



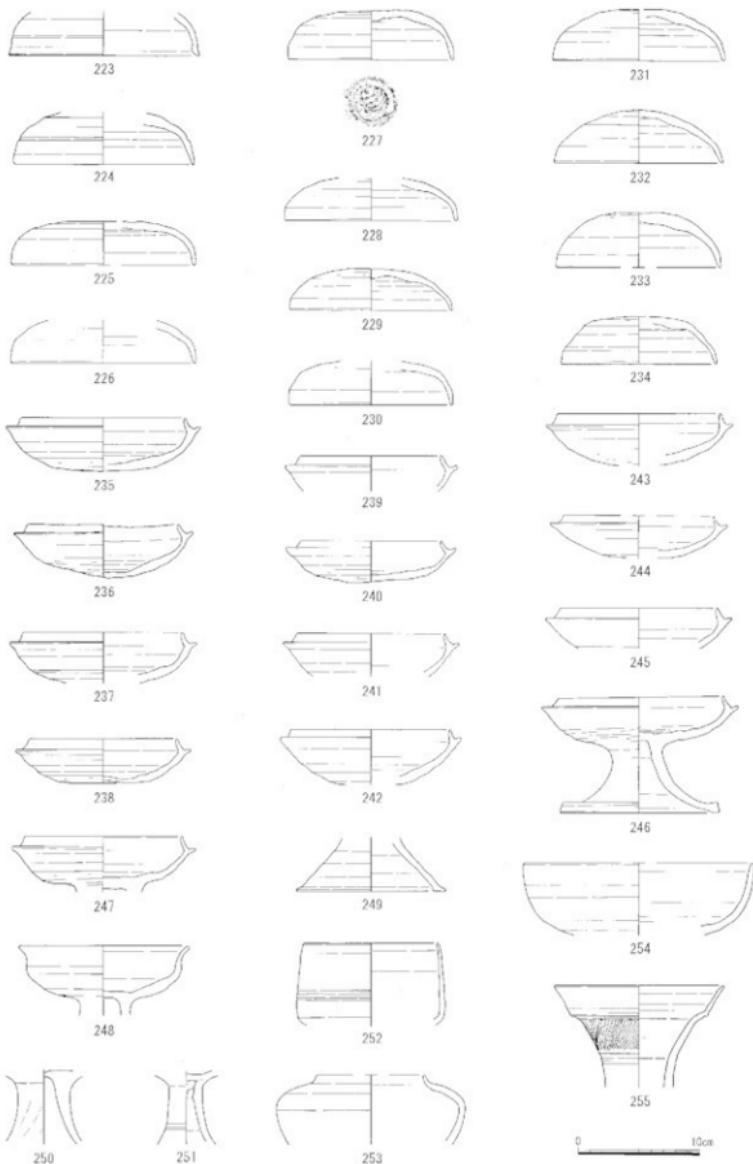


第96図 壇穴住居17カマド・土壤1・2 (1/30)

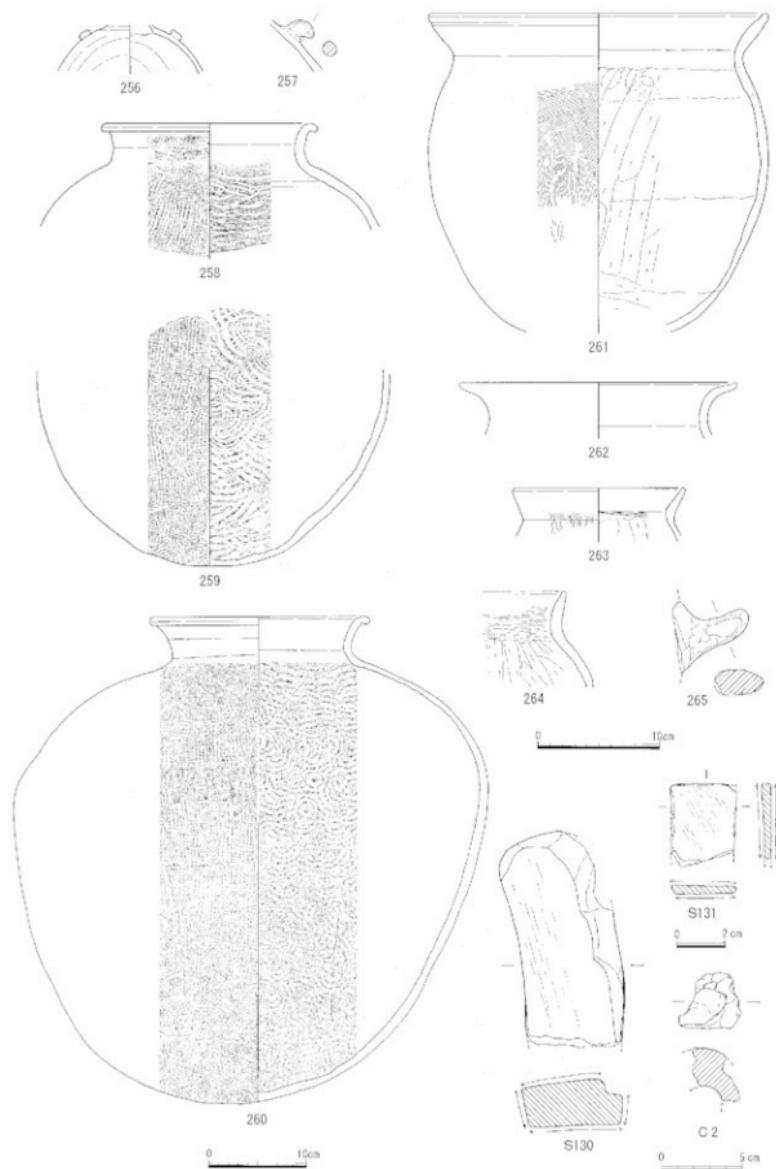
る。この住居は東西624cm、南北585cmを測り、西邊にカマドを設ける方形の住居である。深さは検出面から10cmを測り、底面の海拔高は89.36mで、ほぼ水平である。埋土中には木炭粒が散見された。床面には柱穴が4個、住居中央に焼土面、住居内施設と考えられる土壤2基が確認された。また、住居北半を中心に、須恵器群を床面の直上で検出した。なお、壁体構造は検出できなかった。

柱穴は直徑48cmほどの円形のもの、直徑56cmの橢円形のものの二者がある。深さは35~56cmで、P1・3で柱痕跡が認められる。柱痕の太さはいずれも15cm程度である。P2では柱穴内に須恵器の落ち込みが見られた。一部の須恵器が柱痕跡を覆うように検出されたことから、柱が建っていた際に同時に埋没した公算は低い。他の須恵器が床面の直上で検出された点からも、柱の抜き取り後に埋められたと考えるのが妥当であろう。よって、この落ち込んだ須恵器は住居の廃絶時に最も近い時期を示すものである。柱間距離は南北方向が280~336cm、東西方向が320~340cmである。住居中央では直徑46cm、深さ5cmほどの浅い窪みの中に幅40cmほどにわたって焼上面が形成されていた。色調は橙色を呈し、しまりも弱く、焼成は甘い。

カマドは粘土貼り付けによる造り付けのもので、基底部のみが残存している。幅20cm、高さ最大8cmを測り、平面形はU字形を呈し、焼き口近辺は3cmほど窪む。この窪みからカマド内部にかけて被熱面が形成され、木炭粒の集中も見られた。支柱石などは検出されていない。加えてカマドの周辺には、焼き口を除いては全面にわたり白色粘土の貼り付けがみられた。この粘土は流土と考えられる褐色灰色粘性微砂の上層に位置し、カマドに接する。こうした状況から、この粘土はカマドの構築時ではなく、やや時間をおいて貼り付けられたもので、カマドの修築が行われたことが示唆される。



第97図 壇穴住居17出土遺物① (1/4)



第96図 積穴住居17出土遺物(2) (1/4・1/5・1/2・1/3)

床面からは2基の土壙が検出された。1基はカマドの南側、住居西辺に接し、もう1基は住居東辺から31cm離れたところに位置し、それぞれ土壙1・2として報告する。土壙1は長径67cm、短径60cm、深さ30cmを測る円形の土壙である。土壙内には、ほぼ1個体の甕260が破片となって落ち込んでいた。他にも甕の破片もあり、貯蔵・煮沸具類を一括発見した状況が考えられる。土壙2は長径94cm、短径43cm、深さ12cmを測る、浅い楕円形の土壙である。埋土の中ほどに大形の須恵器片が検出されているが、他の遺物はみられず、性格は不明である。

遺物は須恵器を中心に、土師器や砥石、羽口、鉄滓等がある。223～234は須恵器の杯蓋、235～245は杯身である。杯蓋は口径13.8～15.6cm、器高は3.5～4.2cmを測る。杯身は同様に口径11.5～13.0cm、器高は3.6～4.5cmを測る。240がやや小さいが、全般に立ち上がりも高く、回転ヘラケズリも下半近くまでみられる。246～251は高杯で、246は有蓋短脚高杯、248は無蓋高杯、251は長脚高杯である。252・254は瓶、253は短頸壺、255は甕である。256・257は把手が退化した提瓶、258～260は須恵器の甕である。261～264は土師器の甕、265は甕である。石器には砥石S130・S131がある。また、埋土中から羽口C2、総重量約2.85kgの鐵滓、炉壁片が出土した。

ただ、鍛冶活動を想定させる鉄片や工具類がみられず、中央で見つかった被熱面も焼成が甘く、鍛冶炉とは考えにくいことから、鐵滓等は住居設置時の混入であり、近辺での鍛冶活動に伴うものであろう。この住居の時期は、出土した須恵器からTK43型式の新相、すなわち6世紀後葉である。(和田)

3 土壙

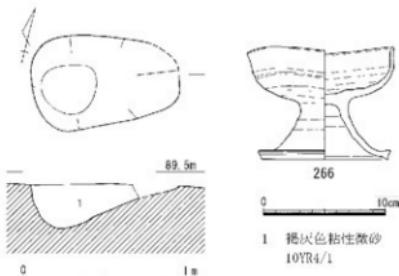
土壙8 (第94・99図、図版30)

1区と2区の境界付近で検出された、長さ91cm、幅58cm、深さ27cmを測る不整楕円形の土壙である。主軸はほぼ東西で、底面は西側に偏っている。埋土中から須恵器の高杯266が出土した。土壙の時期は6世紀後半か。(岡本泰)

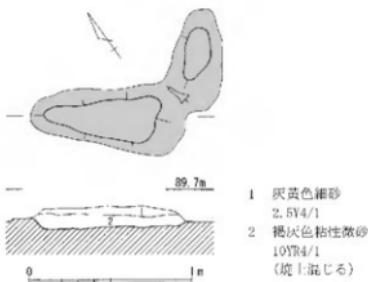
4 火処

火処1 (第94・100図)

土壙8の西側約2.8mの位置で検出されたL字形の焼土面である。地山を少し掘り深めた上に貼り付けられるように染かれ、硬く焼け縮まって一部は赤色に変色し、木炭粒がまばらに検出された。出土遺物はないが、検出状況からみて削平された竪穴住居に伴うカマド等の残欠である可能性がある。(岡本泰)



第99図 土壙8 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第100図 火処1 (1/30)

5 遺構に伴わない遺物

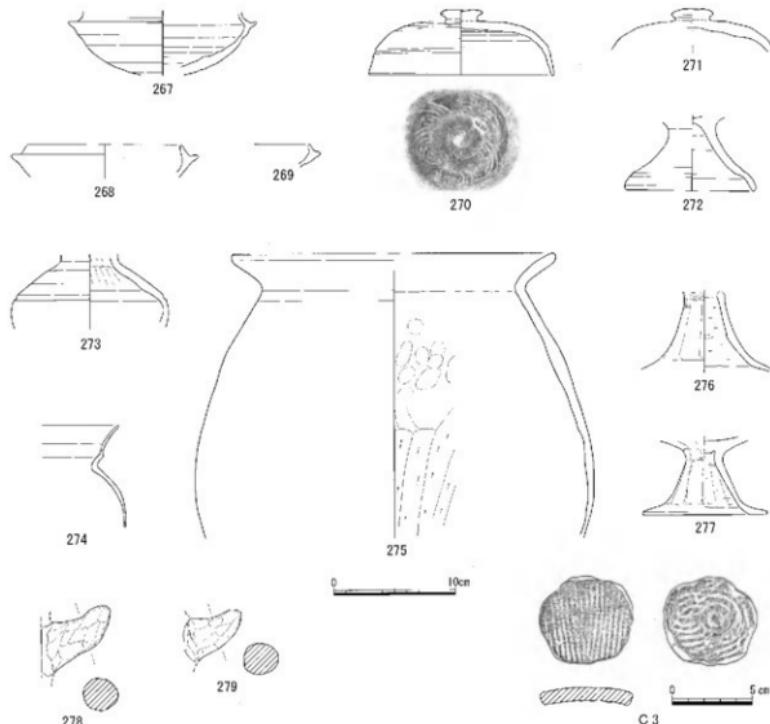
遺構に伴わない遺物（第101図、図版30・34）

ここでは柱穴や包含層から出土し、本来の所属遺構が不明である遺物を掲載する。全体的にみて、弥生時代に比較して遺物数は非常に少なくなる。

267～273は須恵器である。267～269の杯身はいずれも残りが悪いが、口縁部の形態などから6世紀後半から7世紀初め頃までになると思われる。270は柱穴出土で、完形に近いつまみ付きの杯蓋である。内面には同心円状のタタキが残り、時期は6世紀後半か。271も同様の形態である。272は高杯脚部である。273は甕と考えられるが注口部分は残っていない。

274～279は土師器である。274は小片であるが山陰系の甕と考えられる。275の土師器甕は弥生時代中期の堅穴住居5の検出中に出土したもので、近接する火処1との関連も考えられる。276・277の高杯脚部は中期前半頃のものか。278・279は甕の把手である。

C 3は須恵器蓋を転用した円盤状土製品である。両面にタタキの痕跡がよく残っている。（岡本泰）



第101図 遺構に伴わない遺物（1/4・1/3）

第5節 中世の遺構・遺物



第102図 中世遺構全体図 (1/700)

1 概要

中世の遺構・遺物は、主として調査区の南半部に集中する傾向がある。なお、ここで扱う遺構はおおむね12世紀末～13世紀前半あたりに属するものが多いため、時代としては平安時代末から鎌倉時代初頭に該当する。

調査区中央部では、棟方向を揃えた3棟の建物群と、やはり同一方向を指す溝とが検出され、星敷地および区画溝である可能性が高い。建物の規模や、包含層から多く出土した中国製磁器などからみて、有力者の居館であった可能性が高い。他の柱穴の中にも、建物を構成したものがあると考えられるが、特定するに至らなかった。

調査区中央～南半部では、多数の土壙・柱穴を検出した。柱穴については時期の判断が難しいものが多く、第102図には、出土遺物などからこの時期と断定できるものののみを掲載した。

調査区北半部では遺構は極めて少なく、若干の溝や土壙が検出されたにすぎない。前半の影響を受けやすい条件にあったことを考慮しても、もともと星敷地から外れた場所であったと考えられる。

中世末以降、調査地周辺は農耕地となったようで、遺構・遺物は激減する。この時期の遺構も本節で掲載する。

(岡本泰)

2 挖立柱建物

掘立柱建物1 (第102~104図、写真9、図版3・31)

1区の北半部で検出された 6×4 間の大形の総柱建物で、掘立柱建物3の北側 1m弱の位置に隣接する。桁行1,340cm、梁行799cmを測り、面積は106.50m²である。建物の棟方向はN-1°-Eであり、ほぼ南北棟といってよい。

柱穴は、北半部では比較的均整に並ぶが、南端部では配列に乱れが目立ち、柱穴列の主軸方向自体も北半部とはややずれている。このことから、北側に 4×3 間、南側に 4×2 間の2棟の建物に分離する可能性も否定できないが、個々の柱穴の規模・埋土などの点で特に違いがみられないため、ここでは同一の建物と判断した。なお、北邊中央の柱穴は検出されなかった。

柱穴の規格は、長径23~46cmを測り、底面海抜高は88.9~89.2mである。各柱穴からは疊がしばしば出土し、多くは柱の抜き取り後に入ったものとみられる。一方で、P 4・5では柱の側面を押さえのような配置であり、南東部のP 23では、底面に近い位置に扁平な石が置かれ、礎板を思わせる木片が一緒に出土している。これらは建物機能時の位置を保っていると考えられる。

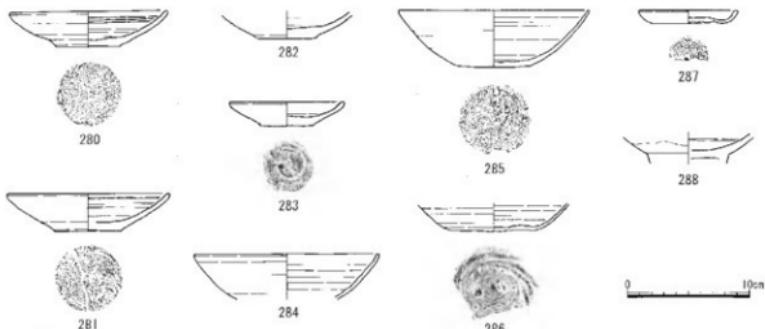
遺物は、疊と同じく柱穴底面から浮いた状態で出土したものが多い。280~283は十師質土器の杯および小皿である。284~286は勝間田焼の碗で、底部と体部との境界は明確な稜をなさず、連続的である。285は灰白色を呈する焼成不良品である。287は勝間田焼の小皿である。288は白磁の碗で、小片ではあるが12世紀後半に位置づけられるものである。

この建物の時期は、出土遺物からみて12世紀末から13世紀前半の間であろう。柱穴出土の木材の炭素14年代は1σで A.D 1044~1160年の結果が出ている。

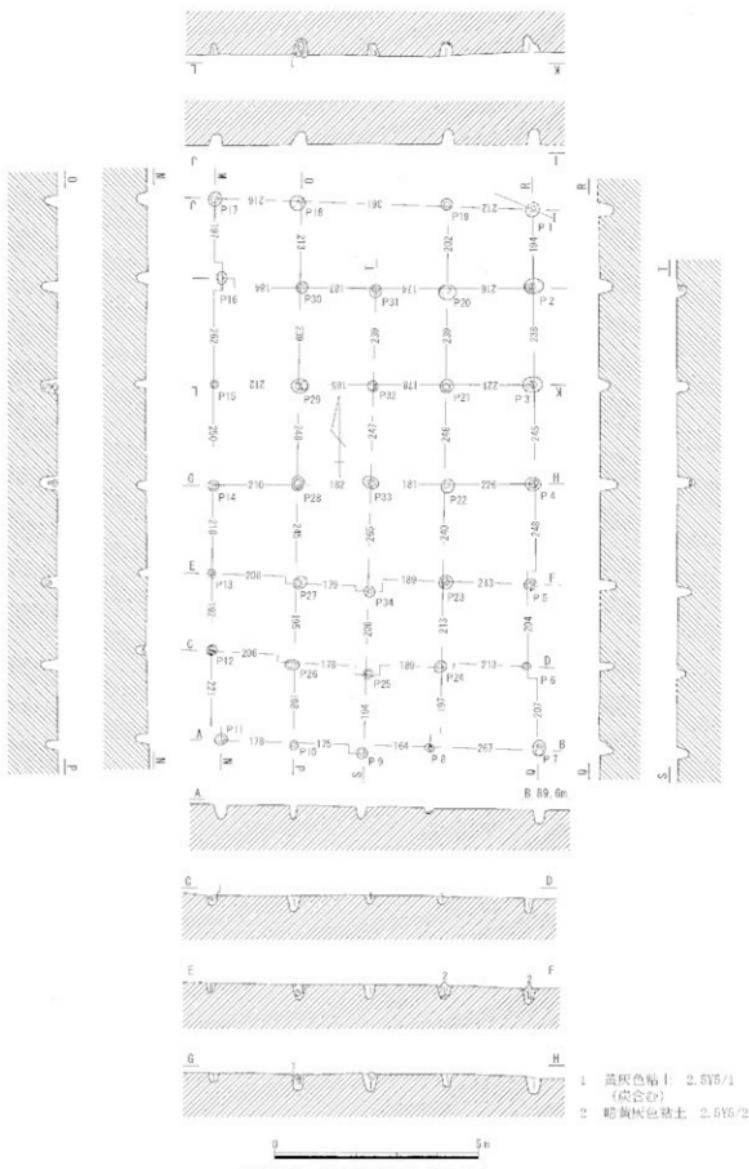
(岡本泰)



写真9 挖立柱建物1 作業風景



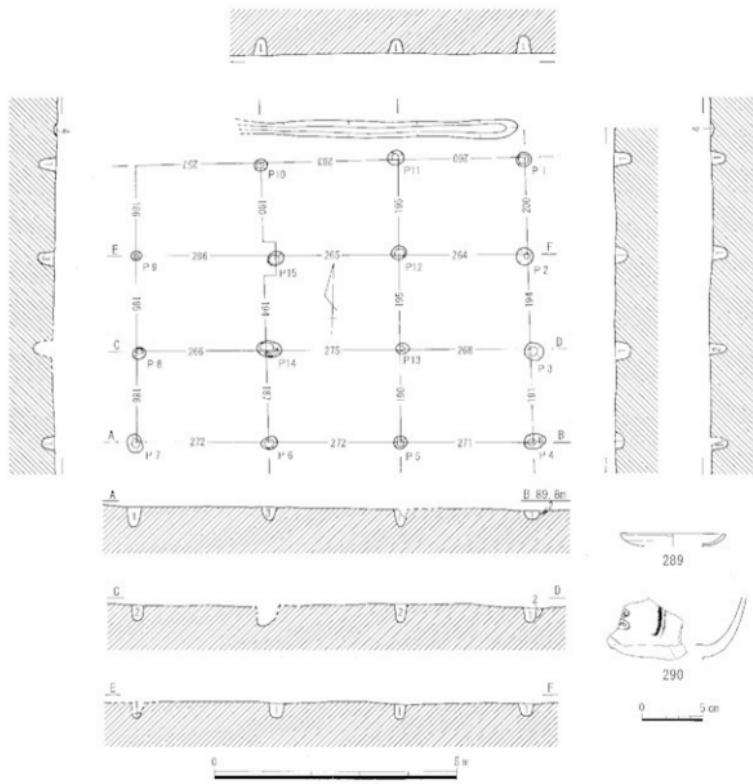
第103図 挖立柱建物1 出土遺物 (1/4)



掘立柱建物2 (第102・105図、図版3・31)

1区の西部にあり、掘立柱建物3の西側約9mの位置で検出された。3×3間の純柱建物と思われるが、北西隅の柱穴は調査区外に出るため検出できていない。棟方向はN-2°-Wで、ほぼ南北を向く。規模は、桁行が815cm、梁行が585cmを測り、面積は46.33m²である。また、北側に平行する浅い東西溝があり、この建物に伴う可能性を考えている。柱穴の配置は、P15がややずれる以外はほぼ一直線上に並んでいる。各柱穴は長径27~46cm、底面海拔高は89.2~89.4mである。P14は他の柱穴よりかなり大きく、別の柱穴と重複しているのかもしれない。

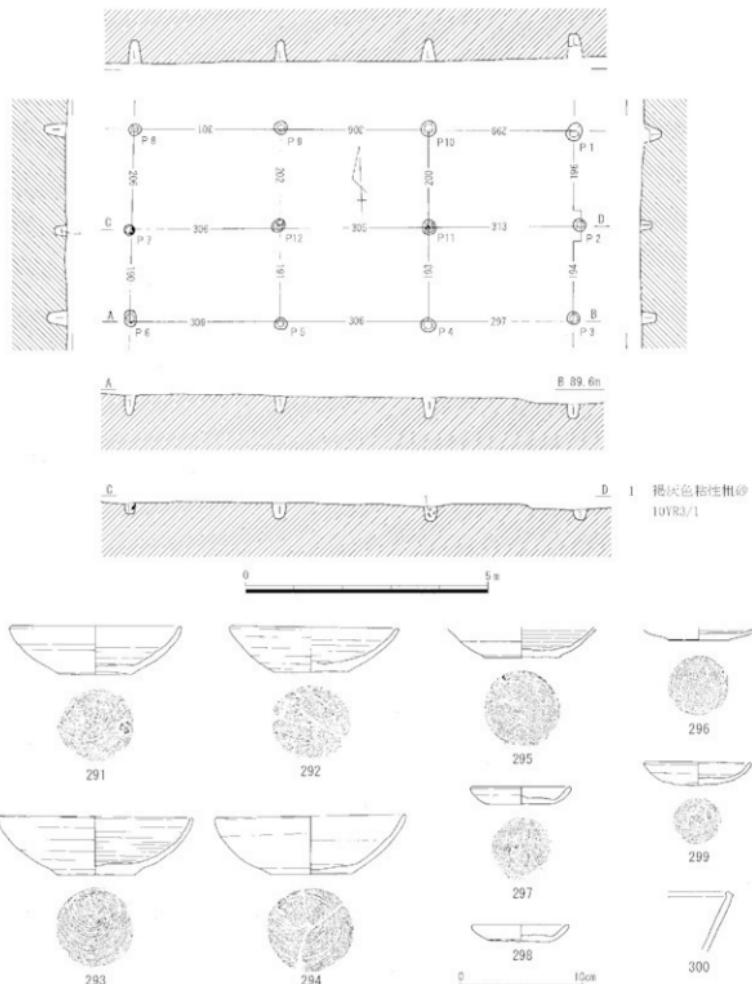
出土遺物は少ないが、土師質土器の小皿289、龍泉窯系青磁碗290などがみられる。これらの遺物から判断して、建物の時期は12世紀末~13世紀前半と考えられる。
(岡本泰)



第105図 掘立柱建物2 (1/100)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物3 (第102・106図、図版3・31)

掘立柱建物1の南側に隣接して検出された3×2間の純柱建物である。棟方向はN-2°-Eとほぼ南北を向き、掘立柱建物1・2と軸を描えている。規模は、桁行912cm、梁行396cm、面積35.38m²である。柱穴は東辺のP2以外はほぼ一直線上に並ぶ。柱穴の長径は22~35cm、底面海拔高は89.1~89.3mを測る。埴土中に砾を含む例もあるが、いずれも浮いた状態のため礎石の類とは考えにくい。



第106図 掘立柱建物3 (1/100)・出土遺物 (1/4)

291・292は土師質土器の杯である。293～296は勝間田焼の椀、299は小皿、300は鉢であろう。297・298は土師質土器の小皿である。時期は、12世紀末から13世紀前半頃と考えられる。(岡本泰)

3 土壌

土壤9 (第102・107図)

溝8の北側に位置する、不規方形の土壌である。長径174cm、短径156cm、深さ33cmを測る。出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、埋土の特徴から中世に属するものと考えられる。

(石田)

土壤10 (第102・108図)

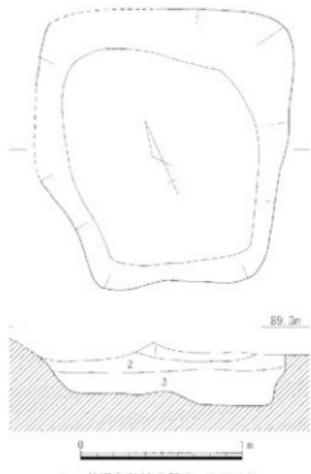
土壌11・12の北側に位置し、互いに近接した状態で検出された土壌である。長径130cm、短径122cm、深さ19cmを測る。出土遺物はなかったが、埋土の特徴から時期は中世と考えられる。

(石田)

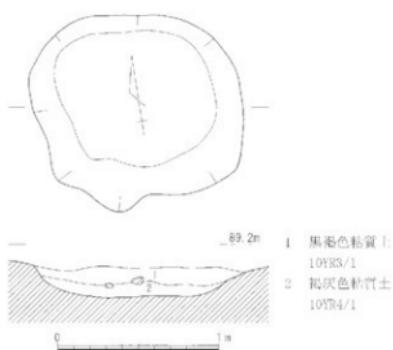
土壤11 (第102・109図)

土壌12の東側で検出した不定形の土壌である。長径172cm、短径145cm、深さ39cmを測る。底面東側に平坦面をもつ。出土遺物はなかったが、埋土の特徴から時期は中世と考えられる。

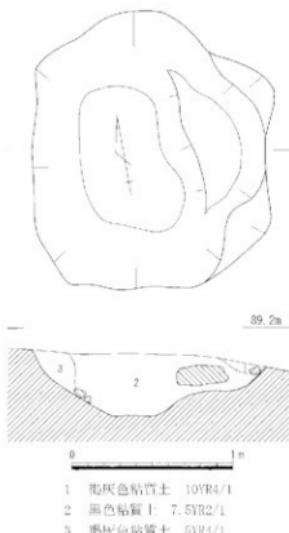
(石田)



第107図 土壌9 (1/30)



第108図 土壌10 (1/30)



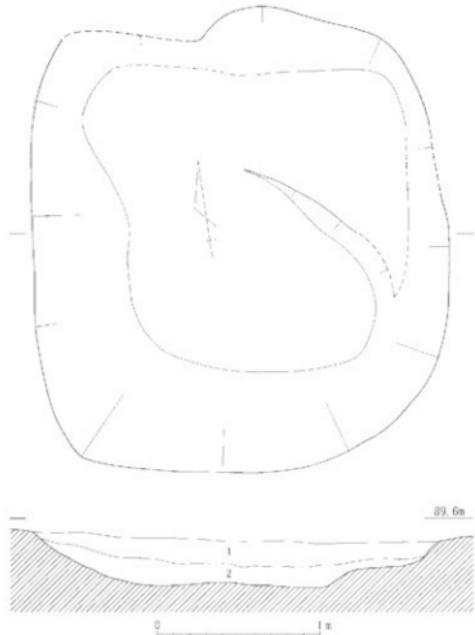
第109図 土壌11 (1/30)

土壤12（第102・110図）

土壌10の西側で検出した。長径132cm、短径108cm、深さ33cmを測る。その位置関係から土壤9～11と一連のもので、時期は中世に属するものと考えられる。（石田）

土壤13（第102・111図）

建物2の西側に位置する、四角形の土壤である。長径286cm、短径255cm、深さ30cmを測る。底面には若干の起伏が認められる。出土遺は少なく、301は土師質土器、302～304は勝間田焼である。遺構の時期は中世であろう。（岡本泰）



第111図 土壤13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壤14（第102・112図）

建物2の東側に位置する不定形の土壤で、長径225cm、短径180cmを測る。深さは最大13cmで、底面は平坦である。埋土中から土師質土器や勝間田焼片がわずかに出土したが、図示可能なものは少なく、305は土師質土器小皿の小片である。遺構の時期は中世である。（岡本泰）

土壤15（第102・112図）

掘立柱建物3の南東側に位置する不整規円形の土壤である。長径147cm、短径119cmを測り、検出面

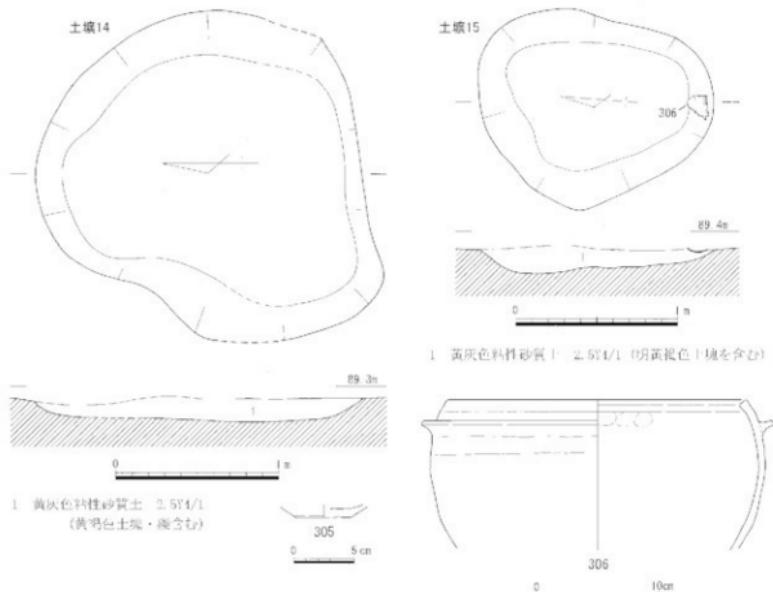


第110図 土壤12 (1/30)

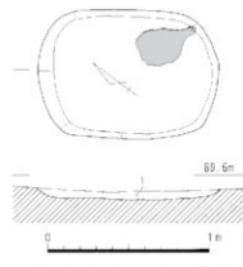


- 1 鷺灰色粘性粗砂 10YR8/1
(鉄分多く沈着)
2 鷺灰色粘性微砂 10YR1/1

からの深さは17cmである。埋土中から勝間田焼や土師質土器の小片が出土したが、図示可能なのは南端部から出土した瓦質土器の羽蓋306のみである。遺構の時期は中世と考えられる。(岡本泰)



第112図 土壙14・15 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第113図 土壙16 (1/30)

土壙16 (第102・113図)

建物3の南西側に位置する隅丸長方形の土壙である。規模は、長径111cm、短径79cmを測り、深さは5cmとごく浅い。下層に焼土ブロックを多く含み、底面の一部に被熱痕を認めることから何らかの高温を伴う作業が行われた可能性がある。出土した土器小片などから、中世の遺構と考えられる。(岡本泰)

土壙17 (第102・114図)

土壙16の南側で検出された隅丸方形の土壙である。長径136cm、短径120cmで、検出面からの深さ11cmを測り底面は平坦である。埋土中から勝間田焼・土師質土器・瓦質土器などの小片が出土した。土壙の時期は中世と考えられる。(岡本泰)

土壙18 (第102・114図)

遺跡のはば中央、建物3の南11m、溝12の北1.1mに位置する。長径112cm、短径88cm、深さは検出面より14cmを測る平面隅丸長方形の土壙である。土壙の外周に沿って厚さ3cmほどの粘土を貼っており、その粘土を中心にして壁全体が赤色に酸化するまで焼けている。底部近くになるにつれ焼きが甘

く、底面はほとんど焼けていない。逆に検出面近くでは高温により還元され灰色を呈する部位も見られた。底面の一部に木炭粒の集中が見られたが、周辺の焼けは甘かった。また、焼土塊の落ち込みが埋土中にみられた。時期はわずかに伴う土師質土器片からみて中世かと思われる。(和田)

土壤19 (第102・115図)

1区の南西部にあり、土壤20の北側、溝10の西側に位置する不整椭円形の土壤で、長径177cm、短径95cm、深さ40cmを測る。埋土中から土師質土器・勝間田焼・瓦質土器などの小片が出土している。土器の時期は中世である。(岡本泰)

土壤20 (第102・116図)

土壤19の南、土壤21の西に位置する、長さ150cm、推定幅75cm、深さ30cmの不整椭円形の上土壤である。埋土から勝間田焼の小皿や甕の破片などが出土した。時期は中世である。(岡本泰)

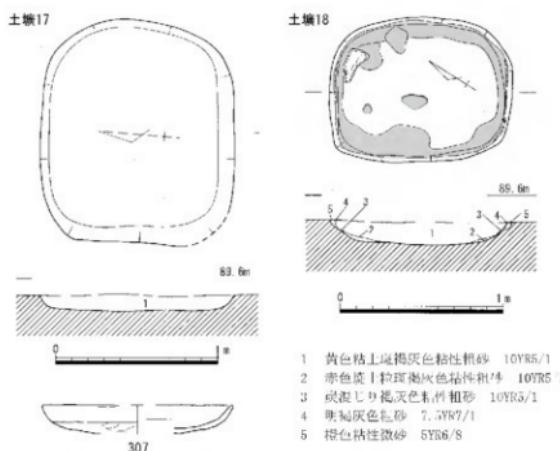
土壤21 (第102・117図)

土壤20の東に位置する。

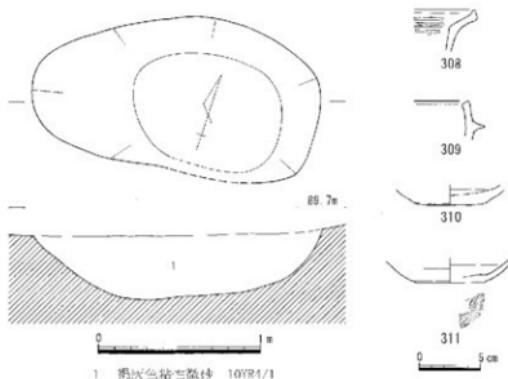
残存状態が悪いが、長径140cm、短径70cm、深さ51cmの長椭円形の土壤で、底面は南向きに傾斜していた。勝間田焼・土師質土器・瓦質土器などの小片が出土した。土壤の時期は中世である。(岡本泰)

土壤22 (第102・118図、岡本泰)

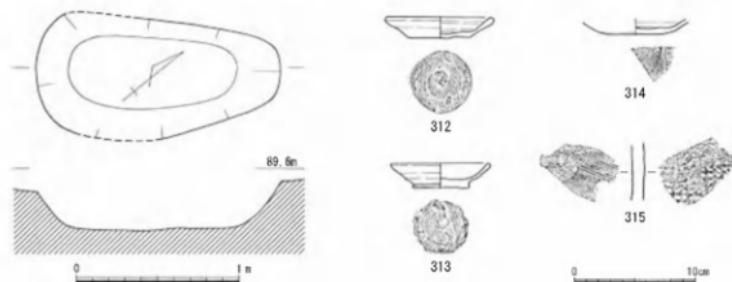
溝12の北1.3mに位置し、土壤28を切る。長径105cm、短径82cm、深さ16cmを測る平面隅丸長方形の土壤である。土壤18同様に、土壤の外周に沿って厚さ2cmほどの粘土が貼り付けられ、やはり粘土部分を中心に酸化し、赤色を呈するまで焼けている。壁の一部は灰色を呈し、還元するほど高熱にさらされていたとみられる。床面の一部まで赤化しているが、壁に比べて焼きしまりは甘い。埋土中に炭



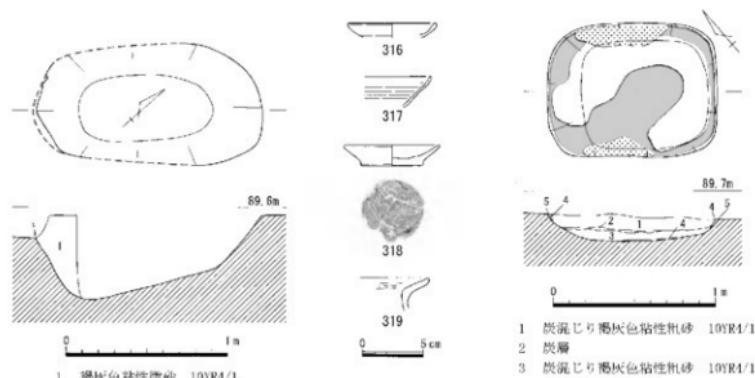
第114図 土壌17・18 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第115図 土壌19 (1/30)・出土遺物 (1/4)



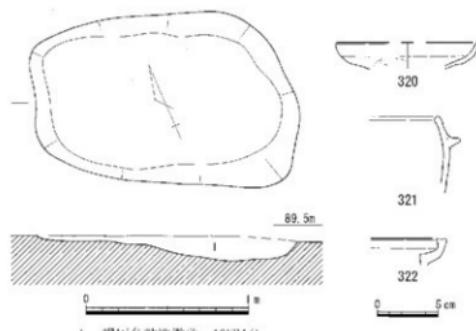
第116図 土壙20 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第117図 土壙21 (1/30)・出土遺物 (1/4)

- 1 炭混じり濃灰色粘性粗砂 10YR1/1
- 2 炭層
- 3 炭混じり濃灰色粘性粗砂 10YR1/1
(焼土粒多く入る)
- 4 明赤褐色粗砂 2, 5YR5/8
- 5 明赤褐色粘性微砂 5YR5/6

第118図 土壙22 (1/30)



第119図 土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4)

層が形成されていたが、これに伴う
焼土面はみられず、流れ込みである
公算が大きい。時期は切り合い関係
から中世である。
(和田)

土壙23 (第102・119図)

溝13・14の西端付近にある土壙
で、長径162cm、短径105cm、深さ15
cmの不整形凸円形を呈する。瓦質土器
などの小片が出土したことから、中
世の土壙と考えられる。(岡本泰)

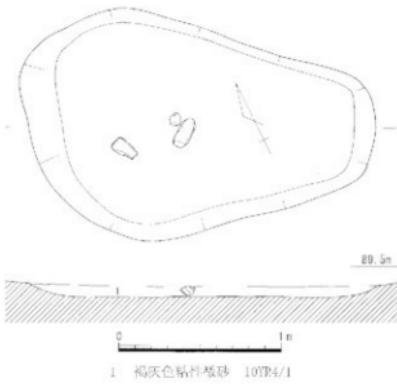
土壤24（第102・120図）

1区の南東部に位置し、溝12の南に接する土壤である。不整梢円形を呈し、長径222cm、短径136cm、深さ8cmである。埋土中にはやや大形の礫が少數含まっていた。若干の遺物や埋土の特徴から、中世の遺構と判断される。

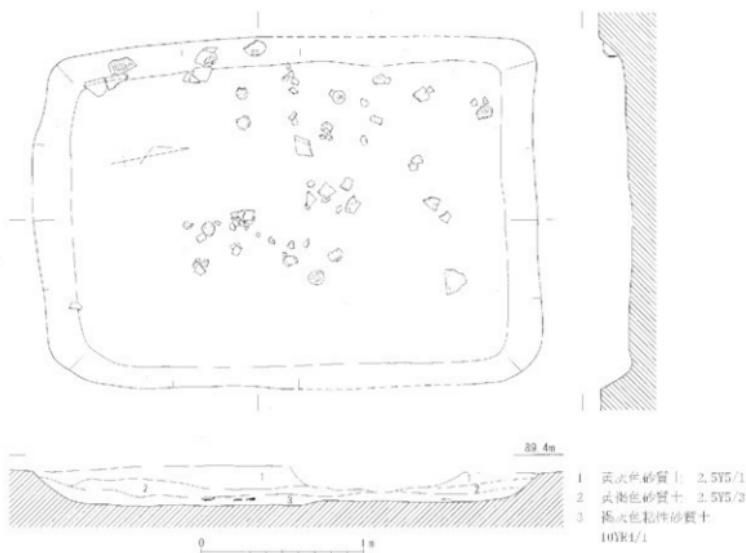
(岡本泰)

土壤25（第102・121～123図、図版12・31）

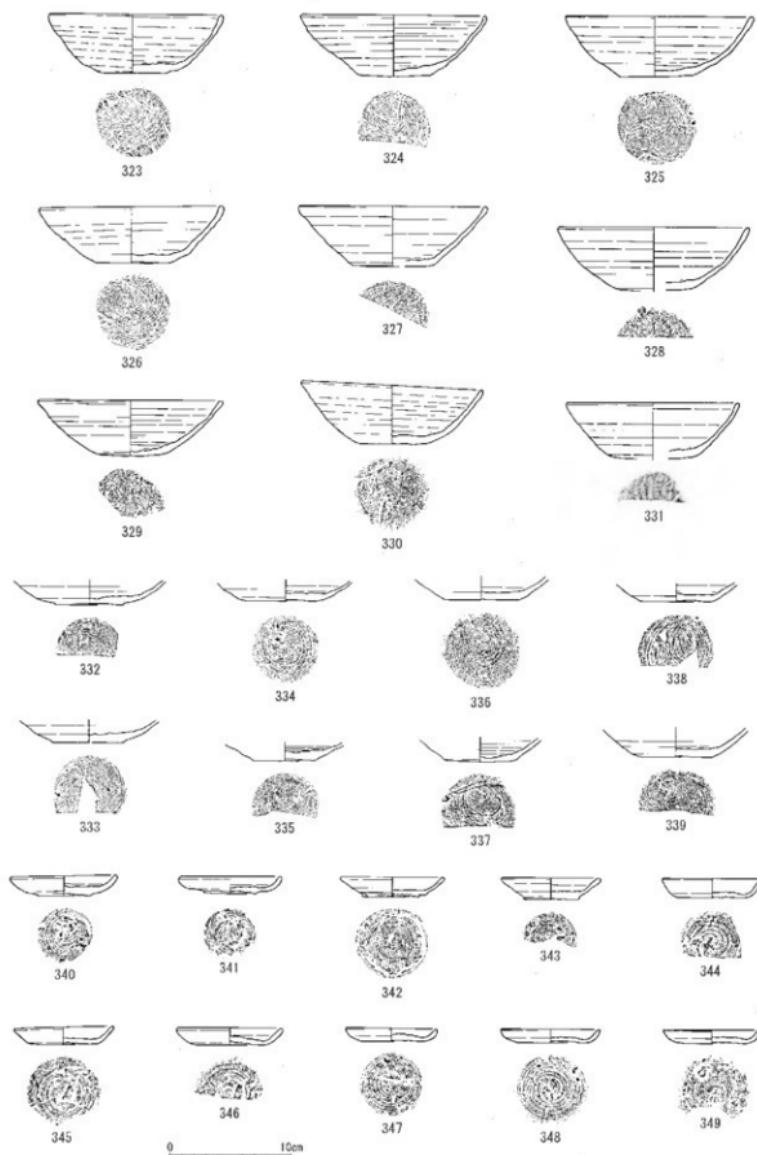
調査区東部に位置し、溝14に切られる土壤である。長径は310cm、短径は215cmの長方形を呈する大型土壤で、断面は逆台形を呈し、深さは24cmで底面は平坦である。埋土は3層程度に細分され、最下層特に底面直上から、勝間田焼を中心とする多数の上器類が出土した。323～339は勝間田焼の碗である。底面はいずれも系切りで、底部と体部の境が若干突出しやや高台状を呈するものと、体部と底部の境が棱をなすもの、曖昧なものがみられる。340～349は勝間田焼の小皿である。342は底面に別個体が溶着している。350は壺であろう。351は片口の付く捏鉢である。352・353は同一個体と思われる壺で、軟質のため黄灰色を呈し、外面に格子目叩きが施される。



第120図 土壤24 (1/30)



第121図 土壌25 (1/30)

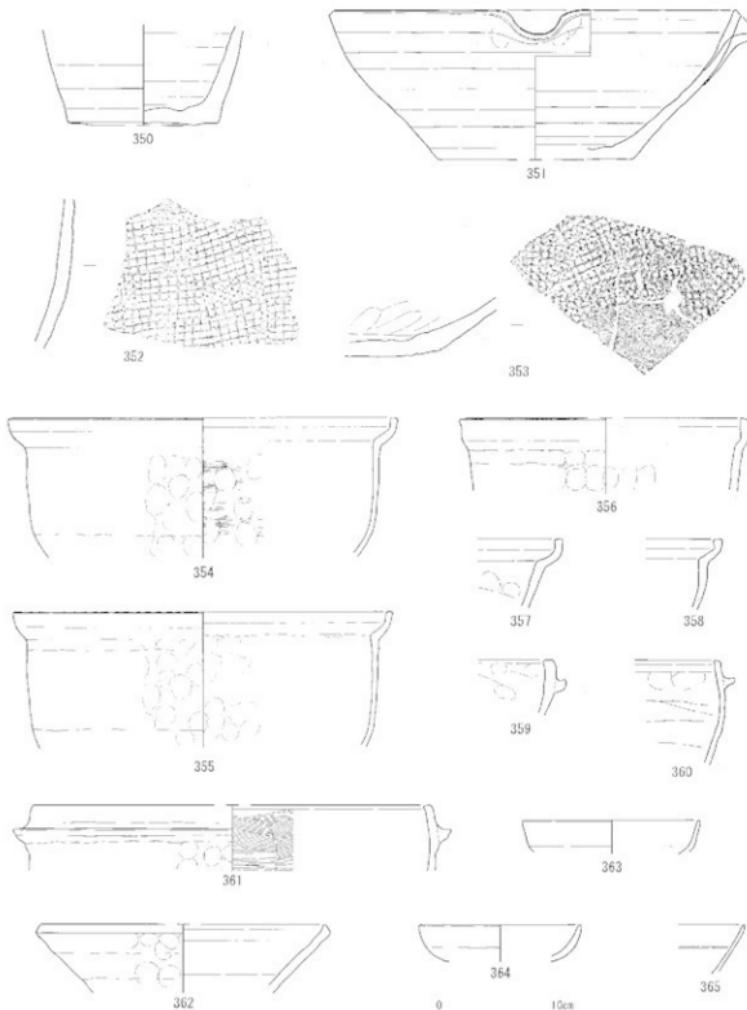


第122図 土壌25出土遺物① (1/4)

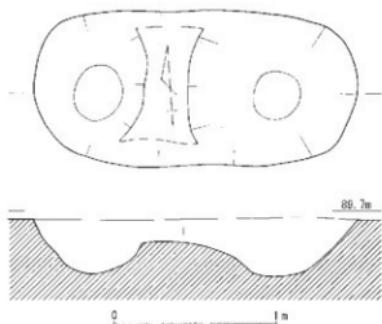
354～361は瓦質土器の鍋および羽釜である。362は瓦質の鉢、363は瓦質、364は土師質の杯である。
365は白磁の碗と思われる小片である。

この土壌の時期は、以上の出土遺物、特に勝間田焼の形態などからみて、12世紀末から13世紀初頭頃に比定されよう。

(岡本泰)



第123図 土壌25出土遺物2(1/4)



1 黄色粘土斑褐色粘土斑 10YR4/1

第124図 土壌26 (1/30)・出土遺物 (1/4)

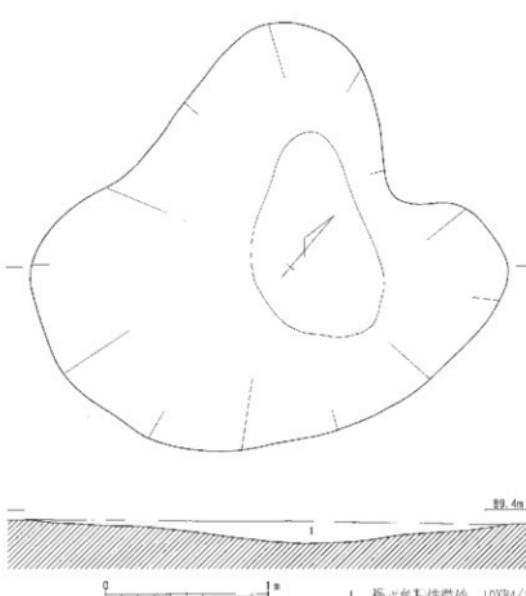


土壌26 (第102・124図)

調査区の西部に位置する、主軸を東西に向けた楕円形の上塙である。長径199cm、短径96cm、深さは最大で36cmを測る。底面は中央部が盛り上がり両側がすり鉢状に窪んだ形態である。出土遺物は小片で量も少なく、土師質土器挽366、白磁碗367、勝間田焼などがみられる。(岡本泰)

土壌27 (第102・125図、図版32)

調査区南部で検出された不定形の大形上塙で、他の小上塙と切り合い関係にある。長径260cm、短径234cm、深さ15cmで壁面の傾斜は緩く、底面は北側に偏るなど、土塙というよりたわみに近い形態である。埋土中から散発的に遺物が出土している。土師質土器挽368、勝間田焼挽369・370、瓦質土器杯371、同じく羽釜372などがみられる。この土壙の時期は中世と考えられる。(岡本泰)



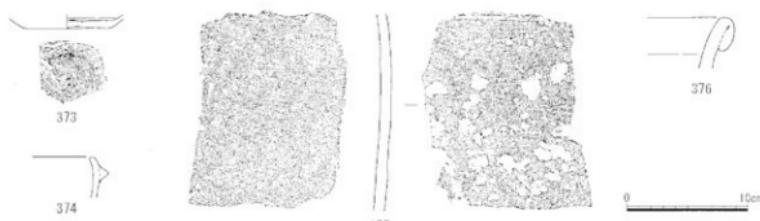
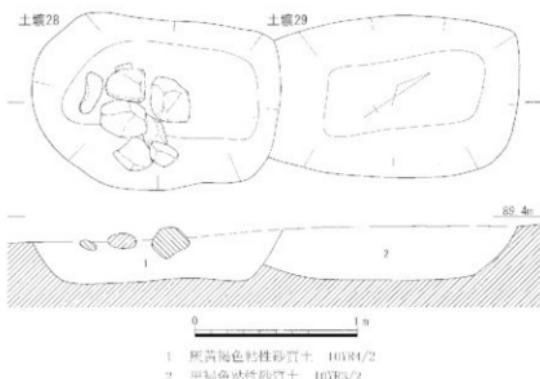
1 棕灰色粘土斑 10YR4/1



第125図 土壌27 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壌28・29(第102・126図、
図版12)**

調査区の南東隅で検出された不規長方形の土壌2基で、切り合ひ関係から南側の土壌28のはうが新しい。土壌28は長径153cm、短径105cm、深さ30cmを測る。埋土上層には人形の形が浮いた状態で入っていた。土壌28の出土遺物には、勝間田焼碗373、瓦質土器374・



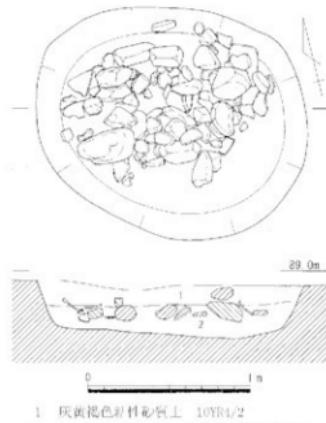
第126図 土壌28・29 (1/30)・出土遺物 (1/4)

375、備前焼壺376がある。376の口縁部は玉縁状を呈する。土壌29は長径147cm以上、短径99cm、深さ33cmで、若干の土器片と焼土塊が出土したが図示できるものはない。土壌28の時期は、備前焼の特徴から14世紀代とみられる。(岡本泰)

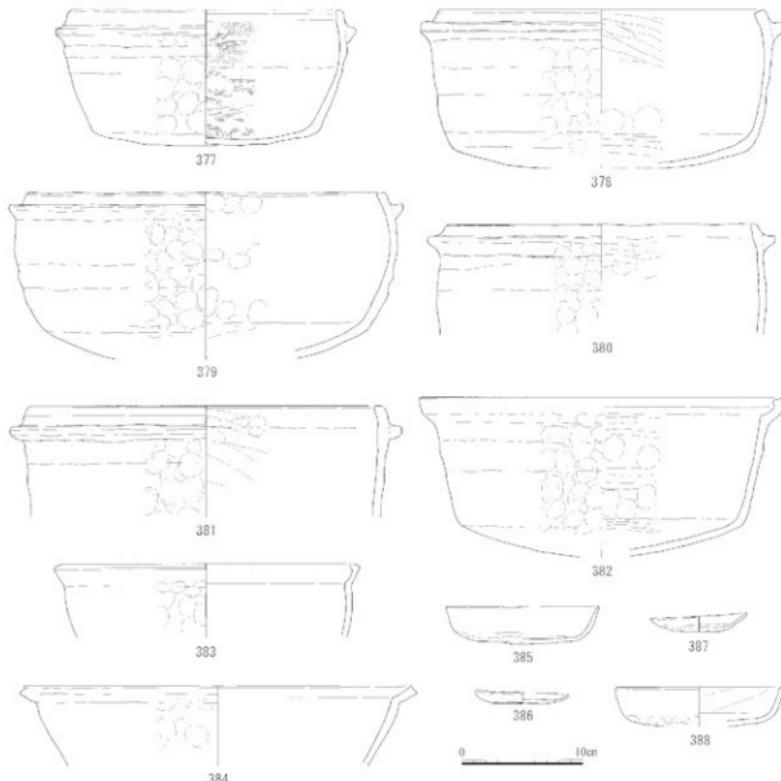
土壌30 (第102・127・128図、図版13・32)

2区の南東隅付近に位置し、東橋脚の北側で検出された楕円形の土壌である。規模は、長径172cm、短径140cm、深さ32cmで、断面は逆台形を呈し、底面は平坦に掘削されている。埋土は上下2層に分層され、主に下層部には人形の形が大量に含まれていた。

出土遺物は瓦質土器が多数を占め、勝間田焼や土師土器はきわめて少ない。377～381は瓦質土器の羽釜で、完形に復元されるものはなく、377で半分程度の残存率であった。382～384は鍋で、口縁部は一旦外反して上方へ立ち上がるもの (382・383) と、直線的に



第127図 土壌30 (1/30)



第128図 土壌30出土遺物 (1/4)

外反するもの（384）の2種が認められる。385～387は瓦質土器の杯および小皿である。388は上師質土器の杯と考えられる。この土壤の時期は、瓦質土器の年代観がとらえにくいが、おおむね13世紀後半～14世紀代と考えられる。

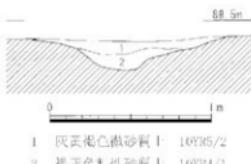
(岡本泰)

4 溝

溝5（第102・129[d]）

調査区北東隅で検出された溝である。確認調査時のトレンチ等によって途切れるが、弧を描くように蛇行して南東へ流下するものと思われる。図示した上流部では壁面が段状をなしている。図示可能な出土遺物はないが、中世の遺構と考えられる。

(岡本泰)



1 灰黃褐色砂質土 10YR5/2

2 褐灰色粘性砂質土 10YR4/1

第129図 溝5 (1/30)

溝6（第102・130図）

調査区の北端部で検出された溝である。図示した北端部では深さ20cm前後を測るが、トレンチで隔てられた南半部では数cmしか残っていない。南北の底面の標高を比較する限り、流下方向は北であったように思われる。図示可能な遺物はないが、中世の遺構と考えられる。

(岡本泰)

溝7（第102・131図）

調査区北部にあり、溝6の西側で検出された溝で、南西に流下するとみられるが、検出範囲はごく短く、約2.4mが残存していたにすぎない。最大幅65cm、深さ11cmと浅く、壁面と底面との境は曖昧である。出土遺物はないが、中世の遺構と考えられる。

(岡本泰)

溝8（第102・132図）

3区の中央付近で、約12mにわたって検出された東西方向の溝で、東へ流下している。さらに西側にある細い溝に逆流していた可能性もある。最大幅は200cm、底面は一部が段状をなし、深さは最大で18cmであった。図示可能な遺物は出土していないが、中世の遺構と考えられる。

(岡本泰)



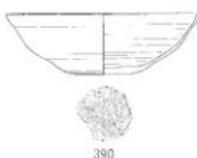
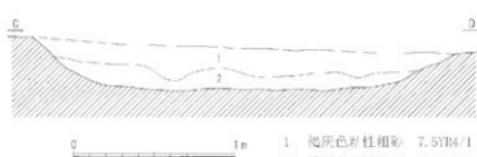
第131図 溝7 (1/30)



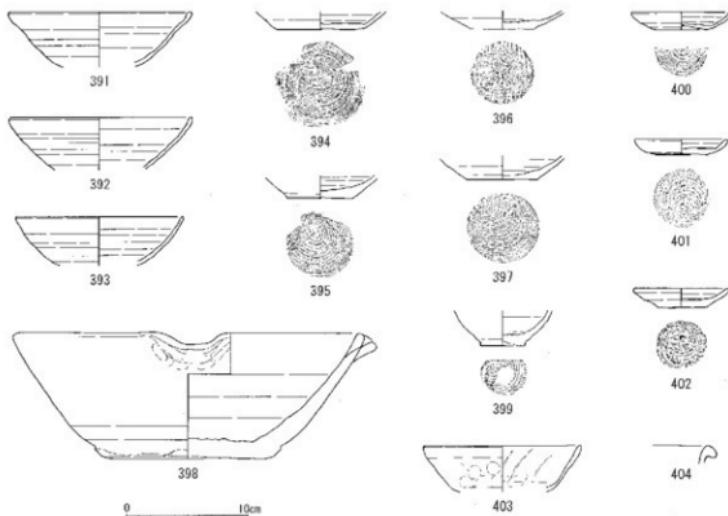
第132図 溝8 (1/30)

溝9（第102・133・134図、図版3・13・32）

調査区中央部の東端にあり、ほぼ南北方向を向いて約25mにわたる大形の溝である。上面幅は245~330cmを測る。深さは最大で28cmと、削平を考慮しても幅の割には浅い。南北両端が途切れるが、壁面が立ち上がっているため、削平によるものではなく、当初の形態に近いと考えられる。断面は逆台形を呈し、底面はやや東に傾斜するもののほぼ平坦に掘削され、埋土は上下2層に分層される。



第133図 溝9 (1/30)・出土物① (1/4)

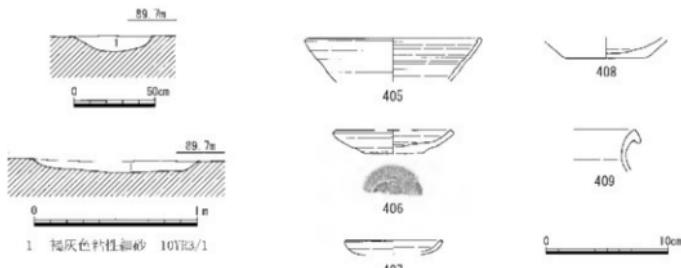


第134図 溝9出土遺物②(1/4)

埋土中からの出土遺物として、勝間田焼389～400、土師質土器401・402、白磁の壺口縁部小片404がみられる。勝間田焼碗のうち389は高台を有し、他の個体に比べて古相を示す。捏鉢398は全体の約1/2程度の残存率であるが、口縁部に唇口が残っている。399は器種がはっきりしないが小壺の類であろうか。瓦質土器の杯403は、内面にいわゆる「コテ当て痕跡」が残る。

この溝は、西側に展開する掘立柱建物群と軸方向が同じで、またこの付近から地形が東側へと徐々に落ち込んでいくという条件を考えると、屋敷地の東限を画す溝と位置づけられよう。(岡本泰)
溝10 (第102・135図、図版32)

掘立柱建物2の南側から、約14.5mにわたってほぼ真南へのびる溝である。幅は44～104cmで一定せず、深さは最大で10cmと浅い。建物群と方向を揃えており、屋敷地の構成要素であった可能性がある。遺物として、勝間田焼405～407、土師質土器408、白磁の壺口縁部409がある。(岡本泰)

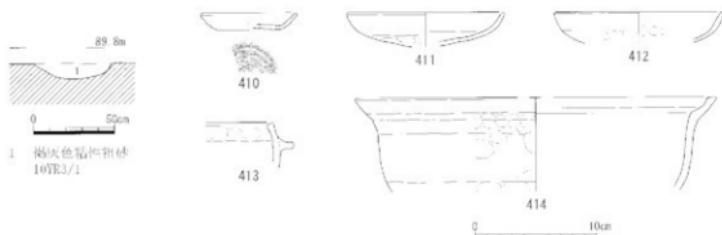


第135図 溝10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝11（第102・136図）

建物2の南西で検出された東西方向の溝である。検出総延長は約4.2m、最大幅53cm、深さ10cmであったが、削平で規模が縮まった可能性もある。出土遺物は比較的多く、腰間田焼小皿410、瓦質土器杯411・412、同じく羽釜413・鍋414などがある。この溝も建物群と方向がほぼ同一であることから、屋敷地を構成する遺構の一つであったかもしれない。

(岡本泰)



第136図 溝11 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝12（第102・137図）

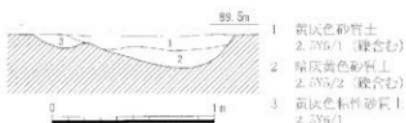
調査区内を西から東へと流れる溝で、東西端部は検出できなかったが、総延長は約48mに及ぶ。最大幅132cm、深さ19cmを測るが単一の溝ではなく2条の溝の重複で、まず南側に浅い溝が掘られ、その後北側へ位置をずらしてより規模の大きい溝を掘削している。中世～近世の土器・陶器片（肥前）などが出土したことから、近世の遺構と考えられる。

(岡本泰)

溝13（第102・138図、図版32）

溝12と溝14に挟まれた位置にある、東西方向の2条の細い溝である。ほぼ平行で規模も似ることから対をなす可能性を考え、1遺構として掲載する。検出総延長は北側が7.8m、南側が15.5mである。溝の幅は30cm前後、深さは最大で10cmである。北側の溝から土鍋415、鍋蓋弁をもつ青磁碗416などが出土している。中世の遺構と考えられる。

(岡本泰)



第137図 溝12 (1/30)

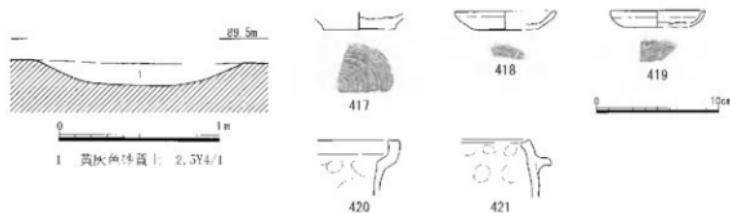


第138図 溝13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝14（第102・139図）

溝9の南端部にとりつく東西方向の溝で、東端部は北側に屈曲する。当初、溝9が直角に曲がり、屋敷地の境をなすものと考えていたが、実際にはやや鋭角で規模が急に縮まることから、別の溝であると判断した。溝9との新旧関係は判然としないが、関連も否定できない。規模は西側ほど縮小し、

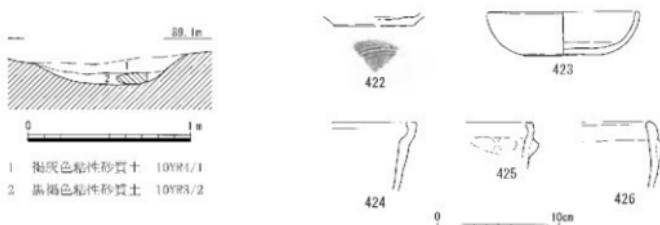
最大幅130cm、深さ12cm。遺物には勝間田焼417～419、瓦質土器420・421などがある。(岡本泰)



第139図 溝14 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝15 (第102・140図)

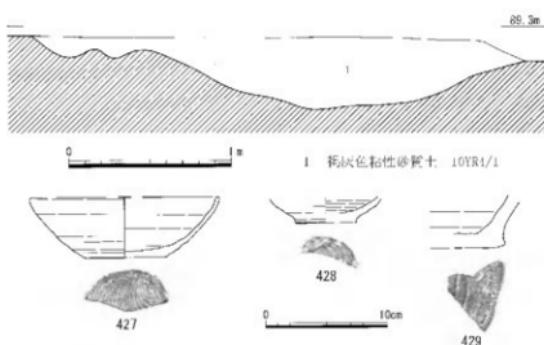
調査区の南部にあり、土壠30のすぐ西側に隣接して検出された。図では土壤状をなしているが、南東側にわずかな窪みが続いていることから、溝の一部が残存したものと考えた。検出された部分の総延長約4m、最大幅130cm、深さ20cmを測る。埋土中から勝間田焼422、土師質土器423、瓦質土器424～426などが出上した。中世の遺構と考えられる。(岡本泰)



第140図 溝15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝16 (第102・141図)

調査区の南西端付近、西橋脚の北側で検出された溝状の遺構であるが、大形土壠の可能性もある。形状は不整形で、南側へと徐々に広がるとともに深さを増し、南端部では45cmを測る。埋土中から勝間田焼427～429、土師質土器などが出上した。溝の時期は中世ないし近世と考えられる。(岡本泰)



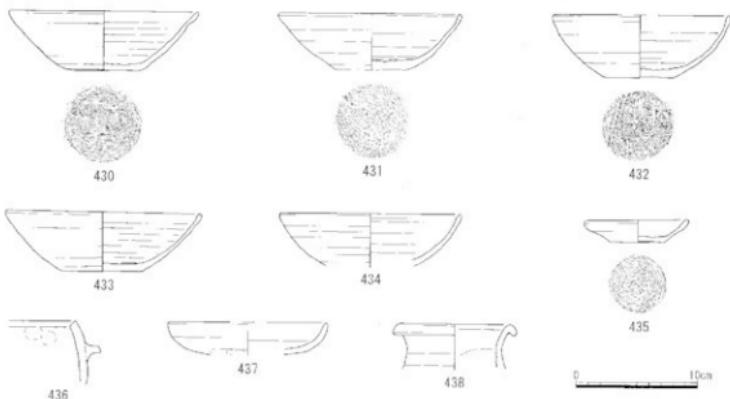
第141図 溝16 (1/30)・出土遺物 (1/4)

5 その他の遺構・遺物

柱穴1 (第102・142図、図版13・33)

1区南東部から2区にかけて無数の柱穴が検出されたが、第102図には出土遺物の点から確実に中世に比定できるもののみを掲載した。その中には、内部に残りの良い土器などの遺物を伴うものも少なくない。ここではその一つ、特に出土遺物が多く、調査当時P35と呼称した柱穴を「柱穴1」として取り上げる。柱穴1は1区南東部の柱穴密集地帯に位置し、最大径40cm、深さ30cmの円形である。他の柱穴と組み合って建物を構成する可能性も高いが、特定はできなかった。遺物は埋土の中ほどから集中して出土しており、勝間田焼碗430~434、同小皿435、瓦質土器436・437、白磁壺438などがある。柱の抜き取り後に廃棄ないし埋納されたものであろう。

(岡本泰)



第142図 柱穴1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

その他の柱穴出土遺物 (第143・144図、図版33)

ここでは柱穴1以外の、個別図を掲載しない柱穴からの出土遺物のうち、主要なものをまとめて紹介する。残存状態のよい個体、柱痕の真下から出土した個体なども多く、単純な混入だけでなく、意図的な埋納や廃棄によるものが、かなり含まれている可能性が高いといえよう。

出土量が最も多いのは勝間田焼である。439~449は碗である。高台をもつものはなく、底部はすべて回転糸切りである。440・441は完形である。体部と底部の境はやや棱線をなすものが多いようである。これらは形態からみて13世紀前半頃のものと思われる。450~462は小皿で、底部はすべて回転糸切りである。図示したもののうち、453・458・462以外は底部が若干高台状を呈する。壺片は多数出土しているが、463の1点のみを示した。外面に顯著な格子叩き目、内面にヨコハケが残る。

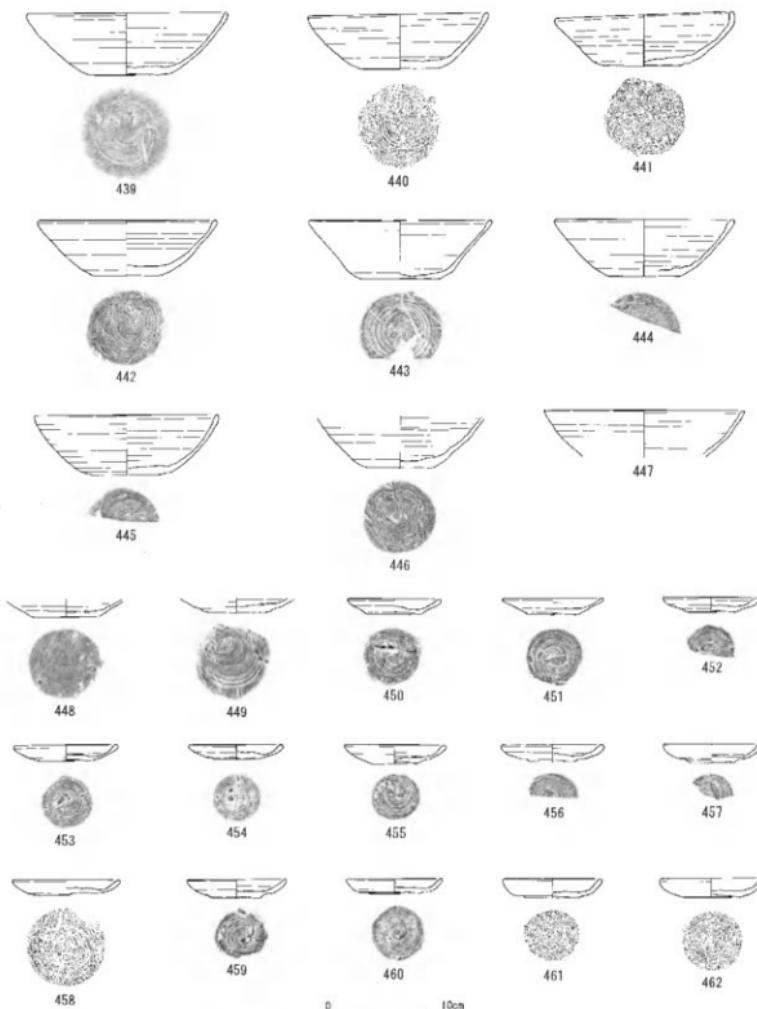
464~472は土師質土器である。464・465は杯、466は碗、467~471は小皿である。472はいわゆる柱状高台と思われ、底部に回転糸切り痕が残る。466の内面にはいわゆる「コテ当て技法」によるとみ

られる痕跡が認められる。小皿は製作技法が腰間田焼のそれと類似している。

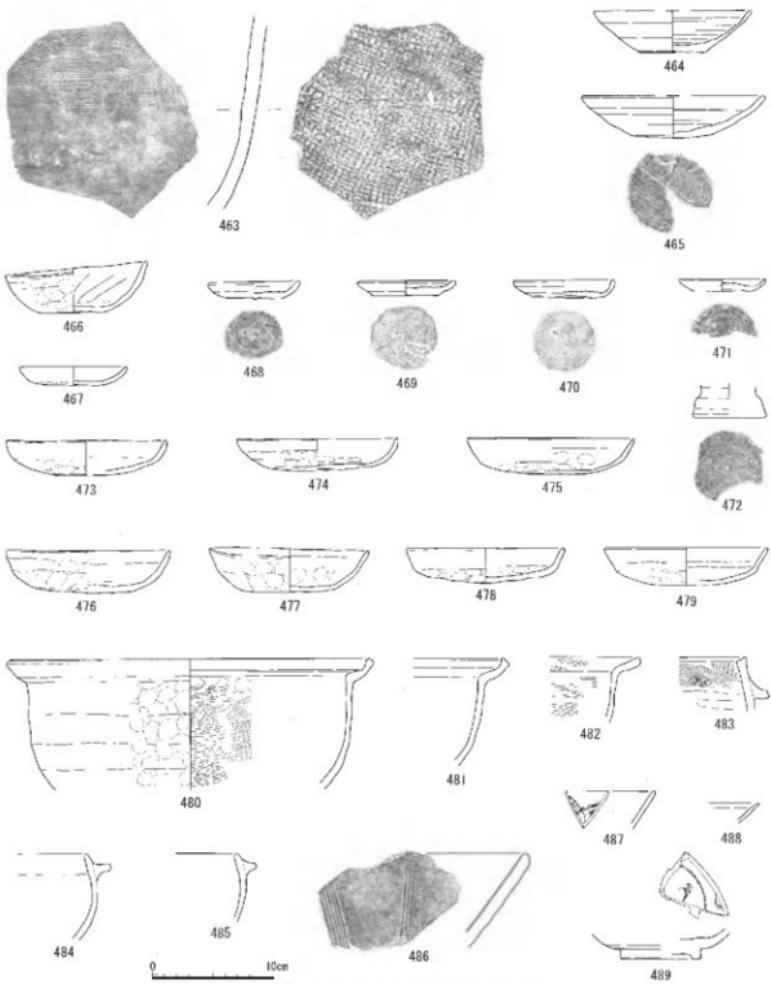
瓦質土器も多く出土している。473～479の杯は手捏ねの成形手法などから京都系のものと考えられ、都との結びつきを示唆する資料といえる。480～485は鍋および羽釜、486は擂鉢である。

輸入陶磁器としては、龍泉窯系青磁の碗487・489、白磁皿488がある。

(岡本泰)



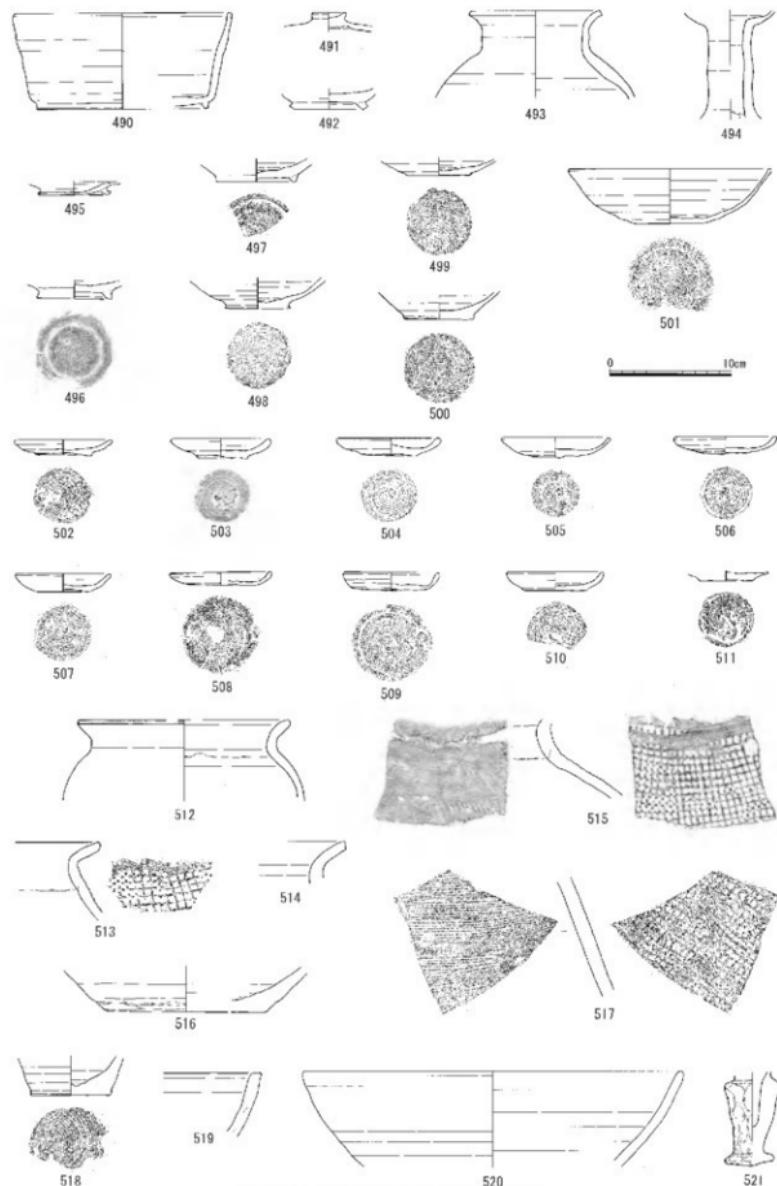
第143図 その他の柱穴出土遺物① (1/4)



第144図 その他の柱穴出土遺物② (1/4)

遺構に伴わない遺物 (第145~148図、図版34)

ここでは、表土内出土の遺物、耕作土直下の包含層から出土した遺物、遺構検出や側溝掘削作業中に遊離した遺物など、いわゆる遺構に伴わない遺物を一括掲載する。量的には遺構出土分よりも多く、図示できたものはその中のごく一部にすぎない。後世の削平等により本米の遺構から流出したものも少なからずあるものとみられる。また、12~13世紀の輸入陶磁器や滑石製石鍋など、比較的高級な品も含まれていることは、大型建物群や大溝などの存在とあわせ、中世における本遺跡の性格を物語る

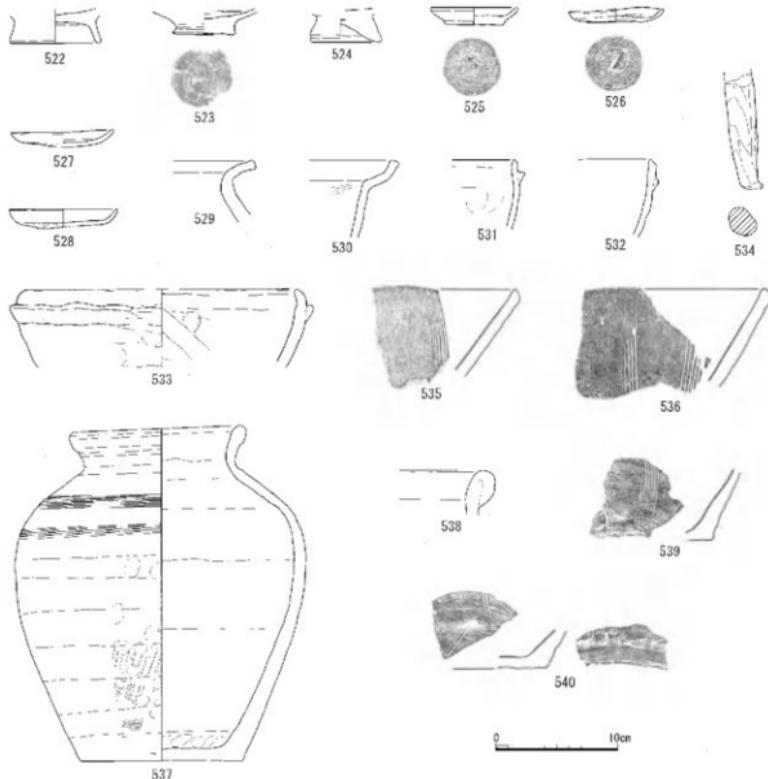


第145図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

ものといえよう。

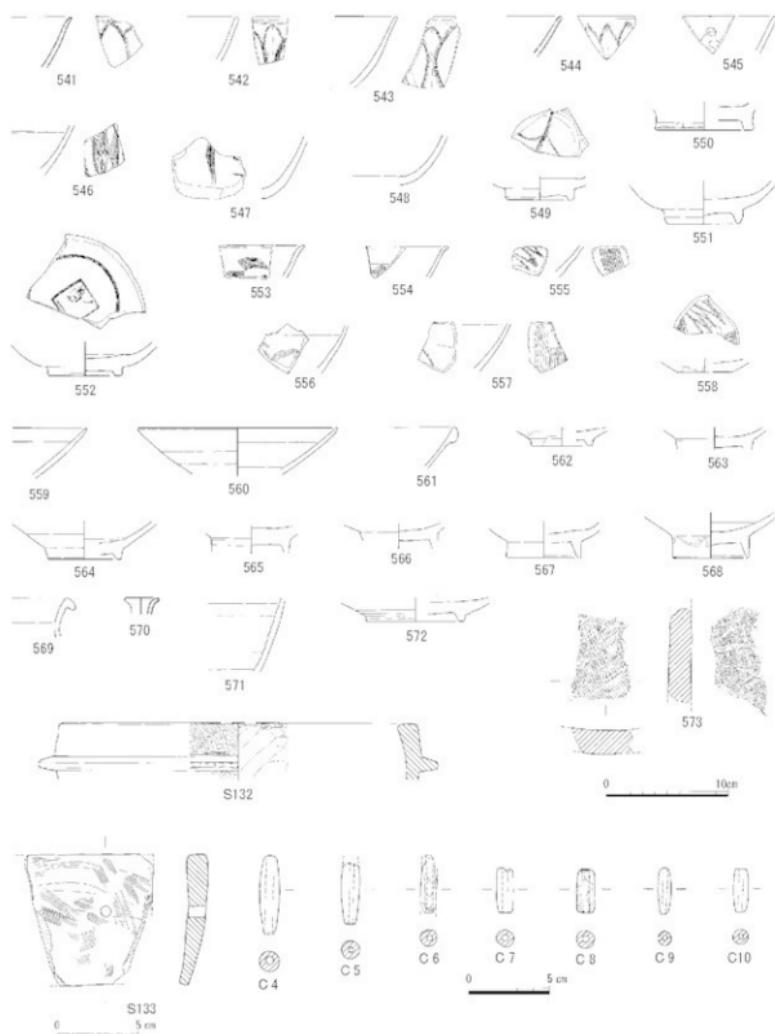
まず、本節の対象とする時期と外れるが、奈良時代頃に遡る遺物が若干ある。いずれも須恵器で、490～492は杯身および杯蓋である。493は壺の口縁～肩部である。494は器種がよく分からぬが、長頭壺の一種であろうか。これらの遺物に対応する時期の遺構は確認されていない。

495～520は勝間田焼である。楕底部495～497は高台を有し、今回出土分の中では数少ない古相を呈するものである。498～500は体部と底部の境が明確な後をなし、高台状を呈するものである。501では体部と底部の境界は曖昧になり、また底部の厚みも体部と比べてさほど変わらず、最も新相に属すると考えられる。502～511は小皿である。底部が高台状を呈する502・503、上げ底になる507、ほぼ平坦な509・510などのバリエーションが認められるが、時期差によるものかどうかは不明である。以上の楕・小皿とも、底部は全て回転糸切りであるが、糸切り痕は楕では底部の端、小皿では中央部に



第146図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

収斂している。512は壺と考えられる。513～517は壺の口縁部～肩部、底部の破片である。外面に格子目叩き、内面にヨコハケが施されている。518は小形の壺の底部と考えられる。519・520は鉢で、内面に描り日をもたないいわゆる「捏鉢」である。521は壺を模したような手捏ねの製品である。



第147図 遺構に伴わない遺物③ (1/4・1/3)

522～526は土師質土器である。522～524は杯と考えられる。522の高台は高く直立し、11世紀頃まで遡るとみられる。523は厚い底部をもち、524は底部外側が窪んで厚い高台を有する。525・526は小皿で、底部は回転系切りである。

527～536は瓦質土器である。527・528は手捏ね成形の小皿で、杯にもみられる京都系のものである。529は甌であろうか。530～534は鍋および羽釜である。531～533は外面に鶴をもつて、いずれもかなり形態化したものである。533は形態からは瓦質土器であるが、須恵質に焼成された特異なものである。534は脚部で、おそらく三脚のつく鍋に伴うものであろう。535・536は擂鉢で、内面には擂り目が施される。

537～540は備前焼である。537は1か所にかたまって出土し、欠落はあるが完形近くに復元された。遺構は確認できていないが骨壺であった可能性もある。538は甌の口縁部である。上記2点は14世紀代のものと思われ、大形建物群の時期よりも新しい。他に擂鉢の底部539・540が出土している。

541～552は龍泉窯系青磁の甌である。541～544は外面に蓮弁文をもち、541を除いて鶴が明確に刻まれる。545・547は内面に花文らしき文様が陰刻されている。546は蓮弁の上に櫻描文を施している。552の見込みには不明瞭であるが、圓錐の中に「金玉滿堂」の刻印がある。これらの時期は主に12世紀末～13世紀と考えられる。

553～558は同安窯系青磁で、出土量は龍泉窯系に比べて少ない。皿558以外は甌の破片と考えられる。いずれも内外面に櫻描文が施されている。

559～571は白磁である。559～568は甌で、559・560のように口縁部が直線的に開くものと、561のように玉縁状を呈するものとがある。569は壺の口縁部の小片である。570は小形の壺であろうか。571は壺の体部と考えられる。

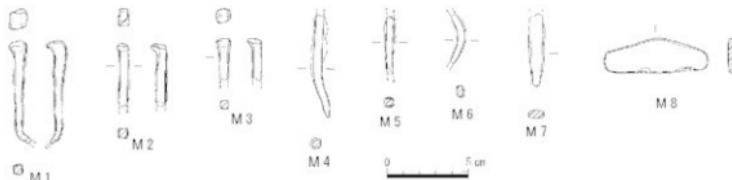
572は瀬戸産の皿で、1点のみの出土である。内外面に浅黄～灰黄色の釉がかかり、図示していないが見込みに重ね焼き痕が認められる。

瓦573は平瓦の破片と思われる。1点のみの出土であり、不道跡に関連するとは考えにくい。

長崎県西彼杵半島産と思われる石鍋とその転用品も出土している。S132は口径の復元が可能な個体であるが、ごく一部に切削面があり、転用を意図していたようである。外面の鶴の突出度は強く、12世紀後半頃の製品とみられる。外面には斜め方向の細かい加工痕が残る。S133は完全な転用品で、表面が滑らかに研磨され1か所に穿孔がなされている。おそらく温石であろう。

土製品としては、管状土鍤C4～C10がある。

鉄器には釘M1～M7、火打金と思われるM8がある。詳細な時期は不明である。 (岡本泰)



第148図 遺構に伴わない遺物④ (1/3)

第6節　まとめ

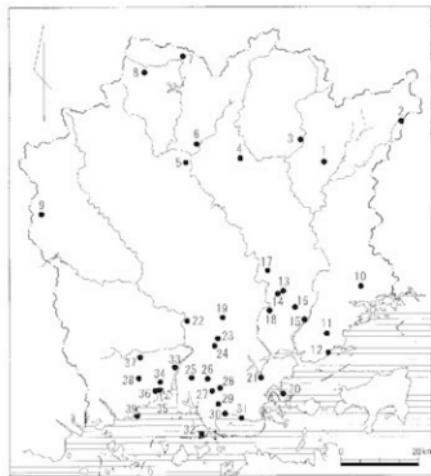
1 縄文時代草創期の遺物について

大河内遺跡で出土した石器を中心とする縄文時代草創期の遺物は、局部磨製石斧（神子柴型石斧）や有茎尖頭器など複数の器種があり、出土点数も多い。第149図および第3表に岡山県内の草創期遺物を示した¹¹⁾が、いずれも表振や包含層からの出土で点数も少ない。そのような状況の中で大河内遺跡の事例は、岡山県内はもとより、これまで縄文時代草創期の様相があまり明確でなかった中国・四国地方においても、その実像に迫ることができる代表的な遺跡の一つとして評価できる。

大河内遺跡における縄文時代草創期の遺構面は草創期以降のある段階で、瀧川に流れ込む付近の小路の氾濫により洗われ、その後上層に砂が堆積している。そのため、砂層中から出土した遺物の一部については、若干ではあるが動いている可能性がある。しかし、多くの石器および剣片が基盤層直上で出土していることや、遺物分布状況から推測するに、大部分はその原位置を保っていると思われ、資料としての一括性は高いと考えられる。

大河内遺跡の縄文時代草創期の石器群の様相についてであるが、有茎尖頭器と神子柴型石斧が共伴していることに加え、石錐が伴う可能性が高いことがまず指摘できる。次に石材についてであるが、ほぼすべての石器がサスカイトから製作されていることが挙げられる。いわゆる柳又形を呈する有茎尖頭器と尖頭器の石質については明瞭な差異が認められることも指摘しておきたい。また、ポイントフレークを含む剣片が多数出土していること、尖頭器未製品が出土していることから、この地で石器製作の最終工程を行っていたことはまず間違いないと考えられる。有茎尖頭器を含む尖頭器には、使用によると思われる衝撃剝離痕が認められるものが出土していることから、製作から使用、そして廃棄までの一連の過程が同一遺跡内で確認できることは重要である。ただし、有茎尖頭器を含む尖頭器の素材剣片を剥離するための石核が出土していないので、素材剣片剥離までの工程については、大河内遺跡では行っていない可能性を指摘しておきたい。なお、出土した有茎尖頭器は、長さ7cm以上のものも出土しているが、多くが長さ3~4cm、幅2cm前後を測る小型のものであることが特徴として挙げられ、大河内遺跡の石器群が時期的に新しく位置づけられる可能性があることを示唆していると考えられる。

（小鶴・石田）



第149図 岡山県内の縄文時代草創期遺物出土地

第3表 岡山県内の縄文時代草創期遺物一覧

番号	遺跡名	所在地	遺物	石材	内数	出土状況	文部
1	大河内遺跡	津田郡大河内町上大河内	局御動石斧 (神子榮望石斧)	括弧岩(カルン ン) フルストン	1	基 層 帶 下 部 (淡 青 色)	本 古
			打撲石斧	安山岩	1		
			打撲石斧	輝緑砂岩	1		
			打撲石斧	サスカイト	1		
			有茎尖頭器	サスカイト	13		
			尖頭器	サスカイト	16		
			尖頭器	流紋岩	1		
			先端器(未製品)	サスカイト	5		
			石盤	サスカイト	1		
			スクレーパー	サスカイト	2		
2	尾崎遺跡	美作市吉原	打撲石斧 (神子榮望石斧)	玄武岩	1	包含層 充填物	岡山県教育委員会「岡山県即興文化発掘調査報告書」213-2008
3	仙舟遺跡	津市草加部	有多尖頭器	サスカイト	1	包含層 充填物	津市市教育委員会「津市仙舟文化財発掘調査報告書」35-1990
4	鶴家遺跡	津市鶴家	局御動石斧 (神子榮望石斧)	流紋岩	1	包含層 充填物	岡山県教育委員会「岡山県即興文化発掘調査報告書」8-1975
5	高屋木遺跡	真庭市高屋	尖頭器	流紋岩	1	包含層 充填物	津市考古委員会「福岡木遺跡・高屋木遺跡」1981
6	長光寺山遺跡	真庭市吉永	尖頭器	輝緑岩	1	去擇	甲子年「藤原時代」[岡山県の考古学] 1987
7	東造跡	真庭市森下大河内	局御動石斧 (神子榮望石斧)	安山岩	1	包含層 充填物	森下教育事務組合「東造跡」2002
8	真庭市森下西吉野村	鳥部郡吉野村 (神子榮望石斧)	綠色骨質	灰搾	1	安川典史「岡山県山口村ト付野川吉野村の鳥部郡吉野村〔古代古墳〕」考古学 187	
9	桃印遺跡	真庭市西町桃印	尖頭器	サスカイト	1	包含層 充填物	岡山県教育委員会「岡山県即興文化発掘調査報告書」22-1978
10	福前寺小屋谷池	有多尖頭器	玉髓	1	去擇	甲子年「藤原時代」[岡山県の考古学] 1987	
11	庄古山遺跡	庄古山内市庄古山西頂点	打撲石斧	サスカイト	1	表露	鶴見町教育委員会「西谷遺跡」1985
12	長野寺跡	(神子)内山牛糞堆集落	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	牛糞堆「牛糞堆」[牛糞堆] 1997
13	用木山遺跡	木津川市河本	有多尖頭器	サスカイト	1	包含層 充填物	山陽町教育委員会「用木山遺跡」1977
14	鷲野原分寺跡	木津川市山田	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	宇多津町教育委員会「鷲野原分寺跡」2005
15	西湖	木津川市白枝月	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	木村幹夫「原始・古代・古墳」[土道向史] 1973
16	小原山	庄古山頂上	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	木村幹夫・原田義・古代・古墳」[土道向史] 1973
17	武成寺谷遺跡	庄古山市津浦町新庄	有多尖頭器	サスカイト	1	包含層 充填物	庄古山教育委員会「武成寺谷遺跡」1998
18	賓朋庵寺	岡山市官田	有多尖頭器	サスカイト	1	包含層 充填物	岡山県教育委員会「岡山県即興文化発掘調査報告書」第9号 1987
19	深音寺	岡山市高松	有多尖頭器	サスカイト	1	表露	箕輪久史「先秦時代」[岡山県の考古学] 1987
20	山崎	玉野市山崎	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	吉川弘文「先秦時代」[岡山県の考古学] 1987
21		玉野市八瀬御神山	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	移野文一「土野市の古吉良焼器」[古代古墳] 第9号 1987
22	井城野	祇礼垂井野	有多尖頭器	黒曜石	1	去擇	移野文一「土野市の古吉良焼器」[古代古墳] 第9号 1987
23	矢掛伊豫新宮跡	波波瀬御所矢掛	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	移野文一「土野市・矢掛伊豫新宮跡」[古吉良谷遺跡] 1990
24	二子御二廣字新宮跡	令和市二子	有多尖頭器	サスカイト	1	包含層 充填物	岡山県教育委員会「岡山県即興文化発掘調査報告書」71-1988
25		鳥取市御坂御所	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	鳥取市「新修鳥取市史」考古学 1996
26	一尺谷上池遺跡	倉敷市拉江	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	萩原政次郎・藤本昌凸「岡山県重要文化財団体」第9号 1987
27	前田遺跡	意都志津江	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	萩原政次郎・藤本昌凸「岡山県重要文化財団体」第9号 1987
28	諸説寺跡	倉敷市赤	有多尖頭器	サスカイト	1	採集	三川口・山田川・萬山川文庫144「日本文教出版」1990
29	山原塚山遺跡	倉敷市見上町	有多尖頭器	サスカイト	1	配入	岡山県教育委員会「岡山県即興文化発掘調査報告書」71-1988
30	向山遺跡	倉敷市荒島町の辻	有多尖頭器	サスカイト	1	表露	倉敷市教育局「古事記の古代」1972・倉敷市「新修倉敷市史」考古学 1996
31	王子が岳南麓遺跡	倉敷市荒島町等	有多尖頭器 局御動石斧 (神子榮望石斧)	サスカイト 墨灰岩	2 1	包含層 充填物	兵庫理義文化財センター「王子が岳南麓遺跡」1995
32	茶秆屋遺跡	倉敷市六門鳥居茶秆屋	尖頭器	サスカイト	1	去擇	兵庫考古館「翁翁の古代」1972・兵庫県新修倉敷市史「考古学」考古学 1996
33	福島遺跡	倉敷市船橋町福島	尖頭器	砂岩	1	表露	岡山市「新修倉敷市史」考古学 1996・東洋史 「考古学」[岡山市立博物館]可憐田耕氏の火耕研磨解説「新修倉敷市史」考古学 1994
34	西元光	倉敷市玉島西町	尖頭器	サスカイト	1	去擇	岡山市「新修倉敷市史」考古学 1996・東洋史 「考古学」[岡山市立博物館]第9号 1994
35	中津貝塚	白斎市玉島町白斎中津	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	倉敷市「新修倉敷市史」考古学 1996・東洋史 「考古学」[岡山市立博物館]第16号 1993
36		小郡御失御山田山	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	岡山市「新修倉敷市史」考古学 1996・東洋史 「考古学」[岡山市立博物館]第9号 1994
37	扣山遺跡	淡路市楊樹町扣山	有多尖頭器	サスカイト	1	包含層 充填物	岡山県教育委員会「岡山県即興文化発掘調査報告書」42-1981
38	吉良遺跡	吉良市吉良町吉良	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	吉良市「新修吉良市史」考古学 1996
39	吉良遺跡	吉良市吉良町吉良	有多尖頭器	チャート	1	去擇	吉良市「新修吉良市史」考古学 1996
40		小郡御失御山田山	有多尖頭器	サスカイト	1	去擇	岡山市「新修倉敷市史」考古学 1996・東洋史 「考古学」[岡山市立博物館]第9号 1994

2 弥生時代の遺構と遺物について

はじめに

大河内遺跡の調査では弥生時代前期末・中期初頭～中期後葉を中心に後期初頭に至る集落を検出した。これまで勝央町内では丘陵上の弥生時代集落の調査例はあったが、大河内遺跡のような平野部集落の調査は実施されていない。美作地域全体を見渡しても平野部での弥生時代集落の調査例は少なく⁽³⁾、その内容が注目される。ここではまず出土土器について検討を加え、次に時期ごとに勝間田盆地東部に所在する周辺集落との比較を行う(第4表)。

出土土器について

今回の調査では前期末～中期初頭に比定される土壙墓1をはじめとし、県北部では例の少ない時期の一括遺物に恵まれた。また、中期後葉では多數の土器が出土した堅穴住居IIをはじめとし、堅穴住居、土壙などからの一括遺物の出土を見た。ここでは大河内遺跡出土土器を時期別(第150図)に概観し、その内容について記述する。

前期末・中期初頭

土壙墓1、土壙5・7の土器が該当する。壺A1類、B類、および甕A1、2類からなり⁽³⁾、壺A1類の頸部は直立、ないしはゆるい「ハ」の字形、あるいは直立し、屈曲部にヘラ描き沈線を施している。B類は強く外反する口縁の裏側に藤手状、および平行する5条の突帯を貼り付けている⁽⁴⁾。甕A1、2類は口縁端部に断面三角形の粘土紐を貼り付けた、いわゆる「瀬戸内型甕」⁽⁵⁾であり、外面に多角化したヘラ描き沈線文、あるいは櫛描き沈線文が観察される⁽⁶⁾。他にも口縁端部を折り曲げて成形する122や130もあるが数量的には少ない。こうした特徴は県南部のそれと共に、正岡睦夫氏のI-3～II-1様式⁽⁷⁾、平井典子氏のII-1～II-2期⁽⁸⁾に併行する。

中期中葉

甕A3類、高杯A1類、鉢A1類からなるが、この時期の遺構は少なく、わずかに土壙3および包含層中より出土を見た⁽⁹⁾のみである。甕A3類は口縁端部をわずかに拡張しており、胴部が大きく張る。高杯A1類は円盤充填技法による深い楕円形の杯部をもち、外面全体にヘラ磨きが観察できる。鉢

	壺	甕	高杯	鉢	器台・その他
・前期 中期 期末 初頭	A 1類 109 110 B類 106	A 1類 114 A 2類 115			
中期 中葉	0 40cm	A 3類 170	A 1類 173 A 1類 174		水差形土器 76 51 27 回転台形土器 142
中期 後葉	A 2類 51 A 3類 53 C類 55	A 4類 64 A 2類 71 A 3類 73 B類 61 B類 74 B類 75 B類 137 B類 178			器台

第150図 弥生土器の編年案 (1/18)

A 1類は甕に似た外形を呈し、胴部の張りは弱く、内面底部付近では多数の指頭圧痕が観察できる。こうした土器群の特徴は、河合忍氏の言う津山盆地のⅢ-2期⁽¹⁰⁾と共通すると考えられ、県南部では正岡睦夫氏のⅢ-2様式、平井典子氏のⅣ-1期に併行すると見られる。

中期後葉

最も器種の種類が多く、また土器群全体を通じて凹線文、櫛描き文、円形浮文を施すなど加飾性が高い。堅穴住居11を指標とし、他にも堅穴住居14、15、土壙墓15、土壙1、2などでこの時期の土器の一括が見られる。壺は胴部が大きく張り、腹部が「ハ」の字形、あるいは直立し、口縁部がラッパ状に開く長頸壺A類が主流である。A類は口縁を上下に拡張するA 2類と、下方向へ大きく拡張するA 3類とに分類される。胴部最大径は胴部中位よりも上にあり、肩部には櫛描き文が施される個体と、52のように刺突文が施される個体がある。壺にはこれ以外にも90のような直口壺と甕に似たC類がある。甕には口径20cm程度の大形のA 4類と、15cm以下で小形のB類とが認められた。A 4類の61には胴部外面にヨコ方向のタキ痕跡が見られる。高杯には口縁が直立し、外面に凹線文を施したA 2類、A 2類と同様の杯部をもちらながら脚部の短いA 3類、水平口縁を持つB類とが見られる。鉢には甕に似た形状を呈するA 2類があり、ほかにも特殊な形態を呈するC類がある。これ以外にも水差し形土器や回転台形土器、器台が加わるようである。こうした土器群の特徴は河合忍氏の言う津山盆地のⅣ-3期に共通するが、高杯A 2類やA 3類に見るよう、岡山県南部の土器群と共通する特徴を持った土器群も含まれている点は見逃せず、正岡睦夫氏のⅣ-2様式、平井典子氏のⅣ-2期に併行すると見られる。

周辺集落との比較

前期末・中期初頭は大河内遺跡で十塙墓、および十塙が数基検出されたのみである。この時期県北域ではまだ明らかな集落跡が知られておらず、その存在の手がかりをつかんだか。**中期中葉**は大河内遺跡ではわずかに十塙があるのみである。**中期後葉**はこの大河内遺跡集落の最盛期であり、四司尾遺跡や宮ノ上遺跡⁽¹¹⁾でも堅穴住居の増加が見られ、瀧川を挟んで南北に集落群をなすようである。しかしながら、続く後期前葉には多くの遺跡で集落が縮小しており、**後期中葉・後葉**には北の丘陵上に位置する小中遺跡へ全面的に集住を遂げるようである⁽¹²⁾。

今回検出された中期後葉の大河内遺跡集落は、堅穴住居ほかの遺構数から考えて当地域の拠点的な集落の一つと見られる。しかし、

第4表 勝央町内各遺跡における弥生時代の遺構数

	前羽末 ・中羽切頭	中羽 中葉	中葉 後葉	後葉 前葉	後葉中 ・後葉
大河内遺跡	3	1	23(16)	1	
小中遺跡		(11)	(2)	1	50(55)
田井ちご池遺跡				(1)	(3)
田井たれをず遺跡			(5)		
岡東高塚遺跡					(2)
四司尾遺跡		(5)	(3)		
坂田遺跡			1		
坂田墳墓群		1			
宮ノ上遺跡		(1)	11(7)	7(6)	2(1)
計	3	19(17)	45(33)	10(7)	66(61)

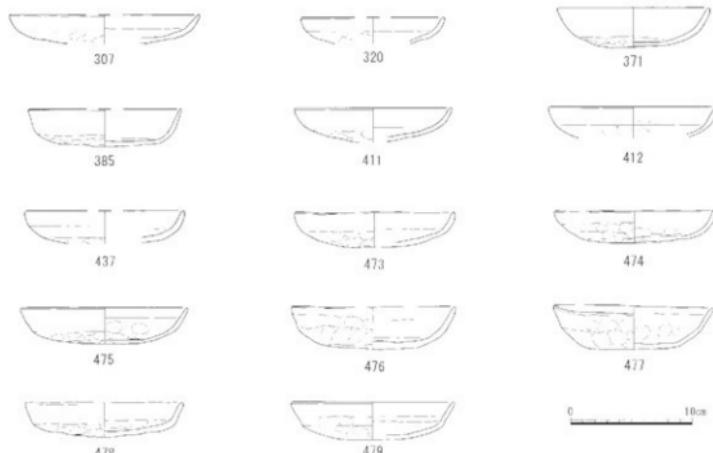
※ () 内は堅穴住居・段状造構・方形堅穴造構の数

続く後期前葉には集落は縮小しており、拠点集落として宮まれた期間は短期間であった。今回の調査成果から集落縮小の要因を言及するのは難しい⁽¹³⁾が、この時期の住居数の増加、隅丸方形堅穴住居の採用、サスカイト製石器の利用や、土器の製作技術から看取できる社会関係の複雑化、複合化にその要因を求めるにとどまる。(和田)

3 中世の遺構と遺物について

大河内遺跡では、主として1区から2区にかけて、掘立柱建物群とそれに平行する溝、多数の柱穴や土壠などが検出された。一方で、3区の遺構密度は極めて希薄であり好対照をなしている。遺構の年代については、出土した勝間田焼や青磁などの特徴からみて、主要遺構の多くは12世紀末から13世紀初頭、つまり平安時代末から鎌倉時代初頭に位置づけることができる。他の出土遺物も、時期の前後するものもあるが、多くはおおむねその範囲におさまっている。掘立柱建物は、多数の柱穴の中に含まれている可能性も高いが、認定したのは3棟の縦柱建物である。これらの建物は、地形に合わせるのではなく、主軸を整然と東西ないし南北に向けて配置されている。明確な切り合い関係が認められず、建物の変遷については明らかにできない。しかし、南北に並ぶ建物1と建物3は距離がわずか1m程度と極めて近いため同時存在は考えにくく、少なくとも2時期にわたることは確実であろう。うち建物1は床面積106.50m²を測る大規模なものである。

いま一つ注目されるのが、建物群の南東側に検出された溝9の存在である。この溝は主軸が建物群と一致することや出土遺物からみて、一連のものであることは疑いない。深さは最大でも28cmで、削平を考慮しても元々さほどの深さは想定しがたい。また、南北両端が途切れているが、これも削平のためではなく本来の形状に近いようである。したがって、この溝はもともと建物群を完全に取り囲まず、東側の境界を区画する程度であったと考えられる。以上のような、大規模な建物や区画溝の存在という点からみて、これらの遺構群は一般集落に伴うものとは考えにくい。出土遺物は、地元産の勝間田焼をはじめ、土師質土器・瓦質土器・中國製陶磁器など多岐にわたっている。勝間田焼は、碗については口径が15cm前後にあり、まだ縮小傾向がみられないことや、体部と底部の境界は不明瞭かせいぜい後をなす程度のものが多いといった特徴から、平岡正宏氏による編年ではII-2期¹⁴⁾、國正



第151図 京都系の杯 (1/4)

雄氏の編年ではⅡ-4期⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾に相当するとみられる。この時期に該当する窯跡としては、勝央町内に所在する鍋倉窯、山田窯などが挙げられる。瓦質土器として掲載した土器のうち307・320・371・385・411・412・437・473-479の杯(第151図)は、在地産ではあるが京都産の杯の模倣品であり、12~13世紀に位置づけられるものである⁽¹⁷⁾。他にも破片が散発的に出土している。京都系の杯の出土例は地方においては少なく、岡山県内でも出土例は限られている。その中で、大河内遺跡でのまとまった出土は異例であり、京都産ではないにせよ、居住者と都との繋がりを想定させる資料といえよう。

また、中国産の白磁・青磁も多数出土し、長崎県の西彼杵半島で製作された石鍋の破片も注目される。以上のように出土遺物の点からも、一般集落とは異なる遺跡の性格が示唆されている。

以上を踏まえ、この時期の勝間田平野において大河内遺跡が占める位置について考えてみたい。周辺には同時期の造構・遺物を検出した遺跡は複数あるが、その中から代表的な事例を参照してみる。

大河内遺跡から約300m西方に、勝央町教委により調査がなされた藤ヶ瀬遺跡がある。調査面積400m²の中に、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物5棟をはじめ、土壙・溝など多数の遺構が検出された。掘立柱建物は、平安末の2時期および鎌倉初頭の、併せて3期に区分されており、總柱・側柱の両方が認められ雨落ち溝を作りうるものもみられる。これらの建物群は、その規模や条里地割に沿った整然とした配置状況から、一般集落とは性格が異なる有力者の屋敷跡と考えられている⁽¹⁸⁾。こうした遺構の状況は大河内遺跡とも共通するものといえる。

さて、次に当時の農地開発の動向について、やや距離が離れるが、大河内遺跡のある勝間田平野とは岡山山塊を挟んで北側に位置する美野条里遺跡を取りあげる。美野条里遺跡は、方形区画の地割が残り、古代の条里地割を現在にまで伝える遺跡と考えられていた。ところが、調査の結果、出土遺物の点では現存する地割の施行は古代にまでは遡らず、12世紀後半以降であることが判明している⁽¹⁹⁾。もちろん農地自体は古くから存在していたはずであるが、平安時代末以降、勝間田平野周辺において地割の施行を含む農地開発が活発化した様子がうかがえるのである。

大河内遺跡で検出された中世集落も、こうした農地開発の動向と密接に連動していたと考えられる。大河内遺跡の所在する勝間田地区は、平安期には勝田郷に属し、平安末~戦国期には「勝田庄」という莊園の領域であったと考えられる。「勝田庄」の成立時期は不明であるが、「東寺百合文書京」によれば紀州の那智山領で、貞応2年(1223)に預所職を熊野三山検校であった東寺前大僧正長蔵から、法印大僧都道敏に譲るとの記事がみえる⁽²⁰⁾。時局的にも、大河内遺跡や藤ヶ瀬遺跡などと近く、関連も大いに考えられるところである。以上のことから、大河内遺跡は勝田庄の一角にあって、都との密接な繋がりを維持しつつ、勝間田平野の開発を推進した有力者の屋敷跡と考えられる。大河内遺跡と藤ヶ瀬遺跡との関係など、解明すべき課題は多いとはいえ、当地域での中世遺跡の動向の一端が明らかになったという点で、大きな成果があったといえよう。

(岡本泰)

註

- (1) 分布図・一覧表の作成にあたっては、倉敷市文化財センター藤原好二氏よりデータの提供を受けた。記して感謝申し上げる。なお、掲載にあたって一部改変している箇所があり、その内容についての責任は当方にあることをお断りしておく。
- (2) 津市京免・竹ノ下遺跡、鏡野町久田原遺跡、久田瀬之内遺跡、夏栗遺跡で調査例がある。
- (3) ほかにも126の瓶としての用途が考えられる甕が加わる可能性がある。

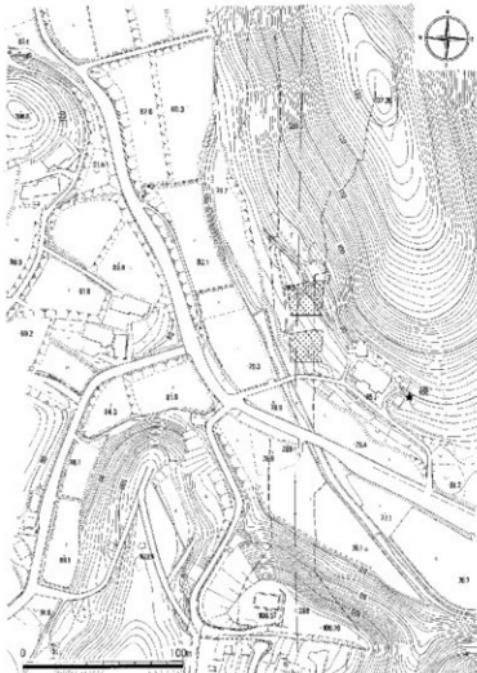
- (4) これらの特徴は秋山浩三氏の言う口縁内面に貼付突帯をもつ壺のうちB類に該当し、瀬戸内市門田貝塚、岡山市百間川原尾島遺跡、百間川米田遺跡等、県南部の沖積地の遺跡でも出土例が見られる。
- 秋山浩三「弥生前期土器」「吉備の考古学的研究（I）」山陽新聞社 1992
- (5) 註4文献
- (6) 従来は中期開始のメルクマールを豊口縁部への彌撒き沈線文の採用とするものと、前期末のヘラ彌撒き沈線文の多条化とする見解とがあったが、今回の調査では両者の一括遺物としての分離是不可能であった。
- (7) 正岡勝夫「備前地城」「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編 木耳社 1992
- (8) 平井典子「備前・備中」「YAY! 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』『弥生土器を語る会 1996
- (9) 包含層中より出土している壺²⁰⁹は中期中葉でも古相を示す。
- (10) 河合忍「第5節 弥生土器について」「岡山県埋蔵文化財調査報告」192 岡山県教育委員会 2005
- (11) 柴田英樹「第6章 第1節まとめ」「岡山県埋蔵文化財調査報告」197 岡山県教育委員会 2005
- (12) このような集落の移動は県南部の百間川道跡群でも認められるほか、近年では鏡野町久田原遺跡、久田堀之内遺跡、夏栗遺跡、久世町種ヶ鼻遺跡など県北部の遺跡群でも見られることが報告されている。
- (13) 出土したサスカイト製石礫は少なく、全長3cm以下の小形のものが大勢を占め松本武彦氏の言う「鐵圓用石礫」は見られないこと、平野部に立地する集落であるのにかかわらず、環濠など防衛的な設備を持たないことなどから、この集落が武力抗争に巻き込まれたとは考えがたい。また、鉄器の出土を見なったことも注目すべき点である。
- 松本武彦「第1章 弥生時代の武器とその変遷」「日本列島の戦争と初期国家形成」東京大学出版会 2007
- (14) 平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」「中近世土器の基礎研究」Ⅳ 日本中世土器研究会 1993
- (15) 国 正雄「勝間田焼の生産と流通」「中世須恵器の生産と流通」山陰中世土器検討会 2003
- (16) 國 正雄「勝間田古窯跡群の動態」「環瀬戸内海の考古学」下巻 古代古墳研究会 2002
- (17) 橋本久和氏の御教示による。
- (18) 勝央町教育委員会「美作・勝央発掘ものがたり」報告会発表資料～町教委分～」 2006
- (19) 松本和男「美野条里遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」62 岡山県教育委員会 1986
- (20) 美作町史編纂委員会「美作町史」資料編1 美作市 2006 に所収。

第4章 稲穂遺跡

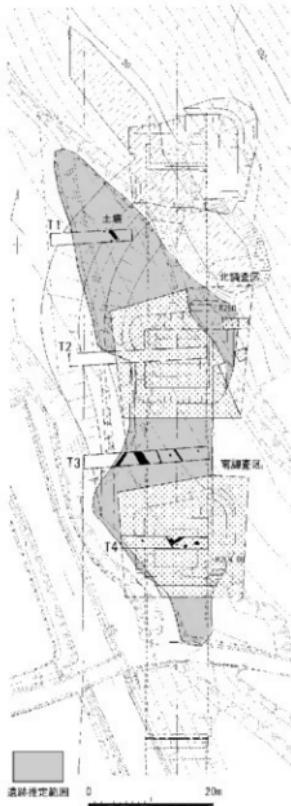
第1節 調査区の概要

稻穂遺跡は、美咲町長内上付近から東へ流れる長内川が形成した、幅100~200m、長さ約3.5kmに及ぶ狭長な盆地の東端近くに位置し、北から南へ延び出した丘陵の南西から南にかけての裾部に立地している。稻穂遺跡の東は南北から丘陵が延びて谷地形になり、ここを東へ抜けると氾濫原に入り、長内川は吉野川に合流する。稻穂遺跡から合流点までは約700mである。

第152図のように、美作岡山道路が稻穂遺跡の所在する丘陵の西側をカットする形で設計され、道路付近では橋脚が立

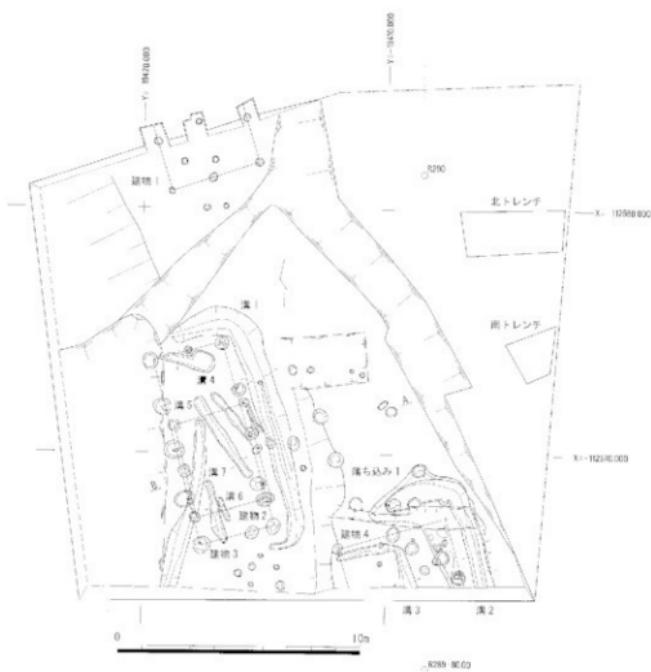


第152図 稲穂遺跡周辺地形図および発掘調査地区（網掛け部分）位置図（1/3,000）

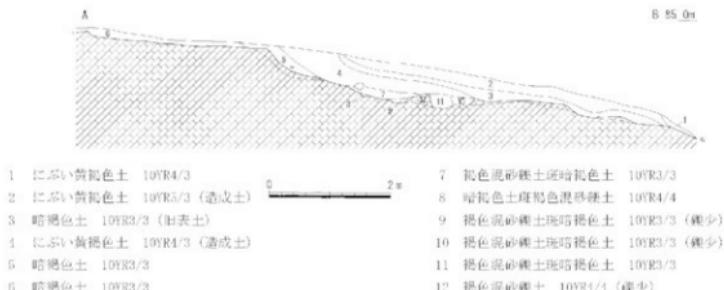


第153図 確認調査トレンチおよび本調査発掘区（網掛け部分）位置図（1/800）

ち並ぶこととなつた。第153図に示すように、確認調査の結果、2か所の橋脚部分の調査が必要となつたため、これを北調査区・南調査区と呼称する。なお、後述する観が第152図の星印の地点から表面採集されているため、遺跡は丘陵の南斜面まで広がっているものと推測される。



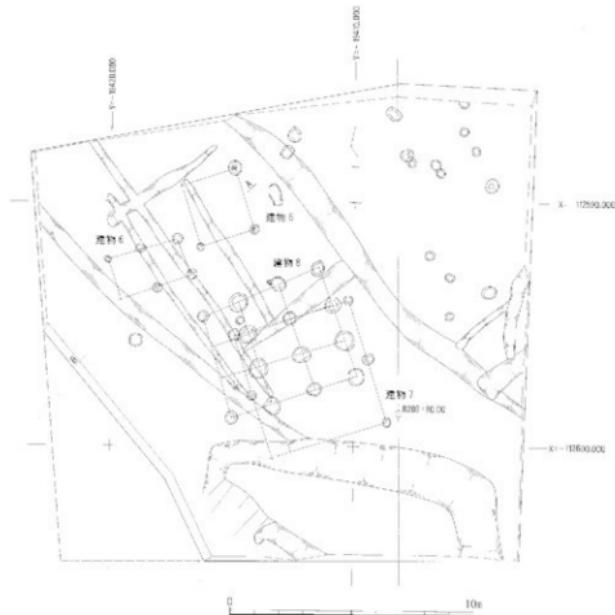
第154図 北調査区遺構配置図 (1/200)



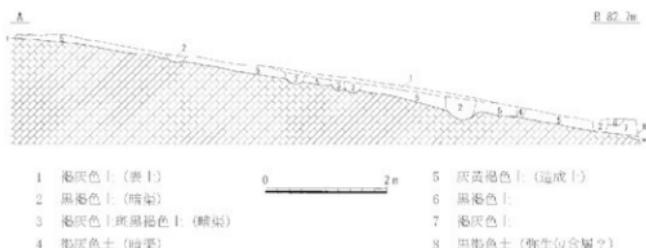
第155図 北調査区中央付近土層断面図 (1/80)

北調査区では、現道路から東の斜面部分にはトレンチを2本設定して調査し、遺構は検出されなかつた。道路から西側部分では、緩斜面を掘削して造成した平坦面が残存し、数多くの柱穴や溝が検出された。小谷の北側では、平坦面上から掘立柱建物が1棟検出され、ほかに柱穴も数個認められた。小谷の南側には階段状に2段の平坦面がみつかり、それぞれに掘立柱建物やその雨落ち溝を含む溝が検出された。掘立柱建物3棟、溝7条を数える。第155図の第4層以上は近世以後の造成土である。

南調査区は畑造成の掘削が深かったためか、平坦面は検出されず、造成土の堆積しか認められなかつた（第157図）。調査区の北東から中央付近にかけて柱穴が散在し、掘立柱建物が4棟確認できた。

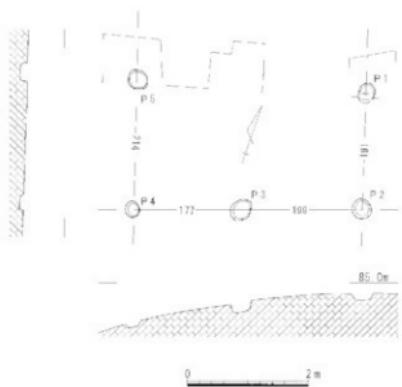


第156図 南調査区遺構配置図 (1/200)



第157図 南調査区北西部土層断面図 (1/80)

第2節 古代の遺構・遺物



第158図 挖立柱建物1 (1/80)

1 挖立柱建物1

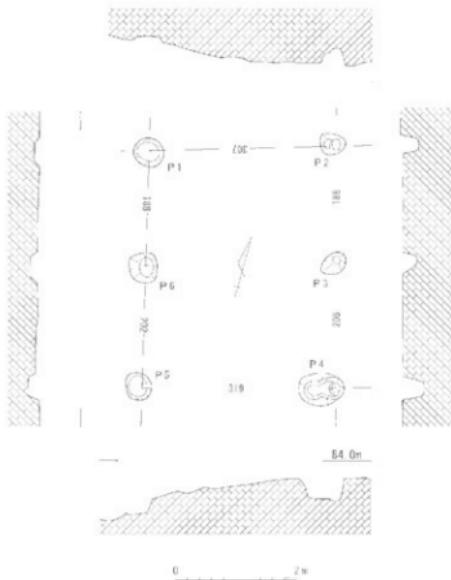
(第154・158図、図版35)

北調査区の北端で一部を検出した。梁行が2間の南北棟建物と推定しているが、桁行は1間分しか検出していない。梁行全長が376cm、検出部分の床面積は7.6m²を測る。棟の方向はN-17°15'Wである。柱穴の平面形は円形で、長径が25~40cm、深さは8~20cmを測る。柱穴の埋土は淡灰褐色砂疊混じり粘質土で、柱痕は検出されず、遺物もほとんどなく小片のみであった。梁行の両端の柱穴、P2とP4の底面の高度差が45cmもあるが、これは平坦面造成前の傾斜地形の名残とみられる。柱の安定のためには地山面からある一定の深さが必要なため、このような現象が生じたものと考える。

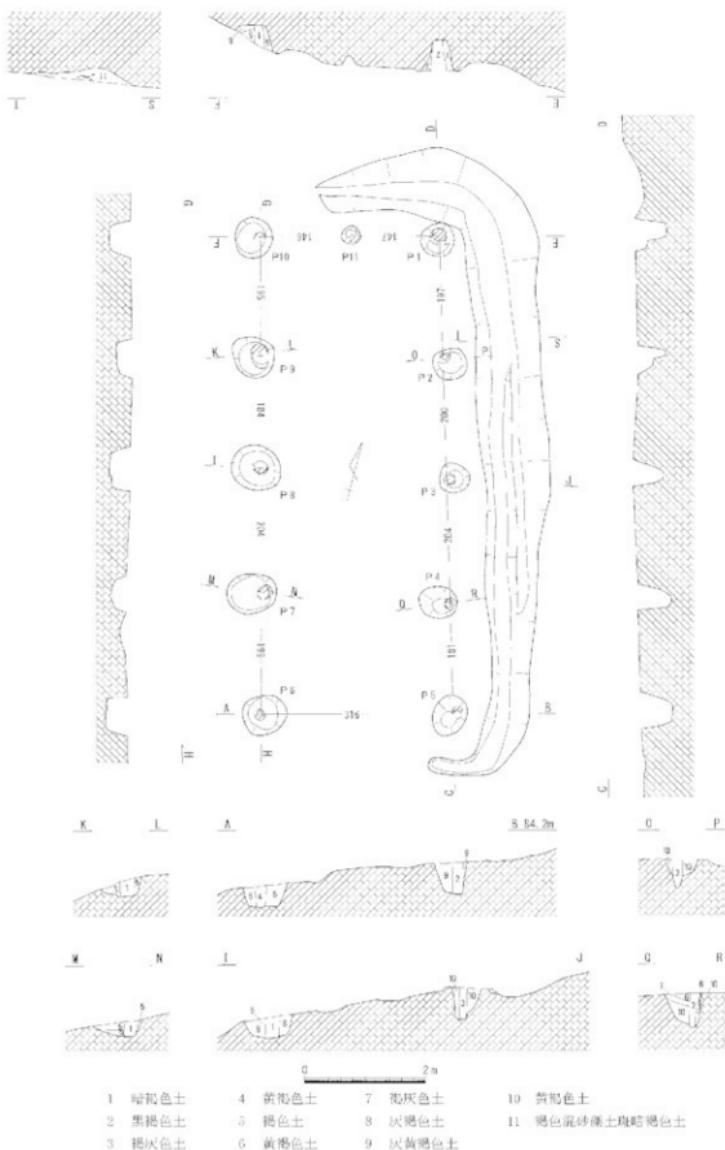
掘立柱建物2

(第154・159図、図版35)

北調査区の南西部、段階状平坦面の下段側で検出された。掘立柱建物3と完全に重複し、どちらかが建て替えられたものである。掘立柱建物2の柱穴は掘立柱建物3の側柱の間に位置している。掘立柱建物2は桁行2間、梁行1間の規模で、桁行全長396cm、梁行全長319cm、床面積は12.3m²を測る。棟の方向はN-14°45'Wである。柱穴は円形で、長径が42~76cm、深さは10~35cmを測り、



第159図 挖立柱建物2 (1/80)





第161図 挖立柱建物3出土遺物(1/4)

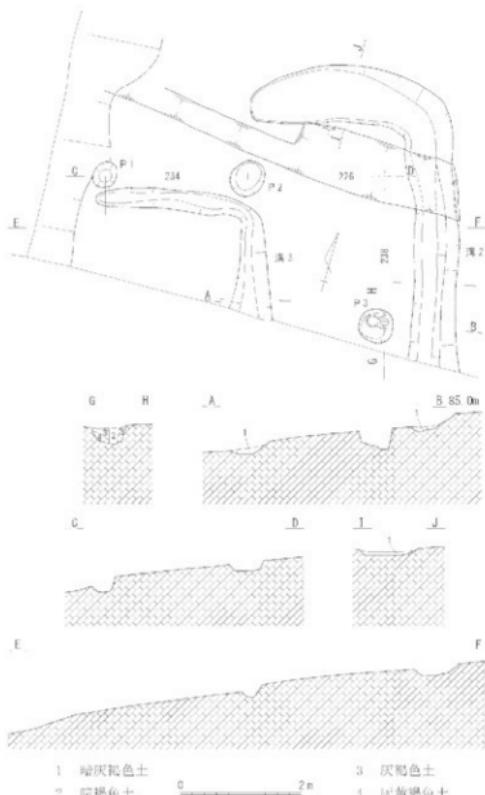
掘立柱建物3 (第154・160・161図、図版35・36)

北調査区の南半、階段状平坦面の下段全面を占める。掘立柱建物2を取り込むような形で重視し、床面積はその約2倍である。桁行4間、梁行1間と考えるが、北梁行の中間に東柱とみられる小柱穴がある。桁行全長が782cm、梁行全長は316cm、床面積は23.8m²を測る。棟の方向はN-16°Wである。柱穴は円形で、山側の東桁行の柱穴が谷側の西桁行の柱穴より小さい。東桁行の柱穴は、長径が49~69cm、深さは47~57cmである。

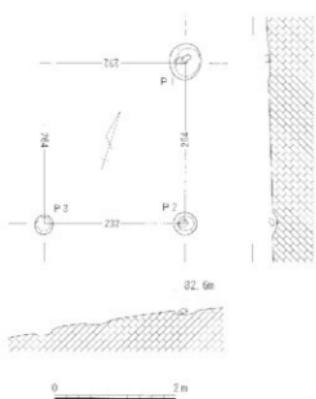
全柱穴で柱痕が確認され、直径は14~26cmを測る。西桁行の柱穴は、長径56~74cm、深さ28~44cmで、柱痕の直径は18~25cmであった。東桁行と西桁行の柱穴底面の高度差は、北梁行で25cm、南梁行では21cmを測る。もとは傾斜地であった所に建てられたため、西桁行の柱は東桁行の柱より長かったとみられる。北梁行中点のP11は長径32cm、深さ17cmと小さく、東柱であろう。

掘立柱建物3の東半を取り開むような形で溝1が掘削されている。北桁行からの距離は溝の中心で80cmを測る。その形状と位置関係から掘立柱建物3の雨落ち溝と判断する。

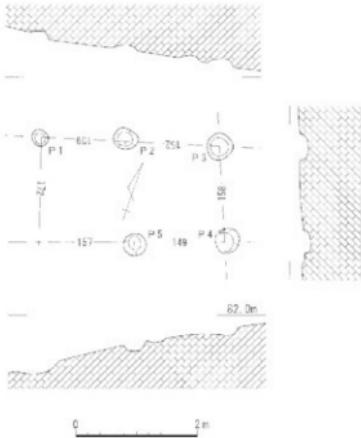
建物の柱穴からはわずかに遺物が出土し、1はP6、2はP1出土である。溝1から多くの土器が出土している、これらの遺物から掘立柱建物3の年代は8世紀末から9世紀初頭と考える。



第162図 挖立柱建物4・溝2・3 (1/80)



第163図 挖立柱建物 5 (1/80)



第164図 挖立柱建物 6 (1/80)

掘立柱建物 4 (第154・162図、図版35・36)

北調査区の南東部、階段状平坦面の上段にある。調査中は建物と認識していなかったが、報告書作成作業中に確認できたものである。梁行2間の南北棟建物と推定され、東半を取り囲むような形で雨落ち溝とみられる溝2が検出された。北西角の柱穴は烟の暗渠によって破壊されている。梁行全長は460cm、北側1間の衍行柱間は238cmで、この調査で検出した掘立柱建物の中ではもっとも規模が大きいかもしれない。検出1間分の床面積は10.9m²、棟の方向はN-16°-Wを測る。柱穴は円形で、長径が46~61cm、深さは17~34cmあり、P3では直径21cmの柱痕を確認した。東衍行と溝2の中心との距離は70cm、北梁行と溝2の距離は120cmであった。掘立柱建物4と重複して溝3が検出されている。溝3は形状から建物の雨落ち溝の可能性があるが、内側に柱穴は検出されていない。

掘立柱建物 5 (第156・163図、図版36・37)

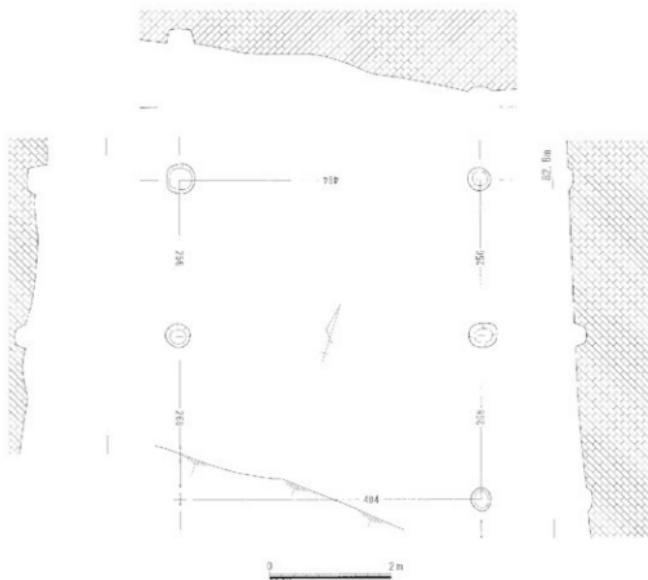
南調査区の北西部で検出された。掘立柱建物6から80cm東、掘立柱建物8からは2.5m北に位置している。衍行1間、梁行1間の構造とみられ、北西角の柱穴は削平されていた。床面積は6.1m²、棟の方向はN-18°-Wを測る。柱穴は円形で、長径が33~60cm、深さは4~7cmと浅く、埋土は暗灰褐色土である。P1とP2で長径が15~22cmの河原石がみつかったが、礫石の根石とは思われない。

掘立柱建物 6 (第156・164図、図版36・37)

南調査区の北西部、掘立柱建物8の北西にあり、約2m離れている。衍行2間、梁行1間で、東西棟の建物とみられる。南西角の柱穴は削平されていた。衍行全長は306cm、床面積は5.0m²、棟の方向はE-17°30'-Nを測る。柱穴は円形で、長径が28~45cm、深さは9~16cm、埋土は暗灰褐色土である。北衍行の東と西の柱穴底面の高度差が46cmもあり、もとはかなりの傾斜地であったと推定される。

掘立柱建物 7 (第156・165図、図版36・37)

南調査区の中央部にあり、掘立柱建物8と重複していた。調査中には東西2列の柱穴列と考えていたが、一つの建物としても、規模的には掘立柱建物8とあまり違わず、掘立柱建物2と3の建て替え例からみて、掘立柱建物8と建て替え関係にある建物と判断した。衍行2間の南北棟建物と考えてい



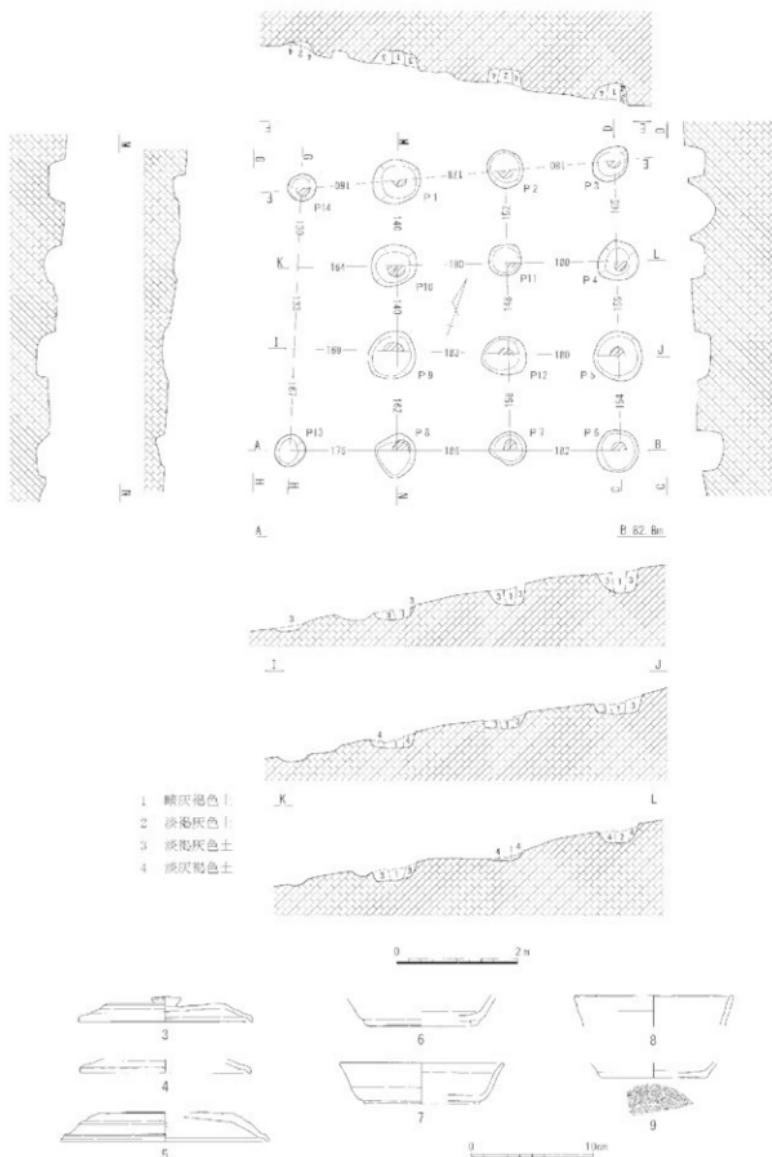
第165図 擬立柱建物7 (1/80)

る。梁行の中点は畠の暗渠や削平された崖面にあたっていて、494cmという柱間からしても、そこに柱穴があったと想定し、梁行も2間とみる。擬立柱建物8のような総柱建物かどうかは柱穴の残存状況が悪いため確定できない。桁行全長が524cm、梁行全長は494cm、床面積は25.9m²を測り、棟方向はN-17°30'-Wとなる。柱穴は円形で、長径が38~49cm、深さは8~32cm。北梁行の東西柱穴底面の高さ差は76cmを測る。柱穴埋土は東桁行が淡灰褐色砂礫混じり粘質土、西桁行は暗灰褐色土である。

擬立柱建物8 (第156・160図、図版36~38)

南調査区の中央部で検出された。擬立柱建物7と重複し、どちらかが建て替えられたものである。P13とP14は他の柱穴よりひとまわり小さく、また浅もあるため、西側の1間分については庇と考え、桁行3間、梁行2間の身舎に庇が付いた構造とみる。P13とP14の間は畠の暗渠によって2柱穴が擾乱されたと想定され、総柱の建物と考える。桁行全長が475cm、梁行は庇部分を含めて全長が544cm、床面積は23.9m²を測る。棟の方向はN-18°30'-Wである。身舎の柱穴は円形で、長径が53~84cm、深さは16~41cmを測るが、P11とP12は他の柱穴より浅く、東柱とみられる。全柱穴で柱痕跡が確認され、直径は16~33cmであった。庇の柱穴も円形で、長径が47~54cm、深さは15~21cmを測る。北梁行の東西柱穴底面の高さ差は68cmを測る。総柱建物で、東柱も太いことから倉庫とみられるが、庇が付く例は少ないのではないかと思われ、途中で拡張されたものであろうか。

遺物がいくらか出土している。図示したものは頸壺器の蓋・杯で、3・6がP10、4がP9、5・7がP3、8がP8、9がP2出土である。3は柱痕内から出土した。出土土器の年代は8世紀末から9世紀初頭とみられるため、擬立柱建物8の年代も奈良時代末期から平安時代初期と考えられる。



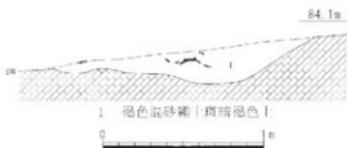
第166図 捨立柱建物 8 (1/80)・出土遺物 (1/4)

2 溝

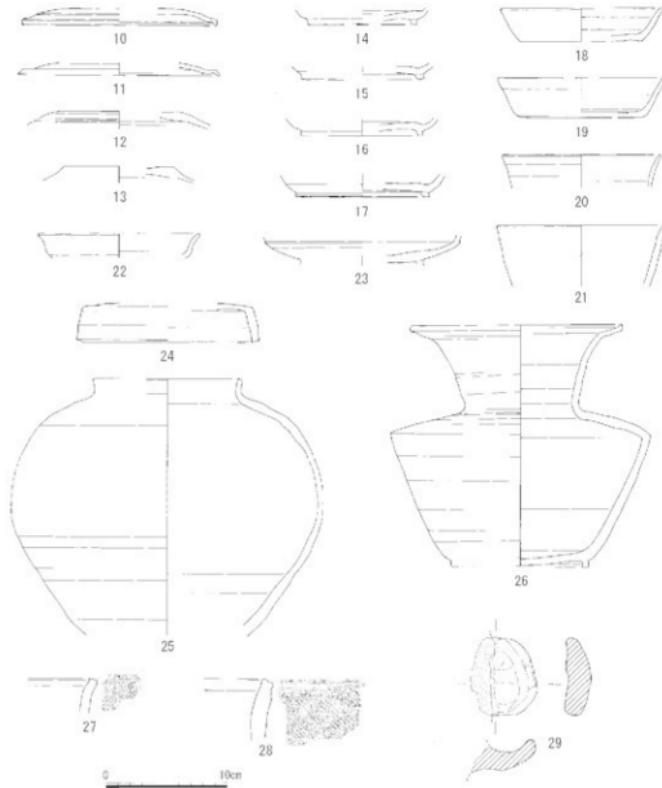
溝1 (第154・155・160・167図、図版35~37)

北調査区南西部、階段状平坦面の下段東縁にあり、掘立柱建物3の東半を囲むように掘削された雨落ち溝である。最大幅が1.2m、深さは45cmで、掘立柱建物3との距離は溝の中心で80cmを測る。埋

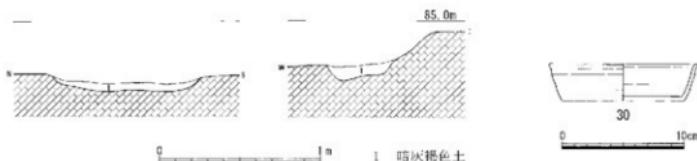
土は1層で、褐色砂礫土混じり暗褐色土である。



第155図第7層が溝1である。第167図の断面にかかっている土器は26の広口壺である。遺物がかなり出土し、須恵器の蓋・杯・皿・後枕・薬壺・広口壺、土師器の瓶と器種は豊富である。土器の年代から9世紀前葉には埋没したと考える。



第167図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



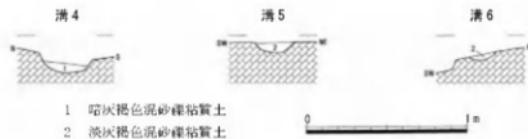
第168図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝2 (第154・162・168図、図版35・36)

北調査区南部、階段状平坦面上段にあり、掘立柱建物4の雨落ち溝である。幅は68~94cm、深さは8~29cm。埋土は1層で、暗灰褐色土である。9世紀前葉には埋没したようである。

溝3 (第154・162・169図、図版35・36)

北調査区南端、階段状平坦面上段にあり、掘立柱建物4と重なる



第170図 溝4~7 (1/30)

る。形状から建物の雨落ち溝のようだが、対応する
建物は検出されていない。幅が25~68cm、深さは18
cmを測る。埋土は1層で、遺物はなかった。

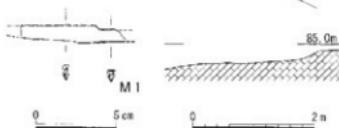
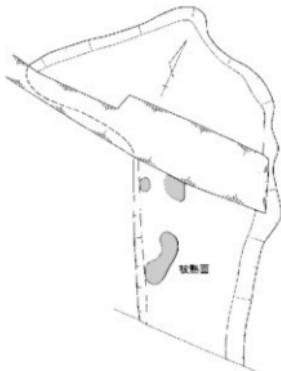
溝4~7 (第154・170図、図版35)

北調査区南西部の階段状平坦面下段の上面で検出した溝群で、掘立柱建物2・3と重なっていた。埋土などから古代の遺構と考えているが、遺物がほとんどなく、確定性に欠ける。溝4は掘立柱建物3の北端にあり、幅84cm、深さ9cm。溝5は建物3の中央部にあり、幅48cm、深さ5cm。溝6・7は溝1と平行し、幅25cmと50cm、深さは6cmと7cmであった。なお、調査区の南端から掘立柱建物3の中央まで延びている長い溝状遺構は近世以後の道路遺構である。

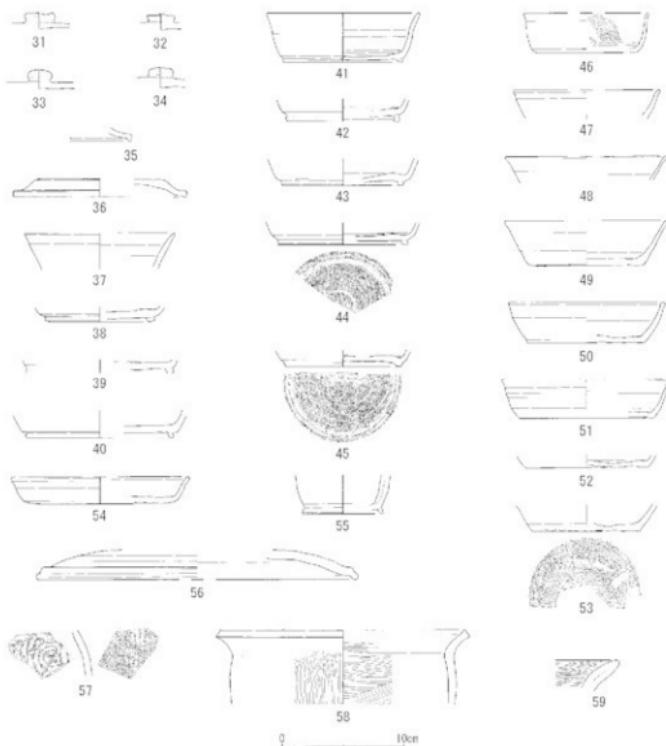
3 落ち込み

落ち込み1 (第154・171・172図、図版35~37)

北調査区の南東部、階段状平坦面上段にあった。
溝2の上方にあり、溝2の埋没後、その肩から埋土
の圧縮によって生じた崖みにかけて形成された落ち



第171図 落ち込み1 (1/80)・出土遺物①(1/3)



第172図 落ち込み1出土遺物2 (1/4)

込みである。逆L字形に近く、最大幅が2.5m、深さは20cmを測る。南半部には、長径が23~89cmの被熱面が3か所あり、北半部で遺物の集中がみられた。埋土は暗灰褐色砂疊混じり粘質土である。

出土遺物が多く、ほとんどは土器類だったが、鉄製刀子（M1）が1点出土した。土器は須恵器がほとんどで、蓋・杯・皿・壺があり、土師器は壺であった。年代は8世紀末から9世紀初頭である。

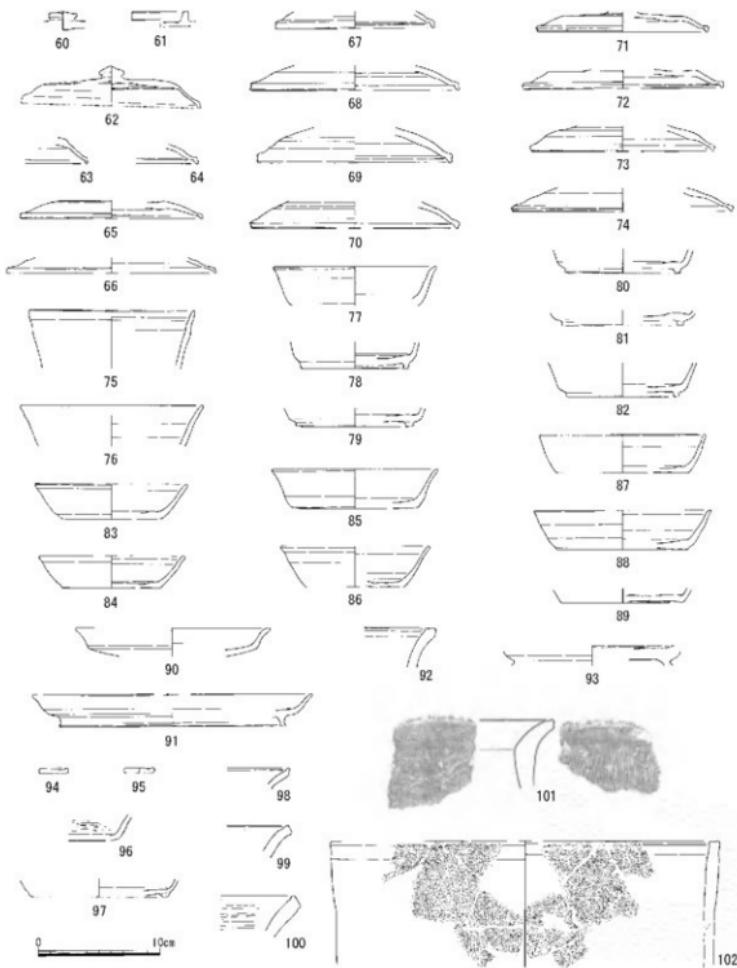
4 包含層出土遺物

第173図に掲載した土器は、北調査区南半の階段状平坦面下段に堆積した古代の流土、あるいは近世以後の烟の造成土から出土したものである。第155図の土層図でいうと、第2層から第5層にあたり、おもには第4層と第5層出土である。60~93は須恵器、94~102は土師器である。須恵器の器種では蓋・杯・皿・壺・瓶があり、土師器では蓋・杯・壺・瓶がある。杯96は内外面丹塗りである。

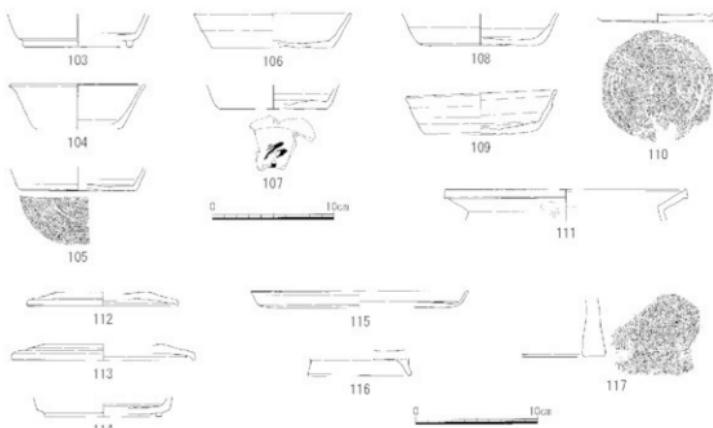
第174図は上記以外の北調査区から出土した土器である。このうち、103~111は北調査区南半の階段状平坦面上段から出土したが、103・104・106・107は現代の暗渠出土で、落ち込み1に包含されていた可能性が高い。112は北トレンチ出土、116の土師器杯は確認調査トレンチ2から出土した。103~

110・112~115は須恵器で、器種では蓋・杯・皿がある。111・117は土師器で、甕と甌である。

107は稲穂遺跡から出土した唯一の墨書き土器である。高台のない杯の底部外面に文字がかすかに読み取れる。明確には判読できなかったが、部首が「宀」か「冂」とみられ、行書体で記されているようである。中央に親棒があり、右には筆を押さえて左下にはねたような筆遣いがみられる。想像をたくましくすれば「市」・「家」のような字が思い浮かぶが確定性を欠く。



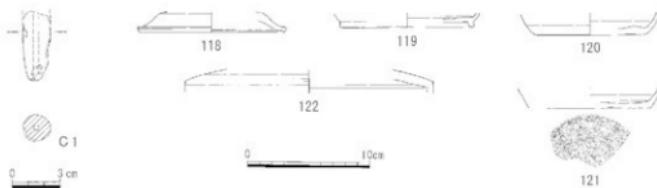
第173図 北調査区南半中段包含層出土遺物 (1/4)



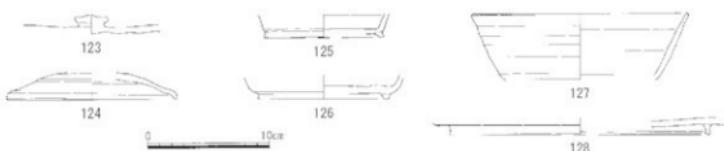
第174図 北調査区出土遺物 (1/4)

第175図は南調査区から出土した遺物である。土層でいうと、近世以後の埋造出土ということになる。C 1は両端が細くなる棒状の土師質の土鍤で、最大径は17.5mm、全長は80mm前後と推定される。118~122は須恵器で、器種としては蓋・杯・平瓶がある。

第176図掲載の土器は、発掘調査時に遺跡周辺から表面採集されたものと、確認調査のトレンチから出土したものである。すべて須恵器で、器種としては蓋・杯・盤がみられる。127の深い杯は確認調査のトレンチで検出された土壤から出土したものである(第153図)。土壤は長軸180cm、短軸80cmの隅丸長方形を呈するようで、中央部を溝状に掘り下げると約10cmで底面に達した。8世紀末から9世紀初頭の年代が考えられる。稲穂遺跡の北端を示す遺構である。



第175図 南調査区出土遺物 (1/3・1/4)



第176図 表面採集およびトレンチ出土古代遺物 (1/4)

第3節 弥生時代以前の遺物

今回の発掘調査では、ごくわずかではあるが、縄文時代と弥生時代の遺物も出土した。第177図に掲載したものがそれである。

S 1は純文時代の石器である。北調査区の表土直下から出土した。石材はサスカイトで、無茎凹基式である。尖端は欠損している。白っぽく風化が進行し、残存長が20.0mm、重さ0.96gを測る。129・130は弥生上器である。129は南調査区の第157図第8層から出土した。弥生時代中期後半の壺の口縁部である。口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文と竹管文、口縁内面には彫書き波状文を飾る。130は北調査区の溝1の北端から出土した。弥生時代後期後葉の壺か器台の口縁部であろう。



第177図 弥生時代以前遺物 (1/2・1/4)

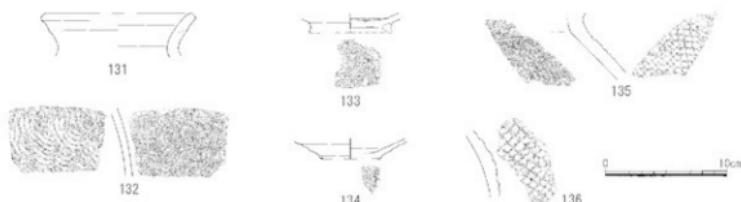
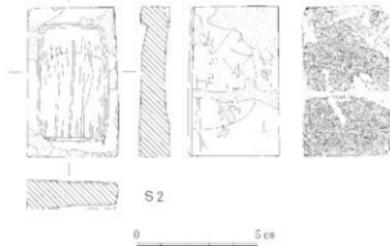
第4節 遺跡内採集遺物

第178図に掲載した遺物は、植穀遺跡内に居住されている方が、農作業などのかたわら、日に付いた遺物を採集されたもので、遺跡の内容を考える上で貴重な資料となっている。

M 2は錢貨で、「寛永通寶」と読み取れる。S 2は石製硯である。第152図の星印の地点で採集された。二つに折れていた。平面形はわずかに台形で、海側が2mm程短い。刻線で外縁部と内部を分ける。海部と陸部の境は弧を描き、海部の断面は三角形をなす。陸部下端は外縁部と段差がない。陸部には擦痕があり、中央はわずかにぼんんでいる。裏面は大きく半円形に窪められているため安定が悪い。裏面には文字が数行にわたって線刻されている

が明瞭に読み取れるものではなく、安・順・帰か得・南のように見える。側面は直立し、横方向の研磨痕が残る。色調は灰白色である。

131～136は平成16年発行「美作町遺跡地図」の基礎資料となった上器である。131・132は須恵器甕で古代、133～136は勝間田焼の碗・甕で、12世紀のものである。

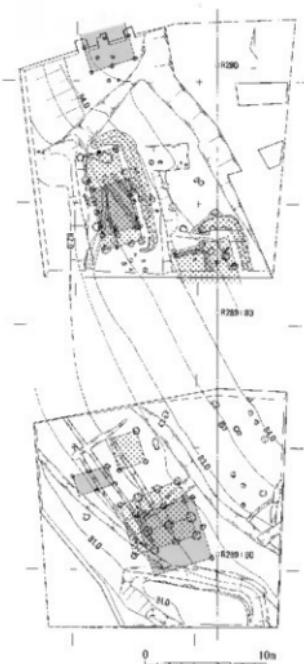


第178図 遺跡内表面採集遺物 (1/2・1/4)

第5節　まとめ

稲徳遺跡の今回調査した地区については古代の遺構・遺物が出土した。出土遺物の年代は8世紀末から9世紀前葉に限られるため、存続した期間は短かったと考えられる。8棟の掘立柱建物が検出されたが、掘立柱建物2と3、7と8で重複関係がみられ、掘立柱建物1でも建物内に雨落ち溝とみられる溝3が重複している。そこで、これらの建物を2時期に分け、同時に併存していた建物を復元する必要がある。掘立柱建物2と3の柱穴を比べると、建物2の柱穴の方が大きく、柱痕が明瞭であった。掘立柱建物7と8でも同様に、建物8の柱穴が大きくて柱痕がはっきりしていた。さらに建物3と8がより北側に位置していた。これらのことから、建物3と8は同時併存であったと考える。

北調査区の建物の棟方向はN-14°45'-WからN-17°15'-Wと近似し、年代差の指標とはなりにくいが、掘立柱建物3と4はともにN-16°-Wである。柱穴規模をみると、掘立柱建物1の柱穴は小さく、柱痕が確認できなかったが、掘立柱建物4の柱穴は大きく、柱痕も確認された。したがって、建物1と2、建物3と4を同時併存とする。南調査区でも、建物の棟方向はN-17°30'-WからN-18°30'-Wとほぼ一致するため、柱穴の規模と位置関係から、建物5と8、建物6と7を同時併存とみる。



第179図 発掘調査区全体図 (1/400)

— 144 —

稲徳遺跡の特徴をまとめると次のようなことになる。建物の棟方向がほぼ揃い、階段状に地形を造成して上下二段に建物を配置した規格性の高い施設である。大形の廻柱建物、縦柱建物の倉庫、小形の建物と、それぞれ機能に応じた建物が配置され、一つの完結した施設とみられる。施設の存続期間が短く、規模が縮小化している。出土した土器では須恵器が多数を占め、様々な器種があって日常生活臭が漂い、人間が常住していたと考えられる。さらには、墨書き器が出土していることなどである。遺跡内に居住されている方に伺うと、第152図の視出土地点から南西の道路より南の畑からは鉄滓が多く出土するとのことで、年代は確認されていないが、工房が伴う可能性もある。このような特徴からすれば、この施設は官衙か在地有力層の居宅と考えられるが、存続期間が短いことや、近接して古墳がないことなどからすれば、前者の可能性がより強いと判断される。

(岡本寛)

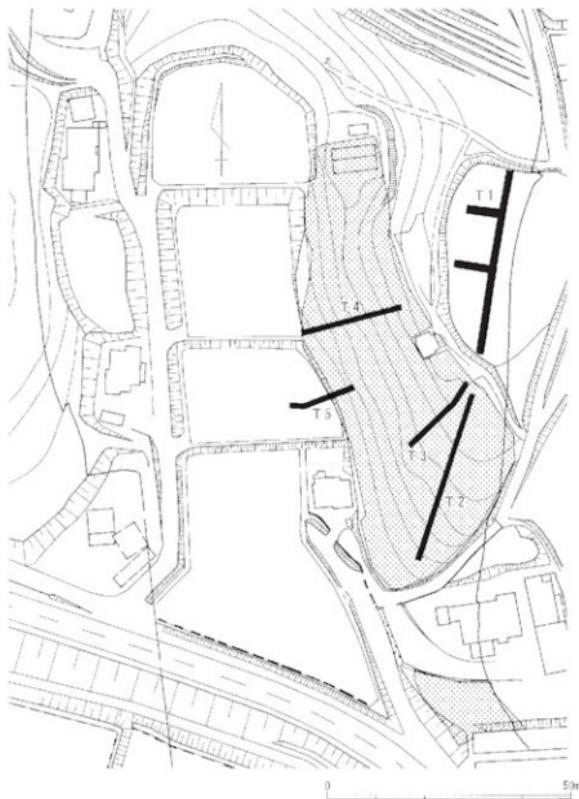
第5章 下坂遺跡

第1節 調査区の概要

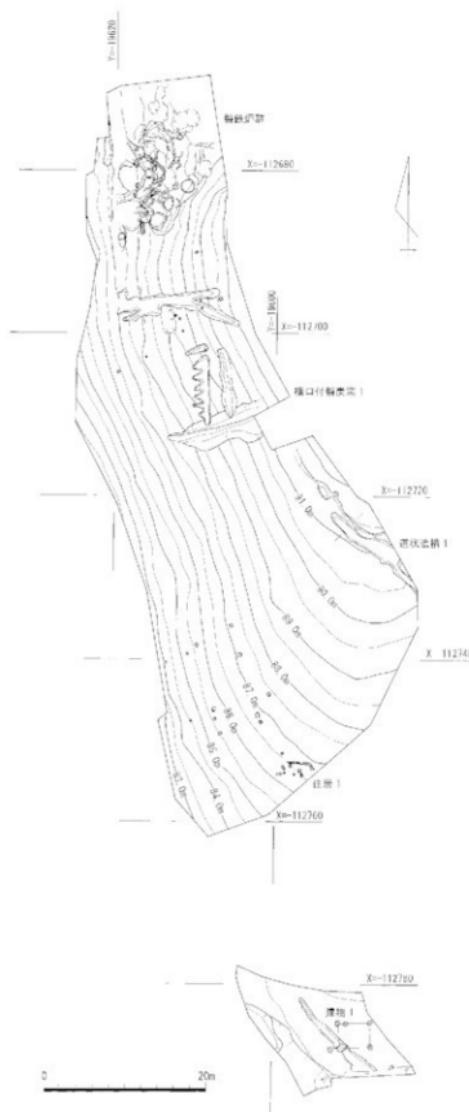
美作市内を南流する吉野川は、蛇行部の各所に小規模な谷底平野を発達させている。下坂遺跡が立地するのは、美作市佐田の平野部を望む小丘陵から、南側へと舌状に派生する尾根の西側斜面である。吉野川からは西側に約1km入った位置にあたる。この尾根は、西側に隣接する尾根と相まって小規模な谷地形を形成し、谷底では水田が営まれていたが、調査時点では工事の盛土によってすでに埋め立てられていた。この谷筋から流出する水は、調査地南側の小河川へ流れ込み、さらには吉野川へとつながっている。

調査対象となったのは、確認調査において炭窯や古道の検出された丘陵斜面部である。全般的にみて、傾斜地ゆえの土砂流出に加え、畠として耕作されていたこともあって、遺構の残り具合は良好とはいせず、特に南半部では表上の除去後ただちに遺構面が露出する状態であった。

確認調査時の知見から予想された通り、全体的に遺構密度は希薄であったが、北端部で製鉄関連遺構、中央部で同時期と考えられる横口付製炭窯（いわゆる「ヤツメウナギ」）1基が検出された。製鉄関連遺構は、調査区の北端部に集中して検出



第180図 調査区およびトレーンチ配置図 (1/1,000)



第181図 下坂遺跡全体図 (1/600)

された製鉄炉跡と、その約20m南方に位置する横口付製炭窯がある。

製鉄炉跡周辺では、複数回の操業に伴って、盛土層や鉄滓層が複雑に重なっていたうえ、現代の擾乱も激しく、検出作業は困難を極めたが、結果的に3基の製鉄炉跡とその付属施設の存在が明らかになつた。

製鉄炉は、斜面をカットして平坦に造成した場所に築かれている。うち1基は、焼けた地下構造と排滓溝が明確に検出され、さらに周囲に溝を巡らせて人念な防湿構造が施されたもので、上屋の柱穴も検出された。他の2基では、方形の下部構造と排滓溝の一部が残存していた。

横口付製炭窯は製鉄炉跡から約20m南側に位置する。基底部と一部の壁面のみの残存であるが、全長約10mを測り、5個の横口をもつなど基本的な構造を把握することができた。隣接する製鉄炉との密接な関係を示す一例といえる。

製鉄関連以外の遺構は少なかつたが、南端部において竪穴住居1軒および若干の柱穴が検出されたのを受け、遺構の南側への広がりを想定して、生活道路と住宅跡を避けた位置に追加の調査区を設定した。ここでは溝・柱穴列などが検出されたものの、ほとんどは近世以降とみられる。これらの新しい時期の遺構については、遺跡の性格との関連が希薄であり、一部を除いては掲載を見送ったことを断っておく。

(岡本泰)

第2節 製鉄関連の遺構・遺物

1 概要

製鉄関連の遺構としては、調査区北端部で集中的に検出された3基の製鉄炉跡（製鉄炉1～3）とその付属施設、そしてその南側約20mに位置する横川付製炭窯（いわゆる「ヤツメウナギ」、以下適宜「製炭窯」と略す）が挙げられる。

製鉄炉跡は、操業が複数回にわたり、それに伴い鉄滓や土砂による盛土もなされていたので、堆積状況は複雑で、また現代の住宅に伴う擾乱層もあり、遺構面の認定や遺構相互の関係の把握は困難を極めた。そのため、十分理解しきれていない部分もあるが、おおむね次のようであったと考えている。

まず斜面をカットし、出土残土で斜面下方に盛土をして平坦面を造成する。そしてその面上に製鉄炉を築き、製鉄作業を行うとともに廃棄物が排滓溝を用いて斜面下方に排出される。製鉄炉の周辺には、原料などの資材置き場が設けられ、それが現在上塙などとして検出されている。

この造成面すなわち遺構面は、少なくとも2面あったと考えられる。この関係は、製鉄炉1の廃絶後に盛土して製鉄炉3が築かれていることから間違いない。しかし、複雑な堆積関係や後代の擾乱もあって、両製鉄炉から離れた地点での新旧関係の把握は困難であった。第182・183図にはそれぞれ下層・上層と推測される遺構をまとめたが、製鉄炉やそれに伴う排滓溝以外は判断が難しい場合が多く、検出の順序や炉との位置関係などを考慮して割り振ったもので、厳密に検討した結果ではない。また、南端に孤立して存在する製鉄炉2は便宜的に下層に含めて図示したが確証はない。

製鉄炉1は、地下構造とそれに伴う排滓溝が検出されたのみならず、防湿目的とみられる二重の溝、上層を想定させる柱穴といった遺構が良好に残っており、製鉄遺構の構造を理解するうえで貴重な資料といえる。製鉄炉2・3では方形の地下構造と排滓溝の一部が検出された。

これら製鉄炉跡群の西側、つまり斜面下方には、操業に伴って排出された鉄滓・炉壁片が分厚く堆積していた。この鉄滓層からは、鉄鉱石（磁鉄鉱）および須恵器の台付瓶1点が出土している。

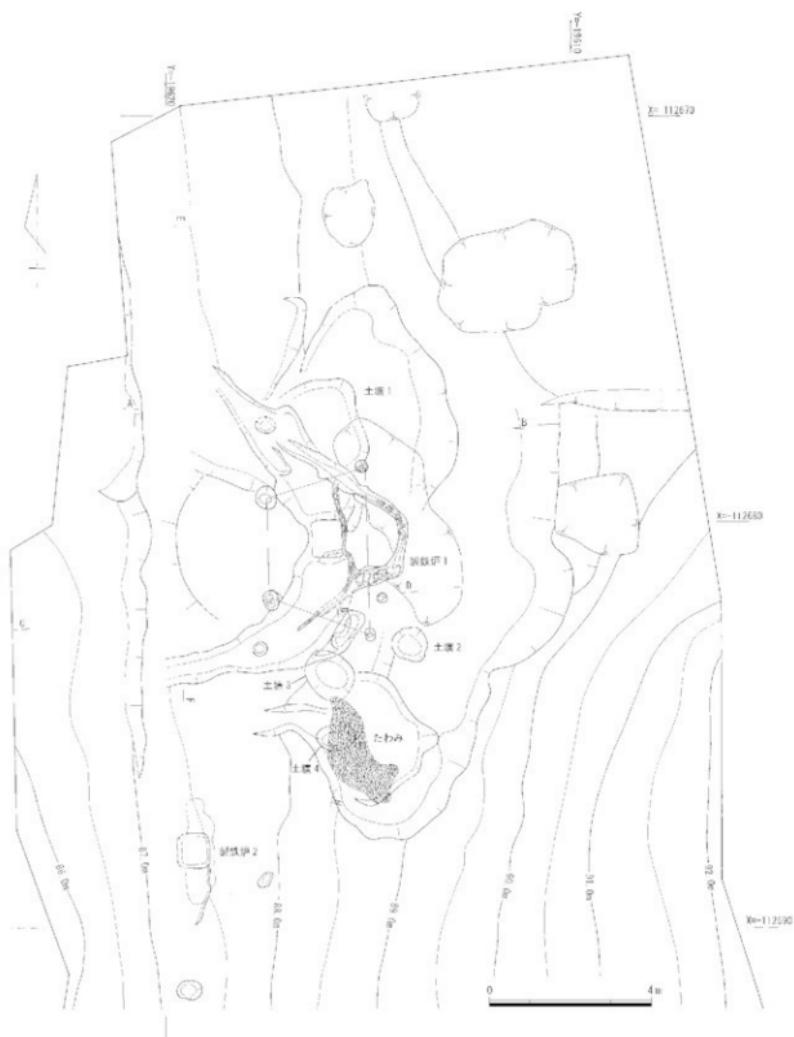
なお、製鉄炉がさらに北側に存在する可能性を考慮し、工事による掘削面などを観察したが、焼土や鉄滓の露出は認められず、製鉄炉群の範囲は調査区内でおさまることを確認した。また、鉄鉱石を調査地付近で調達した可能性も考えたが、工事掘削された隣接地の岩屑の中には、磁性を示すものはみられなかった。

製炭窯は、ほぼ南北に主軸を向け、等高線とはやや斜行して築かれている。天井部や横口部は完全に崩落し、内部には赤褐色の焼上が落ち込んでいた。



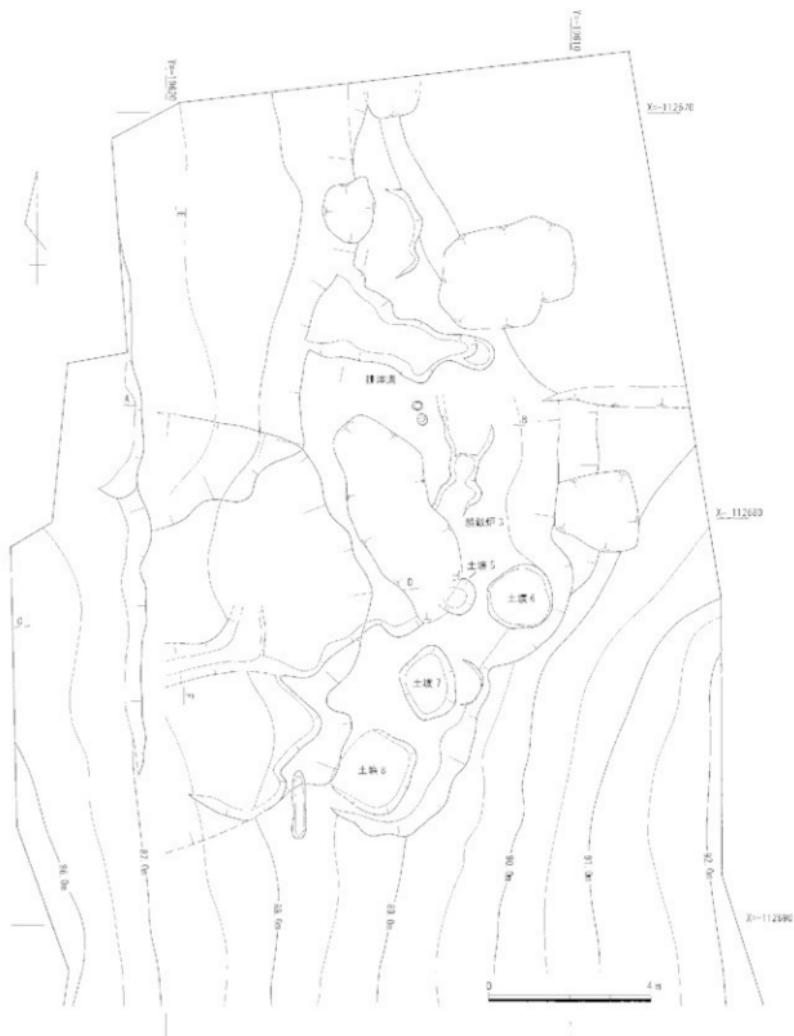
写真10 製鉄炉作業風景

南端の焚き口はやや削平を受けていたが、北端の通道はトンネル状に良好に検出され、伴う排水溝も確認された。製炭窯の斜面上方には、1条の溝が平行して掘削されており、これは山側からの流水を遮断し製炭窯を保護する目的で設けられたものと考えられる。

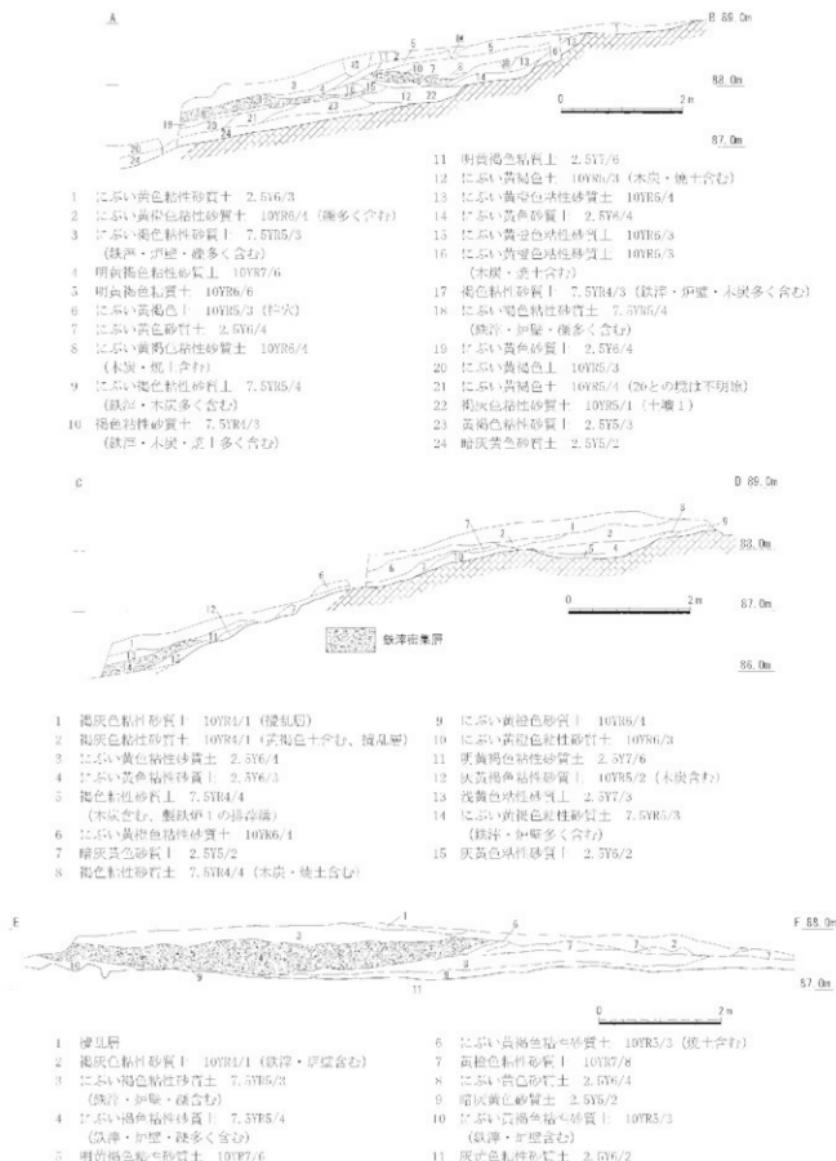


第182図 製鐵関連造構配置図① (1/120)

以上のように、下坂跡では製鉄炉と製炭窯が近接して検出されたことで、製鉄とそれに必要な木炭の生産を同時に行っていた可能性が高い。津山市の縁山遺跡、綾社市の千引カナクロ谷遺跡などの例と同様、当時の製鉄と製炭の密接な関係を如実に物語る遺構群であるといえる。
(岡本奈)



第183図 製鉄関連遺構配置図② (1/120)



第184図 調査区土層断面図 (1/80)

2 製鉄炉

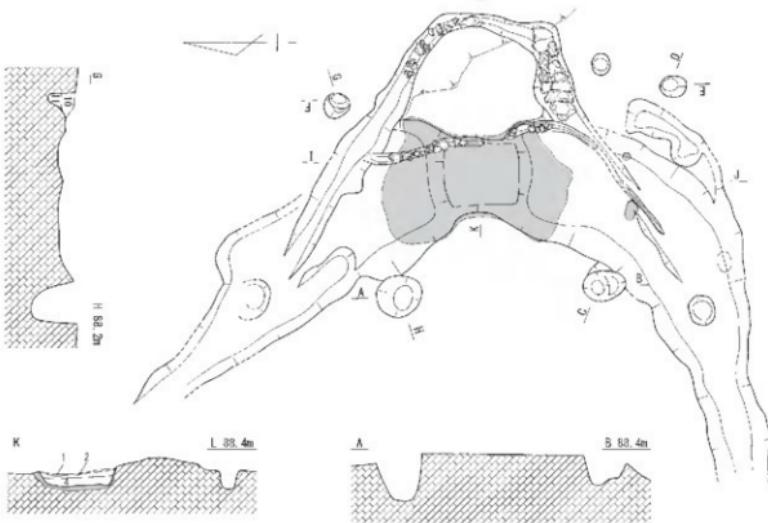
製鉄炉1（第182・185・186図、巻頭図版6・図版39～41）

今回検出された3基の製鉄炉のうち、最も残りの良好なものである。炉を染くに際しては斜面を大きくカットし、出た掛土で斜面下方を埋め立てて作業面の造成を行っている。そして作業面のほぼ中央に炉を染き、上屋の柱穴、排滓溝などの付属施設がほぼ左右対称に配置された構成である。

炉の下部構造は、廃絶後に盛土がなされていており良好に遺存していた。下部構造は、製鉄炉2とは異なり正方形の土壙状をなさず、東西つまり斜面の上方と



図 185-3



- 1 水黄褐色粘土砂質土 10TR1/2
- 2 次黄褐色粘土砂質土 10TR4/2
(小炭・焼土含む)
- 3 にぶい赤褐色粘性砂質土
5TR4/4 (虎十)
- 4 褐色砂質土 7.5TR1/3 (へ民・成土多く含む)
- 5 にぶい黄褐色粘性砂質土
10TR6/4 (木炭・焼土多く含む)
- 6 にぶい黄褐色粘性砂質土
10TR5/3 (木炭含む)
- 7 褐色砂質土 7.5TR1/4 (焼土含む)
- 8 淡褐色砂質土 7.5TR1/2
- 9 にぶい赤褐色砂質土 5TR4/4
- 10 褐色砂質土 10TR6/6 (柱穴)
- 11 にぶい黄褐色粘性砂質土 10TR7/4

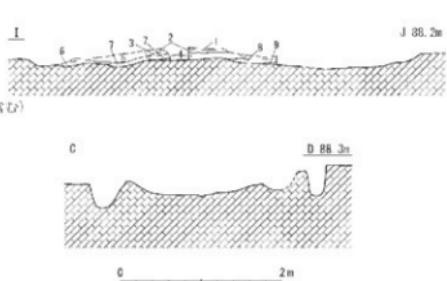
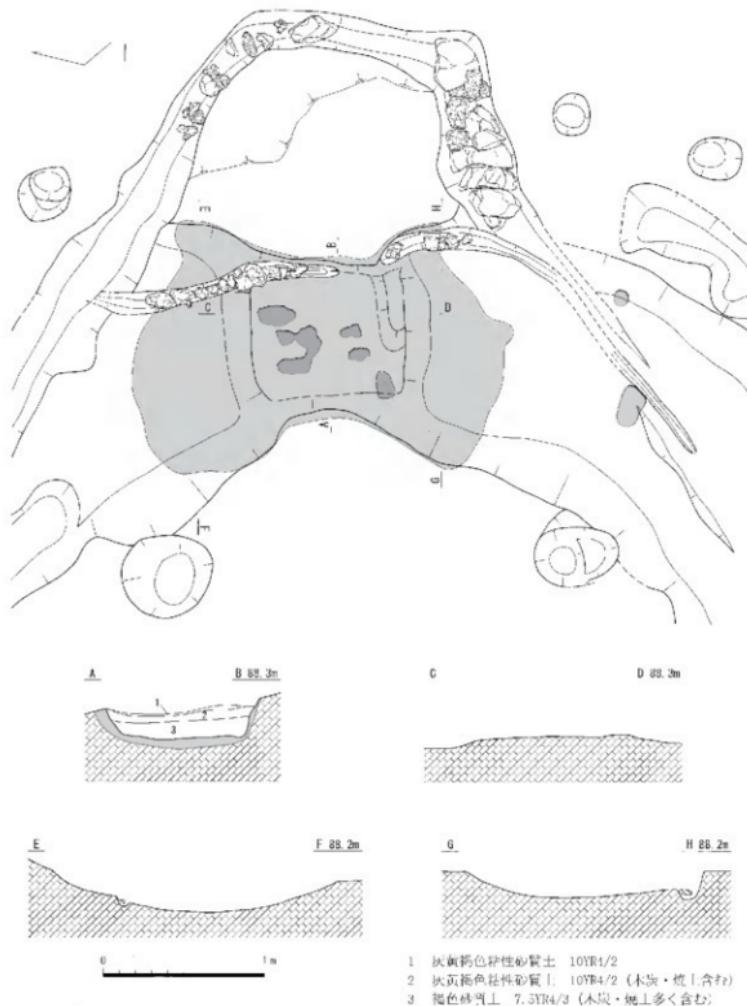


図 185-4 製鉄炉1・排滓溝 (1/60)

下方に高さ約20cmの壁をもつ一方、南北には壁面がなく開いた構造であり、逆に緩い傾斜となって排水溝へと下がっている。こうして形成された平坦面の規模は、南北95cm・東西76cmの長方形で、東西は上端幅で測れば91cmでは正方形となる。底面はわずかな凹凸があり、若干盛んだ部分に黄褐色の砂質土が薄く残り、炉本体の最下部の軌跡と推測される。地下構造は強い被熱により真っ赤に焼け残り、さらに赤色部は地下構造の南北にまで及び、ほぼ対称な形状に広がる。また、南排水溝の一部



第186図 製鉄炉1 (1/30)

にも被熱面が認められる。

この炉で特筆すべきは、炉跡の斜面上方を台形に取り巻くように検出された周溝である。中央部は擾乱層により破壊されているが、残存する最大幅52cm、深さ33cm程度を測る。末端部は排水溝に続いているようである。溝の南端部には、人形の蹠や鉄滓が溝にはめ込まれたような状態で整然と並んでいる。一方で、北半部にも鉄滓や蹠が含まれていたが、出土状況は散漫であり意図的な配置かどうかは判断できない。このような、製鉄炉の背後に設けられた周溝の類例としては、鎌倉市の千引かなくろ谷遺跡の例があるが、下坂遺跡のものはかなり規模が小さい。

さらに特徴的なのは、地下構造の東側壁際に沿って検出された細い溝である。幅は最大12cm、深さは5~10cm程度である。溝は東壁の中央よりやや南側で途切れて連続していない。溝は弧状に緩く湾曲しつつ、最終的には上記の周溝に接続するようである。溝内には鉄滓や骨塙の小片が詰められてその上面が粘土で塞がれており、地下構造の完成時には埋設状態であったとみられる。管見の限りでは類例がなくその性格はよく分からぬが、防湿施設の一例であろうか。

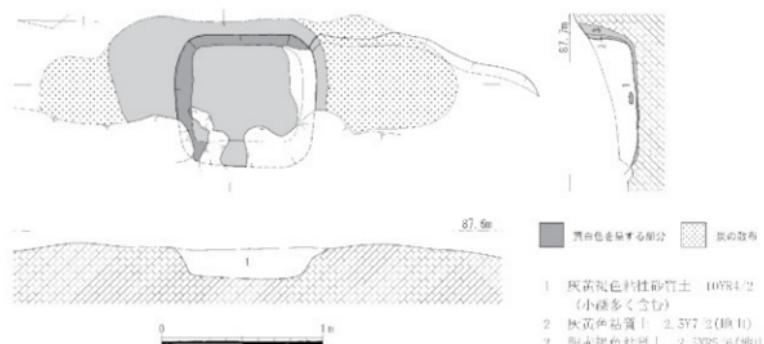
排水溝は、地下構造の南北にとりつき、湾曲して斜面下方へと向かい、全体としては半円形を呈している。溝の底面には、一部を除いて被熱痕跡がみられないことから、鉄滓を自然流下させる溝ではなく、鉄滓を下方の廃棄場所へ運搬するための通路と捉えるのが妥当かもしれない。断面は浅い純状を呈する。

これら諸施設を保護する上層の柱穴が、炉の東側に3個、西側に2個検出された。柱穴は東側に比べて西側の方が径・深さともに規模が大きい。西側2個の外側にはさらに2個の柱穴があるが、位置が排水溝中になるため直接関係があるかどうか不明である。柱穴配置は、長方形ではなく東向きに開いた台形を呈する。その配置からみて柱の建て替えが行われたようである。

出土遺物がなかったため、炭素14および熱残留磁気による年代測定を実施した。炭素14による結果は、1σでAD 640~670年、2σで610~690年となり7世紀代である。一方、熱残留磁気ではAD 680±25年で、7世紀後半を示す。また木炭の樹種はコナラ属コナラ節である。 (岡本泰)

製鉄炉2 (第182・187図、巻頭図版6、図版39・41)

製鉄遺構群の南端で、孤立して検出された製鉄炉である。製鉄炉1・3との先後関係が肩位的に提

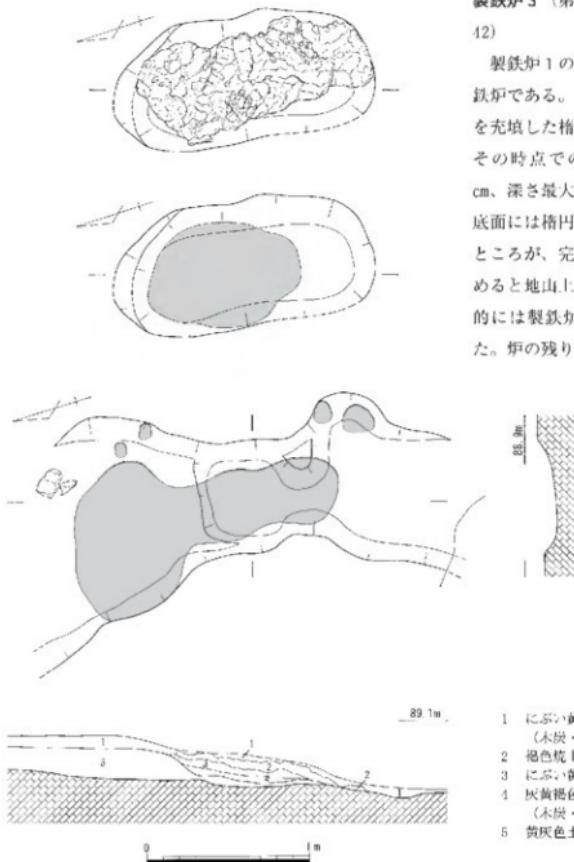


第187図 製鉄炉2 (1/30)

えられないが、便宜的に下層遺構に含めた。炉跡は方形土壙状の地下構造が残り、南北両方に赤色被熱面が広がる。周辺には後世の耕作による細かい擾乱が多いが、南北86cm、東西81cm、深さ最大28cmのほぼ正方形をなす土壙と思われる。内部は木炭を含む土で埋積している。床面・壁面は全体が強い被熱によって赤化し、北壁に至っては高温のため黄白色にまで変色して脆い状態であった。炉の南北には、被熱による赤い変色面が広がるが、明確な排溝溝は検出されず、かろうじて北側で溝の東壁らしき段がわずかに残存していたのみであった。また、上屋の柱穴についても検出できなかった。

この炉に伴う遺物は出土していない。最下層に含まれた木炭の炭素14年代は 1σ でcal AD 660~690年、 2σ でcal AD 640~770年であり、7世紀後半に近い年代が出ている。熱残留磁気による年代はAD 650±30年である。また木炭の樹種はコナラ属コナラ節であった。
(岡本泰)

製鉄炉3 (第183・188・189図、図版41・42)



第188図 製鉄炉3 (1/30)

- 1 にぶい黄褐色粘性の質土 10YR5/3
(木炭・焼土含む)
- 2 煙色灰 7.5YR4/3 (鉄滓を少し含む)
- 3 にぶい黄褐色粘性の質土 10YR4/3
- 4 灰黄褐色粘性の質土 10YR1/2
(木炭・焼土多く含む)
- 5 黄灰色土 2.5Y4/1 (盛土)

ためか一旦途切れるが、炉の北西にある東西溝へと続くと考えられる。この部分での最大幅は201cm、深さ28cmである。

熱残留磁気による年代測定結果はAD680±25年で、7世紀後半の数値である。(岡本泰)

3 土壙

土壙1 (第182・190図)

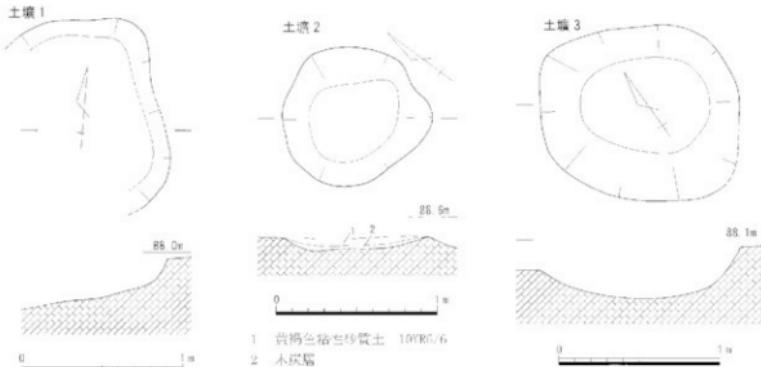
製鉄炉1の北側排溝溝を完掘した後に、存在が判明した土壙である。西側は排溝溝によって失われているが、本来は隅丸方形に近い形であったと思われる。埋土は褐灰色粘性砂質土である。出土遺物はなかった。製鉄炉に先立つことは確実であるが、炉との関係の有無はよくわからない。(岡本泰)

土壙2 (第182・190図)

製鉄炉1の南東側で検出された土壙である。平面形は長さ93cm、幅85cmのいびつな楕円形で、検出面からの深さは7cmとごく浅い。上層埋土の下層はほぼ純粹な木炭層であった。遺物は出土していない。製鉄炉1に伴うという確証はないが、木炭の集中度からすると製鉄に用いる木炭の置き場であった可能性も考えられる。(岡本泰)

土壙3 (第182・190図)

製鉄炉1の南側に位置する土壙である。北端部は炉の南側排溝溝を一部切っている。長さ123cm、幅107cmを測るいびつな楕円形で、検出面からの深さは26cmであった。遺物は、鉄滓・炉壁片のはかりに鉄鉱石が出土している。製鉄炉との密接な関連が想定される。(岡本泰)



第190図 土壙1～3 (1/30)

土壙4 (第182・191図)

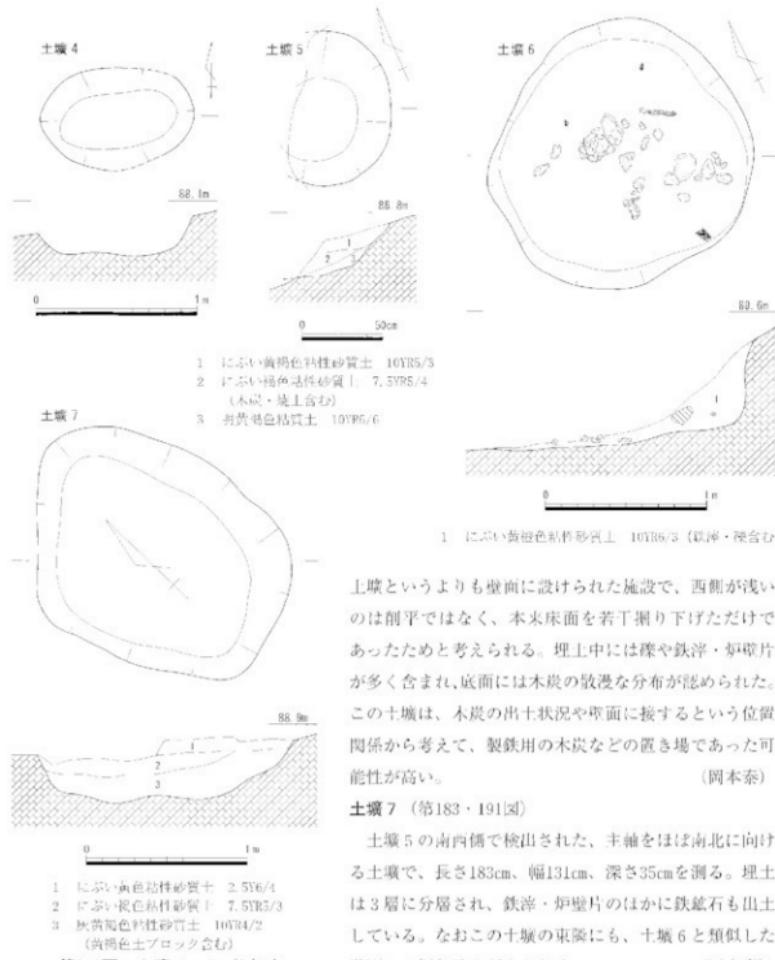
土壙3から55cm南側に着れた場所に位置し、長さ95cm、幅65cm、検出面からの深さ25cmを測る楕円形の土壙であり、これといった特徴に乏しい。底面は若干の起伏はあるもののほぼ平坦であった。遺物は、鉄滓・炉壁の小片が出土したにとどまる。(岡本泰)

土壤5 (第183・191図)

上層の造構面に伴うとした土壤の一つである。北西部は現代の擾乱層によって損なわれているが、残存長95cm、深さ20cmの円形ないし楕円形と想定される土壤である。埋土は3層に区分され、第2層には木炭・焼上が比較的多く含まれていた。上層の性格は不明である。
(岡本泰)

土壤6 (第183・191図、図版42)

土壤5の東側に隣接し、斜面をカットした壁面に密接した位置で検出された土壤である。平面形は長さ167cm、幅153cmのはば円形を呈する。斜面側の上端からの深さは最大で65cmであるが、もともと

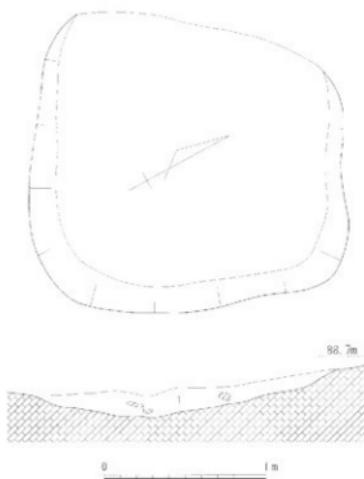


第191図 土壌4～7 (1/30)

上層といよりも壁面に設けられた施設で、西側が浅いのは削平ではなく、本来床面を若干掘り下げただけであったためと考えられる。埋土中には礫や鉄滓・炉壁片が多く含まれ、底面には木炭の散漫な分布が認められた。この土壤は、木炭の出土状況や壁面に接するという位置関係から考えて、製鉄用の木炭などの置き場であった可能性が高い。
(岡本泰)

土壤7 (第183・191図)

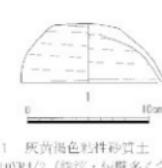
土壤5の南西側で検出された、主軸をほぼ南北に向けた土壤で、長さ183cm、幅131cm、深さ35cmを測る。埋土は3層に分層され、鉄滓・炉壁片のほかに鉄磁石も出土している。なおこの土壤の東隣にも、土壤6と類似した壁面への掘り込みがみられる。
(岡本泰)



第192図 土壌 8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌 8 (第183・192図、図版4)

土壌 7 の南東に位置し、製鉄関連遺構群の南端付近で検出された土壌である。西端部が不明瞭であるが、長さ195cm、残存幅170cmを測り、方形の土壌と考えられる。検出面からの深さは15cm程度で壁面の傾斜は緩く、底面はあまり整形されておらず不安定な形状であった。埋土中からは多量の木炭・鉄滓・炉壁片のほかに、底面から浮いた状態で焼け歪みのある須恵器の杯蓋 1 が出土している。

1 黄褐色粘性砂質土
10TR1/2 (鉄滓・か壺多く含む)

この須恵器蓋は、7世紀初め頃に位置づけられるものであり、製鉄炉群の操業時期を推測するうえで、参考とすべき資料といえる。(岡本泰)

4 その他の遺構

たわみ (第182・193図)

製鉄炉 1 の南側で、南北約3m、東西約2.5mにわたって、木炭や焼土などを多く含む層が複雑に堆積した状況が認められた。複数の遺構が重複している可能性があるが、個々の遺構を認識できず、たわみとして報告する。性格は不明であるが、製鉄炉 1 と何らかの関連を有すると思われる。(岡本泰)

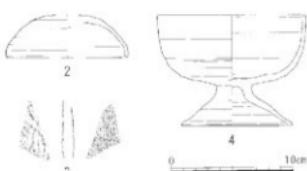


- 1 黄褐色粘性砂質土 10TR5/2 (木炭・木炭含む)
- 2 黄褐色粘性砂質土 10TR6/6 (木炭多く含む)
- 3 にぶい黄褐色土 10TR6/4 (木炭含む)
- 4 黄褐色粘性砂質土 10TR8/3 (燒土・木炭多く含む)
- 5 にぶい黄褐色土 10TR6/4
- 6 灰褐色粘性砂質土 10TR8/2 (木炭などが木炭層)
- 7 灰褐色粘性砂質土 10TR4/2 (燒土多く含む)
- 8 黄褐色粘性砂質土 10TR8/2
- 9 黄褐色粘性砂質土 10TR6/6
- 10 にぶい黄褐色土 10TR4/3 (木炭・焼土含む)
- 11 黄褐色粘性砂質土 10TR6/6
- 12 黄褐色土 10TR6/6
- 13 にぶい黄褐色粘性砂質土 10TR7/4
- 14 にぶい黄褐色土 10TR5/3 (木炭・焼土含む、刃付)

第193図 たわみ断面図 (1/60)

その他の遺物 (第194図、図版43・46)

製鉄遺構に伴う土器はきわめて少ない。2・3は製鉄炉 1 廃絶後、製鉄炉 3 を築くまでの盛土内に含まれていた杯蓋と甕の小片である。4は斜面下方に堆積した鉄滓・炉壁屑の中に混入していた台付碗で、口径12.0cm、器高9.1cmを測る。



第194図 製鉄炉周辺出土遺物 (1/4)

5 製鉄関連遺物

炉壁・鉄鉱石・鉄滓ほか（第195～199図、図版46～48）

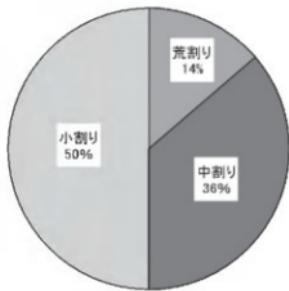
製鉄遺跡という性格上、出土遺物のほとんどは炉壁片・鉄滓・鉄鉱石など、製鉄作業に直接関わるものであった。その出土総重量は約1.5tにも及んだため、全点を持ち帰ることはできず、現地で水洗作業を行い、形態などから炉の構造や作業工程をある程度反映すると思われる個体のみを選別した。また、本書に掲載できたのはその中のさらにごく一部であることを断っておく。

炉壁・鉄滓等は、製鉄炉群よりも下方（西側）の排滓場から最も多く出土したほか、下部構造の埋土や嵩上げ時の盛土、製鉄炉周辺の土壤理上にも多く含まれていた。主要なものについては大澤正己氏に分析を依頼しており、鉄鉱石と砂鉄の双方が原料に用いられたとの結果をいただいている。その結果に基づきつつ、各遺物について概観する。

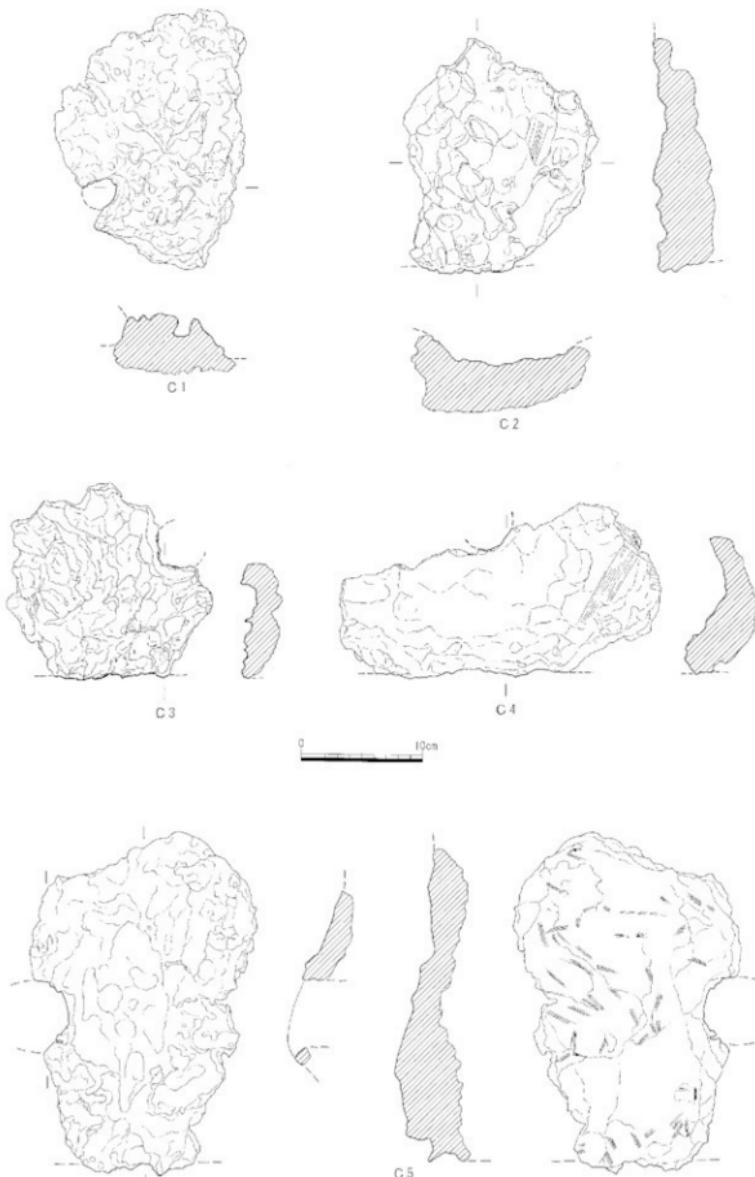
C 1～C 5は炉壁片である。いずれも炉の内側が剥落した状態のもので、本来の壁の厚さのわかる資料は出土していない。炉壁の構築にはスサを混ぜた粘土を使用している。内面は高温で溶融して黒色のガラス質となり、下方へ垂れたような外観を呈するものが多い。また、内面には鉄鉱石とともに投入された木炭の圧痕がしばしば認められる。C 2～C 5には炉壁下端の接地面が残っている。C 1・C 3～C 5には円形の送風孔が認められる。送風孔の下端は底部から8～10cm内外の位置にあり、若干内傾しているようである。

鉄鉱石は計22点が出土し、その全点を図示した。ほとんどは鉄滓屑に混入していたものであるが、S 6・S 7は土壤3、S 18は土壤5からの出土である。いずれも磁石に強い反応を示した。重量は、最小のS 21で14.27g、最大のS 3で1528.20gまでの幅がある。100g以下を小割り、500g以下を中割り、500gを超えるものを荒割りとした場合、第195図のように小割りが11点で半数を占め、荒割り段階のものは少ない。一方で、粉碎工程を経た粒状や粉状のものが検出されていない。厳密な水洗・乾燥・磁石による選別作業を行ってはいないので、実際の組成にこれらが含まれていないとは断言できない。S 8・S 14・S 20～S 22のように、表面に熱を受けたものが散見されるので、鉄鉱石を焙焼・粉碎する工程が存在したことは間違いない。大澤氏に分析を依頼したS 2・S 8については、鉱物名は磁鐵鉱で、脈石鉱物は少なく高品質のものとのことであった。

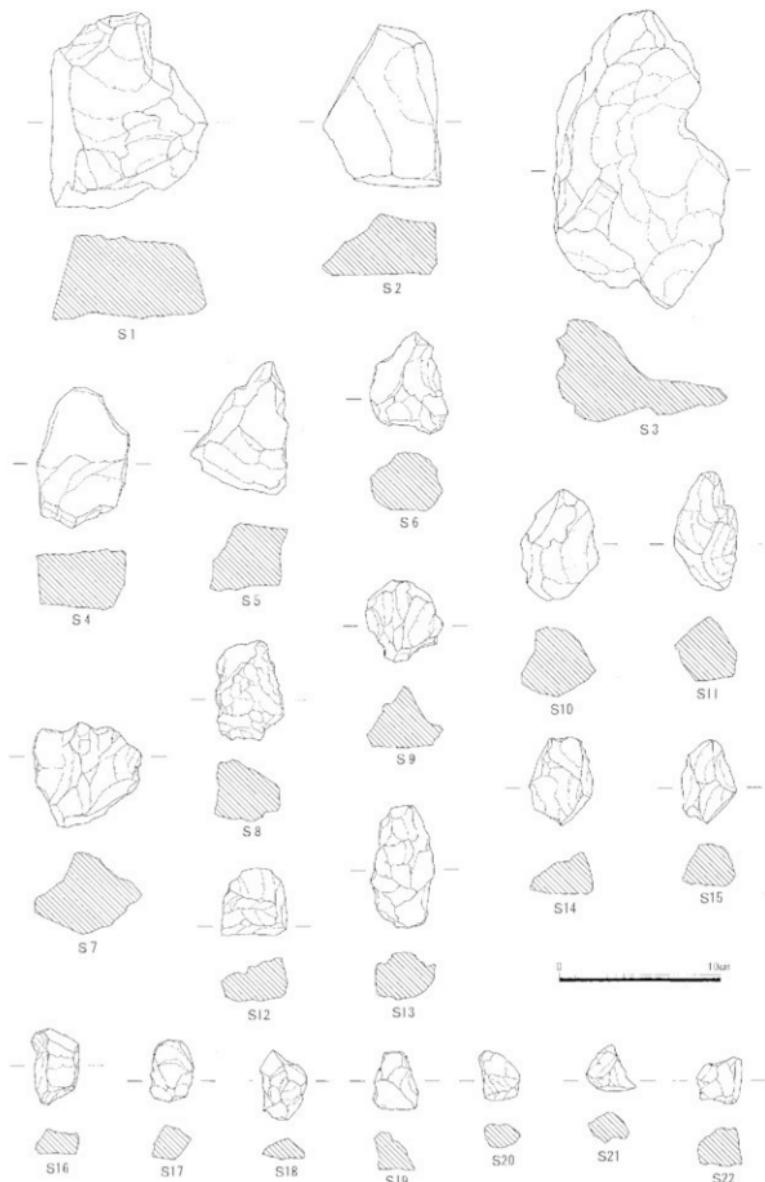
M 1～M 18は各種の鉄滓である。M 1～M 3は工具痕付着滓で、いずれも断面が円形を呈する棒状の工具の痕跡が残っている。M 2は、鉄滓を搔き出した際に工具の先端に付着した状況が見てとれる。M 5・M 7は流出済滓であり、細長い形状を呈し、下面には砂礫が多く付着している。M 4・M 6は炉底塊である。いずれも下面是塊状にカーブし、炉床が付着している。M 6は分析結果によれば、砂鉄を用いた製鉄に伴う。M 8～M 10は炉外流出滓で、表面は流動状を呈する。M 8は分析の結果、砂鉄製錬に伴う鉄滓と判明した。M 11～M 13は流出孔滓と考えられる。いずれも、炉内からの流出孔の形状に規制されて細長い形状を呈する。M 14は炉内滓である。M



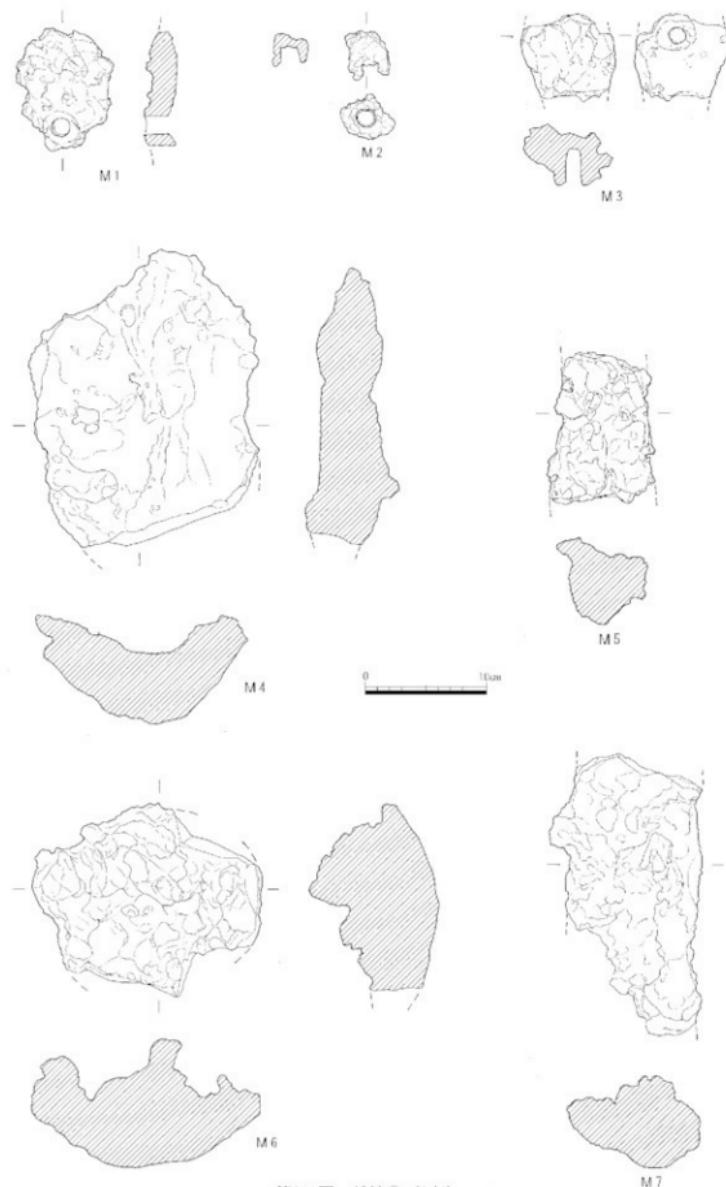
第195図 鉄鉱石の重量別の比率



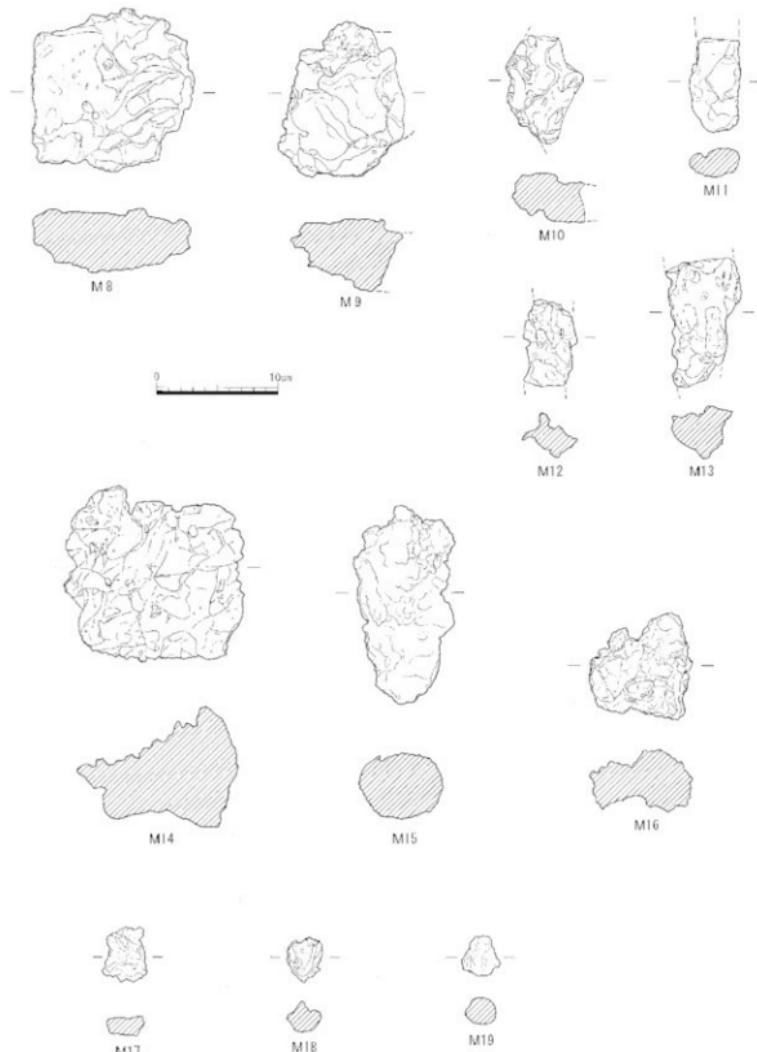
第196図 炉壁 (1/4)



第197図 鉄鉱石 (1/3)



第198図 鉄滓① (1/4)



第199図 鉄滓②・黒鉛化木炭・鉄塊系遺物 (1/4)

15の鉄滓は断面が円形に近く、全体に裸が多く付着する。M16は炉内残留滓である。M17は、木炭に鉄が置換した黒鉛化木炭で、砂鉄製錬に用いられた木炭の破片である。M19は鉄塊系遺物である。砂鉄製錬に伴うもので、金属組織などの特徴から冷却速度は速く、水冷の可能性が考えられる。 (岡本泰)

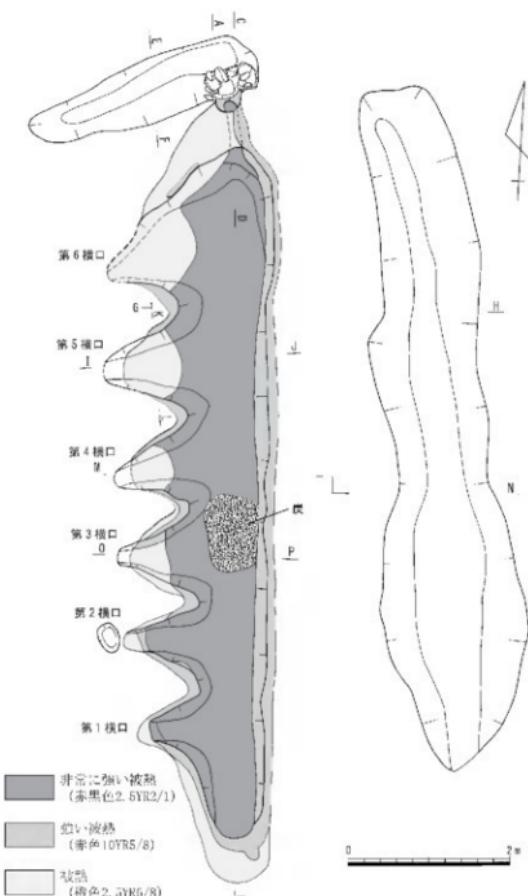
6 横口付製炭窯

横口付製炭窯1 (第181・200・201図、巻頭図版5、図版44・45)

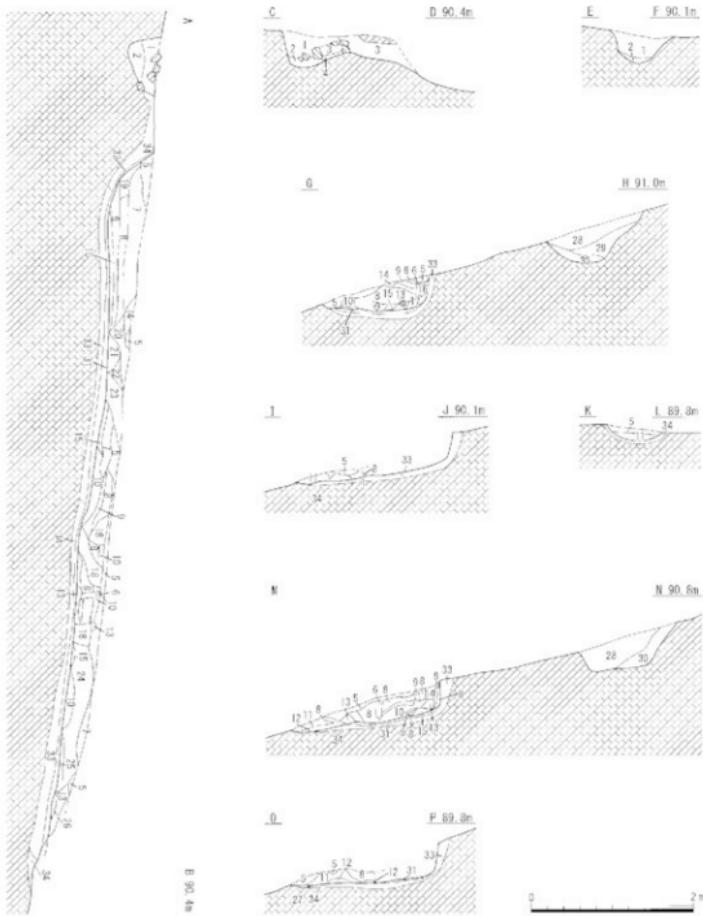
調査区中央部、製鉄炉群が存在する同じ丘陵西斜面の上部に位置しており、製鉄炉2からは南に15m離れている。今回検出された製炭窯はその大部分が崩壊しており、床面と地山を削り出すことで築かれた山側の側壁の一部が、高さにして40cm程度残存している状態であった。また、天井部や側壁の大部分は第201図に示

したように、崩れて何層にも積み重なった状態で焼成部に堆積していた。

製炭窯は、等高線に沿って斜行して築かれており、煙道側にあたる北側が高く、焚口側の南側が低くなっている。製炭窯の規模は全長で10.4m、焼成部の残存長は8.5m、焼成部幅は85cmである。焼成部は半地下式で大部分が地山を削り出して構築していたものと考えられる。山側の側壁は、ほぼ垂直に立ち上がりておらず、赤色に被熱していた。焼成部の床面は非常に強く焼け固まっており赤黒色を呈していた。焼成部は焚口側から煙道へ向かって床面が緩やかに上がりており、床面の傾斜角度は7.1度であった。なお、焼成部の中央付近では床面に段差が認められ、拡張の痕跡とも考えられたが、



第200図 横口付製炭窯1平面図 (1/60)



- | | |
|----------------------------------|--|
| 1 黄褐色砂質土 2.5Y5/3 (灰・燒土混じる、溝道埋理土) | 18 暗褐色土・棕褐色土 10YR1/1 - 5YR7/8 |
| 2 黒褐色砂質土 2.5Y5/2 (灰・燒土混じる、溝道埋理土) | 19 明黃褐色土・灰黃褐色土 10YR7/6 - 10YR5/2 |
| 3 灰褐色土 7.5YR1/2 (溝道埋理土) | 20 にぶい褐色土 7.5YR5/3 |
| 4 黑褐色土 10YR3/1 | 21 にぶい黄色砂質土 2.5Y6/4 |
| 5 灰褐色土 1.5YR5/2 (新しい堆積土) | 22 にぶい褐色土 1.5YR5/3 |
| 6 灰褐色土 7.5YR5/2 (木の根) | 23 1.5YR5/2・1.5YR6/1 - 明赤褐色土 2.5YR6/3 - 2.5YR5/6 |
| 7 明赤褐色土 2.5YR5/6 | 24 暗褐色土 1 - 深黄褐色土 10YR5/2 - 7.5YR8/6 |
| 8 棕色土 5YR7/8 | 25 棕色土 2.5YR6/5 |
| 9 浅黄褐色土 7.5YR8/6 | 26 棕色土 2.5YR7/8 |
| 10 にぶい赤褐色土 2.5YR5/4 | 27 鹿鳴褐色土 5YR5/1 (灰混じる) |
| 11 田褐色土 10YR3/1 (炭・燒土多く含む) | 28 にぶい黄色砂質土 2.5YR6/4 (上方埋理土) |
| 12 灰黄褐色砂質土 10YR5/2 (灰・燒土含む) | 29 明黃褐色砂質土 10YR6/6 (上方埋理土) |
| 13 棕色土 2.5YR5/8 | 30 黃褐色土 10YR7/8 (上方埋理土) |
| 14 にぶい赤褐色土 2.5YR1/4 | 31 棕黒褐色土 2.5YR2/1 (本當に塑性・被熱、燒成部床) |
| 15 明黃褐色砂質土 10YR7/6 | 32 にぶい黃褐色土 10YR7/4 (被熱) |
| 16 にぶい黃褐色砂質土 10YR6/3 | 33 棕色土 10YR6/8 (塑性・被熱) |
| 17 黄褐色砂質土 10YR5/8 | 34 棕色土 2.5YR6/8 (被熱) |

第201図 横口付製炭窯1断面図 (1/60)

被熱状況や其盤の土層に差異は認められず、元々の地質に起因したものと考えている。焼成部中央南付近の床面上には炭片が密に散布していたほか、焼成部への堆積土中にも床面に近いあたりで炭片をいくつか検出している。

谷側にあたる炭窯西側では、焚口側の第1横口から数えると第6横口までの計6孔の横口を確認している。いずれも天井や側壁は残存しておらず、第1横口から第5横口はその床部を検出している。また、第6横口については、床部についてもほとんど残存しておらず、床下の橙色に被熱した範囲を確認するにとどまった。横口の規模については、いずれも焼成部から1mほど谷側に突き出しており、20cm程度の幅で開口していたものと思われる。第3～第5横口の床部出口付近には、炭片や焼土片の堆積が確認でき、横口が炭の抜き出し口としても機能していたと考えられる。

製炭窯南端の焚口部については、削平を大きく受けているが、残存しておらず、焚口に使用されていたであろう石材等も確認できなかった。残存状況や被熱状況から、焚口の幅は60cm程度であったと推定されるが、構造等の詳細は不明である。製炭窯の北側に設けられた煙道は、焼成部床面の30cm上方から長さ70cm、径30cmでトンネル状に掘り抜かれていた。煙道の出口にあたる煙出し穴は大半が崩壊し、本来の形状をとどめていなかったが、付近の埋土には焼石が落ち込んでいたほか、石組基部の1段分が現位置で残存しており、煙突状の右組が付随していたようである。煙出し穴の掘り方には、西側の斜面下方に向かって幅75cm、長さ2.95mの煙道排水溝が取り付いていた。また、製炭窯の上方には、平行して長さ8.4m、幅1.0～1.8m、深さ45cmの上方溝が掘削されており、斜面上部からの雨水等の排出のために機能していたものと考えられる。なお、上方溝の埋土中からは鉄滓が1点出土している。

炭窯南側の焚口の南側や横口が開口する西側の谷部には、製炭窯操業時には半坦面を作り出し、作業面を確保していたものと想定されるが、大部分が削平もしくは流失しており、明確に作業面として捉えられるものは検出できなかった。また、第2横口のすぐ西側に深さ10cm程度のピットを検出しているが、炭窯との関連は不明である。炭窯の周辺についても精査したが、柱穴やピット等は他に認められなかった。

炭窯本体からの土器等の出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。しかし製炭窯は、検出状況やその位置関係を見ても、北側で検出された製鉄炉で使用する木炭を生産していた可能性がきわめて高く、製鉄炉と同時期のものと考えられる。製鉄炉周辺からは、6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出上っているので、操業期間もこの年代に近いものと思われる。なお、炭窯焼成部床面で集中して検出された木炭片の放射性炭素年代（AMS法）は1σでAD550～630年、2σでAD530～650年となり6～7世紀代である。一方、地磁気年代ではAD690±20年で、7世紀後半を示した。また、木炭の樹種はコナラ属コナラ節であった。北側の製鉄炉1・2で検出された木炭片の樹種も、製炭窯のものと同じコナラ属コナラ節であった。

(石田)



写真11 横口付製炭窯1作業風景

第3節 その他の遺構・遺物

1 概要

製鉄関連以外の遺構・遺物は極端に少なく、南半部で堅穴住居・掘立柱建物・道状遺構などがみられる程度である。これ以外にも散発的に柱穴が検出されているが、建物にまとまるものはなかった。この他、図示していないが、近世ないし近代以降の柱穴列や溝、塀の段なども検出された。(岡本泰)

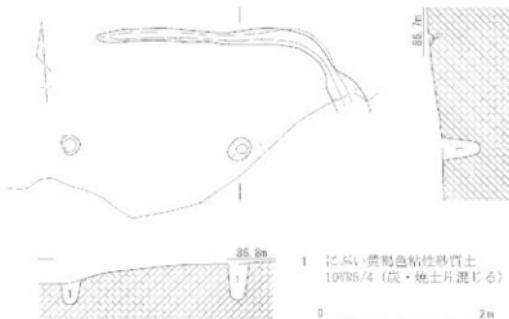
2 遺構・遺物

堅穴住居1 (第181・202図、図版45)

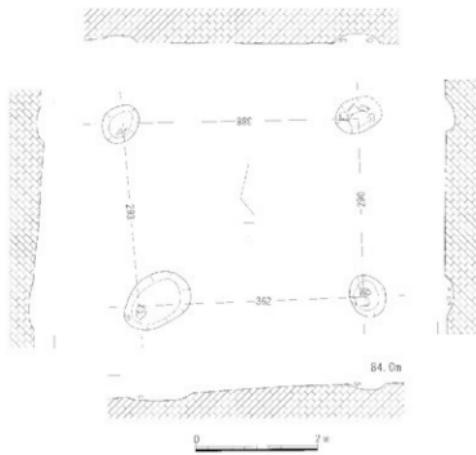
調査区の南端付近で検出された方形と考えられる住居である。削平が激しく、北東隅の壁体溝の一部と柱穴が2個検出されたのみである。2個の柱穴はほぼ同一レベルに掘削されていた。柱穴が4本柱で均整な配置とすれば、一辺約5mの住居に復元される。時期は不明であるが、方形という形態からは古墳時代と想定され、北端部の製鉄遺構に近い可能性もある。(岡本泰)

掘立柱建物1 (第181・203図)

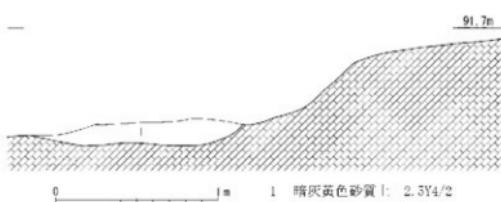
南側の追加調査区において、近世ないし近代以降とみられる柱穴・柱穴列・溝などが検出されている。その中から、配置的に建物の可能性のあるものとして1棟を抽出したが確実ではない。1×1間の建物で、床面積は11.1m²を測る。各柱穴は梢円形を呈し、削平のため残りが悪いが、根固めのためと思われる礫が残存していた。出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。(岡本泰)



第202図 堅穴住居1 (1/60)



第203図 掘立柱建物1 (1/80)



第204図 道状遺構1 (1/30)

が、南端部はさらに調査区外にのびている。この遺構の北端付近にはかつて墓地があったとされ、そこへ参るための墓道であった可能性がある。わずかに出土した陶器片などから、近世以降のものと考えられる。

(岡本泰)

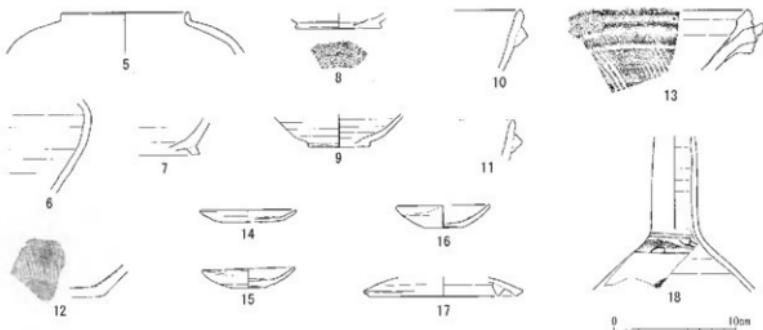
その他の遺物 (第205図)

以下に掲載する遺物は、調査地内において表採されたものや、製鉄遺構を検出する過程で堆積土中から出土したものなどである。出土量は少なく、またほとんどが小片である。

5・6は製鉄炉上面の堆積土中に混入していたもので、焼成や胎土からみて同一個体の可能性があり、奈良時代の短頸壺でいわゆる「薬壺」の形態と考えられる。7は表採された壺の底部である。8・9は勝間田焼の椀の底部である。いずれも削り出し高台で回転糸切り痕が残る。10・11は中世の瓦質土鍋の口縁部である。12は瓦質の擂鉢の底部である。13は備前焼撞鉢の口縁部で片口が認められる。14は土師質土器の小皿で内外面に煤が付着している。15・16は近世の施釉陶器の小皿、17は蓋である。18は肥前系磁器の徳利で、外面に染付による文様が描かれている。

以上のような遺物から、古代～中世にかけてもこの地で何らかの活動が営まれたことは十分考えられるが、それに伴う遺構は大部分が後世の削平によって消滅したようである。

(岡本泰)



第205図 その他の遺物 (1/4)

第4節　まとめ

1 製鉄炉について

下坂遺跡においては、調査区北端の造成面から3基の製鉄炉跡が検出された。いずれも、地面を方形に掘り窪めた地下構造と排滓溝を有し、その内部や周辺部には被熱による著しい赤色化が認められた。3基の差別化は、製鉄炉1と3については前者が後者に先行することが明らかであるが、製鉄炉2はやや下方の離れた位置にあって周辺部の削平も激しく、その先後関係を明確にできない。ただ、一般的には操業の進行に伴って製鉄炉を移築する場合、元の位置よりは上方へ移くことが普通であると思われる所以、ここでは製鉄炉2→1→3という順序を考えておきたい。

次に、検出された地下構造や出土した炉壁・鉄滓などを手がかりとして、下坂遺跡における製鉄の様相を考えてみたい。なお、3基のうち製鉄炉3は残存状態が極めて悪いので、ここでは製鉄炉1・2を中心を見ていくこととする。最も残りの良い製鉄炉1は、斜面に造成された平坦面上に築かれている。ほぼ四面を東西南北に向ける下部構造の両側に排滓溝を取り付き、周囲には上屋の柱穴が伴っている。また、下部構造の山側には台形の周溝が巡り、さらに防湯のためとみられる細い溝が下部構造の壁際に巡るという入念な構造を有している。さらに炉の背後には複数の土壙が認められ、製鉄に伴う何らかの作業、例えば炭の置き場などとして使用された可能性がある。この炉の下部構造で特徴的なのは、掘り方壁面が東西にのみ存在し、南北は壁が立ち上がりずにそのまま排滓溝の底部につながっている点である。岡山県内でこのような下部構造をもつた例としては、赤磐市（旧赤磐郡熊山町）の猿喰池製鉄遺跡の1号炉⁽¹⁾などがある。本遺跡のように明確な上屋の柱穴をもつものは少ないが、猿喰池製鉄遺跡の1号炉と和氣郡和氣町の八ヶ美製鉄遺跡の製鉄炉2⁽²⁾が例として挙げられる。また、製鉄炉1の背後に設けられた周溝は、規模はかなり異なるものの、総社市の千引カナクロ谷製鉄遺跡の2・4号製鉄炉⁽³⁾に類似が認められる。製鉄炉2は、正方形に掘り窪められた下部構造の両側に赤色被熱面が広がっており、排滓溝の存在は疑いないが削平のため残しておらず、他に伴う施設も不明である。炉本体の形状については、地下構造が方形である点、および出土した炉壁片が直線的な形状をもつ点からみて、おそらく方形ないしそれに近いものであろう。炉壁片が小片かつ剥落したものばかりであるため、炉の規模や炉壁の厚さは不明である。また、出土した炉壁片をみると限りでは、炉底面から8~10cm程度のところに、やや内傾した送風孔が開けられていたようである。

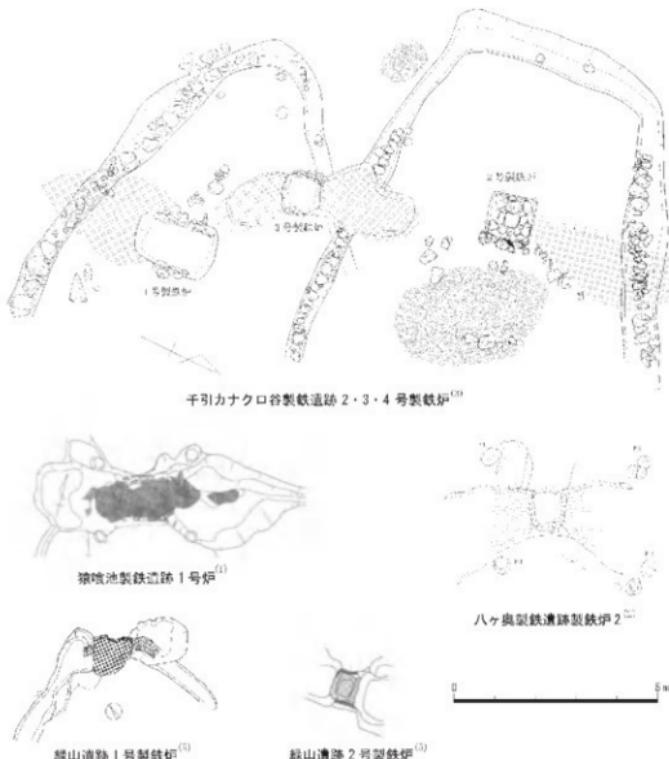
鉄滓については、大津正己氏による分析の結果、製鉄原料として砂鉄と鉄鉱石の両者が用いられたことが判明した。鉄滓の層位別取り上げを実施していないため、この両者が先後関係にあるのか、同時に行われていたのかは不明である。こうした鉄鉱石と砂鉄を併用する製鉄遺跡の類例としては、先に挙げた八ヶ美製鉄遺跡があり、吉井川とその支流域でいくつか発見されている。

年代については、出土遺物、木炭の炭素14年代、そして熱残留磁気の三つが手がかりとなる。まず遺物であるが、いずれも炉の周辺から出土したものである。土壤8出土の須恵器1は身か蓋かの判断に迷うものであるが、一応杯蓋と考えておき、その場合は7世紀前半に位置づけられる。他に、盛土内出土の杯蓋2、鉄滓層内出土の台付椀4があり、ほぼ同じ時期とみられる。木炭の炭素14年代は、製鉄炉1の場合は1σでAD640~670年、2σでAD610~690年となり、7世紀代のどちらかという

と半ばから後半である。一方、熱残留磁気では $AD680 \pm 25$ 年で、7世紀末を示す。製鉄炉 2 では、最下層に包含された木炭の炭素14年代は 1σ で calAD660~690年、 2σ で calAD640~770年であり、7世紀後半に近い年代が出ている。熱残留磁気による年代は AD650 ± 30 年で 7世紀半ばである。

以上のように、いずれもほぼ 7世紀代におさまる数値ではあるが、の中でも半ばから後半にかけの結果となっており、土器の示す年代とはややずれがみられる。操業がある程度長期間であれば、数値に幅が出るのはあり得ることで、いずれにしても 7世紀代よりも下ることはないであろう。

さて、下坂遺跡の製鉄炉の下部構造はほぼ正方形をなしており、安倉清博氏のいう「方形炉」に該当する⁽⁴⁾。このような形態の炉は、おおむね岡山県南部において一般的であると考えられ、6~7世紀代において鉄鉱石製錬が主であった地域とほぼ一致している。一方、砂鉄製錬を専らとした同時期の津山盆地周辺では、かの形態は長方形箱形炉と呼ばれるものが主流である。以上のような点から、



第206図 岡山県内の製鉄炉 (1/120)

下坂遺跡の製鉄炉は南部の系譜を引くものといえよう。また、津山市の緑山遺跡⁽³⁾の製鉄炉は長方形箱形炉か方形炉かの判断は難しいが、形態からは方形としても良いように思われ、この形態の炉の分布が、吉井川沿いに津山盆地周辺にまで及んでいる様子がうかがわれる。以上のように、長方形箱形炉・砂鉄製錬の北部と、方形炉・鉄鉱石製錬の南部との狭間にあって、下坂遺跡の製鉄炉は基本的には南部の系譜を引くものの、砂鉄製錬という北部的な要素も併せ持つており、両者の中間的な様相を示すものといえる。あるいは、鉄鉱石製錬から砂鉄製錬という流れの中で、その過渡期に位置づけられるものかもしれない。

(岡本泰)

2 横口付製炭窯について

下坂遺跡で検出した横口付製炭窯は1基のみであるが、岡山県内においては、これまで120基近くの横口付製炭窯が検出されている⁽⁶⁾。下坂遺跡の近辺では勝田郡勝火町勝火中核工業団地第Ⅵ調査区⁽⁷⁾、津山市緑山遺跡⁽⁸⁾の例があり、緑山遺跡では9基の横口付製炭窯が検出されている。下坂遺跡の製炭窯に類似するものは、規模や煙道排水溝、上方溝などの構造の点からみると緑山遺跡2号窯が挙げられる。緑山遺跡2号窯は遺跡内で検出された製炭窯の中でも最古のもので、6世紀後葉と下坂遺跡の製炭窯に近い年代が想定されている。下坂遺跡と緑山遺跡の製炭窯は構造が類似し、時期や地理的にも近いことから、同様の技術基盤の上に構築されたものと推測される。

横口付製炭窯の用途については議論があり、製炭以外の用途では鉄鉱石焼成粉砕炉説⁽⁹⁾等が提示されている。下坂遺跡では窓内から鉄鉱石は検出されておらず、窓の床面で木炭片の分布が認められた。検出された木炭片の樹種はコナラ属コナラ節で、製鉄炉で見つかった木炭片の樹種とも一致していることから、北側で検出された製鉄炉に供給する木炭を生産していたことは、まず間違いないと思われる。生産した木炭が黒炭か白炭かについても議論があるが、各地で検出されている横口付窯跡を検討し、その構造の特徴から白炭的な木炭生産を想定する十椿武氏の見解⁽¹⁰⁾を参考にすると、下坂遺跡で検出された製炭窯は、窓壁が酸化色を呈し、タールが付着しない点で白炭的な生産が考えられる。以上のことから、下坂遺跡検出された古墳時代後期の製鉄関連造構群は、製鉄炉に製炭窯が伴っている明確な事例の一つであり、美作東部における初期の鉄生産の様相やその技術系譜を考える上でも、重要な造構群であると思われる。

(石田)

註

- (1) 白神賢士編「猿吹池製鉄遺跡」熊山町教育委員会 2004
- (2) 光永兵一「八ヶ奥製鉄遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告178 岡山県教育委員会 2004
- (3) 武田恭彰「千引カナクロ谷製鉄遺跡」『曳坂遺跡群』経社市埋蔵文化財発掘調査報告15 経社市教育委員会 1999
- (4) 安倉清博「吉備の製鉄炉－方形炉について－」『古代吉備』第24集 古代吉備研究会 2003
- (5) 中山俊紀編「緑山遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集 津山市教育委員会 1986
- (6) 安倉清博「製鉄炉と製炭窯－ハッカ目観察－」『古代吉備』第22集 古代吉備研究会 2000
- (7) 山野東平編「勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」勝央町教育委員会 1976
- (8) 註5文献
- (9) 小井洋輔「古代製鉄炉に関する一考察」『偏前刀研究』六 偏前刀学会 1992
- (10) 上梅 武「横口付窯跡による生産内容の復元」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会 2004

付載 1 大河内遺跡の地形の概要

島根県立三瓶自然館 中村唯史

地形の概要

大河内遺跡は、瀬川（吉野川水系）の左岸にあり、周辺は標高90～100m程度の盆地となっている。周囲には盆地面との比高40m程度の段丘が分布し、さらにその周囲は標高300m程度までの比較的なだらかな丘陵地である。

当地一帯の地形を巨視的にみると、中国山地の瀬戸内側に広がる高原地形の一角である。中国山地の瀬戸内側には幾段かの高原面が明瞭に発達し、高い方から道後山面（標高1,000m以上）、吉備高原面（標高500m前後）、瀬戸内面（標高300～100m）に大別されている。個々の地形面は河川による浸食作用により形成された準平原で、中国山地の隆起に伴って古い地形面ほど高位に取り残され、全体として階段状になったものである。当地一帯は瀬戸内面に相当する。標高300m程度までの丘陵が構成する地形面を瀬川が浸食する過程で、比較的小規模な平坦面（河岸段丘）が形成され、冒頭に述べた地形が形成された。盆地の周辺は、北側には盆地面との比高40m程度の段丘面が広く分布しているのに対し、南側ではこれに対応する地形面の範囲が狭く、やや起伏が大きい。また、南側では盆地と丘陵の境界が北西-南東方向の直線的な地形をしている。この直線的な地形は、それほど明瞭なものではないが、東は吉野川、西は西勝間田付近まで5km以上連続して認められる。これは断層などの構造運動に伴う直線地形（リニアメント）とみられ、この構造が盆地の形成に関係している可能性がある。なお、当地では活断層は確認されていないが、当地の北方約20kmには近隣では最大級の活断層の「山崎断層帯」がある。その主断層の方向は当地の直線地形と同じ北西-南東である。

遺跡内の状況

発掘調査が行われた範囲では、拳大から人頭大程度の円謫～亜円謫を含む礫層の分布が確認されている。この礫層の直上で縄文時代草創期の石器が出土している。石器は礫層の上面および直上の粗砂層から多量に出土している。発掘調査では粗砂層に縄文時代中～後期の遺物が混じることが確認され、石器は原位置を保ってはいないものの、近距離からの移動と判断されている（岡本、2007）。石器はある程度まとまった範囲に集中して面的に出土し、礫層中には含まれてはいないことから、礫層は縄文時代草創期以前に堆積した地層とみられる。この礫層は構成礫が比較的大きくてある程度粒径が揃っており、少なくとも調査範囲よりも広い範囲に面的に連続する地層であることから、瀬川によって供給された堆積物と考えられる。

調査範囲の南東部では深い谷地形が認められる。谷を充填する堆積物は、泥分を多く含んだ連続性が悪い薄い地層で、小規模な水流で供給されたとみられる。

堆積物の特徴などから、大河内遺跡の成立に至る地史は次のように考えられる。

縄文時代草創期以前のある時期、増水した瀬川によって供給された礫が堆積し、遺跡の地盤となる礫層が堆積した。その後、基本的に氾濫原の環境だった当地付近で縄文人の生活が営まれ、出土した石器等が用いられた。生活面は特定されていないが、おおまかには礫層が構成する地形面上ととらえて差し支えないと思われる。縄文時代中～後期またはそれ以降には、小規模な水流により浅い谷地形

が形成された。谷地形の中はある程度の厚さの堆積物が充填しているが、その他の地点では礫層の上位の地層は薄く、特に滝川に由来すると判断できる粗粒堆積物は認められない。当地への堆積物供給量が少なかったため、草創期の面はほとんど保存されず、中心部と推定される調査範囲の北側では削剝によって失われた。

岡本泰典（2007）縄文草創期の石器類・岡山県大河内遺跡。季刊考古学、98、81-82。



photo1 西側上空から見た大河内遺跡付近

大河内遺跡は滝川が流れる盆地の一角にある。写真中A付近は盆地との比高40mの段丘。写真中B付近の丘陵は標高200m台で、頂部の段高性が明瞭である。この丘陵頂部の地形面は、瀬戸内面に対応する。



photo2 大河内遺跡の地盤を構成する礫層

縄文時代草創期の遺物は、当地の地盤をなす礫層の直上から出土した。礫層は草創期以前に滝川の増水によって堆積したものである。

付載2 大河内遺跡出土サスカイトの産地分析および土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

I 大河内遺跡出土サスカイトの産地分析

1. はじめに

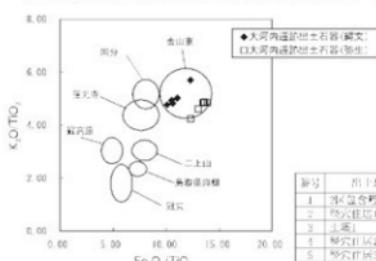
大河内遺跡出土の縄文時代および弥生時代のサスカイト製石器の石材产地について検討した。このサスカイト(安山岩)の原産地としては、西日本にいくつかの产地が現在までわかっている。そこでサスカイト製石器の石材がどこの原産地原石を使用して製作されたか、理化学的な石材分析を実施し产地推定を行った。

2. 分析方法および試料

分析は蛍光X線分析法で実施した。この分析法は石器石材に含まれる成分(元素)量を測定するもので、その成分量の違いから石材の产地を推定する方法である。なお、サスカイト製石器の表面は風化がある程度進んでいると、その石材の定量性が劣ることがあるため表面の風化部分をエアーブラシにより削る必要がある。そのため一部破壊分析である。測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーアンスルメンツ社製SEA2010(L))を使用し、 SiO_2 ・ TiO_2 ・ Al_2O_3 ・ Fe_2O_3 ・ MnO ・ MgO ・ CaO ・ Na_2O ・ K_2O ・ P_2O_5 の10元素を測定した。第1表の出土試料分析値一覧表から TiO_2 (チタン)・ Fe_2O_3 (鉄)・ CaO (カルシウム)・ K_2O (カリウム)の各元素に顕著な違いがみられる。そこで $\text{Fe}_2\text{O}_3/\text{TiO}_2$ 比、 $\text{K}_2\text{O}/\text{TiO}_2$ 比をとりXY散布図を作成し、产地推定を行った。大河内遺跡出土石器の分析試料は第1表に示した10点で、時期は縄文時代が5点、弥生時代が5点(いずれも細片、時代は風化度から推定)である。

3. 分析結果

第1図 $\text{K}_2\text{O}/\text{TiO}_2-\text{Fe}_2\text{O}_3/\text{TiO}_2$ 散布図は、サスカイトの原産地分布域を示している。この散布図に大河内遺跡出土の縄文時代と弥生時代の石器をプロットした。その結果、すべて香川県坂出市金山東の原産地分布域に分布した。したがって、大河内遺跡出土のサスカイト製石器は、時期に関係なくすべて金山東産と推定された。



第1図 大河内遺跡出土サスカイト製石器の原産地推定

第1表 大河内遺跡出土石器分析値一覧表

単位: $\text{SiO}_2-\text{P}_2\text{O}_5$ (%)

番号	出土地点	時期	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5
1	大河内遺跡	縄文時代	55.0%	0.4%	15.8%	5.28	0.17	1.3%	2.1%	2.18	2.2%	0.13
2	大河内遺跡	縄文時代	55.2%	0.4%	16.8%	6.29	0.18	1.1%	1.1%	3.9%	2.11	0.11
3	大河内遺跡	縄文時代	55.1%	0.4%	16.9%	6.12	0.18	1.3%	4.9%	3.3%	2.1%	0.08
4	大河内遺跡	縄文時代	61.9%	0.4%	17.9%	6.07	0.15	1.5%	3.8%	3.47	2.17	0.13
5	大河内遺跡	縄文時代	65.14	0.51	16.52	6.30	0.17	1.4%	4.02	2.52	2.17	0.11
6	大河内遺跡	縄文時代	67.98	0.4%	16.11	4.95	0.17	1.2%	5.6%	2.69	2.36	0.09
7	大河内遺跡	縄文時代	66.72	0.4%	16.42	4.72	0.12	1.6%	5.5%	3.65	2.23	0.12
8	大河内遺跡	縄文時代	67.11	0.4%	16.74	4.89	0.11	1.2%	5.3%	3.46	2.23	0.11
9	大河内遺跡	縄文時代	68.06	0.4%	16.19	4.86	0.11	1.4%	5.41	2.67	2.29	0.07
10	大河内遺跡	縄文時代	67.55	0.4%	16.18	4.92	0.11	1.4%	5.54	3.15	2.28	0.05

II 大河内遺跡出土土器の胎土分析

1. 分析目的

この分析では、大河内遺跡から出土した縄文時代後期から中世にかけての土器について、理化学的

な胎土分析を実施し、以下の事柄について検討した。

- (1) 大河内遺跡出土の縄文時代後期の深鉢と弥生時代中期後葉の土器のあいだで胎土に差異があるかどうか。(2) 弥生時代中期後葉の土器が造構別、器種別に胎土に違いがみられるか。(3) 上塙25および包含層出土の勝間田焼(小皿、碗、壺、壺)と本遺跡の北東部に位置する及遺跡で検出された勝間田焼に使用されたと考えられる粘土を採掘した粘土採掘跡が多数検出されている。そこで、大河内遺跡出土の勝間田焼と及遺跡の粘土採掘抗出土粘土⁽¹⁾とを比較検討した。
- (4) 包含層から出土した瓦質土器の羽釜と鍋のあいだで胎土に違いがみられるか。また、周辺遺跡出土の羽釜、鍋と比較した。比較した遺跡は勝央町石仏上遺跡⁽¹⁾出土の土師器窯で焼成されたと考えられる鍋、鏡野町夏栗遺跡B3区出土⁽²⁾の鍋、釜である。

2. 分析試料

分析に供した試料は、大河内遺跡出土縄文土器、弥生土器、古代末～中世の各時期の土器19点である。また瓦質土器(羽釜、鍋)および勝間田焼の比較試料としては、鏡野町夏栗遺跡出土の鍋、釜と及遺跡出土の勝間田焼粘土採掘抗の胎土である。

3. 分析結果

理化学的な分析方法は、蛍光X線分析法で実施した。試料に含まれる成分(元素)量を測定するもので、その成分量の違いから胎土の差を推定する方法である。また蛍光X線分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L)を使用し、 SiO_2 ・ TiO_2 ・ Al_2O_3 ・ Fe_2O_3 ・ MnO ・ MgO ・ CaO ・ Na_2O ・ K_2O ・ P_2O_5 ・ Rb ・ Sr ・ Zr の13元素を測定した。試料分析値から TiO_2 (チタン)、 CaO (カルシウム)、 K_2O (カリウム)、 Rb (ルビジウム)、 Sr (ストロンチウム)の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

また蛍光X線分析法以外に実体顕微鏡観察法による胎土の差異を検討した。この方法は土器の表面に観察される砂粒(岩石・鉱物)の種類や大まかな含有量を調べる方法である。

(1) 蛍光X線分析結果

第2図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 、第3図 $\text{Rb}-\text{Sr}$ の散布図では、縄文土器(後期)と弥生土器(中期後葉)のあいだ胎土に差があるかどうか検討した。その結果、縄文土器と弥生土器は胎土が一致しなかった。

次に第4図および第5図の $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 散布図では、遺跡内出土の弥生時代中期後葉の土器が造構、器種の違いにより胎土に差があるかどうか検討した。その結果、造構や器種でそれぞれの土器に胎土の違いはなかった。ただ掲載番号58の堅穴住居11出土の壺が他の土器に比べ CaO 量が多い傾向にあった。

第6図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 、第7図 TiO_2-CaO 、第8図 $\text{Rb}-\text{Sr}$ の各散布図では、上塙25および包含層出土の勝間田焼の小皿・碗・壺・壺と本遺跡の北東部に位置する及遺跡で検出された勝間田焼粘土採掘跡の粘土および現在までに蓄積している勝間田焼窯跡試料(戸岩窯、七十荒窯、通上谷窯)と比較した。その結果、各散布図とも勝間田焼分布域内(粘土採掘抗の粘土を含む)に分布することがわかった。

第9図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 、第10図 $\text{Rb}-\text{Sr}$ 、第11図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 、第12図 $\text{Rb}-\text{Sr}$ の各散布図では、包含層出土の瓦質土器の羽釜と鍋のあいだで胎土に違いがみられるか。また、石仏上遺跡、夏栗遺跡出土の釜・鍋と比較した。なお、石仏上遺跡の試料は土師器窯で焼成されたと考えられる鍋である。

分析の結果、第9図、第10図では大河内遺跡内出土の羽釜と鍋のあいだで胎土に違いがあるかどうか検討したところ、両者とも胎土に差はみられなかった。また、石仏上遺跡と夏栗遺跡の鍋・釜と比

較したところ第11図、第12図の散布図でみると、大河内遺跡の羽釜・鍋は同じ地域の石仏上遺跡の鍋の胎土に類似していた。

(2) 実体顕微鏡観察法による結果

今回分析した上器の表面観察を実施したところ、以下のような砂粒が観察され分類された。

- 1類 …… 3mm以下の石英、長石を含むもの（掲載番号1縄文土器）
- 2類 …… 1mm以下の石英、長石と少量の雲母を含むもの（土壌1出土の弥生土器）
- 3類 …… 2mm以下の石英、長石（他の土器に比べ多い）を含むもの（掲載番号58弥生土器）
- 4類 …… 1mm以下の石英、長石と少量の雲母および多量の火山ガラスを含むもの（堅穴住居11出土の弥生土器）
- 5類 …… 2mm以下の石英、長石と多量の火山ガラスと少量の雲母を含むもの（包含層出土の瓦質土器）
- 6類 …… 1mm以下の石英、長石と火山ガラスと少量の雲母を含むもの（勝央町石仏上遺跡、鍋）

以上6種類の胎土に分類された。1類の縄文土器は明らかに含まれる砂粒が他の土器に比べ大きいことが分かる。また弥生土器のうち、2類（土壌1）と4類（堅穴住居11）の土器では、4類に火山ガラスが多量に含まれていた。3類は、他の土器より長石がやや多く含まれていた。5類と6類では砂粒構成は同じであったが、火山ガラスの量が5類に多く含まれていた。

4.まとめ

大河内遺跡出土土器の胎土分析を実施したところ、以下のことが明らかになった。

(1) 縄文土器と弥生土器の胎土比較では、両者の胎土は、蛍光X線分析および砂粒観察とも異なっていた。分析値では非常に近い値ではあったが、弥生土器の分布域に入らなかった。また砂粒観察では、砂粒構成（鉱物・岩石の種類）にはほとんど差はないが、含まれる砂粒の大きさが異なっていた。

(2) 弥生時代中期後葉の土器が遺構や器種で胎土に違いがあるかどうかでは、蛍光X線分析では掲載番号58の壺の胎土が異なっていた以外は、ほぼ1つにまとまり、胎土差はなかった。しかし、砂粒観察では土壌1と堅穴住居11出土土器のあいだで、砂粒構成に違いがみられた。それは堅穴住居11出土土器には、火山ガラスが多量に含まれている素地上が使用されていた。また、蛍光X線分析で唯一胎土が異なっていた掲載番号58（壺）の土器は、砂粒観察で長石が他の土器に比べやや多く含まれていた。したがって、この長石の違いで分析値のCaO量にも違いが出たと推測される。

(3) 土壌25および包含層出土の勝間田焼試料（小皿・碗・壺・壺）と及遺跡出土粘土採掘坑粘土との比較では、大河内遺跡出土の勝間田焼は及遺跡出土の粘土と胎土的に類似していた。

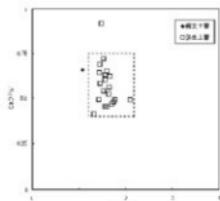
(4) 包含層出土の瓦質土器（羽釜・鍋）が器種や周辺遺跡（石仏上遺跡・夏栗遺跡）出土鍋・釜と胎土に差異があるかどうかでは、瓦質土器のなかでの羽釜と鍋のあいだでは、胎土に違いはなかった。また周辺遺跡との比較では、蛍光X線分析で大河内遺跡が石仏上遺跡と胎土が比較的類似し、砂粒観察でも砂粒構成は似ていたが、大河内遺跡の瓦質土器には火山ガラスが多量に含まれている素地土が使用されていた。これは、弥生土器と同様な結果であった。

以上の胎土分析の結果から掲載番号58の弥生土器以外は、ほぼ胎土が類似していた。つまり大河内遺跡出土の縄文土器（後期）、弥生土器（中期後葉）、瓦質土器（中世）は、蛍光X線分析および砂粒観察では遺跡周辺で生産されたと推定される。

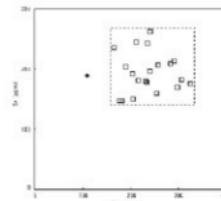
この分析の機会をえていただいた、岡本泰典氏および岡山県古代古墳文化財センターの職員の方々にはいろいろご教示いただいた。末筆ではあります、記して感謝いたします。

註

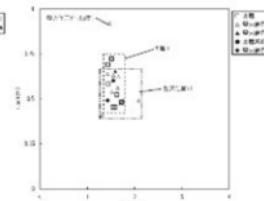
- (1) 勝央町教育委員会「美作・勝央発掘ものがたり」報告会発表資料集 2006.10
- (2) 白石 純「夏葉遺跡出土土器の胎土分析－中世の鍋・釜・鉢について－」『夏葉遺跡』岡山県理藏文化財発掘調査報告194 2005



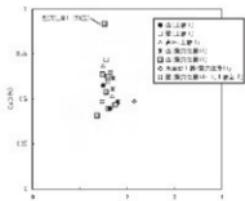
第2図 神文土器と弥生土器の胎土比較
(K₂O-CaO散布図)



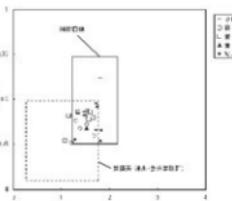
第3図 神文土器と土器弥生の比較胎土
(Rb-Sr散布図)



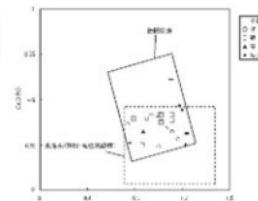
第4図 弥生土器遺跡別による胎土の比較
(K₂O-CaO散布図)



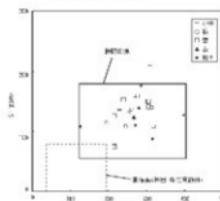
第5図 弥生土器種別による胎土の比較
(K₂O-CaO散布図)



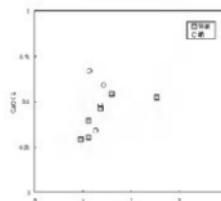
第6図 中世須恵器の产地推定
(K₂O-CaO散布図)



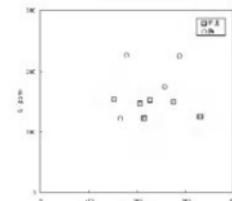
第7図 中世須恵器の产地推定
(TiO₂-CaO散布図)



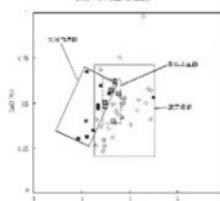
第8図 中世須恵器の产地推定
(Rb-Sr散布図)



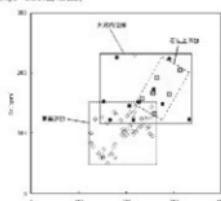
第9図 銅・羽釜の胎土比較
(K₂O-CaO散布図)



第10図 銅・羽釜の胎土比較
(Rb-Sr散布図)



第11図 各遺跡出土銅・羽釜の胎土比較
(K₂O-CaO散布図)



第12図 各遺跡出土の鍋・羽釜の胎土比較
(Rb-Sr散布図)

付載3 下坂遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

下坂遺跡は岡山県美作市位田に所在する。6世紀末～7世紀初頭と推定される製鉄炉3基、横口付木炭窯などの製鉄関連構造が検出された。それに伴い多量の製鉄関連遺物も出土している。このため、当遺跡での鉄生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table1に示す。製鉄関連遺物計9点の調査を行った。

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) 顕微鏡組織
- (3) ピッカース断面硬度
- (4) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査
- (5) 化学組成分析
- (6) 耐火度

3. 調査結果

3-1. 鉱石（塊鉄鉱）系製鉄関連遺物

SMS-1：鉄鉱石

(1) 肉眼観察：550gと大型の鉄鉱石の破片である。全体に磁力が強く、磁鉄鉱と推定される。表面はほぼ全面が直面である。地の色調は灰黒色で、表層は薄く茶褐色の「焼ヶ」に覆われる。脈石鉱物は少なく、品位の高い鉄鉱石である。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 1①～⑤に示す。片状の灰褐色部は磁鉄鉱 (Magnetite : FeO·Fe₂O₃)、また他形の暗黒色結晶は石英 (Quartz : SiO₂) と推定される。

(3) ピッカース断面硬度：Photo. 1①の灰褐色部の硬度を測定した。硬度値は519 Hvであった。磁鉄鉱としては若干軟質である^(注1)。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) は60.55%と高値であった。金属鉄 (Metallic Fe) 0.04%、酸化第1鉄 (FeO) 15.02%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 69.82%の割合であった。また脈石鉱物起源の造溶成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は12.61%と低めであった。このうち酸化珪素 (SiO₂) が11.86%と大半を占めており、塩基性成分 (CaO + MgO) は0.26%と低値であった。また磁鉄鉱中の二酸化チタン (TiO₂) は0.02%、バナジウム (V) が<0.01%、酸化マンガン (MnO) も0.01%とごく微量であった。銅 (Cu) は0.04%を含む。

当資料は高品位の鉄鉱石（磁鉄鉱）であった。なお脈石成分は石英主体のため、珪酸 (SiO₂) の割

合が高い。

SMS-2：鉄鉱石（被熱）

(1) 肉眼観察：不定形で細かい凹凸のある鉄鉱石である。全体に強い磁力があり、磁鐵鉱と推定される。色調は光沢のない黒灰色で、脈石鉱物の割合は低い。また表面にはごく細かい気孔が若干点在しており、熱影響を受けた可能性が考えられる。全体には緻密で、重量感のある浮である。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 1⑥～⑧に示す。片状灰褐色部は磁鐵鉱（Magnetite: FeO·Fe₂O₃）、他部の暗黒色結晶は石英（Quartz: SiO₂）と推定される。鉄鉱石（SMS-1）と酷似する鉱物組成であった。ただし当資料の方が脈石鉱物の割合が低い。

また資料表層部（写真左側）は、熱影響を受けて微細な灰褐色多角形結晶マグнетイト（Magnetite: FeO·Fe₂O₃）が晶出している。

(3) ピッカース断面硬度：Photo. 1⑥の片状灰褐色部の硬度を測定した。硬度値は492 Hvであった。やはり、鉄鉱石（SMS-1）と同様軟質傾向を呈する。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分（Total Fe）は66.96%と高値であった。金属鉄（Metallic Fe）は0.01%、酸化第1鉄（FeO）18.82%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）74.81%の割合である。脈石鉱物起源の造浮成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は4.28%と非常に低値であった。このうち二酸化珪素（SiO₂）が3.76%と大半を占め、塩基性成分は（CaO+MgO）0.20%低値であった。また磁鐵鉱中の二酸化チタン（TiO₂）は<0.01%、バナジウム（V）が<0.01%、酸化マンガン（MnO）も0.01%とごく微量である。銅（Cu）も<0.01%と低い。

当資料も高品位の鉄鉱石（磁鐵鉱）であった。また若干脈石成分の割合は異なるが、鉄鉱石（SMS-1）と酷似した鉱物・化学組成を呈する。

SMS-7：炉外流出浮（鉱石系をまとめて記述するので番号は乱れる）

(1) 肉眼観察：1060gと大型の炉外流出浮の破片である。浮の地の色調は灰黒色で、表層は一部風化が進んでいる。また表面は比較的細く幅10～20mm程の流動浮が複数溶着する個所と、継状の凹凸が残る幅広の流動浮部分とが混在する。表面や破面には中小の気孔が点在するが、緻密で重量感のある浮である。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 2①～③に示す。灰褐色多角形結晶マグネタイト、淡灰色柱状結晶ファイアライト（Fayalite: 2FeO·SiO₂）が晶出する。塊鉱石（磁鐵鉱）が製鉄原料の製錬浮に、よくみられる鉱物組成である。

(3) ピッカース断面硬度：Photo. 2③の淡灰色柱状結晶の硬度を測定した。硬度値は773 Hvであった。ファイアライト（Fayalite: 2FeO·SiO₂）としてはやや硬質の値である。マグネシウム（Mg）など、他の元素を微量固溶している可能性が考えられる。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分（Total Fe）32.63%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.26%、酸化第1鉄（FeO）34.70%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）7.72%の割合であった。造浮成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は54.15%と高値で、塩基性成分（CaO+MgO）も11.73%と高め傾向を示す。また二酸化チタン（TiO₂）が0.37%、バナジウム（V）0.13%、酸化マンガン（MnO）は0.49%と低値である。また銅（Cu）は0.02%であった。

以上の鉱物・化学組成の特徴から、当資料は塊鉱石（磁鉄鉱）を製鉄原料とした製錬滓に分類される。なお鉄鉱石（SMS-1, 2）と比較すると、塩基性成分（CaO+MgO）の高値傾向が顕著であった。これらを主要構成元素とする軽石鉱物を含む塊鉱石が、製鉄原料であったと推定される。

SMS-9：含鉄鉄滓

(1) 肉眼観察：29g強の不定形小型の含鉄鉄滓である。表面は淡褐色の酸化土砂に覆われる。試料表層は大半が灰黒色の滓部で、一部茶褐色の鉄化鉄が遺存する。全体に磁力は強い。また特殊金属探知機のH（○）で反応があり、内部に微細な金属鉄が生じている可能性が考えられる。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 2④～⑧に示す。④～⑥は滓部である。発達した白色粒状結晶ウスクタイト（Fustite: FeO）と、ごく微細な淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。

また⑦⑧は鉄化鉄部で、フェライト地に極く少量のバーライトを析出した亜共析組織(<0.77%C)の痕跡が残存する。この組織痕跡から炭素含有量は0.1%程度の軟鉄と推定される。

(3) ピッカース圧痕硬度：Photo. 2⑨の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は492 Hvであった。ウスクタイトに同定される。

当資料は滓部の鉱物組成から、塊鉱石を製錬してできた含鉄鉄滓と推定される。鉄部は鉄化しており、観察面で金属鉄は確認されなかった。ただし鉄化鉄部の金属性組織痕跡から、炭素含有量の低い軟鉄と判断される。

3-2. 砂鉄系製鉄関連遺物

SMS-3：炉壁

(1) 肉眼観察：強い熱影響を受けて、内面表層が黑色ガラス質化した炉壁片である。内面表層は緩やかな流動状で、一部ごく薄く灰褐色の滓が付着する。滓部の磁力は強い。胎土部分は黄～橙褐色で、砂やスサを混和している。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 3①に示す。写真左側の明色部は、内面表層の付着滓である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Uvospinel: 2FeO·TiO₂）、白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite: FeO·TiO₂）、淡褐色片状結晶シュードブルーカイト（Pseudobrookite: Fe₂O₃·TiO₂）ないしルチル（Rutile: TiO₂）が晶出する。砂鉄を高温製錬した際の反応副生物の晶癖^(注2)である。また写真右側の暗色部は、炉壁内面の黑色ガラス質滓である。

(3) ピッカース圧痕硬度：紙面の構成上圧痕の写真を割愛したが、付着滓中の淡茶褐色多角形の硬度を測定した。結晶硬度値は644 Hvで、ウルボスピネルに同定される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。強熱減量（Ig loss）は1.85%と低値であった。強い熱影響を受け、結晶構造水がほとんど飛散した状態での分析である。鉄分（Fe₂O₃）が3.71%とさほど高くなく、酸化アルミニウム（Al₂O₃）は12.43%と低値であった。耐火性には不利な成分系である。

(5) 耐火度：1280°Cであった。製鉄炉の炉壁としては、やや耐火性の低い範疇に入る。耐火性より、造滓剤としての役割（炉壁内面が溶融して製錬滓成分となる）を重視して、胎土選択がなされた可能性が考えられる。

SMS-4：黑鉛化木炭

(1) 肉眼観察：本炭に鉄が置換した不定形小型の黒鉛化木炭である。表面は黄褐色の酸化土砂で覆われる。さらに外周には灰黒色の滓が付着する。滓部表層は細かい凹凸が目立ち、全体に磁力が強い。内部には幅15mmほどの偏平な木炭の塊み込みが見られる。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 3②～④に示す。②の左側表層の明色部は付着滓で、③はその拡大である。淡褐色片状結晶シードブルーカイトないしルチルが晶出する。やはり高温下で生じた砂鉄製錬滓の品端といえる。なお滓中の微細な明白色粒は金属鉄である。また黒色部は木炭で④はその拡大、一部木材組織が残存する。

以上の特徴から、当資料は砂鉄製錬に用いられた木炭の破片である。

SMS-5：炉底塊

(1) 肉眼観察：2766gと大型の炉底塊破片である。短軸側には明瞭な破面ではなく、長辺は操業後の炉内壁に対応する可能性が考えられる。滓の地の色調は灰黒色を呈する。上面は凹凸が顕著である。また一部磁力の強い個所があり、溶融しきらなかった製錬原料の影響と推測される。全体的には磁力は弱い。横断面は緩やかな楔形で、下面には全面炉床上が附着する。気孔はごく僅かで、非常に重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 3⑤～⑦に示す。⑤は滓中の被熱砂鉄粒子である。断面に綿状の離溶組織が確認される含チタン鉄鉱^(TiO₂)が複数散在する。

また⑥⑦は滓部である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡褐色片状結晶シードブルーカイトないしルチルが晶出する。

(3) ピッカース断面硬度：Photo. 3⑦の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は595Hvであった。若干軟質であるが、ウルボスピネルに同定される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 32.00%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.09%、酸化第1鉄 (FeO) 32.26%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 9.77%の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は34.63%で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は4.02%である。また製錬原料で砂鉄起源の二酸化チタン (TiO₂) は19.51%、バナジウム (V) は0.26%、酸化マンガン (MnO) が0.96%であった。銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

以上の鉱物・化学組成の特徴から、当資料は高チタン (TiO₂) 砂鉄を製錬原料とする、製錬滓に分類される。

SMS-6：炉外流出滓

(1) 肉眼観察：144g弱の炉外流出滓の小破片である。短軸両端と長軸側面の一部が破面である。表面は滑らかな流動状であるが、やや細かい凹凸が目立つ。また気孔はごく少なく、緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：Photo. 4①～③に示す。①の中央は被熱砂鉄（含チタン鉄鉱）である。熱影響を受けて分解・溶化が進行しており、外周には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが晶出する。さらに周囲の滓部には、ごく微細な淡灰色木ずれ状結晶ファイアライトが晶出する。③も同様の鉱物組成の個所である。当資料はこの組成が広範囲で確認された。

これに対して、②は局的に確認された鉱物組成である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルに加

え、白色針状結晶イルミナイト、淡茶褐色片状結晶シュードブルーカイトないしルチルが晶出する。より高温下での砂鉄製錬滓の晶癖といえる。

(3) ピッカース断面硬度: Photo. 4③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は656 Hvで、ウルボスピネルに同定される。

(4) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 38.26%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.13%、酸化第1鉄 (FeO) 41.60%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 8.28%の割合であった。また造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は29.93%で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は4.55%を含む。製鉄原料で砂鉄起源の二酸化チタン (TiO₂) は17.01%、バナジウム (V) 0.29%、酸化マンガン (MnO) が1.23%と高値であった。銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

当資料もか底塊 (SMS-5) と同様、高チタン砂鉄を原料とする製錬滓に分類される。

SMS-8: 鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察: 30g強のごく小型で塊状の鉄塊系遺物である。表面全体は黄褐色の酸化土鉱で、厚く覆われる。全体に特殊金属探知機のL (●) で反応があり、内部には金属鉄が良好に遺存すると推定される。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 4④～⑧に示す。④は試料表層の洋部である。発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。

⑤～⑧は金属鉄部である。5%ナイタルで腐食したところ急冷由来のベイナイト組織が確認された。

(3) ピッカース断面硬度: Photo. 4④の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は581 Hvであった。若干軟質の値を示すため、完全なウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂) 組成ではなく、チタノマグネットайт (^{註1}) の可能性も考えられる。

さらに金属鉄部の硬度測定も実施した。⑥の黒帯を帯びた針状組織の硬度値は297 Hv、⑦の明色針状組織の硬度値は212 Hvであった。以上の硬度値から、当資料は0.1～0.5%程度のベイナイト組織をもつ鋼である。

(4) EPMA調査: Photo. 5の1段目に、滓部の反射電子像 (COMP) を示す。20の淡褐色片状結晶の定量分析値は86.2%TiO₂-6.3%FeO-2.9%MgO-2.0%Al₂O₃であった。他の元素を微量回溶するが、酸化チタン主体でルチル (Rutile: TiO₂) に近い組成の結晶といえる。また21のガラス質部分の定量分析値は61.6%SiO₂-11.7%Al₂O₃-7.2%CaO-4.5%K₂O-9.4%TiO₂-2.5%FeO-2.1%MnOであった。素地部分でもチタン (TiO₂) をかなり回溶した珪酸塩である。砂鉄を高温製錬して生じた滓の晶癖といえる。

さらにもう1視野、Photo. 5の3段目に洋部の反射電子像 (COMP) を示す。22の淡茶褐色多角形結晶の定量分析値は61.0%FeO-33.3%TiO₂-2.1%Al₂O₃であった。ウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂) に同定される。また23のガラス質部分の定量分析値は40.8%SiO₂-5.6%Al₂O₃-6.5%CaO-37.5%FeO-4.8%TiO₂であった。鉄分を非常に多く回溶する。徐冷されればファイヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) が晶出するところを、急冷されたため、非品質のまま固体化したものと推測される。

当資料は砂鉄を高温製錬して生成された、鉄塊系遺物（小鉄塊）である。また金属性組織や付着滓の鉱物組成から、比較的冷却速度が速かったことがうかがえる。製鉄がからか内生成物を取り出した後に水冷した可能性が考えられる。

また鉄中の炭素含有量は部位によりばらつきが大きい。断面硬度測定の結果からは0.1~0.5%程度の鋼と推定される。

4.まとめ

下坂遺跡から出土した、6世紀末~7世紀初頭と推定される製鉄関連遺物群を調査した結果、当遺跡では塊鉱石(磁鉄鉱)・砂鉄双方の製鉄原料を用いて、鉄生産が行われたことが明らかとなった。詳細は以下の通りである。

4-1. 鉱石系製鉄関連遺物 (SMS-1, 2, 7, 9)

〈1〉鉱石 (SMS-1, 2) は共に鉄含有率の高い (Total Fe: 60.55~66.96%)、高品位の磁鉄鉱であった。また脈石鉱物が石英 (Quartz: SiO₂) 主体である点も共通する。

ただし後述する鉱石系製鍊滓 (SMS-7) は、かなり塩基性成分を含んでおり (CaO+MgO: 11.73%)、出土した鉱石とは成分傾向が異なる。実際に製鉄炉内に装入された鉱石には、灰鉄ぎくろ石 [Andradite: CaFe₂(SiO₄)₂]、透輝石 [Diopside: CaMg(SiO₄)₂] といった、塩基性成分を主要元素とする脈石鉱物を含むものも存在したと考えられる。この製鍊滓の組成から、スカルン鉱床^(註5)から採掘された鉱石を、製鉄原料とした可能性が考えられる。

なおFig.1左表に示すように、岡山県下の他の製鉄遺跡から出土した製鍊滓も、塩基性成分 (CaO+MgO) の高値傾向は共通する。こうした製鉄原料に用いる塊鉱石の選択 (スカルン鉱床での採掘) と、脈石鉱物に含まれる塩基性成分 (CaO, MgO, MnO) の利用は、日本列島内の古代の製鉄遺跡で広く確認される特徴といえる^(註6)。

〈2〉炉外流出滓 (SMS-7) は、発達したファイヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) 主体の鉱物組成で、塊鉱石(磁鉄鉱)を原料とする製鍊滓の特徴を示す。

また岡山県下の主な製鉄遺跡から出土した、鉱石系製鍊滓の化学組成^(註7)と比較すると、当遺跡の出土製鍊滓は鉄分 (FeO: ここではTotal Feの換算値) の低い領域に位置する。比較的歩留りのよい採業であったことが窺える。

〈3〉含鉄鉱滓 (SMS-8) は付着滓の鉱物組成から、塊鉱石(磁鉄鉱)を原料とする製鍊生成鉄と推測される。全体に小型で滓部を含むなどまとまりに欠けるため、遺跡内に残された可能性も考えられる。また鉄部は錆化していたが、亜共析組織痕跡が残り、炭素含有量の低い軟鉄 (C: 0.1%) と判断される。

4-2. 砂鉄系製鉄関連遺物 (SMS-3, 4, 5, 6, 8)

〈1〉炉壁 (SMS-3)、黒鉛化木炭 (SMS-4)、製鍊滓 (SMS-5, 6)、鉄塊系遺物 (SMS-8) は、いずれも滓中に (鉄) チタン酸化物の結晶を含むので、砂鉄製鍊に伴う遺物群と判別される。

Fig.1右表に示すように、岡山県北部では砂鉄を始発原料とする製鉄遺跡が複数確認されている^(註8)。周辺地域の出土砂鉄の化学組成を詳細にみると、チタン (TiO₂) 含有率が5~10%以下の低~中チタン砂鉄と、チタン含有率が15%前後の高チタン砂鉄を原料とする遺跡群に大別できる。さらに原料砂鉄のチタン含有率と対応して、出土製鍊滓の化学組成も二分される。

下坂遺跡出土製鍊滓の化学組成は、高チタン砂鉄が原料の遺跡群と近似しており、当遺跡でもチタ

ン含有率15%前後の砂鉄を原料に用いた可能性が考えられる。周辺地域に分布する、火山岩(安山岩・玄武岩)起源の砂鉄を製鉄原料に利用したものと推測される。

(2) 上述の砂鉄製錬に伴う遺物群全てに、イルミナイト ($\text{Ilmenite} : \text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) や、シュードブルーカイト ($\text{Pseudobrookite} : \text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$) ないしルチル ($\text{Rutile} : \text{TiO}_2$) といった、より高温で生じるチタン (TiO_2) の割合の高い結晶が確認された。当遺跡では、高溫下での砂鉄製錬が行われたと推測される。

(3) 鉄塊系遺物 (SMS-8) は、炭素含有量のばらつきが大きい鋼 (C: 0.1~0.5%程度) であった。また金属組織や付着滓の鉱物組成から、比較的早い速度で冷却したものと推測される。製鉄炉の解体後、炉内生成物を水冷した痕跡の可能性が高い。金属組織からは、意識的な熱処理の結果というより作業性から冷却された可能性が考えられる。現代の製鉄実験で造られた鉄塊にも、こうした金属組織はよく確認される。

なお他の古代の製鉄遺跡から出土する鉄塊系遺物でも、水冷痕跡をとどめるものは散見される^(注9)。

5. おわりに

下坂遺跡は塊鉱石(磁鉄鉱)と砂鉄の2種類を原料とする鉄生産であった。この組合せは下坂遺跡が立地する吉井川とその支流域で幾つか発見されている。操業時代は6世紀から7世紀代に属するところも興味深い傾向をもつ。吉井川流域は、古代吉備での製鉄起源と塊鉱石から砂鉄へと切替え問題の鍵を握る鉄生産地帯とも言えそうである。

以下に遺跡名を挙げておく。

- (1) 八ヶ奥製鉄遺跡(和気町)、7世紀代^(注10)
- (2) 宮ノ上遺跡(勝央町)、7世紀以降^(注11) 製鉄遺構未検出
- (3) 大間古墳群(津山市)、6世紀前半:鉱石、中葉:砂鉄^(注12) 製鉄遺構未検出

(注)

- (1) 日刊工業新聞社 1968『焼結鉱組織写真および識別法』

ウスタイトは450~500 Hv、マグネタイトは500~600 Hv、ファイアライトは600~700 Hvの範囲が提示されている。ウルボスピニルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600 Hv以上であればウルボスピニルと同定している。磁鉄鉱石は530~600 Hvが示されている。

- (2) J.B. Mac chesney and A. Murau: American Mineralogist, 46 (1961), 572
- (3) イルミナイト ($\text{Ilmenite} : \text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、シュードブルーカイト ($\text{Pseudobrookite} : \text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$)、ルチル ($\text{Rutile} : \text{TiO}_2$) の晶出は $\text{FeO} - \text{TiO}_2$ 二元平衡状態図から高溫化操業が推定される。

- (4) 木下亀城・小川留太郎 1995『岩石鉱物』保育社

チタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 *Titaniferous iron ore* という。

- (5) 黒田吉益・諭訪兼位 1983『徳光館微鏡と造岩鉱物』[第2版] 共立出版株式会社

第5章 鉱物各論 E. 磁鉄鉱 (magnetite)

磁鉄鉱は広義のスピニル類に属し、 $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$ の理想組成をもっているが、多くの場合 Ti をかなり含んでいる。(中略) ウルボスピニル (Ulvöspinel) と連続固溶体をつくり、この中間組成のものをチタン磁鉄鉱 (*titanomagnetite*) とよぶ。

- (6) 飯山敏道 1998『地球鉱物資源入門』東京大学出版会

スカルン (skarn) とはノルウェーの採鉱業務従事者がカルシウムを多く含んだ珪酸塩系鉱物を含んだ岩石につけた俗称。スカルンを伴う鉱床という意味で学術用語となった。

(6) 鈴木瑞穂 2004 「日本の前近代製鉄炉の変遷と出土製鍊津の組成変化」「日本鉄鋼協会・社会鉄鋼部会「鉄の歴史—その技術と文化」」フォーラム第6回公開研究発表会講演論文集』(社)日本鉄鋼協会・社会鉄鋼部会「鉄の歴史—その技術と文化」フォーラム

(7) Fig.1 左表は以下の調査報告書に記載された化学分析値をもとに作成した。

①国立歴史民俗博物館 1994『国立歴史民俗博物館研究報告 第58・59集 日本・韓国の鉄生産技術 (調査編1・2)』

②大澤正己 1999『奥坂遺跡群』総社市教育委員会

③大澤正己 1991『水鳥機械金属工業団地共同組合西園地内遺跡群』総社市教育委員会

④大澤正己 1994『西祖山方前遺跡』『西祖山方前遺跡・西祖崎本(御体幼稚園)遺跡発掘調査報告書』岡山市教育委員会

⑤大澤正己 1993『みそのお遺跡』岡山県教育委員会

(8) Fig.1 右表は以下の調査報告書に記載された化学分析値をもとに作成した。

①大澤正己 2006『大蔵池南遺跡』『日本列島における初期製鉄・鍛冶技術に関する実証的研究』愛媛大学法文学部

②大澤正己 1986『綠山遺跡』津山市教育委員会

③大澤正己 2004『久田原遺跡・久田原古墳群』国土交通省若田ダム工事事務所・岡山県教育委員会

④大澤正己・鈴木瑞穂 2002『九番丁場遺跡』『一般国道179号線道路改築工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会

(9) 前掲注 (7) ②

(10) 大澤正己 2004『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書178』岡山県教育委員会

(11) 大澤正己 2006『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書197』岡山県教育委員会

(12) 大澤正己 1994『津山市埋蔵文化財発掘調査報告書51』津山市教育委員会

Table 1 供試材の履歴と調査項目

序号	番号	基準材	供試材内	調査名稱	性質		調査		調査		調査		調査		調査	
					大きさ(m)	厚さ(m)	大きさ(m)	厚さ(m)	大きさ(m)	厚さ(m)	大きさ(m)	厚さ(m)	大きさ(m)	厚さ(m)	大きさ(m)	厚さ(m)
SBS-1	52	標準材	標準材	標準材	100.72×73.43	55.64	4.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-2	56	標準材	標準材	標準材	65.88×72.36	125.55	3.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-7	18	標準材	標準材	標準材	134.132.51	306.631	3.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-9	138	標準材	標準材	標準材	35.35×35.24	25.24	H(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-3	124	標準材	標準材	標準材	100.40×101.69	111.131	3.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-4	117	標準材	標準材	標準材	45.8×32.16	35.30	3.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-5	106	標準材	標準材	標準材	106.108×107	279.56	3.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-6	112	標準材	標準材	標準材	43.71×71.26	143.85	3.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SBS-8	119	標準材	標準材	標準材	33.32×32.22	36.55	L(●)	○	○	○	○	○	○	○	○	○

調査の結果を示す記号

○：確認

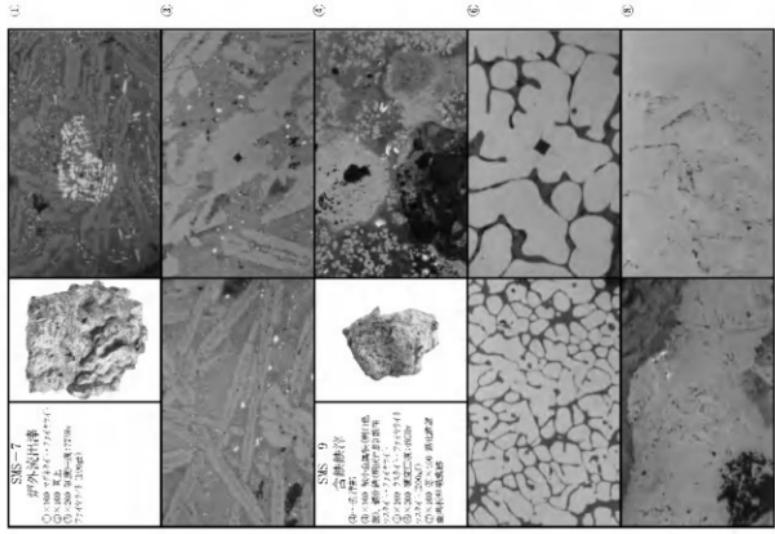
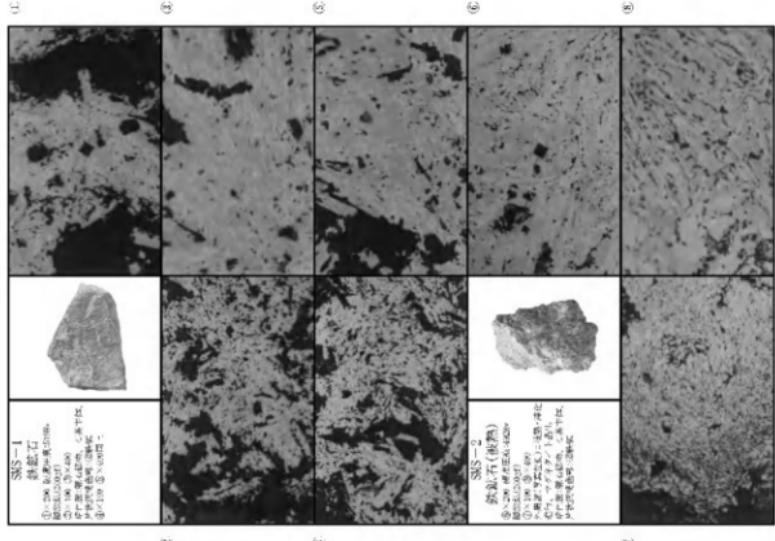
調査

Table 1 供試材の化学組成

Table3 出土遺物の調査結果のまとめ

番号	発見場所	遺物名	山手印押	遺物ノウ	著者・年代	測定実験値				化学組成(%)				Hf/La
						Total Fe	Fe_{TiO_3}	Mn_{TiO_3}	TiO ₂	V	Sc	Cr	Co	
SBS-1 S2	洗浄池 瓦礫堆	瓦礫	瓦	-	新井良義(昭和26年)	46.55	49.82	0.26	0.02	-0.01	6.01	72.61	0.04	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-2 S6	洗浄池 瓦礫堆(積石)	瓦礫	瓦	-	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)	46.56	71.61	0.20	-0.01	-0.01	6.01	5.28	-0.01	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-7 T6	洗浄池 多肉植物	瓦	瓦	-	新井良義(昭和26年)	32.62	7.72	11.73	0.37	0.14	6.49	54.35	0.03	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-9 T8	洗浄池 瓦礫堆	瓦	瓦	-	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)	-	-	-	-	-	-	-	-	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-3 C4	洗浄池 下渠	下水道-U型管-砂防瓦/黑色ガラス管等	砂防瓦	3.25	3.71	0.97	1.10	0.01	0.12	52.02	-0.01	52.02	-0.01	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-4 T7	洗浄池 瓦礫堆	瓦	瓦	-	新井良義(昭和26年)	-	-	-	-	-	-	-	-	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-5 T6	洗浄池 多肉植物	瓦	瓦	-	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)	32.40	8.17	4.32	11.51	0.26	6.36	34.63	-0.01	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-6 T12	洗浄池 砂利堆	瓦	瓦	-	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)	30.25	8.28	4.55	17.61	0.25	4.35	29.03	-0.01	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)
SBS-8 T9	洗浄池 瓦礫堆地盤	瓦	瓦	-	新井良義(昭和26年)	-	-	-	-	-	-	-	-	新井良義(昭和26年)新井良義(昭和26年)

Table3の各項目の説明:
 1. 番号: 調査記録番号
 2. 発見場所: 調査場所
 3. 遺物名: 遺物の種類
 4. 山手印押: 山手印押の有無
 5. 遺物ノウ: 遺物のノウ番号
 6. 著者・年代: 著者と年代
 7. 測定実験値: 測定実験値
 8. 化学組成(%): 化学組成
 9. Hf/La : ハフ/ラジウム比



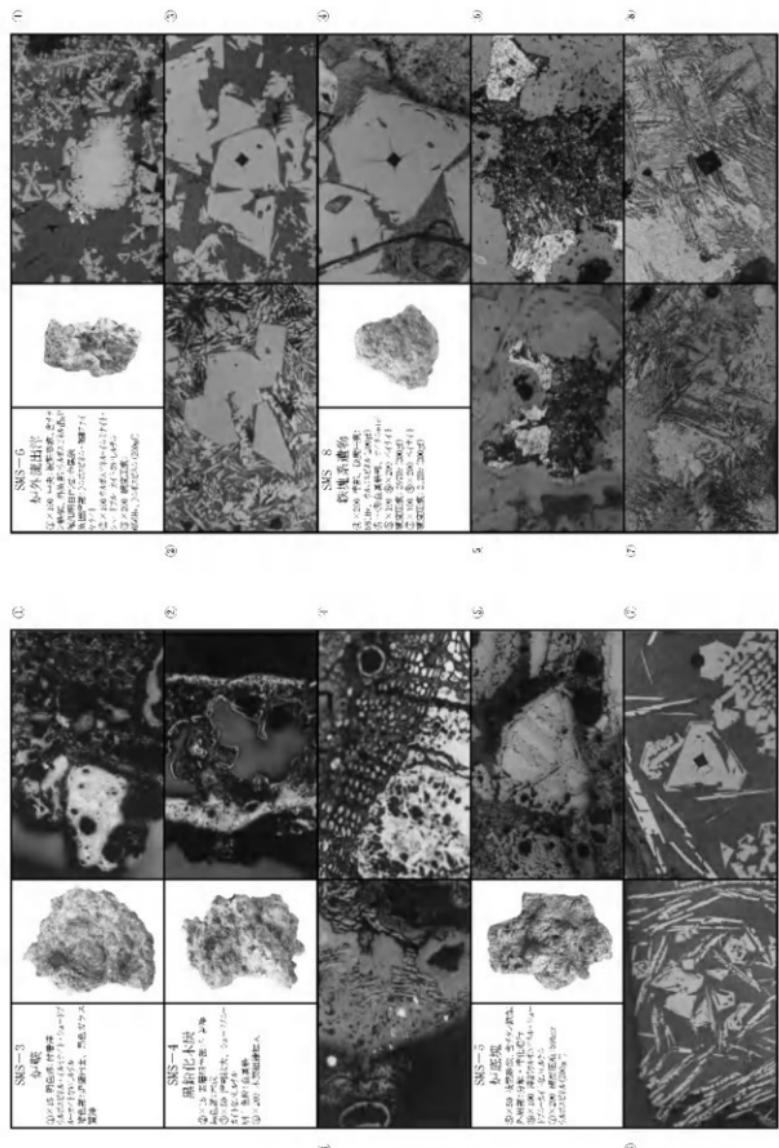


Photo. 3 破断・塑性・引張・引張・延伸の外連出試験結果

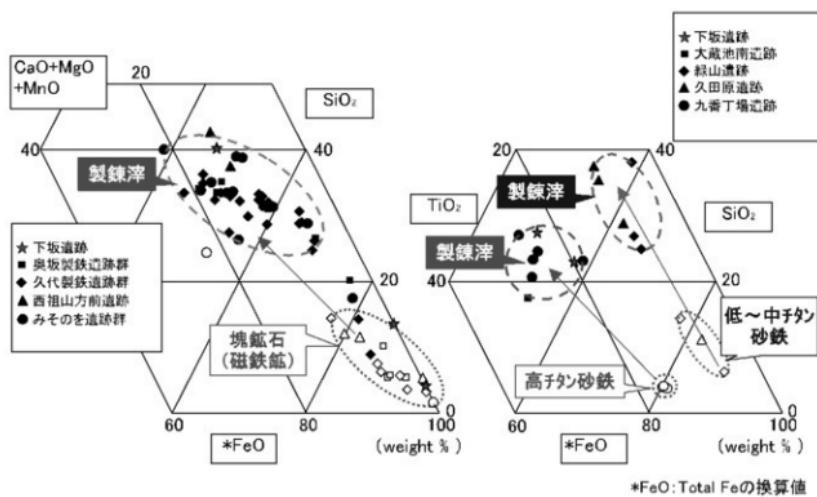
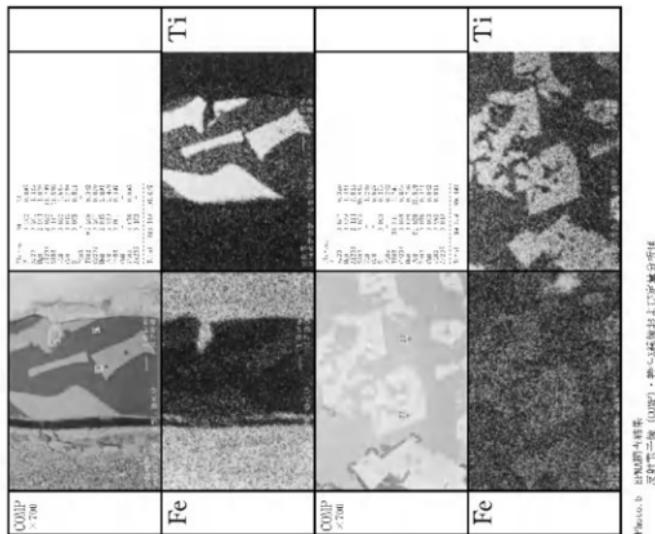


Fig.1 岡山県下の主な製鐵遺跡の出土塊鉱石・砂鐵・製錬滓の化学組成

付載 4 下坂遺跡の製鉄炉 3 基と製炭窯 1 基の地磁気年代

法吉データ 時枝克安

1 地磁気年代測定法の概要

[仕組]

地磁気には偏角、伏角、および、強度の 3 要素がある。各要素は多数の成分からなっており、各成分は緩急さまざまな速度で変動している。この地磁気の変動のなかでも、10 年以上の時間経過で変化が顕著になる緩慢な変動を地磁気永年変化と呼んでいる。地磁気年代測定法で時計の働きをするのは、この地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向の変化グラフに年代を目盛って、地磁気の方向から年代を読みとろうとする。しかし、ある焼土の焼成年代を知ろうとするとき、焼成時の地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなくては何時焼けたかを知ることはできない。焼成時の地磁気の方向は、焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順は、まず、焼土の熱残留磁気を測定して、焼成時の地磁気の方向を求め、次にこの方向に近い点をこの地域の地磁気永年変化曲線上で決定して、その年代目盛りを読みとることになる。

地磁気中で、土壤、粘土、砂、岩石等が焼けると、これらは熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の扱い手は磁鉄鉱などの磁性粒子であり、熱残留磁気の方向は焼けたときの地磁気の方向に一致する。高温で得られた熱残留磁気は非常に安定であり、磁性物質のキュリー温度（磁鉄鉱では 575°C）以上に再加熱されないかぎり数万年以上時間が経過しても変化しない。焼上がキュリー温度以上に再加熱されたときには、それまで保持されていた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、加熱時の地磁気の方向に新しい残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気の方向を正しく記憶していることになる。それゆえ、年代既知の焼土を利用して、あらかじめ、その熱残留磁気から過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかを測定しておけば、このグラフを「時計」の目盛りとして、焼上の最終焼成年代を推定できる。この「時計」では地磁気の方向が「針」に相当し、焼上の熱残留磁気が焼成時の「針」の位置を記憶している。日本では、西南日本の過去 2000 年間の地磁気永年変化曲線（標準曲線）が広岡によって詳しく測定されているので、この方法が焼上の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代測定法の詳細については中島正志、および、広岡による解説¹⁾が参考になる。

[特徴]

- ① 焼成後に動かされていない焼土のみから焼成年代を測定できる。
- ② 原理が簡明であり、測定が比較的簡単である。
- ③ この方法により隔絶した土器編年を対比できる。

[問題点]

- ① 地磁気の地域差

地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違している。厳密に言えば、ある焼上の地磁気年代を求める

には、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域固有の標準曲線を決定して、焼土の残留磁気の方向と比較する必要がある。今まで、中国地域の焼土に対して、広岡による西南日本の標準曲線から求めた地磁気年代と考古学的年代が大きく食い違う例はほとんどない。したがって、中国地域では、西南日本の標準曲線を使用して焼土の最終焼成年代を正しく推定できる。

②土器編年への依存

地磁気年代は、地磁気変動という物理現象を利用して求められているので、土器編年に左右されないとと思われるがちであるが、これは誤解である。地磁気年代と土器編年の間には密接な関係がある。古記録などに基づく少数の年代定点を除くと、標準曲線上のほとんどの年代目盛りは土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠く離れるほど地磁気年代は土器編年の影響をより強く受けしており、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代も訂正しなければならない。年代定点の数が増えると、地磁気年代は土器編年との相互依存から脱却できるが、現状ではやむをえない。

③適用できる年代域の限界

地磁気年代法を適用できる年代域は標準曲線の詳細が分かっている紀元以後である。標準曲線の作製には、残留磁気と年代の2種類のデータのセットが多数必要である。紀元以前については、かなり多くの熱残留磁気データが報告されているが、信頼できる年代値を伴うものは少なく、紀元以前の標準曲線は未だ作製されていない。

〔製鉄関連遺構への地磁気年代法の摘要〕

製鉄関連遺構では鉄を扱う。鉄や銅の酸化物はそのキュリー温度以下になると強い磁性を示す。したがって、鉄の周囲には地磁気に加えて、鉄による磁場が重なっている。地磁気は遺構の全域で一様であるが、鉄による磁場は鉄からの距離と方角によって変化する。したがって、鉄に近いところでは、鉄の磁場のために、熱残留磁気と地磁気の両者の方向にずれが生じる。しかし、鉄による磁場は鉄からの距離の3乗に逆比例して減少するため、鉄から遠いところでは、鉄の磁場は非常に弱くなり、熱残留磁気と地磁気の方向に有意のずれは生じない。以上の事柄をふまえて、地磁気年代法を製鉄関連遺構へ適用する場合には、次の配慮をして試料採取を行う。

①鉄の予想位置を取り巻く広範囲から試料を採取する。広範囲の試料の残留磁気の整列が確認できれば、残留磁気の方向の鉄によるずれはないと結論できる。

②焼土範囲が広い場合には、鉄の予想位置からできるだけ遠く離れた焼土から試料を採取する。

2 遺構と試料

下坂遺跡（岡山県美作市位田）から検出された製鉄炉3基と横口付製炭窯（以下、製炭窯）1基から地磁気年代を推定するための全方位試料を採取した。3基の製鉄炉は比較的狭い範囲に分布する。すなわち、製鉄炉1の南方約8mと東方約4mに、それぞれ、製鉄炉2と製鉄炉3がある。製炭窯は少し離れた場所にあり、製鉄炉のグループから南方約26mのところに位置している。製鉄炉はいずれも中央に良く焼けた方形の炉床をもち、その両側に赤く焼けた排滓場がある。製鉄炉1では砂質土が焼けており、炉床の大きさは95cm×91cmである。全方位試料は炉床から2ヶ、排滓場の赤色焼土から各10ヶずつ、合計22ヶを採取した。製鉄炉2では焼土は粘土質であり、草の根が多く入っていた。炉

床の大きさは86cm×81cmであり、ここから20ヶの定方位試料を採取した。製鉄炉3は残存状態が悪く、焼土には風化しきっていない岩片が多く混じっている。炉床の大きさは70cm×60cmである。定方位試料は赤色化の強い所を選んで、炉床から5ヶ、排滓場から15ヶ、合計20ヶを採取した。製炭窯は等高線に沿う細長い窯体と側面に5つの焚口をもち、炉床は窯尻の方向に僅かな登り勾配となった窯底から窯体長辺に沿って均等に20ヶを採取した。年代の手掛かりとなる遺物として、各製鉄炉からそれぞれ5m離れた地点から、須恵器1片が出土している。この遺物は須恵器の蓋ないし身で、どちらかといえば蓋と判断されており、土器縦年では、6世紀末から7世紀初頭の年代が比定され、製鉄炉の年代に近いと考えられている。試料採取法としては、整形した焼土塊に樹脂製ケース(24×24×24mm)を被せて隙間を石膏で充填し、ケース上面の走行と傾斜をクリノンコンパスで測定した。試料採取状況を次表に示す。

試料採取状況

遺 構	採取資料数
製鉄炉1	炉床(2)、排滓場(20)
製鉄炉2	炉床(20)
製鉄炉3	炉床(5)、排滓場(15)
横口付製炭窯1	窯底(20)(均等に)

3 測定結果

試料の残留磁気をスピナー磁力計(Schonstedt社 Model SSM-1A)で測定した。自然残留磁気の強度は、製鉄炉1では試料の9%が 10^{-6} emu/g、91%が 10^{-5} emu/g、製鉄炉2では40%が 10^{-6} emu/g、60%が 10^{-5} emu/g、製鉄炉3では60%が 10^{-6} emu/g、40%が 10^{-5} emu/gとなった。すべての試料が 10^{-5} emu/g以下の強度を示しており、製鉄炉としては非常に弱い値である。一方、製炭窯では試料の50%が 10^{-5} emu/g、40%が 10^{-4} emu/g、10%が 10^{-3} emu/gとなり、良く焼けた焼土に特有の強い値となっている。自然残留磁気の方向はかなり分散していたので、全試料について交流消磁を行った。交流消磁というのは、試料を交流磁場中で回転させながら、磁場強度を適当な設定値から零になるまで滑らかに減少させて、磁場の設定値よりも弱い抗磁力をもつ2次の磁気汚染を除去する方法であり、この方法により、残留磁気の方向のまとまりを改善できる場合が多い。消磁消磁としては、それぞれの自然残留磁気の強度を参考にして、製鉄炉3基については10mTを、製炭窯について20mTを選んだ。図1に交流消磁後の残留磁気の方向を示す。消磁後の結果の中から、よくまとまっている小円内のデータのみを選び、これらを元にして地磁気年代を推定する。小円内のデータから計算した残留磁気の平均方向、Fisherの信頼度係数(k)、および、95%誤差角($\alpha_{95\%}$)を次表に示す。kの値が大きく、 $\alpha_{95\%}$ の値が小さいほど、残留磁気の方向がよく揃っていることを意味している。

下坂遺跡の製鉄炉と炭窯の残留磁気の平均方向と誤差の目安となる数値

造 構	I _m (度)	D _m (度E)	k	$\sigma_{3\sigma}$ (度)	n/N	信頼度場
製鉄炉 1	59.57	-7.99	2348	1.14	8/22	10mT
製鉄炉 2	59.73	-13.11	656	2.01	9/20	10mT
製鉄炉 3	58.10	-11.90	3904	0.97	7/20	10mT
横口付製炭窯 1	58.14	-9.36	2565	1.02	9/20	20mT

I_m: 平均伏角 D_m: 平均偏角 k: Fisherの信頼度係数 n/N: 採用試料数/採取試料数

4 地磁気年代

図2は残留磁気の平均方向 (+印) と誤差の範囲 (点線の楕円) および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気水年変化曲線⁽²⁾である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向に近い点を水年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとる。同様にして、年代誤差も点線の楕円から評価できる。このようにして、製鉄炉1はAD680±25、製鉄炉2はAD650±30、製鉄炉3はAD680±25、炭窯はAD690±20の地磁気年代を得た。

下坂遺跡の製鉄炉と製炭窯の地磁気年代

造 構	地磁気年代
製鉄炉 1	AD680±25
製鉄炉 2	AD650±30
製鉄炉 3	AD680±25
横口付製炭窯 1	AD690±20

5 考察

いずれの遺構についても、広い範囲から採取した試料について、残留磁気の方向が揃っているので、ここで得た地磁気年代は、鉄の影響のない信頼性の高い年代と結論できる。ここで得た地磁気年代から見ると、3基の製鉄炉と製炭窯はいずれも同じ7世紀後半の時期に稼働していたことになる。一方、出土した須恵器の年代は、杯蓋の場合には6世紀末から7世紀初、杯身の場合には7世紀後半とされ、遺構の年代も同様と考えられている。地磁気年代は須恵器が杯身の場合の年代に合っているが、杯蓋と判断するならばそれより若干新しい年代となる。

〔参考資料〕

- (1) 広岡公夫(1995)「考古資料分析法」、考古学ライブラリー65、田中勇・齊藤努編、ニュー・サイエンス社、100-101
- (2) 中島正志、夏原信義(1981)「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9、ニュー・サイエンス社
- (3) 広岡公夫(1978)「考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向」、第四紀研究 15、200-203

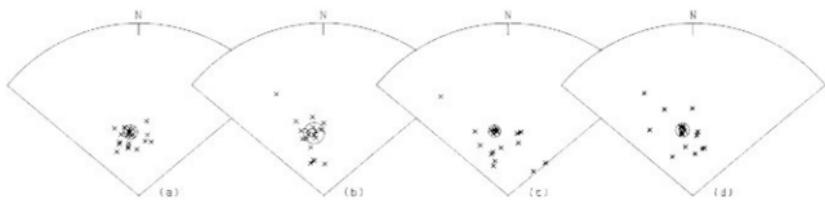


図1 製鉄炉1、製鉄炉2、製鉄炉3、炭窯の交流消磁後の残留磁気の方向。消磁場は、製鉄炉では10mT、製炭窯は20mTである。小円内によく揃ったデータを元にして地磁気年代を推定する。

a:製鉄炉1、b:製鉄炉2、c:製鉄炉3、d:横口付製炭窯1

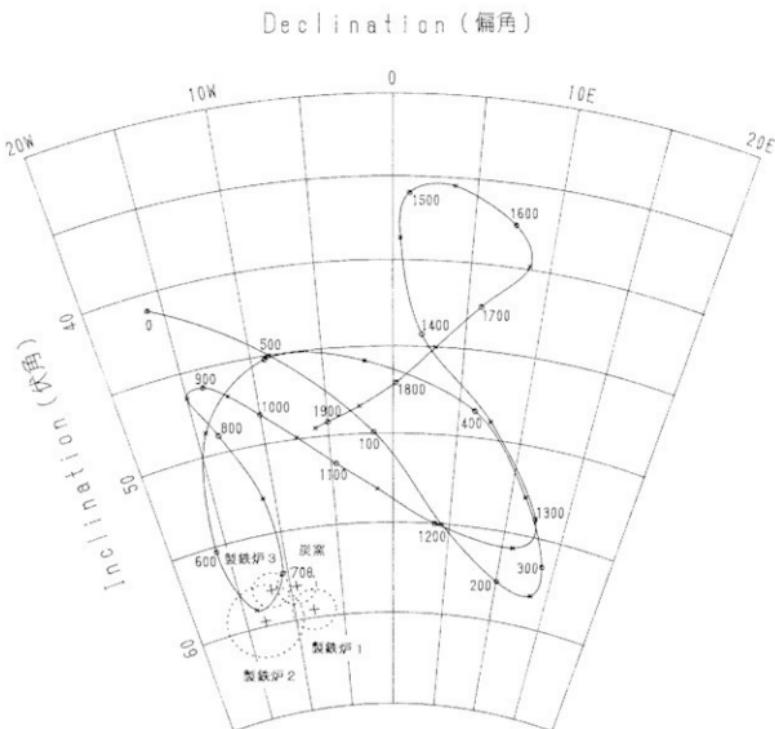


図2 製鉄炉1、製鉄炉2、製鉄炉3、炭窯の残留磁気の平均方向（十印）と誤差の範囲（点線の橋円）、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

1 遺構一覧（観察）表

- 豊穴住居一覧表
- 掘立柱建物一覧表
- 土壙墓一覧表
- 土壙一覧表

2 遺物一覧（観察）表

- 上器観察表
- 石器・石製品一覧表
- 金属製品一覧表
- 土製品一覧表
- 下坂遺跡製鉄関連遺物一覧表

3 大河内遺跡3区出土遺物一覧表

4 新旧遺構名対照表

表凡例

1 遺構一覧（観察）表

- ・「計測値」のうち、「○」は豊穴住居については復元値、掘立柱建物・土壙墓・土壙については残存値を示す。

2 遺物一覧（観察）表

- ・土器については、「計測値」のうち、口径と底径の「○」は復元値、器高の「○」は残存値、「-」は計測不能を示す。
- ・土器の「残存状況」は残存率1/3以上～完形のものを示した。
- ・金属製品・土製品の「計測値」のうち、「○」は残存値を示す。
- ・下坂遺跡製鉄関連遺物については、「計測値」のうち「○」は残存値を示す。
- ・鉄鉱石は、重量100g以下を小割り、500g以下を中割り、500gを超えるものを大割りとした。

3 大河内遺跡3区出土遺物一覧表

- ・本表には、縄文時代草創期の遺物を含め、平成18年度の調査で出土したものと、取り上げ番号の順に掲載している。
- ・X・Y・Zの数値は、遺物の出土地点を示し、平面直角座標第V系（世界測地系）に基づく座標値である。X・Yは平面上の座標、Zは標高である。
- ・「種別」の項目における略号の意味は、次のとおりである。RF：加工痕のある剝片、UF：使用痕のある剝片、Cr：石核、Fr・ch：剝片・碎片
- ・「折れ」の項目における「+」は、欠損部があることを示す。

1 遺構一覧（観察）表

堅穴住居一覧表

大河内遺跡

遺構名	地区	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (m ²)	形状	中央穴 (cm)			壁体性	時期
								周囲	長×幅	高さ		
堅穴住居1	1区	堅丸形	0.90	0.90	0	—	4	堅円形	60×38	9	○	後中期後半
堅穴住居2	1区	堅丸形	0.82	0.81	0.3	7.79	8	不整丸形	60×33	1	○	後中期後半
堅穴住居3	1区	堅丸形	0.86	0.80	0	8.87	8	不整圓形	60×32	20	—	後中期後半
堅穴住居4	2区	円形	0.48	0.51	0.9	—	2	堅円形	76×54	32	○	後中期後半
堅穴住居5	2区	円形	0.57	0.47	—	—	5	堅円形	76×54	32	○	後中期後半
堅穴住居5b	2区	円形	0.60	—	—	—	5	堅円形	60×33	21	○	後中期後半
堅穴住居5c	2区	円形	0.58	0.50	—	—	6	堅円形	60×33	21	○	後中期後半
堅穴住居6	2区	円形	0.72	0.61	0.9	21.31	6	堅丸形	60×40	22	○	後中期後半
堅穴住居6a	2区	円形	0.79	—	—	—	5	—	—	—	○	後中期後半
堅穴住居6b	2区	円形	0.79	—	—	—	5	不規則形	110×57	20	○	後中期後半
堅穴住居6c	2区	円形	0.79	—	—	—	7	—	—	—	○	後中期後半
堅穴住居6d	2区	円形	—	—	—	—	2	—	—	—	○	後中期後半
堅穴住居6e	2区	円形	—	—	—	—	3	堅丸形	126×66	26	○	後中期後半
堅穴住居6f	2区	円形	0.78	—	—	—	3	堅丸形	126×66	26	○	後中期後半
堅穴住居7	2区	堅丸形	0.98	0.81	0.7	—	8	不整圓形	55×38	31	○	後中期後半
堅穴住居8	2区	不整圓形	0.86	0.74	—	—	5.31	不整圓形	103×36	21	○	後中期後半
堅穴住居9	2区	堅丸形	0.86	0.74	—	—	4	不整圓形	103×36	20	○	後中期後半
堅穴住居9b	2区	堅丸形	0.86	0.74	—	—	4	不整圓形	103×36	20	○	後中期後半
堅穴住居9c	2区	堅丸形	0.86	0.74	—	—	4	不整圓形	103×36	20	○	後中期後半
堅穴住居9d	2区	堅丸形	0.87	0.74	—	—	4	不整圓形	103×36	20	○	後中期後半
堅穴住居10	2区	堅丸形	0.87	0.74	—	—	4	不整圓形	103×36	20	○	後中期後半
堅穴住居11	2区	堅丸形	0.87	0.74	—	—	4	不整圓形	103×36	20	○	後中期後半
堅穴住居12	2区	堅丸形	0.87	0.74	—	—	4	不整圓形	103×36	20	○	後中期後半
堅穴住居13	2区	円形	0.79	—	—	—	4~5	円形	—	30	○	後中期後半
堅穴住居14	2区	円形	—	—	—	—	—	—	—	—	○	後中期後半
堅穴住居14a	2区	堅丸形	0.51	0.51	—	18.80	8	堅円形	65×59	29	○	後中期後半
堅穴住居14b	2区	堅丸形	0.48	0.35	—	10.82	4	円形	67×65	30	○	後中期後半
堅穴住居15	2区	堅丸形	0.48	0.35	—	12.67	3	円形	67×65	30	○	後中期後半
堅穴住居16	2区	堅丸形	0.48	0.35	—	12.67	3	円形	67×65	30	○	後中期後半
堅穴住居17	2区	堅丸形	0.48	0.35	—	12.67	3	円形	67×65	30	○	後中期後半

下板遺跡

遺構名	地区	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (m ²)	形状	中央穴 (cm)			壁体性	時期
								周囲	長×幅	高さ		
堅穴住居1	南	円形	—	—	—	—	4~5	円形	—	—	○	古墳?

掘立柱建物一覧表

大河内遺跡

遺構名	南北	東西	柱間距離 (cm)		施行 (m)	高さ (cm)	面積 (m ²)	棟方向	柱穴数 (方木直径)	特徴
			幅	奥						
掘立柱建物 1	1.5m	6.7m	197~215	161~767	1.0	293	196.50	N=1°+W	11	中規
掘立柱建物 2	1.8m	3.7m	2.5~260	1.09~2.00	203	588	46.33	N=2°+W	14	中規
掘立柱建物 3	1.8m	3.2m	297~315	130~296	912	396	37.38	N=2°+E	13	中規

穢德遺跡

遺構名	南北	東西	柱間距離 (cm)		施行 (m)	高さ (cm)	面積 (m ²)	棟方向	柱穴数 (方木直径)	特徴
			幅	奥						
掘立柱建物 1	北偏西6°	11.2×2	191~214	177~199	211	376	17.6	N=17°+W	11	全柱木+平梁切頭
掘立柱建物 2	北偏西6°	3.8×1	189~256	207~319	296	313	12.3	N=14°+W	14	全柱木+平梁切頭
掘立柱建物 3	北偏東7°	4.1×1	193~214	1.6~318	407	318	19.8	N=18°+S	14	全柱木+平梁切頭
掘立柱建物 4	北偏東7°	11.1×2	228	226~224	226	400	19.8	N=16°+S	13	全柱木+平梁切頭
掘立柱建物 5	南偏西4°	1.8×1	264	232	261	232	6.1	N=18°+S	11	全柱木+平梁切頭
掘立柱建物 6	南偏西4°	2.7×1	129~177	158~177	206	172	5.0	E=17°+W	14	全柱木+平梁切頭
掘立柱建物 7	南真東	2.7×1 (2)	256~266	294	324	434	25.3	N=17°+W	14	全真木+平梁切頭
掘立柱建物 8	南偏東6°	3.8×2	128~162	160~186	475	544	22.8	N=18°+W	13	全真木+平梁切頭

下板遺跡

遺構名	南北	東西	柱間距離 (cm)		施行 (m)	高さ (cm)	面積 (m ²)	棟方向	柱穴数 (方木直径)	特徴
			幅	奥						
掘立柱建物 1	南	1.8×1	362~389	290~299	308	293	11.1	N=2°+S	13	無蓋

土壤幕一覧表

大河内遺跡

遺構名	南北	東西	柱間距離 (cm)		施行 (m)	高さ (cm)	面積 (m ²)	平面方向	小口座	特徴	備考
			幅	奥							
土礎第 1	1.2×4	長方形	321	113	54	7.72°+E	×	張生縫附+小口座	木床復元あり		
土礎第 2	1区	長方形	179	120	6	N=1°+S	×	張生中縫底張			
土礎第 3	1区	長方形	170	151	15	N=1°+W	○	張生中縫底張			
土礎第 4	1区	長方形	261	61	1	N=1°+W	○	張生中縫底張			
土礎第 5	1区	長方形	1149	61	1	N=2°+S	○	張生中縫底張			
土礎第 6	1区	長方形	95	56	6	N=2°+W	○	張生中縫底張			
土礎第 7	1区	長方形	189	116	—	N=8°+W	○	張生中縫底張			
土礎第 8	1区	長方形	89	60	7	N=8°+W	○	張生中縫底張			
土礎第 9	1区	長方形	1130	67	12	N=8°+S	○	張生中縫底張			
土礎第 10	1区	長方形	187	118	6	N=16°+E	×	張生中縫底			
土礎第 11	2区	長方形	159	111	5	—	—	張生縫附+小口座			
土礎第 12	2区	長方形	170	121	9	N=1°+W	○	張生中縫底張	木床復元あり		
土礎第 13	2区	不規	179	—	—	N=1°+S	○	張生中縫底張	小口縫のみ底張		
土礎第 14	2区	不規	179	—	—	N=8°+E	○	張生中縫底張	小口縫のみ底張		
土礎第 15	2区	長方形	160	81	10	N=12°+W	×	張生中縫底張			

土壤一覧表

大河内遺跡

測定番号	測定区	平面形	断面形	高輪 (cm)	低輪 (cm)	深さ (cm)	特徴	備考
土壤1	1区	不整馬蹄形	圓形	110	86	26	古墳時代中期	複数多段式台地
土壤2	1区	馬蹄形	圓形	105	75	36	古墳時代中期	
土壤3	2区	馬蹄形	圓形	67	60	48	古墳時代中期	
土壤4	2区	L字形	圓形	207	88	31	古墳時代中期	
土壤5	2区	不整馬蹄形	圓形	106	73	21	古墳時代中期	
土壤6	2区	不整馬蹄形	圓形	110	71	39	古墳時代中期	
土壤7	2区	馬蹄形	圓形	192	140	11	古墳時代中期	
土壤8	2区	不整馬蹄形	圓形	91	58	27	古墳時代中期	
土壤9	3区	六整形	圓形	171	156	31	小丘	
土壤10	3区	不整馬蹄形	圓形	139	122	39	小丘	
土壤11	3区	不规则形	圓形	172	115	79	小丘	
土壤12	3区	不整馬蹄形	圓形	132	108	33	小丘	
土壤13	1区	扇形	圓形	206	255	36	小丘	
土壤14	1区	不规则形	圓形	175	110	32	小丘	
土壤15	1区	不整馬蹄形	圓形	117	119	17	小丘	
土壤16	1区	扇形	圓形	111	79	5	小丘	表面に鐵物
土壤17	1区	扇形	圓形	158	120	11	小丘	
土壤18	1区	扇形	圓形	312	88	31	小丘	表面に鐵物
土壤19	1区	不整馬蹄形	圓形	177	93	70	小丘	
土壤20	2区	不整馬蹄形	圓形	150	172	36	小丘	
土壤21	2区	扇形	圓形	110	170	71	小丘	
土壤22	1区	扇形	圓形	105	87	36	小丘	
土壤23	1区	不整馬蹄形	圓形	162	165	35	小丘	
土壤24	1区	不整馬蹄形	圓形	222	126	8	小丘	
土壤25	1区	扇形	圓形	310	215	21	小丘	
土壤26	1区	扇形	圓形	199	96	96	小丘	
土壤27	1区	不规则形	圓形	268	231	45	小丘	
土壤28	2区	不整馬蹄形	圓形	155	165	26	小丘	
土壤29	2区	不整馬蹄形	圓形	147	99	33	小丘	
土壤30	2区	扇形	圓形	172	140	32	小丘	

下坂遺跡

測定番号	測定区	平面形	断面形	高輪 (cm)	低輪 (cm)	深さ (cm)	特徴	備考
土壤1	北	扇形	圓形	—	—	—	古墳時代中期	一部のみ複数
土壤2	北	不整馬蹄形	圓形	93	84	2	古墳時代中期	風化带出現
土壤3	北	不整馬蹄形	圓形	125	107	26	古墳時代中期	
土壤4	北	扇形	圓形	95	65	25	古墳時代中期	
土壤5	北	圓形	圓形	95	—	26	古墳時代中期	
土壤6	北	不整馬蹄形	圓形	167	120	40	古墳時代中期	
土壤7	北	不整馬蹄形	圓形	105	131	35	古墳時代中期	
土壤8	北	扇形	圓形	195	170	35	古墳時代中期	底土坚硬土

2 遺物一覧（観察）表

土壤觀察表

大河內道跡

土器觀察表

大河內遺跡

土器觀察表

大河内道跡

土器觀察表

大河內遺跡

土器觀察表

大河內遺跡

土器觀察表

大河內遺跡

土器觀察表

大河內遺跡

植物遺跡

小範 種類	俗名	科別	器種	可耕面積 (ha)		耕作地圖	現存狀況	老闆	備考
				11月	武陵				
1 經典日式庭園	海芋	荷葉	荷葉	(12.7)	(16.6)	5.2	0.8英呎x5.7公尺		
	重瓣	荷葉	荷葉	(13.5)	(—)	14.1	0.8英呎x5.9公尺		
2	海芋	荷葉	荷葉	14.1	(—)	2.1	0.8英呎x6.1	1/25%	
3 經典日式庭園	重瓣	荷葉	荷葉	(—)	(—)	—	0.7英呎x6.1		
4	海芋	荷葉	荷葉	(—)	(—)	—	0.8英呎x7.1	極度減少	

土器觀察表

種穗追跡

土器観察表

稲穂遺跡

遺物 番号	遺物名	種類	寸幅	形測量 (cm)			外観色調	保存状況	特徴	備考
				口径	底径	壁高				
91	束口器	直	(17.5) (18.6)	3.6	2.6	1.1	淡青色の灰陶			
92	束口器	曲	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
93	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
94	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
95	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
96	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
97	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
98	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
99	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
100	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
101	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
102	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
103	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
104	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
105	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
106	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
107	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
108	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
109	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
110	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
111	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
112	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
113	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
114	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
115	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
116	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
117	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
118	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
119	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
120	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
121	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
122	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
123	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
124	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
125	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
126	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
127	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
128	束口器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶			
129	レンゲ四耳瓶	直	(17.5)	—	—	—	淡青色の灰陶			
130	水井	直	(21.0)	—	—	—	淡青色の灰陶			
131	水井	直	(18.0)	—	—	—	淡青色の灰陶			
132	水井	直	(16.0)	—	—	—	淡青色の灰陶			
133	水井	直	(17.5)	—	—	—	淡青色の灰陶			
134	水井	直	(17.0)	—	—	—	淡青色の灰陶			
135	水井	直	(17.5)	—	—	—	淡青色の灰陶			
136	水井	直	(17.0)	—	—	—	淡青色の灰陶			
下坂遺跡										
遺物 番号	遺物名	種類	口径	形測量 (cm)			外観色調	保存状況	特徴	備考
				底径	壁高	厚さ				
1	束口器	直	11.5	—	4.6	1.6	淡青色	3/4%	斜面削け落とし	
2	束口器	直	9.5	—	3.5	1.6	淡青色			
3	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
4	束口器	直	12.0	9.0	9.1	1.6	淡青色			
5	束口器	直	13.5	—	3.5	1.6	淡青色			
6	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
7	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
8	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
9	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
10	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
11	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
12	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
13	束口器	直	—	—	—	—	淡青色			
14	上鉢付土器	小底	7.5	2.1	3.0	1.6	淡青色の灰陶	1/5%	内・外側に保有者	
15	内鉢	小底	7.5	2.7	1.7	1.6	淡青色		内鉢	
16	内鉢	小底	7.5	2.1	3.0	1.6	淡青色		内鉢	
17	内鉢	直	11.5	—	3.5	1.6	淡青色		内鉢	
18	上鉢付土器	直	—	—	—	—	淡青色の灰陶		内鉢	

石器・石製品一覧表

大河内遺跡

測量 番号	遺跡名	種類	石質	寸法(ミリ)			高さ(cm)	面相	備考
				長さ	幅	厚さ			
S.1		石斧頭	セヌカイト	79.2	24.6	8.2	14.36	研文時代中期	
S.2		石斧頭	セヌカイト	24.7	17.5	5.3	1.80	研文時代中期	
S.3		石斧頭	セヌカイト	25.1	18.4	5.9	1.32	研文時代中期	
S.4		石斧頭	セヌカイト	38.2	19.8	5.0	2.65	研文時代中期	
S.5		石斧頭	セヌカイト	38.2	19.8	5.5	2.4	研文時代中期	
S.6		石斧頭	セヌカイト	29.5	22.3	6.3	3.72	研文時代中期	
S.7		石斧頭	セヌカイト	35.2	19.1	6.7	2.69	研文時代中期	
S.8		石斧頭	セヌカイト	58.9	21.8	6.4	4.97	研文時代中期	
S.9		石斧頭	セヌカイト	48.9	20.1	6.3	3.77	研文時代中期	
S.10		石斧頭	セヌカイト	42.0	18.6	7.0	4.14	研文時代中期	
S.11		石斧頭	セヌカイト	58.9	22.5	6.7	7.19	研文時代中期	
S.12		石斧頭	セヌカイト	50.9	21.5	6.0	5.37	研文時代中期	
S.13		石斧頭	セヌカイト	48.2	22.5	7.5	6.26	研文時代中期	
S.14		石斧頭	セヌカイト	45.2	18.8	6.0	3.87	研文時代中期	
S.15		石斧頭	セヌカイト	97.2	19.7	7.5	13.19	研文時代中期	
S.16		石斧頭	セヌカイト	37.6	16.5	7.2	8.69	研文時代中期	
S.17		石斧頭	セヌカイト	40.2	14.5	6.0	2.47	研文時代中期	
S.18		石斧頭	セヌカイト	37.6	16.4	6.0	1.79	研文時代中期	
S.19		石斧頭	セヌカイト	54.8	21.2	4.7	2.77	研文時代中期	
S.20		石斧頭	セヌカイト	47.0	21.8	7.0	6.45	研文時代中期	
S.21		石斧頭	セヌカイト	52.0	29.8	6.3	12.41	研文時代中期	
S.22		石斧頭	セヌカイト	55.1	27.8	7.0	6.41	研文時代中期	
S.23		石斧頭	濱灰岩	55.8	31.2	9.4	9.07	研文時代中期	
S.24		石斧頭	セヌカイト	58.7	31.2	7.8	20.12	研文時代中期	
S.25		石斧頭	セヌカイト	58.7	26.8	7.0	7.81	研文時代中期	
S.26		石斧頭	セヌカイト	47.8	27.5	6.0	6.70	研文時代中期	
S.27		石斧頭	セヌカイト	48.9	25.5	8.2	10.12	研文時代中期	
S.28		石斧頭	セヌカイト	48.5	22.1	11.8	17.18	研文時代中期	
S.29		石斧頭	セヌカイト	44.1	31.3	9.8	13.21	研文時代中期	
S.30	大河内遺跡	石斧頭	セヌカイト	46.2	31.6	7.0	15.08	研文時代中期	
S.31	大河内遺跡	石斧頭	セヌカイト	52.5	36.1	6.8	22.73	研文時代中期	
S.32	大河内遺跡	石斧頭	セヌカイト	41.6	21.6	10.5	11.48	研文時代中期	
S.33	大河内遺跡	石斧頭	セヌカイト	48.9	31.7	7.2	15.19	研文時代中期	
S.34	大河内遺跡	石斧頭	セヌカイト	60.2	26.5	9.8	13.43	研文時代中期	
S.35	石斧	セヌカイト		13.2	11.0	2.0	0.26	種文時代中期	
S.36	石斧	セヌカイト		16.2	15.7	2.7	0.32	種文時代中期	
S.37	石斧	セヌカイト		14.5	13.0	2.3	0.28	種文時代中期	
S.38	石斧	セヌカイト		18.0	14.5	3.0	0.46	種文時代中期	
S.39	石斧	セヌカイト		19.5	16.5	2.4	0.42	種文時代中期	
S.40	石斧	セヌカイト		19.0	14.6	3.7	0.80	種文時代中期	
S.41	石斧	セヌカイト		19.0	16.0	5.3	1.11	種文時代中期	
S.42	石斧	セヌカイト		22.0	17.0	4.0	1.00	種文時代中期	
S.43	石斧	セヌカイト		16.0	13.0	3.0	0.70	種文時代中期	
S.44	石斧	セヌカイト		16.1	17.0	3.7	0.55	種文時代中期	
S.45	石斧	セヌカイト		21.0	14.5	3.0	0.69	種文時代中期	
S.46	石斧	セヌカイト		15.5	12.5	2.3	0.43	種文時代中期	
S.47	石斧	セヌカイト		18.7	16.0	2.3	0.62	種文時代中期	
S.48	石斧	セヌカイト		19.0	13.0	3.3	0.67	種文時代中期	
S.49	石斧	セヌカイト		22.0	13.0	3.3	0.62	種文時代中期	
S.50	スクレーパー	セヌカイト		65.1	56.2	0.4	24.35	研文時代中期	
S.51	スクレーパー	セヌカイト		55.0	61.0	0.0	14.12	研文時代中期	
S.52	加工のある調片	セヌカイト		17.2	19.9	2.8	0.95	研文時代中期	
S.53	加工のある調片	セヌカイト		26.6	12.9	6.1	2.29	研文時代中期	
S.54	加工のある調片	セヌカイト		57.0	23.2	5.5	6.24	研文時代中期	
S.55	使用痕のある調片	セヌカイト		38.3	19.7	7.5	4.14	研文時代中期	
S.56	使用痕のある調片	セヌカイト		33.7	58.8	9.1	19.87	研文時代中期	
S.57	使用痕のある調片	セヌカイト		26.1	72.5	7.3	15.72	研文時代中期	
S.58	刀柄	セヌカイト		28.9	29.7	9.8	17.34	研文時代中期	
S.59	刀石	セヌカイト		178.0	55.0	28.0	478.49	研文時代中期	
S.60	刀石	セヌカイト		157.9	57.0	26.0	374.17	研文時代中期	
S.61	刀石	セヌカイト		69.7	40.3	7.2	41.64	研文時代中期	
S.62	刀石	セヌカイト		49.8	39.3	1.3	21.80	研文時代中期	
S.63	刀石	セヌカイト		49.7	60.2	6.5	19.82	研文時代中期	
S.64	打撲痕(146)	セヌカイト		92.0	43.5	6.0	30.00	種文時代後期	

石器・石製品一覧表

大河内遺跡

測定番号	測定年	遺跡	石質	寸法(mm)			測定者	測定場所	備考
				長さ	幅	厚さ			
S-63	3区	打削石斧(心火)	燧石	80.0	46.0	13.5	56.59	縫文時代後・縄周	
S-66		打削石斧(心火)	燧石	92.0	47.0	12.0	57.47	縫文時代後・縄周	
S-67		打削石斧(心火)	燧石	125.0	56.0	22.0	154.25	縫文時代後・縄周	
S-68		磨石	武藏玉長崎産灰岩	256.0	132.0	34.0	505.0	縫文時代後・縄周	
S-69	2区後回向	合子石斧	燧石	77.5	42.0	12.0	64.75	縫文時代後・縄周	
S-70	2区後回向	打削石斧(心火)	燧石	86.5	46.5	15.0	68.58	縫文時代後・縄周	
S-71	1区後回向	打削石斧(心火)	武藏玉長崎産灰岩	129.0	55.0	19.5	156.15	縫文時代後・縄周	
S-72	3区後回向	スレーブバー	サメカバ木	26.0	55.0	10.0	41.95	縫文時代後・縄周	
S-73	縫文時代	馬頭	サメカバ木	25.0	71.0	4.0	3.70	縄文時代中期	
S-74	縫文時代	石斧	サメカバ木	19.0	11.0	4.0	1.74	縄文時代中期	
S-75	石斧	サメカバ木	19.0	11.0	4.0	0.91	縄文時代中期		
S-76	縫文時代	石斧	サメカバ木	17.5	15.5	7.0	9.65	縄文時代中期	
S-77	石斧	サメカバ木	100.0	37.0	6.0	90.80	縄文時代中期		
S-78	縫文時代	石斧(石打刃)	燧石	56.0	35.0	8.0	54.78	縄文時代中期	
S-79	縫文時代	石斧	サメカバ木	33.0	11.0	4.0	3.74	縄文時代中期	
S-80	石斧	サメカバ木	28.0	33.0	4.0	9.90	縄文時代中期		
S-81	石斧	サメカバ木	23.0	13.0	4.0	9.56	縄文時代中期		
S-82	縫文時代	石斧	サメカバ木	22.0	16.0	4.0	5.12	縄文時代中期	
S-83	石斧	サメカバ木	14.0	9.5	3.0	0.58	縄文時代中期		
S-84	縫文時代	磨削石斧	燧石	90.0	50.0	8.0	80.22	縄文時代中期	
S-85	縫文時代	石斧	サメカバ木	14.0	47.0	4.0	9.70	縄文時代中期	
S-86	石斧	サメカバ木	20.0	19.0	4.0	9.89	縄文時代中期		
S-87	縫文時代	石斧	サメカバ木	21.0	23.0	11.0	20.00	縄文時代中期	
S-88	縫文時代	要鑿石斧	燧石	153.0	41.5	10.0	90.19	縄文時代中期	
S-89	石斧	砂岩	10.0	31.0	23.0	251.84	縄文時代中期		
S-90	縫文時代	石斧	サメカバ木	99.0	65.0	15.0	109.18	縄文時代中期	
S-91	縫文時代	石斧	サメカバ木	59.0	32.5	6.0	21.75	縄文時代中期	
S-92	縫文時代	石斧	サメカバ木	228.0	255.0	161.0	2150.30	縄文時代中期	
S-93	縫文時代	石斧(刃のみ)	武藏玉長崎産灰岩	125.0	50.5	25.5	336.10	縄文時代中期	
S-94	縫文時代	石斧(刃のみ)	武藏玉長崎産灰岩	158.0	60.5	26.0	477.84	縄文時代中期	
S-95	縫文時代	石斧(刃のみ)	武藏玉長崎産灰岩	79.0	37.0	11.0	61.95	縄文時代中期	
S-96	縫文時代	石斧(刃のみ)	武藏玉長崎産灰岩	62.0	37.0	11.0	51.92	縄文時代中期・中期後半	
S-97	縫文時代	石斧	武藏玉長崎産灰岩	99.0	101.0	38.0	567.34	縄文時代中期・中期後半	
S-98	石斧	サメカバ木	15.0	12.0	2.0	9.24	縄文時代		
S-99	石斧	サメカバ木	17.0	11.0	4.0	9.80	縄文時代		
S-100	石斧	サメカバ木	18.0	16.0	4.0	9.76	縄文時代		
S-101	石斧	サメカバ木	21.0	16.5	3.0	9.58	縄文時代		
S-102	石斧	サメカバ木	22.0	17.0	4.0	1.06	縄文時代		
S-103	石斧	サメカバ木	25.0	15.0	4.0	3.02	縄文時代		
S-104	石斧	サメカバ木	27.0	16.0	4.0	1.72	縄文時代		
S-105	石斧	サメカバ木	17.0	13.0	3.0	9.09	縄文時代		
S-106	石斧	サメカバ木	18.0	11.0	4.0	9.46	縄文時代		
S-107	石斧	サメカバ木	22.0	16.0	3.0	9.84	縄文時代		
S-108	石斧	サメカバ木	25.0	17.0	3.0	9.89	縄文時代		
S-109	石斧	サメカバ木	18.0	10.5	2.0	9.60	縄文時代		
S-110	石斧	サメカバ木	20.0	13.0	3.0	1.79	縄文時代		
S-111	石斧	サメカバ木	27.0	16.0	4.0	1.42	縄文時代		
S-112	石斧	サメカバ木	19.0	12.5	5.0	1.43	縄文時代		
S-113	石斧	サメカバ木	30.0	16.0	4.0	2.28	縄文時代		
S-114	石斧	サメカバ木	22.0	14.0	6.0	2.28	縄文時代		
S-115	石斧	サメカバ木	37.0	16.0	5.0	3.19	縄文時代		
S-116	石斧石器	サメカバ木	28.0	18.0	6.0	5.70	縄文時代		
S-117	石斧石器	サメカバ木	27.0	21.0	10.0	5.20	縄文時代		
S-118	スレーブバー	サメカバ木	41.0	35.0	11.0	21.67	縄文時代		
S-119	石製石斧	燧石	82.0	6.0	11.0	80.52	縄文時代		
S-120	石斧	サメカバ木	55.0	23.5	6.0	9.30	縄文時代		
S-121	石斧	燧石	81.0	27.5	17.0	30.36	縄文時代		
S-122	石製石斧	燧石	114.0	37.0	9.0	9.27	縄文時代		
S-123	石製石斧(不規則)	燧石	54.0	52.0	2.0	76.28	縄文時代		
S-124	石製石斧	燧石	76.0	29.5	6.0	30.70	縄文時代		
S-125	石製石斧	燧石	134.0	30.0	9.0	48.70	縄文時代		
S-126	石製石斧	燧石	116.0	92.5	10.0	90.90	縄文時代		
S-127	石製石斧(不規則)	燧石	82.0	55.0	6.0	35.52	縄文時代		
S-128	大刀(刃石切刃)	燧石	xx.0	70.0	12.0	307.60	縄文時代		

石器・石製品一覧表

大河内遺跡

測量 番号	通称名	種類	石質	寸法(㎜)			重量(g)	時期	備考
				長	幅	厚			
S.129	頭部付刃なし	圓す方刃石斧	玄武岩質風化岩	101.0	22.6	20.6	176.41	新石器時代	
S.130	頭部付刃なし	石斧	砂岩	133.7	27.5	22.2	297.51	新石器時代後期	
S.131	頭部付刃なし	石斧	花崗岩	24.5	27.6	4.4	6.49	新石器時代後期	
S.132	頭部付刃なし	石斧	虎斑石	27.1	(1.6)	15.0	165.64	新石器時代～銅石器時代	初期石器
S.133	頭部付刃なし	石頭敲打器	虎斑石	78.9	21.3	9.6	154.37	新石器時代～銅石器時代	初期石器

稻地遺跡

測量 番号	通称名	種類	石質	寸法(㎜)			重量(g)	時期	備考
				長	幅	厚			
N.1	石斧	石斧	砂岩	28.9	20.5	3.3	8.96	新石器時代	
N.2	石斧	石斧	石英岩	60.1	27.6	3.3	29.41	新石器時代	中世石器

金屬製品一覧表

大河内遺跡

測量 番号	遺構名	地区	器械	寸法(㎜)			重量(g)	材質	時期	備考
				大人尺	大人尺	大人尺				
M.1	遺構に伴わない	?	劍	66.5	6.6	6.9	6.99	鐵	中世	
M.2		?	劍	59.9	6.5	6.9	4.57	鐵	中世	
M.3		?	劍	(25.9)	2.5	4.5	2.30	鐵	中世	
M.4		?	劍	62.99	5.6	4.7	7.66	鐵	中世	
M.5		?	劍	50.71	5.6	4.9	3.30	鐵	中世	
M.6		?	劍	50.51	7.0	4.9	2.96	鐵	中世	
M.7		?	劍	44.5	10.0	5.5	4.14	鐵	中世	
M.8		?	火薙	64.5	21.9	4.9	10.76	鐵	中世	

稻地遺跡

測量 番号	遺構名	地区	種類	寸法(㎜)			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M.1	遺構付近1	北側臺原	刀子	56.7	11.0	1.9	6.80	鐵	古氏	
M.2	去塚	去塚	劍	21	-	-	-	鐵	近世	白山御用式鏡

土製品一覧表

大河内遺跡

測量 番号	遺構名	地點	器種	寸法(㎜)			重量(g)	色調	陶質	備考
				大人尺	大人尺	大人尺				
C.1	遺構に伴わない	2級	円錐形土器	(7.0)	(12.5)	6.5	14.36	灰褐色±2	馬鹿田款中型	
C.2		2級	土器	(26.5)	(21.0)	24.0	29.87	素燒±3%	馬鹿田款後期	
C.3		2級	圓錐形土器	57.5	25.5	8.2	31.53	素燒±5%	馬鹿田款後期	
C.4		1級	土器	8.6	13.1	-	6.98	12.5%灰褐色±10%	下世	(L16.1.6m)
C.5		1級	土器	(28.2)	11.6	-	5.27	灰褐色±5%±5%	下世	(L16.2.2m)
C.6		7級	土器	(26.1)	11.5	-	5.27	12.5%灰褐色±10%	下世	(L16.4.9m)
C.7		2級	土器	28.6	11.5	-	3.22	黑褐色±3%	下世	(L16.4.2m)
C.8		3級	土器	(27.7)	(11.6)	-	3.38	12.5%灰褐色±5%	下世	(L16.4.9m)
C.9		1級	土器	29.6	9.6	-	2.22	灰褐色±3%	下世	(L16.5.2m)
C.10		1級	土器	27.6	11.2	-	2.77	12.5%灰褐色±5%	下世	(L16.5.1m)

稻地遺跡

測量 番号	測量名	周回	器種	寸法(㎜)			重量(g)	色調	陶質	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
C.1	瓦合磚	南正側面	土器	41.9	17.5	-	19.22	12.5%灰褐色±5%	下世	(L16.3.1m)

下坂遺跡製鉄関連遺物一覧表

組合番号	発見場所	種別	寸法測定 (mm)			重量 (g)	測定日	初期	備考
			最大長	最小幅	厚さ				
C.1	鋸渕塚	鉄鋤	156.0	217.0	156.0	1367.16	-	古墳時代後期	丸頭せり型の直鋸刃あり
C.2		鉄鋤	134.0	166.0	63.0	1113.31	-	古墳時代後期	直鋸刃
C.3		鉄鋤	160.0	166.0	52.0	815.06	-	古墳時代後期	直鋸刃
C.4		鉄鋤	144.0	205.0	23.0	1369.41	-	古墳時代後期	直鋸刃, 口底の直鋸刃あり
C.5		鉄鋤	188.0	278.0	63.0	1931.51	-	古墳時代後期	直鋸刃内彎
S.1		鉄鋤, 石	170.0	27.0	62.5	1166.52	聖徳川	古墳時代後期	
S.2		鉄鋤, 石	170.0	27.5	55.0	559.69	聖徳川	古墳時代後期	直鋸刃
S.3		鉄鋤, 石	182.0	106.0	63.5	1529.29	荒城川	古墳時代後期	
S.4		鉄鋤, 石	86.0	57.5	58.5	362.56	小鶴川	古墳時代後期	
S.5		鉄鋤, 石	82.5	61.0	42.0	255.82	小鶴川	古墳時代後期	
S.6	土塗3	鉄鋤, 石	62.0	48.0	34.0	167.87	聖徳川	古墳時代後期	
S.7		鉄鋤, 石	65.0	62.0	51.0	318.81	聖徳川	古墳時代後期	
S.8		鉄鋤, 石	61.0	47.0	38.0	178.55	聖徳川	古墳時代後期	直鋸刃, 分岐
S.9		鉄鋤, 石	59.5	48.5	38.0	99.50	小鶴川	古墳時代後期	
S.10		鉄鋤, 石	69.0	48.5	43.0	165.81	聖徳川	古墳時代後期	
S.11		鉄鋤, 石	72.0	36.0	39.5	123.00	聖徳川	古墳時代後期	
S.12		鉄鋤, 石	42.0	41.0	27.5	51.13	小鶴川	古墳時代後期	
S.13		鉄鋤, 石	70.0	39.0	39.5	118.34	聖徳川	古墳時代後期	
S.14		鉄鋤, 石	55.0	39.0	25.0	60.84	小鶴川	古墳時代後期	直鋸, 分岐
S.15		鉄鋤, 石	51.5	35.0	25.0	65.37	小鶴川	古墳時代後期	
S.16	鋸7塚	鉄鋤, 石	47.5	26.0	15.5	34.26	小鶴川	古墳時代後期	
S.17		鉄鋤, 石	56.0	27.0	21.5	24.56	小鶴川	古墳時代後期	
S.18		鉄鋤, 石	43.5	26.0	13.5	21.52	小鶴川	古墳時代後期	
S.19		鉄鋤, 石	37.0	27.5	23.5	26.21	小鶴川	古墳時代後期	
S.20		鉄鋤, 石	31.0	25.5	14.5	17.57	小鶴川	古墳時代後期	直鋸, 分岐
S.21		鉄鋤, 石	29.0	31.0	19.0	14.27	小鶴川	古墳時代後期	直鋸, 分岐
S.22		鉄鋤, 石	29.0	26.0	21.0	26.91	小鶴川	古墳時代後期	直鋸, 分岐
M.1	野原塚1 古墳群	工具・付着物	121.0	80.0	25.0	288.11	-	古墳時代後期	棒状の工具が付着
M.2		工具・付着物	100.0	45.0	30.0	35.06	-	古墳時代後期	棒状の工具が付着
M.3		工具・付着物	74.0	46.0	31.0	236.63	-	古墳時代後期	棒状の工具が付着
M.4		工具・付着物	125.0	122.0	33.0	1060.91	-	古墳時代後期	棒状の工具が付着
M.5		工具・付着物	115.0	126.0	78.0	1658.21	-	古墳時代後期	
M.6		工具・付着物	87.0	64.0	41.0	290.73	-	古墳時代後期	
M.7		工具・付着物	122.0	127.0	68.0	2618.25	-	古墳時代後期	
M.8		工具・付着物	122.0	122.0	33.0	1060.91	-	古墳時代後期	直鋸刃
M.9		工具・付着物	115.0	126.0	78.0	1658.21	-	古墳時代後期	
M.10		工具・付着物	74.0	46.0	31.0	236.63	-	古墳時代後期	
M.11		工具・付着物	126.0	41.0	30.0	138.57	-	古墳時代後期	
M.12		工具・付着物	71.0	48.0	31.0	143.88	-	古墳時代後期	直鋸刃
M.13		工具・付着物	17.0	6.0	31.0	224.64	-	古墳時代後期	
M.14		工具・付着物	140.5	14.0	100.0	2094.73	-	古墳時代後期	
M.15		工具・付着物	164.0	63.0	45.0	727.91	-	古墳時代後期	
M.16		工具・付着物	104.5	86.0	116.0	217.59	-	古墳時代後期	直鋸刃
M.17		工具・付着物	45.0	37.0	16.0	35.39	-	古墳時代後期	直鋸刃
M.18		工具・付着物	90.0	56.0	24.0	29.29	-	古墳時代後期	直鋸刃, メカニズム (○)
M.19		工具・付着物	33.0	32.0	22.0	30.38	-	古墳時代後期	直鋸刃, メカニズム (●)

3 大河内遺跡3区出土遺物一覧表

遺物件数 -ノット番号	X	Y	Z	種類	石寸	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	参考 考文	備註 等
S1	-160803, 817	-18001, 214	89, 018	玉串器	ナガヨコト	47.0	27.5	6.0	6.70	5,960	大河内3区	S1
S2	-160803, 729	-18001, 240	89, 020	玉串器	ナガヨコト	42.5	23.2	6.0	3.47			S1
S3	-160804, 471	-18001, 202	89, 022	石器	ナガヨコト	28.0	17.2	6.0	1.03			S1
S4	-160808, 012	-18001, 054	89, 238	F	ナガヨコト	21.0	14.0	10.0	1.36			
S5	-160807, 129	-18001, 512	89, 098	F	ナガヨコト	16.0	12.0	2.0	0.60			
S6	-160804, 130	-18001, 743	89, 095	F	ナガヨコト	8.0	12.0	2.0	0.33			
S7	-160801, 803	-18001, 943	89, 098	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	0.50			
S8	-160801, 803	-18001, 943	89, 098	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	0.50			
S9	-160807, 271	-18001, 957	89, 115	有孔玉器	ナガヨコト	38.0	14.0	2.0	22.5	8.2	大河内	S1
S10	-160807, 411	-18001, 612	89, 147	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	2.2	0.18		
S11	-160807, 341	-18001, 549	89, 156	F	ナガヨコト	28.0	12.0	2.0	3.2	1.38		
S12	-160802, 303	-18001, 613	89, 167	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	0.70			
S13	-160804, 354	-18001, 582	89, 168	F	ナガヨコト	19.0	14.0	2.0	0.52			
S14	-160807, 110	-18001, 600	89, 208	F	ナガヨコト	11.0	8.0	2.0	0.10	1.0	0.11	
S15	-160807, 110	-18001, 600	89, 208	F	ナガヨコト	7.0	5.0	2.0	0.05	1.0	0.11	
S16	-160807, 110	-18001, 600	89, 208	F	ナガヨコト	7.0	5.0	2.0	0.05	1.0	0.11	
S17	-160807, 161	-18014, 287	89, 176	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	2.2	1.04		
S18	-160807, 201	-18014, 404	89, 178	F	ナガヨコト	9.0	6.0	2.0	0.50	0.53		
S19	-160801, 093	-18014, 138	89, 146	F	ナガヨコト	6.0	4.0	2.0	0.26			
S20	-160806, 256	-18014, 154	89, 097	F	ナガヨコト	14.0	10.0	2.0	2.4	1.24		
S21	-160807, 256	-18014, 203	89, 126	F	ナガヨコト	21.0	12.0	2.0	0.90			
S22	-160807, 591	-18014, 261	89, 145	F	ナガヨコト	13.0	9.0	2.0	2.4	0.73		
S23	-160807, 394	-18014, 051	89, 190	F	ナガヨコト	13.0	9.0	2.0	1.7	0.37		
S25	-160808, 117	-18014, 631	89, 174	F	ナガヨコト	15.0	10.0	2.0	1.8	0.73		
S27	-160808, 036	-18014, 121	89, 181	F	ナガヨコト	12.0	8.0	2.0	0.50	1.20		
S28	-160808, 034	-18014, 254	89, 191	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	1.4	0.15		
S29	-160807, 304	-18015, 281	89, 182	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	0.80	0.83		
S30	-160801, 199	-18015, 978	89, 162	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	1.4	0.11		
S31	-160804, 050	-18015, 151	89, 116	F	ナガヨコト	15.0	10.0	2.0	1.4	0.97		
S32	-160805, 070	-18015, 504	89, 117	F	ナガヨコト	13.0	10.0	2.0	1.4	0.25		
S33	-160805, 271	-18015, 504	89, 142	F	ナガヨコト	11.0	8.0	2.0	1.3	0.13		
S34	-160806, 328	-18015, 505	89, 105	F	ナガヨコト	18.0	12.0	2.0	1.3	1.07		
S35	-160808, 006	-18015, 186	89, 158	F	ナガヨコト	40.0	20.0	2.0	4.30	0.30		
S36	-160808, 719	-18015, 018	89, 105	F	ナガヨコト	18.0	12.0	2.0	0.7	0.20		
S37	-160808, 829	-18015, 402	89, 252	F	ナガヨコト	12.0	7.0	2.0	2.4	0.24		
S38	-160808, 906	-18015, 122	89, 231	F	ナガヨコト	9.0	5.0	2.0	1.3	0.14		
S40	-160807, 436	-18014, 924	89, 196	F	ナガヨコト	10.0	7.0	2.0	1.6	0.53		
S41	-160808, 014	-18011, 241	89, 172	F	ナガヨコト	9.0	7.0	2.0	1.2	0.13		
S42	-160807, 895	-18015, 011	89, 275	F	ナガヨコト	18.0	12.0	2.0	1.8	0.41		
S43	-160808, 649	-18014, 012	89, 223	F	ナガヨコト	12.0	8.0	2.0	0.56			
S44	-160801, 666	-18014, 130	89, 226	F	ナガヨコト	9.0	5.0	2.0	1.7	0.13		
S45	-160801, 030	-18014, 024	89, 222	F	ナガヨコト	9.0	5.0	2.0	1.4	0.20		
S46	-160808, 257	-18015, 128	89, 235	F	ナガヨコト	8.0	5.0	2.0	1.5	1.50		
S48	-160803, 670	-18014, 056	89, 106	F	ナガヨコト	10.0	7.0	2.0	1.3	0.25		
S49	-160804, 328	-18016, 307	89, 292	F	ナガヨコト	21.0	15.0	2.0	3.4	0.56		
S50	-160801, 181	-18014, 741	89, 262	c	ナガヨコト	17.0	12.0	2.0	0.16			
S51	-160801, 449	-18014, 472	89, 207	c	ナガヨコト	17.0	12.0	2.0	0.05			
S52	-160807, 844	-18016, 079	89, 248	c	ナガヨコト	17.0	12.0	2.0	0.20			
S53	-160808, 154	-18016, 618	89, 277	F	ナガヨコト	20.0	18.0	2.0	2.2	1.40		
S54	-160808, 209	-18016, 750	89, 267	F	ナガヨコト	47.0	19.0	2.0	7.7	15.19		S1
S55	-160808, 321	-18016, 537	89, 276	F	ナガヨコト	12.0	14.0	2.0	2.1	0.40		
S56	-160808, 193	-18017, 959	89, 261	F	ナガヨコト	6.0	13.5	2.0	0.25			
S57	-160808, 259	-18018, 142	89, 302	c	ナガヨコト	17.0	12.0	2.0	0.12			
S58	-160808, 277	-18017, 872	89, 269	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	2.1	0.58		
S59	-160807, 258	-18017, 258	89, 249	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	2.9	0.53		
S60	-160809, 190	-18017, 257	89, 226	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	2.2	0.27		
S61	-160809, 384	-18017, 258	89, 249	F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	2.9	0.53		
S62	-160809, 394	-18017, 062	89, 216	F	ナガヨコト	6.0	12.0	2.0	1.7	0.19		
S63	-160809, 757	-18017, 062	89, 262	C	ナガヨコト	16.0	12.0	2.0	2.2	0.27		
S71	-160801, 825	-18011, 050	89, 195	R.F	ナガヨコト	16.0	10.0	2.0	2.7	21.15		
S72	-160809, 307	-18011, 050	89, 217	波	波							
S73	-160808, 809	-18001, 743	89, 248	c	ナガヨコト				6.07			
S75	-160808, 802	-18001, 062	89, 206	F	ナガヨコト	21.0	10.0	2.0	1.66			
S76	-160809, 119	-18001, 263	89, 226	F	ナガヨコト	16.0	12.0	2.0	2.0	0.25		

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(m)	裏形	参考	備考
577	-160097.796	-130054.051	201.204	P.1	サスカメント	20.5	*	20.3		4.7	1.46		
578	-160096.159	-130052.151	201.341	P.1	サスカメント	25.5		24.5		5.5	5.37		
579	-160099.491	-130051.212	201.368	P.1	サスカメント	15.2		16.5		2.3	1.10		
580	-160099.297	-130051.107	201.396	P.1	サスカメント	20.5		21.2	*	4.1	4.62		
581	-160098.841	-130051.903	201.358	P.1	サスカメント	18.2		20.7		3.8	1.18		
582	-160097.97	-130051.262	201.352	P.1	サスカメント	16.5		17.1		2.6	0.94		
583	-160096.799	-130051.012	201.347	P.1	サスカメント	18.5	*	19.1		2.9	0.97		
584	-160096.546	-130051.401	201.334	P.1	サスカメント	18.3		18.1		1.9	0.38		
585	-160096.546	-130051.405	201.336	P.1	サスカメント	6.2	*	12.1		1.3	0.11		
586	-160094.398	-130051.154	201.225	P.1	サスカメント	22.5		13.3		1.9	0.59		
587	-160091.277	-130101.407	201.191	P.1	サスカメント	12.5		14.4		1.6	0.75		
588	-160091.369	-130101.250	201.110	P.1	サスカメント	7.0	*	13.2	*	1.7	0.23		
589	-160091.410	-130101.441	201.195	P.1	サスカメント	11.3		22.5		2.0	0.54		
590	-160091.556	-130101.411	201.195	P.1	サスカメント	1.2	*	11.2	*	2.6	0.17		
591	-160091.492	-130101.052	201.195	P.1	サスカメント	16.5	*	17.2	*	1.6	0.13		
592	-160091.069	-130104.623	201.228	P.1	サスカメント	17.2	*	24.0		2.7	0.96		
593	-160091.396	-130101.252	201.252	P.1	サスカメント	23.9		25.1		2.8	1.71		
594	-160091.471	-130101.081	201.255	P.1	サスカメント	16.8	*	27.8		4.6	11.32		
595	-160091.711	-130101.524	201.242	P.1	サスカメント	10.2		10.5		6.5	19.82	561	
596	-160091.072	-130101.072	201.239	P.1	サスカメント	13.2		18.5	*	1.8	0.19		
597	-160091.294	-130101.253	201.243	P.1	サスカメント	18.6	*	22.5		2.8	14.27		
598	-160091.278	-130101.701	201.281	P.1	サスカメント	16.1	*	14.0	*	0.7	0.55	513	
599	-160091.927	-130105.951	201.361	P.1	サスカメント	17.2	*	24.2		5.8	3.61		
600	-160091.275	-130104.988	201.326	P.1	サスカメント	18.2	*	24.3		2.9	1.21		
601	-160091.287	-130104.681	201.349	P.1	サスカメント	22.9		24.7		1.4	4.16	作業場	
602	-160091.087	-130101.871	201.311	P.1	サスカメント	40.0	*	20.4		5.3	3.72		
603	-160091.497	-130101.214	201.316	P.1	サスカメント	14.7		16.3		3.2	7.33		
604	-160091.506	-130101.151	201.305	P.1	サスカメント	15.0		18.5		2.4	1.28		
605	-160091.514	-130101.010	201.327	P.1	サスカメント	15.3		11.0		2.2	0.27		
606	-160088.961	-130121.416	201.335	P.1	サスカメント	15.5		23.4		3.6	1.76		
607	-160088.736	-130101.511	201.342	P.1	サスカメント	17.0		22.0		2.9	0.96		
608	-160087.898	-130101.351	201.305	P.1	サスカメント	16.2	*	14.2		1.8	20.12	524	
609	-160087.693	-130101.142	201.291	P.1	サスカメント	29.6		32.0		4.2	3.37		
610	-160087.673	-130101.243	201.293	P.1	サスカメント	18.6		20.9	*	4.6	1.39		
611	-160088.085	-130101.704	201.276	P.1	サスカメント	18.6		9.9		2.6	0.49		
612	-160088.927	-130101.213	201.216	P.1	サスカメント	15.3		18.9		5.9	1.66		
613	-160088.647	-130101.511	201.234	P.1	サスカメント	28.3		31.5		4.4	4.18		
614	-160087.693	-130101.291	201.231	P.1	サスカメント	17.0		21.0		2.8	0.64		
615	-160087.673	-130101.243	201.231	P.1	サスカメント	18.6		20.9	*	4.6	1.39		
616	-160088.927	-130101.213	201.216	P.1	サスカメント	15.3		18.9		5.9	1.66		
617	-160088.647	-130101.511	201.234	P.1	サスカメント	27.3		31.5		4.4	4.18		
618	-160087.654	-130101.648	201.272	P.1	サスカメント	20.6		21.6		2.8	0.64		
619	-160088.898	-130101.352	201.272	P.1	サスカメント	21.4	*	28.2		3.5	1.60		
620	-160088.379	-130101.279	201.265	P.1	サスカメント	16.2		14.9		1.7	0.37		
621	-160088.447	-130101.451	201.245	P.1	サスカメント	15.0		22.6		2.6	1.09		
622	-160089.341	-130101.530	201.256	P.1	サスカメント	16.2		28.6		2.4	1.33		
623	-160089.387	-130101.387	201.271	P.1	サスカメント	27.9	*	28.9		3.6	5.84		
624	-160076.936	-130122.222	201.272	P.1	サスカメント	22.6		22.9		3.8	1.52		
625	-160076.009	-130104.429	201.271	P.1	サスカメント	27.2		28.6		2.8	1.95		
626	-160076.779	-130104.132	201.275	L.16.25	サスカメント	38.7	*	26.9		7.9	7.81	821	
627	-160076.715	-130104.375	201.275	P.1	サスカメント	18.5		31.2		5.6	2.35		
628	-160089.657	-130104.681	201.264	P.1	サスカメント	14.6		17.7		2.2	0.55		
629	-160089.263	-130104.967	201.276	P.1	サスカメント	18.2	*	31.0	*	5.9	2.58		
630	-160089.684	-130104.516	201.269	P.1	サスカメント	36.0	*	21.8	*	5.6	4.07	N8	
631	-160089.825	-130104.608	201.277	P.1	サスカメント	15.9		21.2		2.9	0.57		
632	-160089.919	-130104.650	201.268	c.b	サスカメント	26.2		20.7		2.2	1.78		
633	-160089.319	-130104.650	201.268	c.b	サスカメント	20.6		27.2		4.4	0.08		
634	-160087.583	-130104.465	201.282	P.1	サスカメント	12.1		13.6		2.6	0.22		
635	-160088.187	-130108.911	201.199	P.1	サスカメント	12.2	*	11.6		8.7	25.15		
636	-160089.856	-130103.208	201.192	P.1	サスカメント	21.6	*	22.9		8.2	2.55		
637	-160081.198	-130101.475	201.008	石器	サスカメント	15.6		11.5	*	2.8	6.57		
638	-160086.627	-130108.586	201.076	打削器	サスカメント	22.1		21.7		1.7	1.11		
639	-160087.377	-130107.512	201.068	骨製石斧	サスカメント	152.6		51.6		36.5	274.12	560	
640	-160087.119	-130108.019	201.058	骨製石斧	サスカメント	126.0		56.0		22.6	154.25	567	
641	-160087.657	-130108.953	201.055	骨製石斧	サスカメント	47.1		31.2		6.5	6.71		
642	-160087.794	-130105.657	201.190	P.1	サスカメント	16.2	*	17.5	*	5.7	0.35		
643	-160088.279	-130103.414	201.163	P.1	サスカメント	18.6		21.6		6.7	1.39		
644	-160088.251	-130105.479	201.168	R.F	サスカメント	26.6	*	14.9	*	5.7	2.26		
645	-160088.329	-130102.561	201.161	R.F	サスカメント	43.6	*	27.2		6.7	6.51		
646	-160088.111	-130102.611	201.165	P.1	サスカメント	16.3		24.2	*	2.5	6.92		
647	-160088.826	-130102.710	201.166	P.1	サスカメント	12.8	*	11.5		1.7	0.25		

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
Q155	-160001_340	-160011_947	as_120	P	ササガベト	21.4	*	26.7	2.1	0.79			
Q156	-160001_130	-160012_335	as_025	P	ササガベト	14.3		17.3	2.0	0.64			
Q158	-160001_467	-160012_344	as_019	P	ササガベト	14.9		24.0	3.7	1.49			
Q160	-160001_619	-160012_323	as_026	e	ササガベト					0.414			
Q171	-160001_140	-160013_484	as_024	P	ササガベト	26.8	*	18.2	2.0	1.00			
Q172	-160001_375	-160013_354	as_028	P	ササガベト	18.5		24.2	5.6	1.92			
Q173	-160001_617	-160013_344	as_044	P	ササガベト	6.8		14.3	2.0	0.26			
Q174	-160001_130	-160048_543	as_023	P	ササガベト	14.5	*	24.2	2.4	0.95			
Q175	-160048_642	-160048_661	as_019	P	ササガベト	44.0		17.4	5.7	2.35			
Q176	-160048_384	-160048_692	as_314	P	ササガベト	20.8		27.1	2.7	2.67	石核頭部有り		
Q177	-160077_486	-160047_927	as_658	未定	ササガベト	43.7	*	19.1	5.7	2.09	5.60±5と裏石用	5.2	
Q178	-160078_500	-160011_390	as_454	P	ササガベト	10.4		18.2	2.0	0.33			
Q179	-160078_390	-160011_231	as_495	P	ササガベト	19.3		24.3	2.7	1.06			
Q181	-160078_397	-160011_551	as_495	P	ササガベト	12.1		21.1	2.0	0.49			
Q182	-160078_392	-160011_390	as_495	P	ササガベト	13.6		21.0	1.9	0.49			
Q183	-160077_395	-160011_216	as_452	P	ササガベト	19.1		17.3	2.7	0.55			
Q184	-160077_399	-160011_417	as_495	P	ササガベト	26.1		21.2	4	2.7	0.87		
Q185	-160078_271	-160011_137	as_311	P	ササガベト	21.6	*	26.4	4	4.5	2.37		
Q190	-160078_511	-160011_051	as_495	未定	ササガベト	26.3		13.6	3.7	1.9			
Q191	-160077_391	-160011_121	as_306	未定	ササガベト	13.4		22.5	4	2.3	10.56		
Q192	-160077_372	-160011_479	as_321	P	ササガベト	12.1	*	13.9	4	0.9	0.28		
Q193	-160077_326	-160011_130	as_306	P	ササガベト	13.1	*	16.5	4	1.6	0.28		
Q194	-160076_396	-160011_260	as_495	P	ササガベト	26.6	*	20.0	2.7	1.47			
Q196	-160076_398	-160048_528	as_495	P	ササガベト	16.8	*	13.5	1.9	0.46			
Q197	-160076_248	-160011_052	as_495	P	ササガベト	16.4		13.6	2.0	0.56			
Q199	-160076_177	-160011_216	as_495	e	ササガベト					0.408			
Q200	-160076_561	-160011_661	as_495	P	ササガベト	12.4		18.1	2.1	0.41			
Q201	-160076_326	-160048_257	as_495	P	ササガベト	18.4	*	12.8	2.0	0.55			
Q202	-160076_259	-160048_720	as_162	P	ササガベト	12.6		24.9	2.4	0.74			
Q203	-160087_419	-160047_972	as_295	P	ササガベト	16.1		11.8	1.8	0.25			
Q204	-160087_692	-160047_010	as_361	P	ササガベト	12.2	*	18.1	1	2.0	0.34		
Q205	-160087_496	-160048_670	as_394	P	ササガベト	12.9		14.2	1.7	0.22			
Q206	-160087_622	-160048_811	as_376	P	ササガベト	6.8	*	11.2	1	1.1	0.68		
Q207	-160076_183	-160048_179	as_356	P	ササガベト	11.6		25.2	3.0	0.65			
Q208	-160076_236	-160048_253	as_356	P	ササガベト	15.6		15.1	2.6	0.41			
Q209	-160087_389	-160075_016	as_333	P	ササガベト	13.9	*	19.2	2.1	0.56			
Q210	-160087_406	-160071_045	as_306	P	ササガベト	16.5		21.2	1.9	0.44			
Q211	-160087_838	-160071_177	as_405	P	ササガベト	26.1		21.0	2.0	1.53			
Q212	-160087_855	-160071_184	as_371	P	ササガベト	26.1		22.5	3.7	1.94			
Q214	-160076_754	-160042_538	as_239	P	ササガベト	33.2	*	34.6	1	4.3	2.88		
Q215	-160076_439	-160042_462	as_193	P	ササガベト	11.4		9.1	1.6	0.12			
Q216	-160076_564	-160042_053	as_206	P	ササガベト	36.7		20.9	17.3	2.27	吹き出し		
Q217	-160076_621	-160043_067	as_271	P	ササガベト	13.9	*	18.4	1	2.3	0.52		
Q218	-160071_227	-160041_847	as_243	P	ササガベト	17.6		27.9	2.0	0.67			
Q219	-160088_321	-160045_631	as_297	P	ササガベト	23.1		20.8	4.0	1.18			
Q220	-160088_432	-160045_361	as_241	P	ササガベト	13.1		17.2	2.8	0.54			
Q221	-160088_038	-160077_440	as_129	打込み?	心臓	92.0		43.5	16.0	30.09	564		
Q222	-160088_330	-160056_204	as_143	打込み?	心臓	48.3	*	22.5	1.2	6.98	513		
Q223	-160087_544	-160074_155	as_071	P	ササガベト	16.7		23.6	1	2.1	0.71		
Q224	-160084_684	-160073_250	as_696	P	ササガベト	12.4	*	17.9	1.7	0.41			
Q225	-160084_366	-160073_253	as_149	P	ササガベト	50.4		44.8	4.5	8.26			
Q226	-160082_279	-160074_643	as_214	P	ササガベト	15.5		12.9	1.2	0.52			
Q227	-160081_759	-160075_275	as_196	P	ササガベト	17.9	*	20.2	2.4	0.96			
Q228	-160085_199	-160081_516	as_319	打込み?	心臓	18.5	*	14.0	2.5	0.62	547		
Q229	-160087_284	-160073_912	as_155	P	ササガベト	14.2	*	18.6	2.5	0.76			
Q231	-160099_127	-160074_219	as_957	P	ササガベト	17.7		15.7	3.1	0.95			
Q232	-160099_534	-160074_522	as_752	P	ササガベト	21.5		11.5	3.0	0.69	517		
Q233	-160096_364	-160071_550	as_805	P	ササガベト	16.1		31.5	3.5	4.71			
Q234	-160095_614	-160072_854	as_056	P	ササガベト	20.6		21.3	5.1	1.81			
Q236	-160095_372	-160072_961	as_956	P	ササガベト	26.5		31.1	6.5	3.79			
Q237	-160095_027	-160073_050	as_052	P	ササガベト	9.4	*	11.6	2.1	0.28			
Q238	-160091_305	-160071_411	as_112	e	ササガベト					0.408			
Q239	-160092_397	-160071_277	as_057	R P	ササガベト	19.7	*	27.7	6.7	1.57			
Q240	-160092_674	-160071_116	as_095	P	ササガベト	11.1	*	11.1	1	0.1	0.25		
Q241	-160092_878	-160071_033	as_176	P	ササガベト	14.1	*	18.3	4	2.5	0.76		
Q242	-160091_637	-160071_644	as_112	P	ササガベト	11.7		17.6	1.7	0.45			
Q243	-160091_119	-160071_219	as_172	P	ササガベト	12.2	*	16.8	2.2	0.7			
Q244	-160091_617	-160071_617	as_176	P	ササガベト	1.7	*	9.9	1	1.6	0.19		
Q245	-160091_499	-160071_617	as_105	P	ササガベト	16.7		14.8	1.1	0.37			
Q246	-160092_323	-160071_514	as_103	e	ササガベト					0.408			

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
S240	-160074, 790	-160074, 471	as, 975	P 1	サスカノト	12.2	*	20.5	*	3.3	1.4		
S240	-160074, 342	-160074, 272	as, 924	P 1	サスカノト	8.2		14.5		2.8	0.30		
S240	-160074, 879	-160074, 452	as, 912	P 1	サスカノト	14.5		17.0	*	4.7	0.38		
S244	-160077, 416	-160074, 798	as, 825	P 1	サスカノト	22.2		20.3		6.5	1.19		
S246	-160077, 219	-160074, 143	as, 889	P 1	サスカノト	11.8		19.2		2.6	0.19		
S246	-160078, 344	-160074, 273	as, 857	P 1	サスカノト	13.4		20.1		3.4	0.47		
S247	-160077, 309	-160074, 271	as, 853									器物なし	
S248	-160078, 346	-160074, 327	as, 865									器物なし	
S271	-160077, 249	-160074, 422	as, 866	R P	サスカノト	17.3	*	18.0	*	2.6	0.95		
S271	-160080, 249	-160074, 282	as, 182	P 5	サスカノト							0.16	
S274	-160080, 290	-160074, 314	as, 216	P 1	サスカノト	17.3		21.3		2.7	1.02		
S274	-160080, 241	-160074, 150	as, 208	P 1	サスカノト	10.8		12.2		1.7	0.20		
S276	-160080, 184	-160074, 270	as, 193	P 5	サスカノト							0.04	
S277	-160080, 642	-160074, 642	as, 196	P 1	サスカノト	11.5		8.5		16.0	0.15		
S279	-160081, 347	-160074, 253	as, 193	P 1	サスカノト	7.9		11.2		2.6	0.11		
S279	-160081, 472	-160074, 951	as, 183	P 1	サスカノト	16.5		22.0		3.6	0.81		
S280	-160081, 399	-160071, 609	as, 196	P 1	サスカノト	16.9		20.2	*	2.5	0.70		
S281	-160080, 875	-160071, 212	as, 167	P 1	サスカノト	12.9	*	20.5		2.9	0.95		
S281	-160081, 399	-160071, 771	as, 120	P 1	サスカノト	12.8		21.2		2.5	0.72		
S284	-160081, 392	-160071, 642	as, 106	P 1	サスカノト	18.6		22.2		5.9	2.55		
S284	-160081, 411	-160071, 661	as, 106	P 1	サスカノト	11.2		19.2		2.2	0.10		
S286	-160080, 885	-160071, 019	as, 115	P 1	サスカノト	11.9		20.2	*	2.8	1.39		
S287	-160082, 189	-160075, 023	as, 195	P 1	サスカノト	12.0	*	11.9	*	6.6	4.78		
S288	-160081, 909	-160074, 619	as, 975	25B	サスカノト	12.5		11.6		2.5	0.28		
S289	-160081, 278	-160074, 921	as, 928	P 1	サスカノト	16.5		24.5		2.4	0.96		
S290	-160081, 459	-160074, 711	as, 929	P 1	サスカノト	16.1		17.6		2.7	0.72		
S290	-160081, 836	-160074, 663	as, 929	P 1	サスカノト	12.5		12.6		1.5	0.26		
S291	-160081, 960	-160074, 662	as, 929	P 1	サスカノト	18.4		19.4		4.4	1.03		
S294	-160086, 258	-160074, 812	as, 905	P 1	サスカノト	48.1		71.6		15.9	29.64	正面有斜井	
S295	-160086, 266	-160074, 476	as, 926	P 1	サスカノト	27.6		41.4		6.6	6.03		
S296	-160081, 909	-160074, 011	as, 974	P 1	サスカノト	21.1		24.9		3.5	1.83		
S297	-160087, 090	-160074, 080	as, 644	U P	サスカノト	16.5		40.0		5.1	4.96		
S298	-160087, 506	-160074, 074	as, 634	P 1	サスカノト	13.5		18.7		5.1	6.61		
S299	-160086, 997	-160071, 211	as, 651	P 1	サスカノト	16.9		14.1		2.1	0.38		
S300	-160086, 842	-160071, 200	as, 651	P 1	サスカノト	14.3		20.6		2.9	1.37		
S301	-160083, 833	-160212, 917	as, 978	P 1	サスカノト	27.9		24.6		4.6	2.02		
S302	-160083, 905	-160211, 810	as, 914	P 1	サスカノト	22.0		22.5		6.6	3.47		
S303	-160083, 894	-160211, 142	as, 975	P 1	サスカノト	28.4		17.9		3.5	1.11		
S304	-160083, 567	-160211, 584	as, 624	P 1	サスカノト	8.8		16.9		1.7	0.18		
S306	-160083, 914	-160211, 171	as, 628	P 1	サスカノト	14.9		18.2		2.8	0.66		
S307	-160083, 862	-160211, 473	as, 656	P 1	サスカノト	9.9		20.2		1.9	0.39		
S308	-160084, 779	-160211, 057	as, 106	P 1	サスカノト	16.9		22.6		3.2	0.95		
S309	-160084, 442	-160211, 123	as, 958	P 1	サスカノト	12.7		16.2		2.6	0.39		
S310	-160081, 897	-160211, 271	as, 974	P 1	サスカノト	11.9		13.6		3.7	0.28		
S311	-160084, 438	-160211, 056	as, 992	P 1	サスカノト	(2.3)		16.7		1.6	0.16		
S312	-160084, 591	-160211, 591	as, 907	U P	サスカノト	44.9		26.5		5.6	5.78		
S313	-160082, 022	-160211, 079	as, 972	P 1	サスカノト	26.6		23.5		3.3	1.27		
S314	-160082, 309	-160211, 249	as, 996	P 1	サスカノト	18.5		32.3		4.7	2.39		
S315	-160082, 725	-160211, 020	as, 908	P 1	サスカノト	13.3		13.1		3.6	0.29		
S317	-160087, 213	-160211, 764	as, 982	P 1	サスカノト	13.9		9.8		1.9	0.37		
S318	-160082, 359	-160211, 053	as, 968	26B	サスカノト	13.3		8.7		2.3	0.21		
S319	-160071, 177	-160211, 021	as, 998	P 1	サスカノト	10.5		18.6		1.8	0.28		
S320	-160070, 798	-160211, 075	as, 952	P 1	サスカノト	15.8		22.6		3.5	1.15		
S321	-160070, 297	-160211, 023	as, 996	P 1	サスカノト	20.8		27.2		3.9	2.00		
S322	-160089, 302	-160211, 170	as, 928	P 1	サスカノト	15.2		23.8		2.2	0.88		
S323	-160089, 939	-160211, 087	as, 919	P 1	サスカノト	23.1		28.9		3.2	1.58		
S324	-160088, 317	-160211, 151	as, 989	P 1	サスカノト	22.1		27.8		7.6	5.5		
S324	-160072, 675	-160211, 370	as, 913	P 1	サスカノト	16.3		15.1		8.7	15.65		
S326	-160075, 131	-160211, 562	as, 926	R P	サスカノト	14.1	*	26.7		8.3	14.21		
S327	-160076, 725	-160211, 911	as, 922	P 1	サスカノト	10.5	*	18.6	*	2.3	0.50		
S328	-160077, 756	-160211, 186	as, 956	P 1	サスカノト	14.9		16.5	*	2.5	0.58		
S329	-160088, 898	-160211, 123	as, 958	P 1	サスカノト	10.5	*	16.6	*	1.7	0.29		
S330	-160089, 166	-160211, 070	as, 928	P 1	サスカノト	15.9	*	13.9	*	2.9	0.65		
S331	-160089, 601	-160211, 016	as, 923	P 1	サスカノト	16.7	*	18.2	*	2.1	0.68		
S332	-160089, 559	-160211, 765	P 1	サスカノト	16.3		15.1		8.7	15.65			
S333	-160089, 602	-160211, 101	as, 979	P 1	サスカノト	20.6	*	25.1	*	2.5	1.25		
S334	-160089, 657	-160211, 159	as, 957	P 1	サスカノト	10.5		13.2		2.6	0.31		
S335	-160089, 601	-160211, 746	as, 963	P 1	サスカノト	42.6		70.3		8.5	1.00		
S336	-160076, 938	-160211, 751	as, 923	P 1	サスカノト	13.2	*	25.3	*	3.6	1.2		
S337	-160076, 900	-160211, 254	as, 917	P 1	サスカノト	13.1	*	14.9	*	1.9	0.38		

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

遺物名 二重番号	系	Y	Z	測量	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	組合	刃さ(mm)	重量(g)	参考	備考
S38X -160071, 043	-160071, 543	av.192	¶ 1	サスカメント	20.5		13.7		1.8	0.18			
S38X -160072, 295	-160072, 598	av.141	¶ 1	サスカメント	20.4	*	21.3	*	3.6	1.56			
S38X -160071, 497	-160071, 513	av.154	¶ 1	サスカメント	14.2	*	21.3	*	3.6	1.60			
S38X -160088, 864	-160088, 862	av.190	¶ 1	サスカメント	12.1		26.3		3.8	0.27			
S38X -160088, 947	-160088, 867	av.160	¶ 1	サスカメント	22.6	*	24.2	*	3.6	1.90			
S38X -160088, 271	-160088, 275	av.194	¶ 1	サスカメント	26.8		22.5		2.7	1.38			
S38X -160094, 199	-160094, 196	av.126	¶ 1	サスカメント	16.8		14.2		1.6	0.17			
S38X -160098, 210	-160098, 210	av.156	¶ 1	サスカメント	16.8		14.2		1.6	0.17			
S38X -160098, 062	-160098, 062	av.156	¶ 1	サスカメント	16.8		14.2		1.6	0.17			
S38X -160088, 426	-160088, 426	av.111	¶ 1	サスカメント	21.6		13.3		3.8	1.43			
S38X -160088, 069	-160088, 069	av.158	¶ 1	サスカメント	17.7		26.1		4.6	1.79			
S38X -160088, 220	-160088, 220	av.126	¶ 1	サスカメント	17.7		26.1		4.6	1.79			
S38X -160088, 434	-160088, 434	av.140	¶ 1	サスカメント	16.1	*	13.3		3.8	0.70			
S38X -160088, 036	-160088, 036	av.150	¶ 1	サスカメント	16.3		21.6	*	1.3	0.37			
S38X -160088, 273	-160088, 268	av.151	¶ 1	サスカメント	16.3		21.6	*	1.3	0.37			
S38X -160087, 891	-160087, 542	av.125	¶ 1	サスカメント	16.3		21.6	*	1.3	0.37			
S38X -160087, 947	-160087, 013	av.168	¶ 1	サスカメント	16.3		21.6	*	1.3	0.37			
S38X -160071, 517	-160071, 517	av.129	¶ 1	サスカメント	16.6		11.7		1.7	0.18			
S38X -160071, 511	-160071, 127	av.198	¶ 1	サスカメント	7.3	*	17.3	*	3.6	0.16			
S38X -160071, 547	-160071, 547	av.161	¶ 1	サスカメント	16.5		17.8		2.6	0.22			
S38X -160071, 084	-160071, 084	av.132	¶ 1	サスカメント	17.6	*	19.5	*	2.7	0.60			
S38X -160071, 162	-160071, 216	av.113	¶ 1	サスカメント	21.2		23.2		2.8	0.78			
S38X -160071, 891	-160071, 542	av.125	¶ 1	サスカメント	16.3		14.2		1.7	0.18			
S38X -160071, 924	-160071, 612	av.118	¶ 1	サスカメント	16.8		19.2	*	2.5	0.58			
S38X -160081, 491	-160081, 223	av.107	U 1	サスカメント	13.2		16.8		3.4	1.49		S38X	
S38X -160082, 621	-160082, 621	av.978	五面	サスカメント	27.6		11.4		2.5	0.45		S38X	
S38X -160087, 150	-160087, 150	av.176	U 1	サスカメント	16.5		16.1		0.8	21.73		S38X	
S38X -160087, 544	-160087, 544	av.163	U 1	サスカメント	16.2	*	41.8	*	2.8	4.76		S38X	
S38X -160088, 399	-160088, 399	av.164	U 1	サスカメント	16.2	*	41.8	*	2.8	4.62		S38X	
S38X -160088, 222	-160088, 222	av.108	¶ 1	サスカメント	16.3	*	14.2		1.7	0.18			
S38X -160071, 529	-160071, 529	av.177	R P	サスカメント	24.4		31.1	*	3.6	1.98			
S38X -160087, 259	-160087, 051	av.194	¶ 1	サスカメント	16.3		19.1		2.1	0.42			
S38X -160087, 660	-160087, 660	av.168	¶ 1	サスカメント	16.6		14.2		2.4	0.14			
S38X -160087, 798	-160087, 558	av.193	¶ 1	サスカメント	16.8		14.2		2.4	0.14			
S38X -160082, 042	-160082, 042	av.177	¶ 1	サスカメント	27.9		19.9		3.2	2.16			
S38X -160084, 125	-160084, 271	av.129	¶ 1	サスカメント	31.2		24.8		2.9	1.67			
S38X -160088, 721	-160088, 721	av.243	¶ 1	サスカメント	14.1		19.5	*	2.7	0.57			
S38X -160088, 528	-160088, 442	av.242	¶ 1	サスカメント	14.2		13.3		1.3	0.39			
S38X -160081, 234	-160081, 833	av.194	¶ 1	サスカメント	27.3		22.6		3.3	2.03			
S38X -160072, 498	-160072, 274	av.158	¶ 1	サスカメント	31.3	*	31.2		3.6	4.98			
S38X -160072, 113	-160072, 505	av.294	¶ 1	サスカメント	32.1		31.0		2.7	2.13			
S38X -160071, 467	-160071, 447	av.327	¶ 1	サスカメント	14.9	*	19.1	*	1.7	0.22			
S38X -160089, 762	-160089, 274	av.273	¶ 1	サスカメント	14.9		16.2	*	1.8	0.28			
S38X -160081, 164	-160081, 177	av.97	¶ 1	サスカメント	14.1	*	18.6	*	2.0	0.58			
S38X -160072, 398	-160072, 398	av.172	¶ 1	サスカメント	18.3	*	16.5		3.1	0.95			
S38X -160076, 779	-160076, 429	av.995	¶ 1	サスカメント	19.3		40.4	*	4.7	4.72			
S38X -160076, 924	-160076, 250	av.143	¶ 1	サスカメント	15.3		12.2		1.7	0.25			
S38X -160072, 988	-160072, 558	av.394	¶ 1	サスカメント	26.3		28.8		4.7	2.97			
S38X -160086, 669	-160086, 721	av.994	¶ 1	サスカメント	25.1		26.6		4.1	2.12			
S38X -160081, 608	-160081, 444	av.906	¶ 1	サスカメント	14.4	*	20.3		3.0	0.59			
S38X -160082, 771	-160082, 253	av.958	¶ 1	サスカメント	19.9	*	21.6		4.6	2.74			
S38X -160084, 308	-160084, 808	av.892	¶ 1	サスカメント	24.4		27.6	*	3.8	2.66			
S38X -160087, 694	-160087, 549	av.968	¶ 1	サスカメント	22.7		28.6		3.2	1.73			
S38X -160086, 559	-160086, 240	av.914	¶ 1	サスカメント	24.7	*	17.5		5.2	1.86		S38X	
S38X -160084, 729	-160084, 020	av.916	¶ 1	サスカメント	12.5	*	18.1		2.7	0.7			
S38X -160081, 118	-160081, 208	av.927	¶ 1	サスカメント	15.8	*	23.6		2.5	0.76			
S38X -160084, 196	-160084, 296	av.127	¶ 1	サスカメント	37.2		21.7		5.7	1.53			
S38X -160072, 351	-160072, 532	av.906	¶ 1	サスカメント	11.9	*	18.1	*	2.7	0.61			
S38X -160072, 625	-160072, 711	av.965	¶ 1	サスカメント	30.5		26.6		2.4	2.36			
S38X -160076, 622	-160076, 298	av.127	¶ 1	サスカメント	31.1		27.2		2.9	2.81			
S38X -160075, 175	-160074, 519	av.112	¶ 1	サスカメント	31.1		27.2		2.9	2.81			
S38X -160065, 697	-160064, 727	av.185	美術品	サスカメント	43.8	*	21.2	*	6.7	2.53		S38X	
S38X -160061, 399	-160061, 755	av.193	美術品	サスカメント	77.5	*	15.1	*	2.3	0.77			
S38X -160061, 280	-160061, 553	av.700	¶ 1	サスカメント	16.1	*	17.1	*	2.0	0.51			
S38X -160067, 063	-160067, 555	av.105	¶ 1	サスカメント	29.6		12.8		3.1	3.62			
S38X -160067, 471	-160067, 305	av.228	¶ 1	サスカメント	20.7		16.5	*	1.9	0.58			
S38X -160061, 721	-160061, 511	av.326	¶ 1	サスカメント	16.1	*	22.3		2.6	1.65			
S38X -160061, 992	-160061, 908	av.326	¶ 1	サスカメント	25.9	*	20.7		4.4	2.76			
S38X -160053, 361	-160053, 178	av.126	¶ 1	サスカメント	30.5	*	22.3		2.1	0.68			

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	測定	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重量(g)	参考	備考	
5418	-160093.671	-130207.248	89.238	P 1	サスカイト	9.5	*	12.1		1.1	0.15			
5419	-160094.450	-130207.554	89.238	P 1	サスカイト	9.5		14.3		2.2	0.31			
5420	-160094.344	-130207.653	89.238	P 1	サスカイト	10.6		11.8		1.6	0.39			
5421	-160079.292	-130307.888	89.164	P 2	サスカイト						0.06			
5422	-160077.740	-130307.888	89.164	P 1	リテラル4本筋型:	サスカイト	48.6	*	84.7	*	12.2	19.46	500	
5423	-160094.100	-130248.688	89.404	C P	サスカイト	47.8	*	83.3		8.2	12.36			
5424	-160093.740	-130448.741	89.401	P 1	サスカイト	82.8	*	22.5	*	1.6	4.72			
5425	-160079.108	-130448.182	89.326	P 1	サスカイト	13.2		21.3		2.4	0.96			
5426	-160079.108	-130448.182	89.326	P 1	サスカイト	13.2		21.3		2.4	0.96			
5427	-160071.816	-130307.143	89.144	P 1	サスカイト	18.2	*	10.6		1.8	0.13			
5428	-160072.248	-130307.043	89.123	P 1	サスカイト	14.4		18.6	*	2.6	0.58			
5429	-160074.977	-130307.060	89.143	C B	サスカイト						0.08			
5430	-160074.120	-130151.547	89.404	P 1	サスカイト	12.3	*	22.2		2.2	1.13			
5431	-160072.304	-130151.357	89.011	P 1	サスカイト	24.2		21.3		2.4	1.39			
5432	-160072.154	-130151.457	89.011	P 1	サスカイト	23.0		21.1		2.2	1.08			
5433	-160071.380	-130151.012	89.003	P 1	サスカイト	16.0		19.4		2.4	0.61			
5434	-160071.386	-130151.150	89.001	R P	サスカイト	22.1		16.2		2.5	1.60			
5435	-160071.386	-130151.150	89.001	P 1	サスカイト	22.1		16.2		2.5	1.60			
5436	-160071.300	-130151.058	89.002	P 1	サスカイト	21.9	*	19.1		2.8	0.87			
5437	-160072.301	-130151.058	89.006	P 1	サスカイト	21.1	*	13.2	*	2.6	0.28			
5438	-160071.301	-130151.521	89.006	P 1	サスカイト	30.3		16.7		1.9	0.20			
5439	-160071.300	-130151.521	89.007	P 1	サスカイト	21.4		16.3		2.4	1.22			
5440	-160071.301	-130151.521	89.011	P 1	サスカイト	21.4		16.3		2.4	1.22			
5441	-160071.301	-130151.621	89.015	P 1	サスカイト	14.6	*	11.5	*	1.2	0.20			
5442	-160071.564	-130151.605	89.022	P 1	サスカイト	26.1		16.5		2.5	2.08			
5443	-160071.564	-130151.605	89.022	R P	サスカイト	22.1		16.5		2.5	1.60			
5444	-160071.500	-130151.137	89.025	P 1	サスカイト	16.6		13.2		2.8	0.75			
5445	-160071.479	-130151.200	89.024	P 1	サスカイト	16.8		24.5		2.5	1.05			
5446	-160071.479	-130151.200	89.028	P 1	サスカイト	7.2		11.1		1.5	0.15			
5447	-160071.479	-130151.200	89.028	P 1	サスカイト	48.6		21.5		2.2	1.32			
5448	-160071.479	-130151.200	89.032	P 1	サスカイト	15.2		16.2		2.8	0.56			
5449	-160068.191	-130151.210	89.036	P 1	サスカイト	14.6		19.1		2.8	1.40			
5450	-160068.364	-130448.751	89.349	P 1	サスカイト	16.6		22.9		2.5	1.66			
5451	-160068.320	-130448.501	89.347	P 1	サスカイト	16.2		23.9		2.5	1.66			
5452	-160068.320	-130448.501	89.347	P 1	サスカイト	16.2		23.9		2.5	1.66			
5453	-160068.150	-130448.504	89.375	C B	サスカイト						0.08			
5454	-160068.679	-130447.270	89.332	C B	サスカイト						0.08			
5455	-160067.397	-130446.253	89.375	P 1	サスカイト	8.7		15.4		1.4	0.57			
5456	-160068.156	-130444.900	89.475	P 1	サスカイト	9.9		21.6		2.3	0.38			
5457	-160068.368	-130444.502	89.475	P 1	サスカイト	14.5	*	21.5	*	2.7	0.58			
5458	-160066.796	-130415.504	89.106	P 1	サスカイト	15.4	*	27.5		3.4	3.58	参考(刀)		
5459	-160064.520	-130476.203	89.241	P 1	サスカイト	15.6		11.3		2.2	0.38			
5460	-160064.538	-130476.203	89.242	P 1	サスカイト	21.2		25.6		2.5	1.36			
5461	-160063.349	-130476.156	89.103	P 1	サスカイト	16.7	*	41.3	*	4.6	4.64			
5462	-160064.304	-130484.272	89.234	P 1	サスカイト	29.3		31.1		3.6	2.28			
5463	-160077.147	-130751.907	89.136	P 1	サスカイト	13.5		14.7		2.7	0.86			
5464	-160077.147	-130751.907	89.137	P 1	サスカイト	8.1		12.7		2.7	0.62			
5465	-160074.199	-130751.199	89.119	P 1	サスカイト	12.2		8.5		1.5	0.44			
5466	-160072.283	-13074.892	89.056	P 1	サスカイト	14.9		23.6		3.3	1.16			
5467	-160071.399	-13074.253	89.049	P 1	サスカイト	23.9		30.8		3.4	1.81			
5468	-160071.191	-13075.183	89.067	P 1	サスカイト	22.9		19.9		3.1	1.49			
5469	-160089.997	-130444.243	88.954	P 1	サスカイト	43.5	*	49.2	*	7.4	14.86			
5470	-160089.917	-130442.880	88.886	P 1	サスカイト	33.9	*	46.1	*	5.5	9.79			
5471	-160085.041	-130446.782	88.841	P 1	サスカイト	13.1	*	13.8		2.1	0.35			
5472	-160084.585	-130446.473	88.862	P 1	サスカイト	8.9		19.5		1.4	0.28			
5473	-160074.431	-13054.431	89.067	P 1	サスカイト	20.6		16.9		2.4	0.76			
5474	-160074.457	-13054.457	89.076	P 1	サスカイト	15.1	*	11.4		1.5	0.23			
5475	-160074.198	-13074.662	89.085	P 1	サスカイト	16.5		15.1		1.5	0.28			
5476	-160071.201	-13055.617	89.108	P 1	サスカイト	20.5		18.9		2.1	0.69			
5477	-160065.302	-13049.653	89.271	P 1	サスカイト	10.5		8.7		1.1	0.08			
5478	-160065.035	-13047.961	89.182	P 1	サスカイト	15.3	*	13.2	*	6.7	2.83			
5479	-160072.364	-13055.262	89.345	R P	サスカイト	32.1		9.6		2.8	0.87			
5480	-160072.055	-13055.209	89.382	C B	サスカイト						0.08			
5481	-160072.109	-13075.216	89.082	P 1	サスカイト	13.6	*	12.2		2.6	0.22			
5482	-160072.117	-13065.121	89.079	P 1	サスカイト	9.3		11.1		2.6	0.22			
5483	-160072.050	-13074.619	89.076	P 1	サスカイト	6.7		11.1		1.3	0.11			
5484	-160081.953	-13074.213	89.057	P 1	サスカイト	10.6	*	9.6	*	1.3	0.22			
5485	-160082.609	-13074.272	89.011	P 1	サスカイト	13.8		21.5		2.4	1.36			
5486	-160082.253	-13074.277	89.014	P 1	サスカイト	10.6		10.9		1.6	0.20			
5487	-160081.197	-13076.202	89.013	P 1	サスカイト	16.9		26.7		3.6	1.16			
5488	-160081.962	-13045.908	89.038	P 1	サスカイト	16.5	*	24.3		3.7	1.67			
5489	-160082.727	-13045.710	89.052	P 1	サスカイト	13.6	*	12.2		2.6	0.22			

歴物なし

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	種別	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(m)	重さ(g)	参考	備考
S401	-160071.505	-18045.091	265	ササシメノト	28.3	+	28.3	+	3.8	3.69			
S404	-160072.382	-1804.093	265	ササシメノト	11.3		11.4		2.2	0.33			
S405	-160071.259	-1804.0.275	265	美標器	45.8	+	41.2	+	3.4	0.03			
S406	-160071.869	-1804.0.450	264	ササシメノト	14.9		13.6		2.7	0.08			
S406	-160088.931	-1804.0.187	264	ササシメノト	18.5	+	18.2	+	2.6	0.25			
S406	-160071.300	-1804.0.543	264	ササシメノト	14.5		14.5		2.3	0.32			
S406	-160064.372	-18045.450	264	ササシメノト	12.8		12.8		2.2	0.16			
S406	-160070.305	-1804.0.240	264	ササシメノト	18.8		17.8		2.7	0.04			
S407	-160070.374	-1804.0.112	264	ササシメノト	18.4		18.2		4.3	1.8			
S408	-160071.367	-1804.0.957	264	ササシメノト	11.8		12.2		1.3	0.28			
S408	-160072.395	-1804.0.245	264	ササシメノト	19.5		18.6		4.7	2.76			
S408	-160072.374	-1804.0.175	264	ササシメノト	20.5		22.2		2.5	0.72			
S408	-160072.505	-1804.0.901	264	ササシメノト	9.8		16.7		1.6	0.29			
S409	-160072.575	-1804.0.215	264	ササシメノト	12.5	+	26.5	+	2.8	1.02			
S409	-160072.568	-1804.0.651	264	ササシメノト	10.2		13.2		1.8	0.27			
S409	-160071.250	-1804.0.823	264	ササシメノト	12.6		12.6		1.3	0.32	6.96±0.28	瓦片	
S410	-160071.905	-18041.005	265	ササシメノト	16.9		12.4	+	5.8	0.27			
S410	-160072.961	-18041.021	265	ササシメノト	16.2		12.4	+	5.8	0.32			
S411	-160087.714	-18045.087	265	ササシメノト	15.5		15.5		2.5	0.40			
S411	-160077.360	-18044.001	265	ササシメノト	22.8	+	26.4	+	4.1	2.5			
S411	-160077.359	-18041.017	265	ササシメノト	16.4	+	22.7		3.7	2.5			
S411	-160077.549	-18045.277	265	ササシメノト	21.2	+	16.8		1.9	0.61			
S412	-160072.891	-18045.118	265	ササシメノト	12.5		12.5		2.8	0.52			
S412	-160072.797	-18045.080	265	ササシメノト	16.8		12.4	+	5.8	0.27			
S412	-160071.818	-18045.079	265	ササシメノト	13.8		20.2		3.4	1.00			
S412	-160072.587	-18045.060	265	ササシメノト	16.5		13.2		1.9	0.22			
S412	-160064.475	-18041.420	265	ササシメノト	17.9		13.5		2.6	0.39			
S412	-160064.843	-18051.181	265	ササシメノト	6.5		14.8		3.4	0.72			
S412	-160077.630	-18045.448	265	ササシメノト	14.5		11.6		2.4	0.52			
S413	-160072.891	-18045.131	265	ササシメノト	11.6		13.2		2.8	0.5			
S413	-160072.797	-18045.080	265	ササシメノト	16.8		12.4	+	5.8	0.27			
S413	-160071.707	-18041.061	265	ササシメノト	12.2		20.5		3.7	2.49			
S420	-160076.974	-18041.010	265	ササシメノト	16.5		22.9		2.4	0.27			
S428	-160074.630	-18041.010	265	ササシメノト	12.2		14.7		3.0	0.40			
S429	-160065.620	-18011.052	265	ツバメ	26.5		40.1		17.4	41.64			
S430	-160071.520	-18045.229	268	ササシメノト	16.3		14.6		2.0	0.31			
S432	-160072.603	-18047.680	268	ササシメノト	14.5		21.1		3.4	0.83			
S433	-160074.387	-18045.911	268	ササシメノト	8.9		16.3		1.6	0.47			
S434	-160071.177	-18045.919	268	ササシメノト	16.1		22.3		3.3	0.45			
S434	-160071.648	-18072.771	268	ツバメ	20.1		18.4		3.9	1.53	5.60±0.14	瓦片	
S436	-160076.550	-18041.773	268	ササシメノト	8.6		12.3		1.4	0.42			
S437	-160076.651	-18041.082	268	ササシメノト	19.2		34.3		2.4	1.53			
S439	-160072.873	-18045.969	268	ササシメノト	14.3		12.7		1.9	0.37			
S440	-160072.879	-18045.805	268	ササシメノト	16.7		17.1		2.5	0.55			
S441	-160077.547	-18041.051	268	ササシメノト	15.9		27.7		3.6	2.99			
S442	-160076.627	-18041.014	268	ササシメノト	17.9		27.1		3.6	1.12			
S443	-160076.555	-18041.148	268	ササシメノト	10.6		17.6		2.1	0.38			
S444	-160072.331	-18041.011	268	ササシメノト	19.1		12.2		1.0	0.26			
S447	-160076.950	-18073.810	268	ササシメノト	11.1		6.6		1.9	0.44			
S448	-160072.881	-18073.984	268	ツカシ	22.9		30.0		3.2	2.41			
S448	-160077.848	-18045.718	268	ササシメノト	15.9		24.6		2.3	1.61			
S449	-160077.606	-18045.832	268	ツカシ	20.7		21.2		6.4	2.21			
S450	-160064.261	-18045.023	268	石器	18.2		11.7		2.7	0.52			
S531	-160066.114	-18045.270	268	ササシメノト	17.5	*	23.6	*	4.1	1.44			
S532	-160078.658	-18045.204	268	ササシメノト	12.9		12.2		1.9	0.21			
S532	-160078.672	-18045.021	268	ササシメノト	14.6		15.5	*	2.2	0.66			
S534	-160073.663	-18042.961	268	ササシメノト	20.6		16.6		2.8	0.86			
S535	-160072.266	-18041.965	268	ササシメノト	10.8		11.5		2.5	0.21			
S536	-160071.319	-18051.673	268	ササシメノト	11.5		13.3		2.2	0.33			
S537	-160071.159	-18051.421	268	ササシメノト	9.3		13.6		2.0	0.21			
S538	-160071.389	-18051.511	268	ツカシ	21.1		21.1		2.4	0.70			
S539	-160071.271	-18051.617	268	ツカシ	17.6		11.9		2.4	0.38			
S540	-160071.269	-18051.670	268	ツカシ	18.9		18.9		6.12	0.12			
S561	-160071.153	-18054.567	268	ツカシ	14.5		15.8		0.98				
S562	-160072.513	-18051.056	268	ササシメノト	17.7		26.3		2.1	0.61			
S563	-160072.057	-18051.710	268	ササシメノト	11.6		24.1		2.4	0.70			
S564	-160071.059	-18051.584	268	ツカシ	17.6		11.9		2.4	0.38			
S565	-160064.959	-18051.351	268	ササシメノト	13.8		26.2		2.6	1.32			
S566	-160071.662	-18051.209	268	ツカシ	18.6		19.6		2.1	0.77			
S567	-160071.651	-18051.277	268	ツカシ	41.2		39.2		2.9	2.1			
S568	-160071.314	-18051.363	268	ササシメノト	26.1		24.7		6.2	3.9			

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
560	-160071, 700	-160071, 201	av, 006	P 1	サスカノト	17.3	*	20.5	*	2.6	0.67		
561	-160071, 302	-160071, 448	av, 202	P 1	サスカノト	18.8	*	18.2	*	1.1	0.15		
562	-160071, 302	-160071, 648	av, 182	P 1	サスカノト	18.8	*	18.3	*	1.6	0.12		
563	-160071, 217	-160071, 643	av, 182	P 1	サスカノト	18.9	*	14.6	*	2.4	0.14		
564	-160071, 710	-160043, 051	av, 322	P 1	サスカノト	16.8	*	11.1	*	1.6	0.11		
565	-160071, 256	-160444, 284	av, 005	P 1	サスカノト	16.8	*	16.2	*	1.7	0.40		
566	-160071, 177	-16043, 244	av, 056	P 1	サスカノト	14.4	*	14.8	*	0.6	0.09		
567	-160071, 631	-16020, 171	av, 054	P 1	サスカノト	19.2	*	14.3	*	2.8	0.64		
568	-160071, 271	-16020, 453	av, 056	P 1	サスカノト	17.2	*	17.2	*	4.6	1.74		
569	-160071, 299	-16020, 502	av, 026	P 1	サスカノト	18.6	*	12.3	*	1.9	0.34		
570	-160071, 271	-16020, 680	av, 048	P 1	サスカノト	14.8	*	16.0	*	2.8	0.39		
571	-160089, 211	-16014, 054	av, 256	P 1	サスカノト	20.1	*	22.2	*	2.6	1.45		
572	-160089, 549	-16014, 481	av, 213	P 1	サスカノト	16.5	*	21.1	*	3.7	1.13		
573	-160089, 561	-16015, 261	av, 211	P 1	サスカノト	13.8	*	27.3	*	2.8	0.90		
574	-160071, 102	-16014, 613	av, 117	P 1	サスカノト	16.6	*	23.5	*	3.6	0.53		
575	-160071, 297	-16014, 686	av, 083	P 1	サスカノト	16.1	*	21.8	*	2.7	0.87		
576	-160089, 937	-16014, 910	av, 128	参考軍刀頭部	サスカノト	56.0	*	21.5	*	6.6	5.31	562	
577	-160089, 910	-16014, 910	av, 186	P 1	サスカノト	11.8	*	11.2	*	1.7	0.29		
578	-160089, 304	-16015, 113	av, 105	P 1	サスカノト	11.2	*	20.7	*	2.6	0.51		
579	-160071, 172	-16015, 293	av, 033	P 1	サスカノト	12.9	*	16.1	*	2.6	0.32		
580	-160071, 214	-16015, 420	av, 080	P 1	サスカノト	20.6	*	11.0	*	2.6	0.33		
581	-160071, 879	-16015, 965	av, 052	P 1	サスカノト	21.3	*	16.2	*	3.7	1.39		
582	-160071, 297	-16015, 686	av, 083	P 1	サスカノト	17.1	*	22.2	*	6.5	1.29		
583	-160071, 939	-16015, 616	av, 091	P 1	サスカノト	11.1	*	14.8	*	1.7	0.21		
584	-160089, 302	-16015, 051	av, 186	P 1	サスカノト	11.8	*	14.1	*	1.7	0.26		
585	-160089, 304	-16015, 113	av, 105	P 1	サスカノト	11.2	*	20.7	*	2.6	0.51		
586	-160071, 172	-16015, 293	av, 033	P 1	サスカノト	12.9	*	16.1	*	2.6	0.32		
587	-160071, 214	-16015, 420	av, 080	P 1	サスカノト	20.6	*	11.0	*	2.6	0.33		
588	-160071, 149	-16015, 752	av, 078	P 1	サスカノト	17.2	*	27.1	*	2.2	0.94		
589	-160071, 499	-16015, 740	av, 002	P 1	サスカノト	14.7	*	24.6	*	3.5	0.76		
590	-160071, 214	-16015, 740	av, 008	P 1	サスカノト	14.7	*	24.6	*	3.5	0.76		
591	-160089, 202	-16015, 051	av, 186	P 1	サスカノト	9.1	*	17.2	*	2.7	0.39		
592	-160089, 112	-16015, 052	av, 126	参考石刀	サスカノト	45.6	*	39.1	*	11.5	21.89	562	
593	-160089, 302	-16015, 052	av, 203	P 1	サスカノト	29.1	*	24.9	*	6.2	5.40	曲面あり	
594	-160089, 841	-16015, 822	av, 058	P 1	サスカノト	14.3	*	16.4	*	2.2	0.41		
595	-160089, 606	-16017, 016	av, 058	P 1	サスカノト	16.3	*	8.6	*	1.5	0.43		
596	-160071, 794	-16017, 908	av, 104	P 1	サスカノト	20.6	*	20.2	*	2.5	0.57		
597	-160089, 256	-16017, 481	av, 100	P 1	サスカノト	15.3	*	21.6	*	2.4	0.67		
598	-160089, 671	-16017, 479	av, 179	P 1	サスカノト	8.3	*	17.5	*	1.7	0.35		
599	-160089, 270	-16017, 482	av, 096	P 1	サスカノト	16.7	*	14.9	*	2.1	0.42		
600	-160089, 569	-16017, 331	av, 188	P 1	サスカノト	14.9	*	23.2	*	3.6	1.27		
601	-160071, 962	-16017, 819	av, 074	P 1	サスカノト	17.7	*	8.2	*	1.9	0.26		
602	-160089, 671	-16017, 002	av, 249	P 1	サスカノト	20.2	*	20.1	*	2.6	1.04		
603	-160094, 027	-16019, 613	av, 195	P 1	サスカノト	13.4	*	14.7	*	3.3	0.65		
604	-160094, 671	-16019, 307	av, 307	P 1	サスカノト	15.4	*	17.1	*	2.7	0.55		
605	-160089, 231	-16019, 831	av, 392	P 1	サスカノト	18.4	*	8.5	*	2.3	0.26		
606	-160091, 254	-16017, 460	av, 376	参考刀	サスカノト	27.5	*	20.2	*	2.5	0.22		
607	-160087, 441	-16019, 252	av, 405	P 1	サスカノト	27.3	*	22.8	*	4.8	3.18		
608	-160087, 294	-16019, 383	av, 411	P 1	サスカノト	9.6	*	20.6	*	3.1	0.78		
609	-160086, 622	-16018, 144	av, 462	P 1	サスカノト	13.5	*	4.9	*	2.5	0.22		
610	-160081, 018	-16017, 750	av, 292	P 1	サスカノト	11.7	*	9.7	*	2.2	0.24		
611	-160084, 129	-16018, 171	av, 371	P 1	サスカノト	13.3	*	16.9	*	2.2	0.53		
612	-160092, 364	-16018, 072	av, 221	P 1	サスカノト	13.7	*	12.2	*	2.2	0.27		
613	-160092, 591	-16018, 086	av, 228	P 1	サスカノト	10.7	*	10.2	*	1.6	0.18		
614	-160092, 671	-16018, 111	av, 088	P 1	サスカノト	15.9	*	8.9	*	1.8	0.19		
615	-160091, 294	-16018, 017	av, 579	P 1	サスカノト	21.6	*	17.9	*	2.6	0.79		
616	-160092, 291	-16018, 118	av, 082	c b	サスカノト	13.1	*	10.2	*	1.1			
617	-160092, 476	-16018, 002	av, 169	c b	サスカノト	13.1	*	9.6	*	2.1	0.40		
618	-160091, 660	-16018, 153	av, 177	P 1	サスカノト	13.1	*	9.1	*	2.1	0.41		
619	-160089, 664	-16017, 253	av, 231	c b	サスカノト	13.1	*	9.2	*	2.0	0.36		
620	-160088, 473	-16016, 018	av, 796	P 1	サスカノト	20.8	*	19.9	*	2.7	0.67		
621	-160088, 851	-16017, 253	av, 769	P 1	サスカノト	18.7	*	16.6	*	1.9	0.56		
622	-160088, 694	-16016, 051	av, 307	P 1	サスカノト	11.3	*	16.5	*	2.7	0.27		
623	-160087, 756	-16017, 017	av, 218	c b	サスカノト	13.1	*	9.0	*	0.6			
624	-160087, 829	-16017, 083	av, 238	P 1	サスカノト	13.1	*	10.0	*	1.2	0.36		
625	-160089, 999	-16017, 151	av, 252	c b	サスカノト	13.1	*	9.6	*	0.6			
626	-160088, 473	-16016, 017	av, 327	c b	サスカノト	13.1	*	9.2	*	0.6			
627	-160088, 199	-16017, 017	av, 329	P 1	サスカノト	2.8	*	17.9	*	1.3	0.21		

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
5651-1	-160097. 806	-160051. 051	av.305	P.1	サスカノト	10.7	20.5	2.4			重起ハ明		
5652	-160097. 807	-160051. 012	av.350								0.15	遺物なし	
5653	-160098. 309	-160051. 027	av.368	e.b	サスカノト						0.06		
5654	-160098. 346	-160051. 124	av.363	e.b	サスカノト						0.03		
5655	-160098. 17.	-160051. 017	av.365	e.b	サスカノト						0.06		
5656	-160092. 671	-160051. 041	av.300	P.1	サスカノト	7.3	11.5	2.0			0.19		
5657	-160094. 771	-160051. 041	av.362	e.b	サスカノト						0.04		
5658	-160094. 641	-160051. 021	av.312	e.b	サスカノト						0.03		
5659	-160095. 308	-160051. 054	av.295	P.1	サスカノト	9.4	16.0	4	3.8		0.36		
5660	-160095. 308	-160051. 070	av.283	P.1	サスカノト	2.1	14.0	1.4	0.4		0.14		
5661	-160097. 496	-160051. 040	av.293	P.1	サスカノト	2.7	10.0	1.0	0.49				
5662	-160097. 350	-160051. 221	av.215	P.1	サスカノト	13.2	10.2	1.6	0.26				
5663	-160094. 606	-160051. 052	av.243	P.1	サスカノト	19.3	21.3	2.2	1.0				
5671	-160098. 154	-160051. 111	av.243	e.b	サスカノト						0.23		
5672	-160098. 286	-160051. 051	av.266	P.1	サスカノト	41.9	33.2	4	8.3		10.3		
5673	-160098. 075	-160051. 052	av.241	P.1	サスカノト	11.9	11.2	1.8	0.22				
5674	-160098. 571	-160051. 010	av.300	e.b	サスカノト						0.07		
5675	-160098. 246	-160051. 021	av.195	P.1	サスカノト	10.2	12.0	2.0	0.26				
5676	-160098. 608	-160051. 171	av.191	P.1	サスカノト	10.5	11.5	2.5	0.10				
5677	-160091. 717	-160051. 015	av.105	P.1	サスカノト	16.4	18.6	2.3	0.73				
5678	-160091. 111	-160041. 397	av.162	P.1	サスカノト	10.5	9.8	1.5	0.22				
5679	-160098. 246	-160051. 251	av.128	P.1	サスカノト	13.2	18.1	1.6	0.1				
5680	-160098. 171	-160051. 211	av.106	e.b	サスカノト						0.09		
5681	-160098. 271	-160051. 251	av.155	e.b	サスカノト						0.01		
5682	-160098. 912	-160051. 008	av.175	e.b	サスカノト						0.05		
5683	-160097. 806	-160051. 271	av.129	e.b	サスカノト						0.06		
5684	-160097. 916	-160051. 271	av.181	e.b	サスカノト						0.03		
5685	-160097. 507	-160051. 247	av.307	e.b	サスカノト						0.05		
5686	-160096. 589	-160051. 411	av.215	P.1	サスカノト	14.9	11.4	1.9	0.31				
5687	-160096. 478	-160041. 704	av.228	e.b	サスカノト						0.06		
5688	-160096. 511	-160041. 724	av.239	P.1	サスカノト	11.1	12.1	1.6	0.18				
5689	-160094. 449	-160041. 912	av.245	P.1	サスカノト	14.5	11.7	1.7	0.26				
5690	-160098. 814	-160041. 924	av.213	e.b	サスカノト						0.07		
5691	-160098. 891	-160041. 650	av.234	P.1	サスカノト	12.7	11.9	1.9	0.24				
5694	-160098. 339	-160051. 960	av.268	P.1	サスカノト	13.9	15.9	1.9	0.29				
5695	-160094. 261	-160058. 012	av.246	P.1	サスカノト	12.7	12.1	2.2	0.22				
5697	-160091. 171	-160051. 216	av.252	dr.k	サスカノト	19.2	23.0	2.3	6.65				
5698	-160092. 279	-160051. 456	av.200	P.1	サスカノト	13.9	17.9	2.8	0.72				
5699	-160091. 854	-160051. 311	av.228	P.1	サスカノト	16.5	11.9	3.6	0.36				
5700	-160091. 756	-160051. 221	av.246	P.1	サスカノト	8.5	11.2	1.7	0.19				
5701	-160095. 562	-160021. 454	av.233	P.1	サスカノト	12.2	9.1	1.4	0.17				
5702	-160092. 805	-160021. 851	av.267	e.b	サスカノト						0.03		
5703	-160091. 949	-160021. 830	av.242	P.1	サスカノト	9.5	11.2	2.3	0.26				
5707	-160091. 568	-160021. 865	av.227	P.1	サスカノト	18.5	18.4	1.4	1.08				
5709	-160074. 307	-160021. 613	av.203	P.1	サスカノト	8.5	12.3	2.0	0.16				
5710	-160079. 299	-160021. 656	av.195	P.1	サスカノト	16.1	19.7	1.6	0.38				
5712	-160080. 251	-160028. 726	av.216	P.1	サスカノト	11.1	11.9	2.7	0.33				
5713	-160080. 509	-160028. 759	av.215	e.b	サスカノト						0.08		
S714	-160080. 641	-160027. 415	av.185	P.1	サスカノト	8.2	13.4	1.6	0.20				
5715	-160079. 791	-160028. 861	av.168	e.b	サスカノト						0.03		
5716	-160081. 194	-160026. 418	av.156	P.1	サスカノト	16.3	16.3	1.7	0.32				
5718	-160082. 364	-160016. 271	av.217	P.1	サスカノト	15.5	9.4	1.1	0.15				
5719	-160082. 321	-160015. 924	av.205	e.b	サスカノト						0.05		
5720	-160084. 997	-16054. 855	av.265	e.b	サスカノト						0.04		
5721	-160084. 587	-16054. 628	av.212	P.1	サスカノト	9.1	12.3	2.4	0.22				
5722	-160082. 991	-16074. 117	av.211	L脚									
5723	-160081. 954	-16072. 878	av.119	P.1	サスカノト	6.8	12.3	1.5	0.13				
5724	-160081. 912	-16072. 622	av.175	P.1	サスカノト	6.8	16.6	2.2	6.30				
5726	-160051. 534	-16051. 556	av.027	P.1	サスカノト	10.8	11.3	2.2	0.33				
5727	-160082. 875	-16072. 721	av.068	P.1	サスカノト	16.5	9.5	1.9	0.29				
5728	-160081. 305	-16052. 256	av.042	P.1	サスカノト	17.3	22.6	2.1	0.56				
5729	-160081. 609	-16071. 070	av.056	P.1	サスカノト	27.0	14.0	5.0	1.55				
5730	-160082. 394	-16053. 793	av.029	P.1	サスカノト	12.9	10.2	1.9	0.73				
5731	-160081. 760	-16071. 611	av.145	P.1	サスカノト	17.3	2.7	0.67					
5732	-160081. 161	-16074. 611	av.127	e.b	サスカノト						0.01		
5737	-160079. 562	-16054. 616	av.165	e.b	サスカノト						0.02		
5739	-160079. 212	-16057. 859	av.736	両刃刀	サスカノト	40.5	22.5	6.6	3.32		両刃あり		
5741	-160079. 361	-16056. 050	av.736	P.1	サスカノト	14.5	14.9	1.8	0.29				
5742	-160079. 765	-16056. 011	av.269	e.b	サスカノト						0.15		
5751	-160079. 327	-16056. 017	av.274	P.1	サスカノト	6.2	11.0	1.0	0.01				

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
5744	-160077.456	-160070.415	89.221	P-1	サスカノト	18.6	13.3	*	2.7	6.54	複数あり		
5745	-160077.352	-160070.078	89.191	P-1	サスカノト	9.6	13.2	*	2.7	6.62			
5747	-160077.475	-160051.545	89.206	c-h	サスカノト					0.64			
5748	-160074.790	-160010.645	89.263	P-1	サスカノト	17.1	*	13.6	*	2.6	6.44		
5749	-160074.154	-160105.109	89.142	P-1	サスカノト	9.8		10.1		1.4	6.18		
5751	-160074.252	-160102.924	89.148	P-1	サスカノト	7.5	*	12.1	*	1.7	6.11		
5751	-160074.452	-160101.734	89.107	P-1	ハシマタ	9.4		17.4		1.1	6.27		
5752	-160076.172	-160104.951	89.121	c-h	サスカノト					0.65			
5752	-160074.389	-160104.413	89.056	c-h	サスカノト					0.68			
5756	-160074.189	-160105.394	89.019	P-1	サスカノト	12.6		16.2		2.2	6.26		
5756	-160074.146	-160104.560	89.121	c-h	サスカノト					0.67			
5759	-160074.212	-160105.222	89.126	P-1	サスカノト	16.6	*	20.2	*	2.5	1.26		
5761	-160074.154	-160104.761	89.103	P-1	サスカノト	6.2		12.5	*	1.2	6.13		
5762	-160074.475	-160104.541	89.051	c-h	サスカノト					0.62			
5763	-160074.362	-160105.300	89.093	P-1	サスカノト	9.8		10.8		1.2	6.13		
5764	-160074.359	-160105.565	89.098								55.0(?)		
5765	-160074.309	-160105.563	89.095	P-1	サスカノト	16.4	*	13.0		2.7	6.7		
5766	-160074.258	-160101.157	89.105	c-h	サスカノト					0.68			
5767	-160074.312	-160107.337	89.112	c-h	サスカノト					0.10			
5768	-160074.394	-160104.623	89.163	P-1	サスカノト	15.5	*	18.6	*	2.6	6.55		
5769	-160074.191	-160106.398	89.097	P-1	サスカノト	16.8	*	12.2	*	1.7	6.21		
5770	-160074.248	-160105.210	89.096	P-1	サスカノト	13.2		15.2		2.6	6.30		
5771	-160074.289	-160104.551	89.126	P-1	サスカノト	16.2	*	11.3		2.7	6.26		
5772	-160074.279	-160104.751	89.106	P-1	サスカノト	14.2	*	21.8		2.6	1.51		
5772	-160074.275	-160104.751	89.106	P-1	サスカノト	16.2	*	11.2	*	1.8	6.18		
5774	-160074.256	-160107.180	89.061	P-1	サスカノト	26.2		21.5		2.6	1.26		
5776	-160074.051	-160101.014	89.106	c-h	サスカノト					0.66			
5779	-160074.643	-160105.562	89.145	P-1	サスカノト	14.9	*	18.4		1.9	6.58		
5780	-160074.667	-160104.610	89.052	c-h	サスカノト					0.64			
5780	-160074.667	-160104.610	89.052	c-h	サスカノト					0.63			
5781	-160074.371	-160104.714	89.106	c-h	サスカノト					0.69			
5782	-160074.128	-160107.392	89.075	c-h	サスカノト					0.63			
5783	-160074.058	-160107.582	89.117	P-1	サスカノト	15.2	*	19.6		2.3	6.50		
5784	-160074.099	-160105.659	89.114	c-h	サスカノト					0.66			
5785	-160074.162	-160105.289	89.114	c-h	サスカノト					0.65			
5785	-160074.162	-160105.289	89.114	c-h	サスカノト					0.61			
5786	-160074.492	-160105.210	89.122	c-h	サスカノト					0.66			
5787	-160074.430	-160107.173	89.107	P-1	サスカノト	7.5	*	11.1	*	2.6	6.18		
5788	-160068.856	-160105.424	89.127	c-h	サスカノト					0.66			
5789	-160070.419	-160107.068	89.164	c-h	サスカノト					0.67			
5790	-160070.472	-160104.551	89.103	c-h	サスカノト					0.61			
5791	-160068.879	-160104.350	89.195	P-1	サスカノト	14.1		12.9		1.9	6.26		
5793	-160069.912	-160102.870	89.244	c-h	複数件					6.14			
5794	-160069.691	-160102.963	89.220	P-1	サスカノト	21.9		21.5		3.0	1.76		
5797	-160069.652	-160102.792	89.271	c-h	サスカノト					6.05			
5797	-160069.712	-160102.294	89.296	c-h	サスカノト					6.17			
5798	-160070.112	-160101.864	89.292	P-1	サスカノト	8.8		11.2		1.6	6.16		
5799	-160070.154	-160101.861	89.305	P-1	サスカノト	13.3		16.2		4.7	6.84		
5800	-160070.969	-160107.546	89.052	P-1	サスカノト	14.3		14.4		2.6	6.25		
5804	-160072.543	-160104.961	89.048	c-h	サスカノト					6.01			
5805	-160072.752	-160105.887	89.306	c-h	サスカノト					6.62			
5806	-160072.899	-160104.001	89.216	P-1	サスカノト	8.4		10.9		1.5	6.11		
5807	-160072.880	-160105.331	89.331	P-1	サスカノト	7.5		11.1		1.9	6.17		
5808	-160072.896	-160107.416	89.325	c-h	サスカノト					6.04			
5809	-160072.291	-160107.424	89.218	P-1	サスカノト	10.5		12.6		2.1	6.28		
5810	-160073.529	-160107.052	89.306	P-1	サスカノト	13.3		10.5		1.6	6.20		
5811	-160071.315	-160105.580	89.222	P-1	サスカノト	18.1	*	28.2		2.2	1.92		
5811	-160069.974	-160101.413	89.395	c-h	サスカノト					6.06			
5817	-160081.365	-160105.020	89.398	P-1	サスカノト	8.1		10.9		1.6	6.09		
5818	-160081.795	-160105.563	89.368	P-1	サスカノト	12.5	*	11.5		1.8	6.32		
5829	-160079.875	-160107.034	89.323	P-1	サスカノト	11.5		15.3		1.7	6.28		
5831	-160079.181	-160107.010	89.333	P-1	サスカノト	11.5		10.1		1.6	6.27		
5829	-160072.257	-160103.960	89.375	c-h	サスカノト					6.03			
5829	-160072.661	-160104.715	89.305	P-1	サスカノト	15.1	*	20.3		2.2	6.79		
5829	-160071.479	-160102.975	89.238	c-h	サスカノト					6.05			
5830	-160071.316	-160102.921	89.222	P-1	サスカノト	7.5		11.1		1.1	6.11		
5831	-160069.967	-160103.693	89.233	c-h	サスカノト					6.05			
5833	-160069.790	-160103.553	89.228	P-1	サスカノト	14.1	*	12.5	*	1.8	6.16		
5835	-160069.260	-160104.252	89.244	P-1	サスカノト	21.5		21.5		4.2	2.0		
5836	-160069.306	-160104.357	89.242	白磁	サスカノト	13.5		14.5		2.4	6.17		

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

遺物記号 二重合号	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅高	刃さ(m)	裏形	参考	備考
S-048	-160071, 145	-160457, 098	09, 346	P-1	サガラノト	6.8	12.5	2.6	0.23				
S-049	-160071, 108	-160457, 154	09, 358	P-1	サガラノト	11.2	9.6	1.2	0.17				
S-049	-160071, 067	-160457, 151	09, 342	P-1	サガラノト	8.6	13.7	1.6	0.17				
S-051	-160071, 307	-160457, 063	09, 354	P-1	サガラノト	4.4	10.8	2.1	0.07				
S-051	-160071, 309	-160457, 046	09, 311	P-1	サガラノト				0.12				
S-051	-160071, 506	-160457, 031	09, 325	P-1	サガラノト	6.2	11.1	1.5	0.12				
S-054	-160071, 360	-160457, 050	09, 351	P-1	サガラノト				0.09				
S-054	-160071, 300	-160457, 229	09, 359	P-1	流突刃	10.6	+	12.8	1.6	0.16			
S-056	-160072, 452	-160457, 001	09, 291	P-1	サガラノト	18.1	+	20.1	3.6	0.96			
S-058	-160071, 407	-160457, 407	09, 354	P-1	サガラノト	10.2	+	13.1	1.9	0.33			
S-060	-160071, 497	-160457, 245	09, 318	P-1	サガラノト	7.5		12.6	+	1.5	0.44		
S-060	-160089, 507	-160457, 614	09, 326	P-1	サガラノト	8.3	+	22.4	2.4	0.27			
S-061	-160089, 647	-160457, 176	09, 352	P-1	サガラノト	14.2		9.5		0.08	0.11		
S-062	-160089, 675	-160457, 221	09, 328	P-1	サガラノト	13.5	+	12.8	2.6	0.46			
S-062	-160089, 550	-160457, 121	09, 398	P-1	サガラノト	12.5		11.8	1.7	0.19			
S-064	-160089, 587	-160457, 056	09, 368	P-1	サガラノト				0.01				
S-065	-160089, 709	-160457, 015	09, 256	P-1	サガラノト	13.2	+	17.7	1.7	0.23			
S-066	-160089, 571	-160457, 629	09, 319	P-1	サガラノト	12.6	+	11.4	+	1.4	0.12		
S-067	-160089, 907	-160457, 051	09, 362	P-1	サガラノト	12.5		11.6	+	1.7	0.20		
S-068	-160071, 471	-160457, 361	09, 258	P-1	サガラノト				0.03				
S-069	-160071, 216	-160457, 253	09, 324	P-1	サガラノト				0.05				
S-070	-160087, 557	-160457, 623	09, 323	P-1	鉄頭器	29.2		27.3	7.2	2.05			
S-074	-160086, 374	-160457, 072	09, 251	P-1	サガラノト	15.2		20.1	8.7	0.91			
S-075	-160086, 997	-160457, 012	09, 256	P-1	サガラノト	16.8		16.3	1.9	0.52			
S-076	-160085, 537	-160457, 081	09, 273	P-1	サガラノト	13.5	+	14.6	1.7	0.27			
S-078	-160086, 508	-160457, 095	09, 276	P-1	サガラノト	16.5		24.4	3.7	3.25			
S-079	-160086, 565	-160457, 595	09, 262	P-1	サガラノト	14.3		19.2	3.2	0.39			
S-079	-160087, 903	-160457, 242	09, 398	P-1	サガラノト	13.5		21.9	4.7	1.04			
S-082	-160088, 302	-160457, 660	09, 325	P-1	サガラノト				0.02				
S-071	-160087, 707	-160457, 128	09, 375	P-1	サガラノト	7.8		11.6	1.2	0.16			
S-077	-160086, 724	-160457, 792	09, 218	P-1	サガラノト	25.9		22.2	2.7	1.05			
S-077	-160087, 298	-160457, 766	09, 376	P-1	サガラノト	7.6		14.8	1.4	0.19			
S-077	-160087, 641	-160457, 216	09, 303	P-1	サガラノト	6.8	+	17.4	2.3	0.14			
S-078	-160088, 256	-160457, 941	09, 339	P-1	サガラノト	5.1	+	17.1	1	1.3	0.66		
S-080	-160088, 912	-160457, 251	09, 305	P-1	サガラノト	8.4	+	12.3	1.6	0.16			
S-084	-160085, 727	-160457, 443	09, 325	P-1	サガラノト				0.04				
S-085	-160084, 608	-160457, 712	09, 375	P-1	サガラノト	18.6		27.9	2.9	1.05			
S-090	-160084, 431	-160457, 658	09, 495	P-1	サガラノト	13.2		17.7	1.7	0.22			
S-094	-160082, 826	-160457, 756	09, 376	西山田山	12.9								
S-092	-160087, 593	-160457, 888	09, 398	P-1	サガラノト	14.5		19.7	2.5	0.67			
S-093	-160087, 626	-160457, 142	09, 374	P-1	サガラノト	8.6	+	12.9	1	1.5	0.40		
S-096	-160088, 233	-160457, 242	09, 388	白石	サガラノト	17.0	+	15.0	3.6	0.28			
S-098	-160088, 193	-160457, 930	09, 436	P-1	サガラノト	16.2		18.6	2.6	0.38			
S-099	-160072, 914	-160457, 125	09, 334	P-1	サガラノト	28.2	+	41.0	1	5.4	0.88		
S-000	-160072, 450	-160457, 028	09, 293	P-1	サガラノト	22.5		27.4	5.6	2.26	伊志アリ		
S-001	-160074, 825	-160457, 270	09, 372	P-1	サガラノト	12.8		11.6	1.3	0.17			
S-002	-160086, 893	-160458, 508	09, 388	尾瀬原	12.9								
S-003	-160088, 834	-16071, 782	09, 392	P-1	サガラノト				0.95				
S-004	-160082, 882	-16066, 446	09, 332	P-1	サガラノト				0.41				
S-006	-160084, 927	-16065, 353	09, 289	P-1	サガラノト	46.4		47.8	5.5	11.66			
S-008	-160073, 941	-16071, 330	09, 206	P-1	サガラノト	24.8		24.9	1	3.5	1.84		
S-009	-160073, 825	-16019, 155	09, 263	P-1	サガラノト	28.4	+	21.0	2.7	1.99			
S-010	-160074, 532	-16035, 223	09, 288	P-1	サガラノト				0.67				
S-011	-160072, 621	-160456, 223	09, 306	P-1	サガラノト				0.04				
S-014	-160088, 189	-16044, 248	09, 234	P-1	サガラノト				0.05				
S-016	-160089, 519	-16044, 781	09, 362	P-1	サガラノト	9.5		14.1	2.3	0.25			
S-018	-160077, 081	-16072, 072	09, 223	P-1	サガラノト	9.2	+	17.2	2.6	0.28			
S-019	-160077, 636	-16073, 371	09, 372	石室	サガラノト	15.5		12.5	+	2.5	0.3		
S-020	-160086, 924	-16074, 182	09, 251	御前ヶ谷石室	8.6			11.0		12.5	55.69		
S-021	-160086, 972	-16071, 650	09, 372	御前ヶ谷石室	15.5			16.0		5.3	1.11		
S-022	-160082, 451	-16063, 725	09, 263	P-1	天井石	26.4		24.2	6.2	16.57			
S-024	-160072, 895	-16057, 719	09, 316	P-1	天井石	25.6		27.0	9.6	50.56			
S-027	-160092, 187	-16047, 179	09, 031	P-1	サガラノト	11.2		9.2	1	0.12			
S-028	-160092, 125	-16047, 067	09, 037	P-1	サガラノト	15.7	+	21.3	3.3	1.56			
S-029	-160092, 395	-16046, 606	09, 398	P-1	サガラノト				0.11				
S-030	-160092, 376	-16046, 015	09, 398	P-1	サガラノト	16.7	+	21.9	2.5	1.01			
S-031	-160092, 879	-16046, 859	09, 022	P-1	サガラノト	10.5		12.1	1.7	0.38			
S-032	-160081, 961	-16062, 909	09, 253	P-1	サガラノト	6.2		11.6	2.2	0.19			
S-034	-160090, 659	-16046, 017	09, 161	P-1	サガラノト	11.1		15.0	1.3	0.19			
S-034	-160087, 566	-16047, 018	09, 337	白坂	サガラノト	26.5	+	32.5	3.0	0.94			

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
7457	-160004.156	-160005.552	av.305	P.1	サスカイト	13.4	16.3	1.7	0.95				
7458	-160004.166	-160005.254	av.303	P.1	サスカイト	6.3	*	10.2	1.4	0.13			
7459	-160004.172	-160005.668	av.316	石器	サスカイト	12.5	14.5	3.2	0.74				
7460	-160004.047	-160005.254	av.222	P.1	サスカイト	12.2	14.6	1.6	0.24				
7461	-160004.399	-160004.826	av.133									遺物なし	
7464	-160005.210	-160004.072	av.291	石器	サスカイト	16.0	*	1.0	2.2	0.27			
7465	-160005.7.84	-160004.080	av.298	P.1	サスカイト	12.2	20.0	4.6	1.22				
7466	-160004.2-6	-160004.947	av.214	石器	サスカイト	4.4	34.1	3.3	13.54	S.1と同様			
7467	-160004.2-6	-160004.947	av.215	P.1	サスカイト	18.5	38.4	4.1	2.07				
7468	-160006.207	-160005.211	av.306	P.1	サスカイト	13.6	12.7	2.5	0.76				
7469	-160006.968	-160004.753	av.301	P.1	サスカイト	9.8	14.6	1.7	0.34				
7470	-160007.303	-160005.651	av.354	P.1	サスカイト	12.6	*	14.5	2.3	0.57			
7471	-160004.621	-160004.614	av.126	P.1	サスカイト	17.5	14.2	2.5	0.39				
7472	-160007.303	-160005.614	av.352	P.1	サスカイト	11.5	*	12.6	1.2	0.22			
7473	-160006.847	-160005.612	av.116	P.1	サスカイト	21.0	10.8	3.5	5.58				
7474	-160006.536	-160005.613	av.255	P.1	サスカイト	22.6	*	21.3	5.8	2.08			
7475	-160007.196	-160007.706	av.304	P.1	鉄製矢	46.1	56.2	6.9	13.55				
7476	-160007.327	-160004.927	av.182	c.b	鉄製矢					0.06			
7477	-160004.309	-160001.251	av.305	P.1	サスカイト	11.8	13.1	2.0	0.29				
7478	-160002.589	-160005.671	av.105	P.1	鉄製矢	16.0	*	21.3	2.6	1.11			
7479	-160004.679	-160005.793	av.219	P.1	サスカイト	13.6	16.0	2.0	0.35				
7480	-160001.254	-160004.318	av.130	R.P	サスカイト	43.2	36.2	5.2	6.33				
7481	-160008.814	-160001.618	av.815	P.1	サスカイト	25.1	*	23.3	*	1.71			
7482	-160007.565	-160008.857	av.305	P.1	サスカイト	18.0	17.4	1	2.6	0.86			
7483	-160007.565	-160008.903	av.305	P.1	サスカイト	18.5	14.8	1.9	0.39				
7484	-160007.741	-160007.684	av.308	P.1	サスカイト	13.8	18.8	2.5	0.73				
7485	-160007.972	-160007.644	av.304	P.1	サスカイト	17.1	*	22.1	2.2	0.80			
7486	-160006.123	-160007.950	av.306	P.1	サスカイト	7.0	17.2	1.9	0.18				
7488	-160007.839	-160007.214	av.965	P.1	サスカイト	18.4	22.0	1	2.7	1.25			
7489	-160007.809	-160007.478	av.975	P.1	サスカイト	16.7	17.0	1	2.2	0.63			
7490	-160007.831	-160009.012	av.308	P.1	サスカイト	25.0	*	47.2	1	5.3	0.35		
7491	-160007.833	-160009.474	av.922	c.b	サスカイト					0.19			
7492	-160007.752	-160009.311	av.928	P.1	サスカイト	9.4	19.7	2.7	0.57				
7493	-160007.743	-160009.843	av.306	P.1	サスカイト	12.7	18.3	2.5	0.60				
7494	-160007.297	-160009.227	av.956	c.b	サスカイト					0.09			
7496	-160007.196	-160007.427	av.931	P.1	サスカイト	14.5	*	15.1	1	1.8	0.45		
7497	-160007.477	-160007.477	av.912	P.1	サスカイト	13.0	19.3	2.4	0.59				
7498	-160007.972	-160007.210	av.973	P.1	サスカイト	15.5	19.3	4.7	0.95				
7499	-160007.532	-160006.935	av.935	P.1	サスカイト	16.9	*	16.0	1	1.7	0.16		
7500	-160007.570	-160006.050	av.926	P.1	サスカイト	27.0	19.3	2.6	1.18				
7501	-160007.783	-160007.534	av.893	R.P	サスカイト	37.3	23.2	5.5	6.24				S.4
7502	-160007.475	-160014.144	av.962	P.1	サスカイト	26.2	22.1	2.3	0.86				
7503	-160007.469	-160011.961	av.937	P.1	サスカイト	16.1	16.0	1	2.6	0.46			
7504	-160007.517	-160011.872	av.926	P.1	サスカイト	19.4	16.7	1	1.8	0.52			
7505	-160007.390	-160024.840	av.963	C.P	サスカイト	36.1	22.5	7.3	17.72				SC
7506	-160007.754	-160027.514	av.806	P.1	サスカイト	14.7	24.0	3.3	1.26				
7507	-160007.534	-160027.643	av.894	P.1	サスカイト	17.3	17.1	2.7	0.79				
7508	-160007.309	-160026.831	av.836	P.1	サスカイト	17.6	26.1	2.3	0.59				
7509	-160007.179	-160027.312	av.829	c.b	サスカイト					0.49			
7510	-160007.262	-160027.348	av.925	P.1	サスカイト	14.7	*	19.3	1	1.8	0.52		
7511	-160007.349	-160027.588	av.926	P.1	サスカイト	9.8	12.7	1.7	0.66				
7512	-160007.350	-160027.931	av.941	P.1	サスカイト	14.7	21.1	2.3	0.78				
7513	-160007.861	-160028.057	av.926	P.1	サスカイト	9.8	12.6	1.2	0.46				
7514	-160007.954	-160028.800	av.906	P.1	サスカイト	9.8	*	12.7	1.7	0.22			
7515	-160007.755	-160028.455	av.927	P.1	サスカイト	10.5	*	12.7	*	1.4	0.22		
7516	-160007.773	-160028.415	av.931	P.1	サスカイト	8.2	*	10.7	1.9	0.48			
7518	-160007.775	-160028.513	av.926	P.1	サスカイト	18.0	21.5	2.6	1.07				
7519	-160007.546	-160028.517	av.981	P.1	サスカイト	17.6	*	21.5	3.1	1.47			
7521	-160007.915	-160028.829	av.912	P.1	アズキ	26.9	*	13.3	*	7.6	11.2		
7522	-160007.310	-160055.185	av.131	P.1	サスカイト	29.3	*	26.6	2.7	1.98			
7524	-160007.329	-160056.509	av.156	P.1	サスカイト	17.8	12.7	1.5	0.33				
7526	-160007.767	-160057.917	av.877	P.1	サスカイト	19.5	*	16.0	2.1	0.75			
7527	-160007.957	-160057.055	av.742	P.1	サスカイト	16.5	*	13.7	1.7	0.31			
7528	-160007.961	-160057.965	av.131	P.1	サスカイト	19.7	11.9	2.5	0.60				
7529	-160007.781	-160057.710	av.145	c.b	サスカイト					0.16			
7530	-160007.196	-160057.717	av.129	P.1	サスカイト	8.9	12.1	2.1	0.25				
7531	-160007.957	-160057.649	av.127	P.1	サスカイト	12.3	*	12.2	4	1.6	0.23		
7532	-160007.746	-160057.251	av.108	白陶	サスカイト	17.5	10.5	2.6	0.59				
7533	-160007.157	-160057.153	av.989	P.1	サスカイト	12.5	17.3	2.3	0.49				
7534	-160007.904	-160057.319	av.115	c.b	サスカイト					0.45			

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(m)	重さ(g)	参考	備考
Q1015	-1600761_762	-1600761_250	89_195	P-1	サスカノト	16.5	14.8	2.8	2.9	0.59			
Q1016	-1600761_661	-1600761_331	89_128	P-1	サスカノト	40.5	33.2	2.9	5.67				
Q1017	-1600761_494	-1600761_343	89_186	P-1	サスカノト	12.8	4	1.8	1.8	0.38			
Q1018	-1600761_456	-1600761_275	89_184	P-1	サスカノト	11.9	12.1	4	1.7	0.28			
Q1019	-1600761_189	-1600761_781	89_112	P-1	サスカノト	17.7	21.2	2.8	0.79				
Q1020	-1600761_673	-1600761_346	89_124	△R	サスカノト	13.2	4	14.0	2.8	0.36			
Q1021	-1600761_316	-1600761_251	89_181	c b	サスカノト					0.16			
Q1022	-1600761_328	-1600761_260	89_162	P-1	サスカノト	21.2	4	24.4	3.0	1.77			
Q1023	-1600808_672	-1600808_273	89_127	▲R(矢頭無)	サスカノト	40.2	4	33.8	3.0	2.05	5.60	5.60	
Q1024	-1600808_477	-1600808_246	89_123	P-1	サスカノト	14.5	18.3	2.5	0.89				
Q1025	-1600808_361	-1600808_212	89_206	P-1	サスカノト	14.2	4	24.5	3.0	1.38			
Q1026	-1600808_275	-1600808_613	89_205	P-1	ミヤヒコ	14.8	20.4	3.0	5.58				
Q1027	-1600808_331	-1600808_911	89_273	P-1	サスカノト	16.2	16.8	1.8	0.55				
Q1028	-1600808_302	-1600808_451	89_263	P-1	サスカノト	21.8	28.5	2.5	1.70				
Q1029	-1600808_301	-1600808_000	89_105	P-1	サスカノト	23.1	4	32.2	3.0		非鉄不明		
Q1029	-1600808_301	-1600808_000	89_105	P-1	サスカノト	3.1	1	15.3	2.1		非鉄不明		
Q1030	-1600808_891	-1600808_000	89_105	P-1	サスカノト	16.9	15.8	1.8	0.47				
Q1030	-1600808_874	-1600808_010	89_218	c b	サスカノト					0.07			
Q1031	-1600808_517	-1600808_612	89_124	c b	サスカノト					0.01			
Q1032	-1600808_851	-1600808_524	89_126	P-1	サスカノト	21.1	4	27.1	2.3	1.19			
Q1033	-1600808_363	-1600808_250	89_156	P-1	サスカノト	14.2	4	29.2	3.0	6.53			
Q1034	-1600808_564	-1600808_186	89_231	R P	サスカノト	26.5	2	24.2	2.5	2.81			
Q1035	-1600808_179	-1600808_265	89_228	P-1	サスカノト	16.3	4	17.3	2.5	0.87			
Q1036	-1600808_518	-1600808_511	89_175	P-1	サスカノト	16.3	18.5	2.6	0.76				
Q1037	-1600808_518	-1600808_511	89_171	P-1	サスカノト	12.1	4	27.1	2.3	1.19			
Q1038	-1600808_528	-1600808_522	89_126	P-1	サスカノト	12.2	3	14.2	1.9	0.32			
Q1039	-1600808_303	-1600808_954	89_106	P-1	サスカノト	12.3	16.4	1.9	0.68				
Q1040	-1600808_911	-1600808_620	89_126	P-1	サスカノト	13.9	3	12.2	1.7	0.25			
Q1040	-1600808_905	-1600808_295	89_118	c b	サスカノト					0.05			
Q1041	-1600808_865	-1600808_561	89_149	P-1	サスカノト	12.9	3	18.4	1	4.6	1.33		
Q1042	-1600808_178	-1600808_410	89_126	P-1	サスカノト	15.4	3	24.5	3.6	1.74			
Q1043	-1600808_399	-1600808_216	89_149	P-1	サスカノト	19.3	3	23.2	3.6	0.92			
Q1044	-1600761_007	-1600761_010	89_140	P-1	サスカノト	15.6	3	17.1	2.6	0.54			
Q1045	-1600808_727	-1600808_173	89_145	P-1	サスカノト	7.8	3	11.6	1.2	0.11			
Q1046	-1600808_740	-1600808_953	89_174	c b	サスカノト					0.08			
Q1047	-1600808_178	-1600808_410	89_126	P-1	サスカノト	15.4	3	24.5	3.6	1.74			
Q1048	-1600808_410	-1600808_411	89_161	P-1	サスカノト	19.3	3	23.2	3.6	0.92			
Q1049	-1600761_007	-1600761_010	89_140	P-1	サスカノト	15.6	3	17.1	2.6	0.54			
Q1050	-1600808_727	-1600808_173	89_145	P-1	サスカノト	7.8	3	11.6	1.2	0.11			
Q1051	-1600808_740	-1600808_953	89_174	c b	サスカノト					0.08			
Q1052	-1600808_410	-1600808_173	89_126	P-1	サスカノト	12.2	3	13.6	1.8	0.27			
Q1053	-1600761_624	-1600761_213	89_124	P-1	サスカノト	14.5	3	40.4	3.4	5.75			
Q1054	-1600761_691	-1600761_912	89_324	P-1	サスカノト	12.1	3	21.1	2.4	0.47			
Q1055	-1600808_401	-1600808_401	89_161	P-1	サスカノト	8.2	3	10.1	1.6	0.40			
Q1056	-1600808_449	-1600808_449	89_161	P-1	サスカノト	12.2	3	13.6	1.8	0.27			
Q1057	-1600761_624	-1600761_213	89_124	P-1	サスカノト	14.5	3	40.4	3.4	5.75			
Q1058	-1600761_691	-1600761_912	89_324	P-1	サスカノト	12.1	3	21.1	2.4	0.47			
Q1059	-1600808_448	-1600808_361	89_161	P-1	サスカノト	12.2	3	13.6	1.8	0.27			
Q1060	-1600808_032	-1600808_833	89_953	P-1	サスカノト	18.9	3	18.6	1	4.5	2.31		
Q1061	-1600808_039	-1600808_757	89_669	P-1	サスカノト	23.3	28.6	2.9	1.86				
Q1062	-1600906_987	-1600906_923	88_976	P-1	サスカノト	18.1	3	21.9	1	2.6	0.72		
Q1063	-1600906_203	-1600747_548	88_938	P-1	サスカノト	12.2	3	13.5	1	1.4	0.33		
Q1064	-1600906_766	-1600906_766	88_993	P-1	サスカノト	15.7	12.8	1.4	0.24				
Q1065	-1600906_943	-1600906_754	88_933	P-1	サスカノト	6.1	3	10.5	1.4	0.09			
Q1066	-1600798_852	-1600798_050	88_962	P-1	サスカノト	16.7	3	13.5	1	2.9	0.57		
Q1067	-1600798_554	-1600798_171	88_927	P-1	サスカノト	16.5	9.4	1.3	0.45				
Q1068	-1600798_879	-1600798_290	88_964	c b	サスカノト	18.5	3	24.5	3.6	0.6	538		
Q1069	-1600798_496	-1600798_523	88_968	P-1	サスカノト	13.7	3	21.1	2.6	1.17			
Q1070	-1600798_740	-1600798_740	89_112	P-1	サスカノト	23.9	21.8	1	2.6	1.28			
Q1071	-1600807_932	-1600808_378	89_098	P-1	サスカノト	15.7	12.8	1.4	0.24				
Q1072	-1600807_943	-1600807_754	89_098	P-1	サスカノト	6.1	3	10.5	1.4	0.09			
Q1073	-1600807_208	-1600807_596	89_019	P-1	サスカノト	16.7	3	13.5	1	2.9	0.57		
Q1074	-1600807_159	-1600807_967	89_022	P-1	サスカノト	9.4	3	10.5	1	1.6	0.42		
Q1075	-1600807_514	-1600807_471	89_188	P-1	サスカノト	10.5	13.7	1.2	0.17				
Q1076	-1600807_603	-1600807_635	89_213	P-1	サスカノト	15.2	3	21.8	2.8	1.29			
Q1077	-1600807_530	-1600807_526	89_129	c b	サスカノト					0.05			
Q1078	-1600807_052	-1600807_063	89_024	P-1	サスカノト	8.6	3	10.5	1.5	0.13			
Q1079	-1600807_060	-1600807_588	89_008	c b	サスカノト					0.02			
Q1080	-1600807_208	-1600807_596	89_019	P-1	サスカノト	7.7	3	17.5	1.8	0.13			
Q1081	-1600807_257	-1600807_967	89_022	P-1	サスカノト	9.4	3	10.5	1	1.6	0.36		
Q1082	-1600807_121	-1600807_039	89_079	P-1	サスカノト					0.01			
Q1083	-1600807_399	-1600807_016	89_075	c b	サスカノト					0.06			
Q1084	-1600807_903	-1600807_955	89_082	P-1	サスカノト	13.6	3	17.7	1.9	0.21			
Q1085	-1600807_952	-1600807_842	89_075	P-1	サスカノト	11.8	3	10.7	1.2	0.13			
Q1086	-1600807_141	-1600807_709	89_005	P-1	サスカノト	11.6	3	15.1	1.8	0.26			
Q1087	-1600807_502	-1600807_819	89_048	c b	サスカノト					0.09			
Q1088	-1600807_394	-1600807_928	89_047	P-1	サスカノト	11.5	3	12.0	1.1	0.16			

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	種別	石寸	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	幅(mm)	刃さ(mm)	重量(g)	参考	備考
3137	-1600761_665	-130205_244	as_116	Y形	サスカメント	13.2	*	16.2		2.2	0.14		
3137	-1600761_471	-130205_093	as_153	P	サスカメント	13.2	*	16.2		2.2	0.18		
3138	-1600761_894	-130205_093	as_158	P	サスカメント	13.2	*	17.0		3.0	0.28		
3139	-1600761_274	-130205_282	as_206	P	云雷紋	41.9		16.0		10.7	20.46		
3140	-160090_977	-130205_263	as_209	P	サスカメント	18.1	*	17.0		2.0	0.72		
3141	-160094_271	-130205_272	as_214	P	サスカメント	11.5	*	12.4		1.4	0.19		
3142	-160099_804	-130205_484	as_658	P	サスカメント	17.4	*	17.4	*	2.0	0.16		
3144	-160074_267	-130205_089	as_343	P	サスカメント	46.0	*	16.0		3.2	5.38		
3145	-160102_542	-130205_633	as_314	P	サスカメント	6.2		14.2		1.3	0.12		
3146	-160082_109	-130205_257	as_268	P	サスカメント	26.9		24.0		2.5	2.13		
3147	-160074_740	-130205_947	as_618	P	サスカメント	2.9		19.5		3.0	0.34		
3148	-160074_542	-130205_641	as_205	P	サスカメント	13.6	*	11.2		1.6	0.14		
3149	-160074_677	-130205_471	as_97	P	サスカメント	15.5		16.0		2.0	0.09		
3150	-160074_291	-130205_615	as_106	P	サスカメント	11.4	*	12.5		1.8	0.57		
3151	-160066_559	-130205_933	as_302	e	サスカメント						0.09		
3152	-160089_414	-130204_550	as_614	P	サスカメント	3.6	*	18.2		1.0	0.32		
3153	-160074_605	-130205_975	as_405	P	出筋印	24.7	*	14.0		3.0	0.73		
3157	-160074_588	-130205_975	as_323	P	サスカメント	13.1	*	13.2		2.5	0.18		
3158	-160088_782	-130205_212	as_175	P	サスカメント	19.5		13.2		2.0	0.39		
3159	-160088_104	-130205_251	as_83	P	サスカメント	15.6		19.2		1.1	0.32		
3161	-160087_889	-130205_301	as_893	P	サスカメント	13.1	*	20.2		3.3	1.12		
3182	-160088_572	-130204_450	as_855	P	サスカメント	46.0	*	24.2		6.2	4.2		
3183	-160088_889	-130205_033	as_896	P	サスカメント	19.1	*	13.1	*	5.3	2.31		
S145	-160084_872	-130407_053	as_868	P	サスカメント	16.0	*	13.2		1.9	0.11		
S158	-160084_506	-130407_403	as_868	P	サスカメント	3.6	*	14.0		2.0	0.13		
S159	-160084_757	-130407_156	as_826	P	サスカメント	9.7		13.1		1.7	0.17		
S160	-160079_851	-130402_051	as_951	P	サスカメント	14.3		20.8		3.2	0.62		
S192	-160055_253	-130511_143	as_221	火炎文	サスカメント	13.0		21.6		3.6	14.33	SC	
S193	-160084_467	-130511_256	as_854	e	サスカメント	19.1		13.1		2.0	2.06		
S197	-160401_934	-130402_047	as_934	R.P	サスカメント	14.7		44.0		44.7	3.76		
S200	-160402_641	-130401_951	as_332	P	出筋印	14.3	*	24.4		1.9	0.39		
S201	-160403_941	-130402_941	as_377	P	サスカメント	17.1		11.1		3.0	0.62		
S203	-160403_943	-130401_721	as_606	R.P	サスカメント	16.3		28.6		4.3	5.09		
S205	-160403_906	-130401_559	as_612	P	サスカメント	27.6	*	41.4		3.7	4.66		
S206	-160404_532	-130401_288	as_605	P	サスカメント	16.0		13.1		1.2	0.19		
S210	-160406_568	-130402_906	as_99	R.P	サスカメント	25.3	*	27.0		2.5	2.09		
S219	-160403_927	-130402_972	as_467	P	サスカメント	16.1		17.1		2.3	0.59		
S222	-160505_301	-130402_059	as_144	R.P	サスカメント	40.0		29.2		3.4	4.75		
S223	-160509_517	-130507_819	as_337	P	サスカメント	12.5		11.8		2.0	0.35		
S224	-160506_021	-130507_981	as_626	P	サスカメント	20.6	*	20.9		3.8	1.75		
S226	-160508_622	-130504_410	as_923	P	サスカメント	20.6		21.9		2.5	1.09		
S227	-160501_805	-130507_059	as_654	e	サスカメント					0.07			
S228	-160579_604	-130712_470	as_262	P	サスカメント	12.5		9.0		1.2	0.46		
S229	-160506_257	-130714_372	as_626	P	サスカメント	26.3		34.0		6.0	2.88		
S231	-160502_907	-130407_139	as_932	P	サスカメント	11.8	*	14.8		1.9	0.57		
S232	-160507_774	-130407_847	as_931	P	サスカメント	14.9		10.8		1.4	0.27		
S233	-160506_499	-130407_742	as_958	P	サスカメント	14.1		12.2		1.6	0.28		
S234	-160506_499	-130407_743	as_958	e	サスカメント					0.07			
S234	-160579_395	-130511_109	as_959	P	サスカメント	21.6		24.5		5.6	2.52		
S247	-160579_436	-130511_767	as_948	P	サスカメント	15.8		14.6		2.6	0.51		
S248	-160579_232	-130511_704	as_911	P	サスカメント	22.3		13.6		2.3	0.57		
S249	-160506_556	-130411_023	as_969	P	サスカメント	12.5		16.6		3.1	0.61		
S248	-160507_333	-130405_899	as_909								0.07		
S249	-160506_862	-130405_909	as_121	P	サスカメント	8.5	*	13.5	*	2.1	0.22		
S249	-160507_021	-130505_652	as_974	P	サスカメント	10.2		11.6		1.6	0.16		
S251	-160507_951	-130511_183	as_898	P	サスカメント	16.8		16.1		2.3	0.53		
S252	-160506_713	-130505_213	as_591	P	サスカメント	10.5	*	9.3	*	1.6	0.18		
S253	-160505_039	-130411_263	as_511	P	サスカメント	6.5		12.6		2.3	0.15		
S254	-160502_399	-130402_821	as_475	P	サスカメント	13.1	*	10.6	*	2.1	0.25		
S255	-160501_029	-130406_851	as_679	四脚	サスカメント	16.5		12.6	*	2.6	0.27		
S256	-160506_295	-130501_021	as_732	P	サスカメント	7.5	*	11.6		1.5	0.15		
S257	-160504_678	-130506_518	as_174	e	サスカメント					0.03			
S258	-160502_728	-130506_689	as_700	e	サスカメント					0.16			
S259	-160507_534	-130507_531	as_198	P	サスカメント	10.3		20.5		1.5	0.36		
S259	-160506_176	-130501_680	as_367	P	サスカメント	13.0		13.6		2.0	0.11		
S260	-160505_682	-130501_218	as_917	e	サスカメント					0.16			
S261	-160507_562	-130507_081	as_951	P	サスカメント	10.0	*	9.8	*	1.6	0.16		
S262-1	-160505_286	-130506_931	as_798	P	サスカメント	21.6		24.2		3.5	直角ハ明		
S266	-160501_348	-130404_600	as_528							2.28	直角なし		

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
3025	-160090.558	-160000.008	808.568	P-1	サスカント	18.6	+	44.5	+	7.0	5.97		
3026	-160090.044	-160000.351	808.426	P-1	サスカント	18.5	+	20.0	+	2.1	0.54		
3027	-160090.256	-160000.288	808.454	P-1	サスカント	11.2	+	16.8	+	2.5	0.44		
3027	-160090.154	-160000.143	808.438	(Y面)	サスカント	18.6	+	14.0	+	9.0	0.59		S23
3028	-160090.451	-160000.501	808.486	P-1	サスカント	19.6	+	22.2	+	3.9	1.61		
3029	-160090.246	-160000.440	808.425	P-1	サスカント	18.1	+	12.2	+	3.5	0.43		
3029	-160090.444	-160000.724	808.333	P-1	サスカント	18.2	+	13.0	+	1.5	0.30		
3030	-160090.386	-160000.674	808.358	P-1	サスカント	26.0	+	48.4	+	5.0	5.41		
3030	-160090.172	-160000.600	808.371	P-1	サスカント	16.8	+	7.0	+	1.1	0.44		
3031	-160090.051	-160000.461	808.445									1.5	遺物なし
3034	-160090.741	-160000.680	808.309									0.34	遺物なし
3035	-160090.500	-160000.683	808.425	R P	サスカント	19.3	+	13.0	+	3.1	0.35		
3036	-160090.040	-160000.521	808.211	P-1	サスカント	11.2	+	12.7	+	1.0	0.34		
3037	-160090.312	-160000.583	808.143	P-1	サスカント	10.8	+	8.6	+	1.7	0.19		
3038	-160090.355	-160000.623	808.166									0.05	遺物なし
3039	-160090.506	-160000.751	808.162	P-1	サスカント	9.3	+	11.2	+	1.5	0.16		
3040	-160090.167	-160000.611	808.118	P-1	サスカント	18.6	+	16.0	+	2.2	0.17		
3040	-160090.172	-160000.673	808.298	P-1	サスカント	26.9	+	33.0	+	5.8	4.31		
3041	-160090.154	-160000.720	808.211	P-1	サスカント	15.5	+	21.6	+	2.7	0.80		
3041	-160090.304	-160000.554	808.008	P-1	サスカント	16.5	+	22.5	+	2.3	0.88		
3042	-160090.273	-160000.613	808.115	P-1	サスカント	17.0	+	12.8	+	1.8	0.50		
3042	-160090.369	-160000.720	808.264	P-1	サスカント	26.0	+	12.2	+	1.8	0.13		
3043	-160090.676	-160000.761	808.118	実測値(手屈足)	サスカント	16.5	+	26.5	+	8.8	1.3		S23
3044	-160090.179	-160000.651	808.348	P-1	サスカント	27.0	+	17.0	+	3.6	1.22		
3045-1	-160090.497	-160000.724	808.362	c b	サスカント							0.11	
3045-2	-160090.497	-160000.724	808.362	c b	サスカント							0.06	
3046	-160090.736	-160000.797	808.308	c b	サスカント							0.10	
3047	-160090.569	-160000.953	808.067	P-1	サスカント	11.1	+	41.5	+	5.2	2.71		
3048	-160090.389	-160000.722	808.398	P-1	サスカント	14.0	+	18.2	+	3.5	0.86		
3049	-160091.174	-160000.454	808.071	P-1	サスカント	24.2	+	24.1	+	3.6	1.13		
3049	-160091.301	-160000.594	808.182	P-1	サスカント	14.2	+	32.9	+	3.6	0.15	表記+?付	
3051	-160091.421	-160000.587	808.096	P-1	サスカント	16.4	+	19.0	+	2.0	0.46		
3052	-160090.739	-160000.744	808.974	P-1	サスカント	12.8	+	21.1	+	2.5	0.86		
3053	-160090.624	-160000.838	808.842	P-1	サスカント	8.5	+	11.2	+	1.3	0.15		
3054	-160090.309	-160000.341	808.894	P-1	サスカント	14.6	+	11.2	+	2.6	0.32		
3054	-160090.000	-160000.457	808.852	P-1	サスカント	16.4	+	11.0	+	1.9	0.23		
3055	-160091.936	-160000.913	808.163	P-1	サスカント	14.5	+	29.5	+	2.3	0.64		
3056	-160091.008	-160000.641	808.303	P-1	サスカント	13.9	+	18.7	+	2.6	0.56		
3058	-160092.302	-160000.748	808.938	P-1	サスカント	12.9	+	16.2	+	1.5	0.33		
3059	-160091.552	-160000.469	808.958	P-1	サスカント	14.2	+	21.1	+	2.6	0.65		
3059	-160091.719	-160000.659	808.207	P-1	サスカント	24.1	+	33.4	+	3.9	2.81		
3060	-160090.309	-160000.551	808.236	P-1	サスカント	12.2	+	21.1	+	2.2	0.54		
3060	-160091.299	-160000.213	808.458	P-1	サスカント	8.3	+	14.1	+	1.2	0.42		
3061	-160091.132	-160000.777	808.494	c b	サスカント							0.11	
3062	-160091.303	-160000.808	808.440	P-1	サスカント	14.8	+	16.0	+	1.4	0.49		
3063	-160091.188	-160000.613	808.120	P-1	サスカント	26.4	+	24.3	+	2.7	1.37		
3064	-160091.692	-160001.571	808.198	R P	サスカント	27.6	+	46.6	+	3.7	4.84		
3065	-160091.829	-160001.877	808.221	△サスカント	6.1	+	56.3	+	16.6	34.53			
3066	-160091.558	-160001.575	808.369	P-1	サスカント	26.5	+	26.2	+	4.1	2.42		
3067	-160091.229	-160001.171	808.465	P-1	サスカント	17.9	+	36.0	+	5.5	2.60		
3068	-160091.311	-160001.963	808.493	P-1	サスカント	14.5	+	29.5	+	1.8	0.59		
3069	-160091.301	-160001.963	808.469	P-1	サスカント	14.8	+	16.0	+	1.4	0.49		
3070	-160091.115	-160001.869	808.169	P-1	サスカント	15.9	+	14.2	+	2.4	0.52		
3071	-160090.129	-160001.162	808.162	P-1	サスカント	12.9	+	16.2	+	2.6	0.59		
3072	-160090.656	-160001.843	808.116	P-1	サスカント	11.8	+	18.7	+	1.8	0.48		
3073	-160090.647	-160001.805	808.114	c b	サスカント							0.06	
3074-1	-160090.960	-160001.072	808.116	P-1	サスカント	8.5	+	11.7	+	1.0	0.35		
3074-2	-160090.361	-160001.072	808.116	c b	サスカント							0.01	
3075	-160090.624	-160001.273	808.116	P-1	サスカント	13.6	+	12.8	+	1.5	0.29		
3076	-160090.793	-160001.413	808.115	c b	サスカント							0.62	
3077	-160090.520	-160001.551	808.131	c b	サスカント							0.01	
3078	-160090.306	-160001.471	808.131	c b	サスカント							0.08	
3079	-160090.260	-160001.010	808.112	c b	サスカント							0.48	
3080	-160090.369	-160001.251	808.126	P-1	サスカント	5.5	+	11.2	+	1.5	0.05		
3081	-160090.177	-160001.056	808.127	P-1	サスカント	7.5	+	30.8	+	1.7	0.26		
3082	-160090.084	-160001.056	808.128	P-1	サスカント	9.6	+	21.5	+	3.8	0.63		
3083	-160090.211	-160001.017	808.121	△サスカント(右)	9.6	+	17.6	+	12.0	57.7		266	
3084	-160090.329	-160001.072	808.126	P-1	サスカント	14.1	+	17.5	+	2.1	0.41		
3085	-160090.280	-160001.171	808.136	P-1	サスカント	14.3	+	14.5	+	2.6	0.51		
3086	-160090.362	-160001.211	808.123	P-1	サスカント	16.4	+	14.5	+	3.3	0.3		
3087	-160090.362	-160001.018	808.125	c b	サスカント							0.08	

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

箇数 合計	系	Y	Z	標記	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅	刃さ(mm)	重さ(g)	参考	備考
31301	-160091.007	-160043.004	an.114	P.1	サガラノト	16.2	*	12.3	*	2.0	0.25		
31309	-160091.140	-160043.290	an.108	P.3	サガラノト						0.04		
31317	-160091.170	-160043.410	an.107	P.3	サガラノト						0.06		
31327	-160091.067	-160043.643	an.106	P.1	サガラノト	7.6		5.5		1.5	0.24		
31337	-160091.190	-160043.647	an.106	P.1	サガラノト	14.5		10.1		2.0	0.54		
31347	-160091.300	-160043.624	an.125	P.1	サガラノト	18.3	*	14.5	*	2.0	0.44		
31357	-160091.306	-160043.606	an.104	P.1	サガラノト	12.4	*	12.4	*	2.3	0.34		
31357	-160091.522	-160043.510	an.108	P.1	サガラノト	8.3	*	13.5	*	2.0	0.44		
31369	-160091.412	-160043.612	an.108	P.3	サガラノト						0.09		
31381-1	-160090.643	-160043.043	an.126	P.1	サガラノト	11.1		18.2		2.1		遺物不明	
31384-1	-160090.614	-160043.598	an.126	P.1	サガラノト	10.9		22.3		4.0		遺物不明	
31386	-160090.171	-160041.280	an.158	P.1	サガラノト	14.4		11.0	*	1.7	0.26		
31387	-160090.470	-160041.541	an.107	P.1	サガラノト	8.6	*	11.2	*	1.5	0.11		
31391	-160091.560	-160045.722	an.105	P.1	サガラノト	15.6	*	10.1		1.7	0.22		
31392	-160083.800	-160045.521	an.105	P.1	サガラノト	12.5		12.8		1.5	0.23		
31393	-160091.670	-160045.251	an.138	P.1	サガラノト	23.2		28.5		2.7	1.60		
31394	-160091.076	-160045.056	an.155	P.1	サガラノト	8.2		12.3		1.8	0.40		
31395	-160092.576	-160045.221	an.195	P.1	サガラノト	8.5		11.2	*	1.5	0.11		
31396	-160093.303	-160047.298	an.109	P.1	サガラノト	25.8		21.7		6.5	5.98		
31397	-160093.500	-160047.277	an.122	P.1	サガラノト	16.8	*	22.3	*	2.6	0.39		
31398	-160092.900	-160047.211	an.108	P.1	サガラノト	20.6	*	22.9		2.7	1.21		
31399	-160096.186	-160047.001	an.222	P.1	サガラノト	25.0	*	24.0	*	2.5	2.61		
31400	-160092.298	-160047.056	an.385	P.1	サガラノト	8.6		12.0	*	1.5	0.26		
S1401	-160079.324	-160046.261	an.398	P.3	サガラノト						0.09		
S1402	-160079.405	-160046.450	an.308	P.1	サガラノト	11.9	*	9.2		1.4	0.13		
S1403	-160080.274	-160041.171	an.175	P.1	サガラノト	9.0	*	22.4		2.7	0.52		
S1404	-160080.274	-160041.171	an.175	P.3	サガラノト						0.12		
S1404	-160080.430	-160042.240	an.186	P.1	サガラノト	14.1	*	21.5		2.3	0.68		
S1405	-160083.737	-160043.550	an.92	P.1	サガラノト	11.3		14.7		2.4	0.36		
S1406	-160084.799	-160043.378	an.208	P.1	サガラノト	21.6		18.2		2.1	0.61		
S1407	-160082.122	-160045.005	an.970	P.1	サガラノト	10.8	*	9.3		1.7	0.13		
S1408	-160081.510	-160045.724	an.611	P.1	サガラノト	10.2		14.8		3.2	0.48		
S1410	-160087.410	-160041.431	an.839	P.1	サガラノト	7.9	*	11.9	*	1.5	0.13		
S1411	-160087.292	-160042.640	an.213	P.1	サガラノト	8.2	*	14.6	*	3.3	0.27		
S1412	-160088.144	-160045.752	an.206	P.3	サガラノト						0.06		
S1414	-160084.177	-160047.914	an.214	P.1	サガラノト	11.3	*	23.9	*	1.8	0.19		
S1415	-160080.796	-160042.760	an.192	P.1	サガラノト	6.1		22.3		2.0	0.18		
S1416	-160079.754	-160048.540	an.195	P.1	サガラノト	10.4		14.7		1.1	0.32		
S1417	-160083.522	-160073.473	an.346	P.1	サガラノト	8.1	*	13.1	*	1.6	0.21		
S1418	-160085.520	-160048.620	an.672	P.1	サガラノト	20.5	*	24.6	*	3.2	14.06	S-50-214号右目	S1
S1419	-160082.299	-160045.805	an.148	P.1	サガラノト	17.0	*	23.6	*	39.6	470.40		S2
21	160079.604	160049.213	an.313	P.1	神文上部	125					5		
22	160080.227	160049.340	an.206	P.1	上部	125							
23	160079.364	160048.872	an.363	P.1	上部	125							
24	160076.130	160049.472	an.889	P.1	神文上部	125							6
25	160078.913	160048.620	an.321	P.1	上部	125							
26	160084.430	160051.006	an.957	P.1	神文上部	125							7
27	160085.269	160063.028	an.312	P.1	上部	125							
28	160086.962	160041.058	an.148	P.1	上部	125							
29	160086.921	160043.850	an.206	P.1	上部	125							
30	160086.309	160044.052	an.263	P.1	上部	125							
31	160085.430	160045.049	an.277	P.1	上部	125							
32	160085.745	160045.432	an.257	P.1	上部	125							
33	160085.199	160046.241	an.256	P.1	上部	125							
34	160086.917	160044.087	an.926	P.1	神文上部	125							
35	160087.611	160041.255	an.196	P.1	上部	125							
36	160085.314	160051.931	an.231	P.1	上部	125							
37	160086.338	160048.201	an.261	P.1	上部	125							
38	160086.360	160045.184	an.126	P.1	上部	125							
39	160087.169	160044.221	an.121	P.1	上部	125							
40	160087.379	160044.254	an.103	P.1	上部	125							
41	160087.771	160044.212	an.90	P.1	上部	125							
42	160088.696	160077.519	an.274	P.1	上部	125							
43	160085.671	160075.637	an.288	P.1	上部	125							
44	160085.672	160075.980	an.176	P.1	上部	125							
45	160085.512	160075.963	an.298	P.1	上部	125							
46	160086.776	160061.181	an.295	P.1	上部	125							
47	160085.774	160061.065	an.288	P.1	上部	125							
48	160085.302	160061.514	an.284	P.1	上部	125							

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

遺物番号 二重合号	系	Y	Z	種類	石寸	長さ(mm)	幅	高さ(mm)	幅高	刃さ(mm)	重量(g)	参考	備考
"29	-160008N_371	-13001,474	20,305	流生十部	125								
"30	-160008R_362	-13001,503	20,348	流生十部	125								
"31	-160008N_444	-13001,601	20,419	流生十部	125								
"32	-160008N_117	-13002,504	20,400	流生十部	125								
"33	-160008N_399	-13003,013	20,326	流生十部	125								
"34	-160008R_156	-13003,215	20,318	流生十部	125								
"35	-160007_306	-13016,942	20,243	流生十部	125								
"36	-160004_R01	-13045,121	20,246	十部	125								
"37	-160008R_452	-13057,403	20,113	十部	125								
"38	-160006_398	-13074,405	20,198	十部	125								
"39	-160001_R01	-13081,928	20,156	十部	125								
"40	-160008_344	-13097,610	20,116	十部	125								
"41	-160007_799	-13094,071	20,125	十部	125								
"42	-160008_362	-13097,556	20,158	十部	125								
"43	-160004_R01	-13098,051	20,158	十部	125								
"44	-160006_430	-13098,210	20,175	十部	125								
"45	-160004_R02	-13099,072	20,196	十部	125								
"46	-160009_R27	-13099,050	20,157	十部	125								
"47	-160006_R02	-13071,318	20,168	十部	125								
"48	-160006_R02	-13071,009	20,118	十部	125								
"49	-160001_R01	-13071,621	20,113	十部	125								
"50	-160007_R09	-13071,182	20,118	十部	125								
"51	-160006_R02	-13071,258	20,112	十部	125								
"52	-160004_R02	-13071,601	20,182	十部	125								
"53	-160001_R01	-13071,754	20,041	十部	125								
"54	-160001_R02	-13070,947	20,114	十部	125								
"55	-160007_909	-13071,921	20,167	十部	125								
"56	-160007_R03	-13072,683	20,181	十部	125								
"57	-160007_R01	-13072,711	20,185	十部	125								
"58	-160008_725	-13072,767	20,172	十部	125								
"59	-160003_697	-13071,851	20,116	十部	125								
"60	-160007_R03	-13071,721	20,120	十部	125								
"61	-160105_R01	-13074,294	20,133	十部	125								
"62	-160009_429	-13076,506	20,164	鉢文×器	125							2	
"63	-160072_619	-13074,251	20,162	鉢文×器	125							3~4	
"64	-160008_R01	-13074,411	20,140	十部	125								
S2001	石斧(刀頭部)	ツヌカヘト	42.6	+	28.6					2.6	4.54	S201	
S2002	実底双刃刀頭部	ツヌカヘト	40.5	+	34.6	1	12.6	15.38	S202				
S2003	石斧部	ツヌカヘト	35.1	+	27.8	1	7.5	6.44	S203				
S2004	石斧部	ツヌカヘト	48.5	+	32.1		11.8	17.08	S4-14切石目	S204			
S2005	石斧部	ツヌカヘト	40.2	+	14.5		5.6	2.57	S4-61切石目	S205			
S2006	石斧部	ツヌカヘト	45.0	+	31.8	1	7.5	8.05	S206				
S2007	石斧部	ツヌカヘト	27.6	+	15.4	1	5.6	1.79	S4-60切石目	S207			
S2008	石斧部	ツヌカヘト	74.0	+	29.7	1	9.7	12.1	S208				
S2010	石斧	ツヌカヘト	12.6	+	11.5	1	4.3	0.69					
S2011	石斧	ツヌカヘト	19.0	+	14.0	1	2.5	0.56					
S2012	石斧	ツヌカヘト	15.5	+	12.5	1	5.6	0.63					
S2014	石斧	ツヌカヘト	18.0	+	13.5	1	2.8	0.62					
S2015	石斧	ツヌカヘト	17.0	+	16.0		3.2	0.9					
S2016	石斧	ツヌカヘト	19.0	+	14.0	1	3.7	0.89					
S2017	石斧	ツヌカヘト	17.5		12.6		4.6	0.71					
S2018	石斧	ツヌカヘト	24.5		14.5		4.5	1.52					
S2019	石斧	ツヌカヘト	21.8		10.5		2.6	0.54					
S2020	U.F	ツヌカヘト	39.5		19.2		7.5	4.44	S202				
S2021	實底尖端部	ツヌカヘト	29.2		19.8		5.5	2.4	S4-61切石目	S202			
S2022	實底尖端部	ツヌカヘト	29.5	+	22.3		6.5	3.43	S4-60切石目	S202			
S2023	スヌカイバー	ツヌカヘト	57.0		22.5		5.5	19.1					
S2024	実底背(刀頭部)	ツヌカヘト	11.6	+	31.6		11.5	14.8	S202				
S2025	C.F	ツヌカヘト	41.6		20.6		6.5	4.58					
S2026	C.F	ツヌカヘト	37.5		21.5		3.5	3.05					
S2028	C.F	ツヌカヘト	35.5		20.6		5.6	3.76					
S2029	スクレーパー	ツヌカヘト	76.0		53.0		11.6	41.95	S2029				
S2030	R.F	ツヌカヘト	176.0		17.0		3.0	0.92					
S2031	鉛製石器	ツヌカヘト	116.5		57.5		11.5	91.80	S2031				
S2032	銅製石器	ツヌカヘト	27.0		20.7		11.7	7.33					
S2033	銅製石器	ツヌカヘト	26.0		21.5		6.0	3.97					
S2034	打壓凹凸(外縁)	ツヌカヘト	86.5		16.5		15.6	50.26	S2034				
S2035	白漆	ツヌカヘト	14.3	+	14.5		3.6	0.76					
S2036	白漆	ツヌカヘト	14.6		14.5		3.5	0.76					
S2037	白漆	ツヌカヘト	16.0		10.5		3.6	0.8					

大河内遺跡3区出土遺物一覧表

遺物番号 二重番号	X	Y	Z	種別	石寸	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	刃寸(mm)	重量(g)	参考	備考
Q304X				石斧	サスカノト	17.5	9.6	3.4	0.16			
Q304Y				石斧	サスカノト	19.5	14.0	3.0	0.53			
Q304Z				石斧	サスカノト							
Q305X				石斧	サスカノト							
Q305Y				石斧	サスカノト							
Q305Z				石斧	サスカノト							
Q306X				石斧	サスカノト							
Q306Y				石斧	サスカノト							
Q306Z				石斧	サスカノト							
Q307X				石斧	サスカノト							
Q307Y				石斧	サスカノト							
Q307Z				石斧	サスカノト							
Q308X				石斧	サスカノト							
Q308Y				石斧	サスカノト							
Q308Z				石斧	サスカノト							
Q314X				石斧	サスカノト							
Q314Y				石斧	サスカノト							
Q314Z				石斧	サスカノト							
Q317X				磨利石器	サスカノト							
Q318X				石斧	サスカノト							
Q318Y				石斧	サスカノト							
Q319X				U型	サスカノト							
Q319Y				C型	サスカノト							
Q319Z				C型	サスカノト							
Q320X				石斧	サスカノト							
Q320Y				石斧	サスカノト							
Q320Z				石斧	サスカノト							
Q321X				R型	サスカノト							
Q321Y				R型	サスカノト							
Q321Z				R型	サスカノト							
Q322X				R型	サスカノト							
Q322Y				R型	サスカノト							
Q322Z				R型	サスカノト							
Q323X				R型	サスカノト							
Q323Y				R型	サスカノト							
Q323Z				R型	サスカノト							
Q324X				R型	サスカノト							
Q324Y				R型	サスカノト							
Q324Z				R型	サスカノト							

4 新旧遺構名对照表

大河內遺跡

地點名	電話	回憶錄名
新火種-1	2 区	新火種1
新火種-2	2 区	新火種2
新火種-3	2 区	新火種3
新火種-4	2 区	新火種4
新火種-5	1 + 2 区	新火種5
新火種-6	2 区	新火種6
新火種-7	2 区	新火種7
新火種-8	2 区	新火種8
新火種-9	2 区	新火種9
新火種-10	2 区	新火種10
新火種-11	2 区	新火種11
新火種-12	2 区	新火種12
新火種-13	2 区	新火種13
新火種-14	2 区	新火種14
新火種-15	2 区	新火種15
新火種-16	2 区	新火種16
新火種-17	2 区	新火種17
新火種-18	2 区	新火種18
新火種-19	2 区	新火種19
新火種-20	2 区	新火種20
新火種-21	2 区	新火種21
新火種-22	2 区	新火種22
新火種-23	2 区	新火種23
上湖渠-1	1 + 2 区	上湖渠1
上湖渠-2	1 区	上湖渠2
上湖渠-3	1 区	上湖渠3
上湖渠-4	1 区	上湖渠4
上湖渠-5	1 区	上湖渠5
上湖渠-6	1 区	上湖渠6
上湖渠-7	1 区	上湖渠7
上湖渠-8	1 区	上湖渠8
上湖渠-9	1 区	上湖渠9
上湖渠-10	1 区	上湖渠10
上湖渠-11	2 区	上湖渠11
上湖渠-12	2 区	上湖渠12
上湖渠-13	2 区	上湖渠13
上湖渠-14	2 区	上湖渠14
上湖渠-15	2 区	上湖渠15
上湖渠-16	2 区	上湖渠16
上湖渠-17	2 区	上湖渠17
土壁渠-1	1 区	土壁渠1
土壁渠-2	1 区	土壁渠2
土壁渠-3	2 区	土壁渠3
土壁渠-4	2 区	土壁渠4
土壁渠-5	2 区	土壁渠5
土壁渠-6	2 区	土壁渠6
土壁渠-7	2 区	土壁渠7
土壁渠-8	2 区	土壁渠8
土壁渠-9	2 区	土壁渠9
土壁渠-10	2 区	土壁渠10
土壁渠-11	2 区	土壁渠11
土壁渠-12	2 区	土壁渠12
土壁渠-13	2 区	土壁渠13
土壁渠-14	2 区	土壁渠14
土壁渠-15	2 区	土壁渠15
土壁渠-16	2 区	土壁渠16
土壁渠-17	2 区	土壁渠17
土壁渠-18	2 区	土壁渠18
土壁渠-19	2 区	土壁渠19
土壁渠-20	2 区	土壁渠20
土壁渠-21	2 区	土壁渠21
土壁渠-22	1 区	土壁渠22
土壁渠-23	2 区	土壁渠23
土壁渠-24	2 区	土壁渠24
土壁渠-25	2 区	土壁渠25
土壁渠-26	2 区	土壁渠26

地名	桂16	旧地名
上坡27	215	新112上坡
上坡28	214	新110上坡
上坡29	215	新110上坡
上坡30	214	新112上坡
湖1	215	湖8 - 12 - 14 - 15%
湖2	214	湖6湖
湖3	217	湖外湖
湖4	215	湖1湖
湖5	216	湖2湖
湖6	214	湖6湖
湖7	215	湖6湖
湖8	214	湖7湖
湖9	1 - 218	湖1湖
湖10	214	湖1湖
湖11	215	湖2湖
湖12	1 - 218	湖11湖
湖13	214	新113 - 114湖
湖14	214	湖6湖 (南)
湖15	215	湖15湖
湖16	217	湖16湖
头桥1	216	新28桥1

植物試驗

地點名	地圖	距離
樹立木造橋 1	北河第4橋	4km 遠
樹立木造橋 2	北河第4橋	4km 遠
樹立木造橋 3	北河第4橋	4km 遠
樹立木造橋 4	北河第4橋	下 8 - 10m , 72m
樹立木造橋 5	北河第4橋	4km 遠
樹立木造橋 6	北河第4橋	4km 遠
樹立木造橋 7	北河第4橋	4km 遠
樹立木造橋 8	北河第4橋	4km 遠
橋	北河第4橋	4km 遠
橋 2	北河第4橋	4km 遠
橋 3	北河第4橋	4km 遠
橋 4	北河第4橋	4km 遠
橋 5	北河第4橋	4km 遠
橋 6	北河第4橋	4km 遠
橋 7	北河第4橋	4km 遠
萬有山森林	北河第4橋	4km 遠

下坂處物

拍賣品名	其1	拍賣品名
鑲鑽石項鍊	其1	鑲鑽石項鍊,鑲黃金
鑲鑽石耳環	其1	鑲鑽石耳環
鑲鑽石手鏈	其1	鑲鑽石手鏈
手鍊1	其1	なし
手鍊2	其1	鑲鑽石手鍊
手鍊3	其1	鑲鑽石手鍊
手鍊4	其1	鑲鑽石手鍊
手鍊5	其1	鑲鑽石手鍊
手鍊6	其1	鑲鑽石手鍊
手鍊7	其1	鑲鑽石手鍊
手鍊8	其1	鑲鑽石手鍊
手鍊9	其1	鑲鑽石手鍊
鑲鑽石項鍊	其1	鑲鑽石項鍊
鑲鑽石耳環	其1	鑲鑽石耳環
鑲鑽石手鏈	其1	鑲鑽石手鏈
鑲鑽石項鍊	其1	鑲鑽石項鍊

図版1

大河内遺跡



1 遺跡遠景（北から）



2 遺跡遠景（南東から）

図版 2

大河内遺跡



1 3区全景（南東から）



2 弥生時代の集落・土壙墓群（北東から）

大河内遺跡



1 掘立柱建物 1 ~ 3 (北東から)



2 掘立柱建物 1 ~ 3・溝 9 (北から)

図版 4

大河内遺跡



1 3区石器出土状況
(南西から)



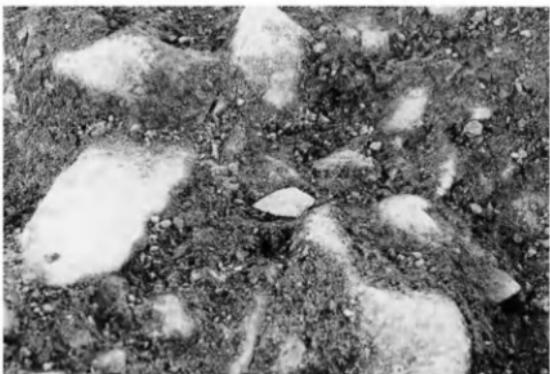
2 3区東壁断面
(西から)



3 有茎尖頭器(S15)
出土状況(南西から)

大河内遺跡

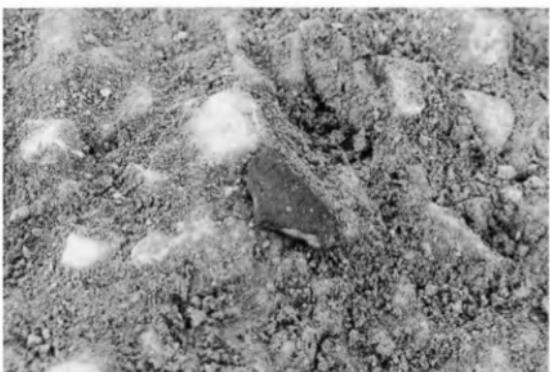
1 有茎尖頭器 (S7)
出土状況 (南西から)



2 石鏃 (S39)
出土状況 (西から)



3 繩文土器 (5)
出土状況 (南西から)



図版 6

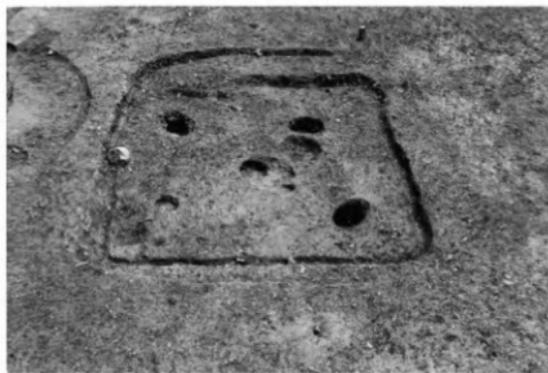
大河内遺跡



1 竪穴住居 2
(南から)



2 竪穴住居 5
(北西から)



3 竪穴住居 7
(西から)

図版 7

大河内遺跡

1 竪穴住居 9
(南から)



2 竪穴住居 6
(南東から)



3 竪穴住居 11
遺物出土状況
(北西から)



図版 8

大河内遺跡



1 竪穴住居 11・12
(北から)



2 竪穴住居 14
(南から)



3 竪穴住居 15
(南から)

大河内遺跡



1 土壙墓1~14
(南から)



2 土壙墓1 (南から)



3 土壙墓5 (東から)

図版10

大河内遺跡



1 土壙墓 6 (西から)



2 土壙墓 12 (東から)



3 土壙墓 15 (南東から)

大河内遺跡



1 壺穴住居17
(東から)



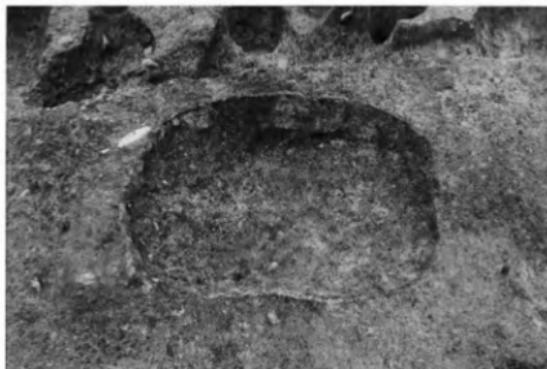
2 壺穴住居17 カマド
(東から)



3 壺穴住居17 内土壤1
(東から)

図版12

大河内遺跡



1 土壌 22 (南西から)



2 土壌 25 (南から)



3 土壌 28 (北西から)

図版13

大河内遺跡



1 土壌30（南から）



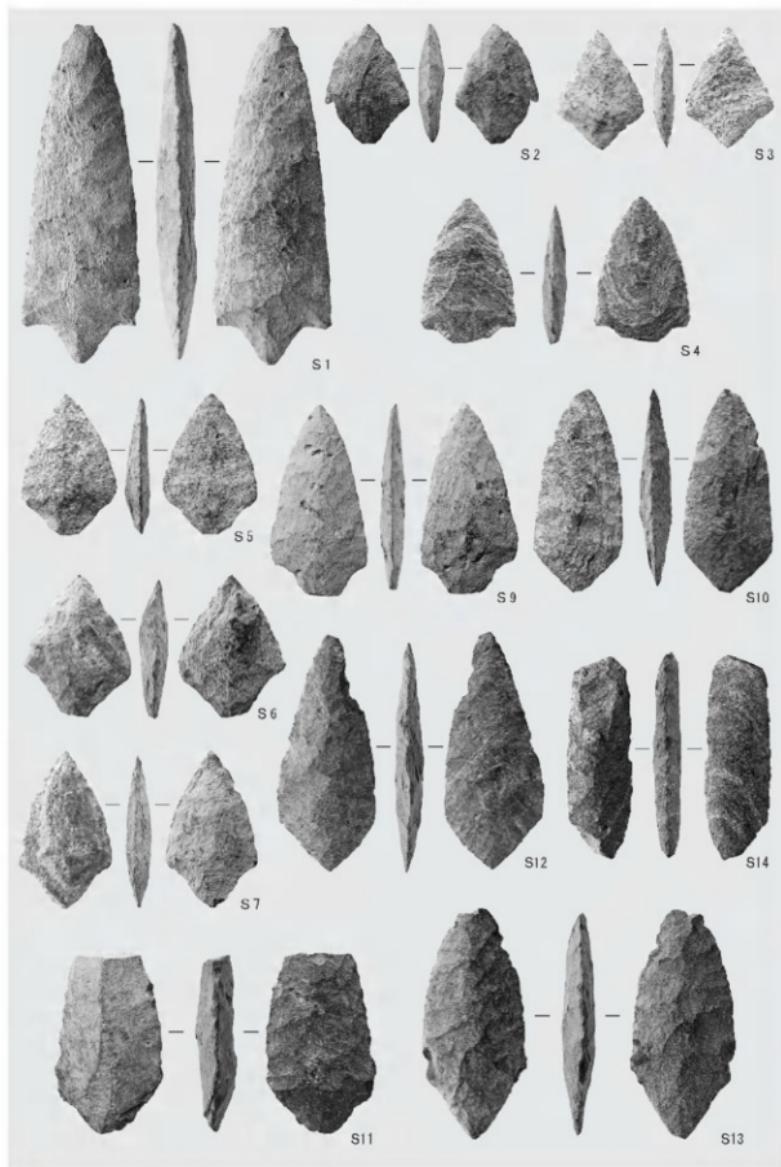
2 溝9断面（南から）



3 柱穴1（北西から）

図版14

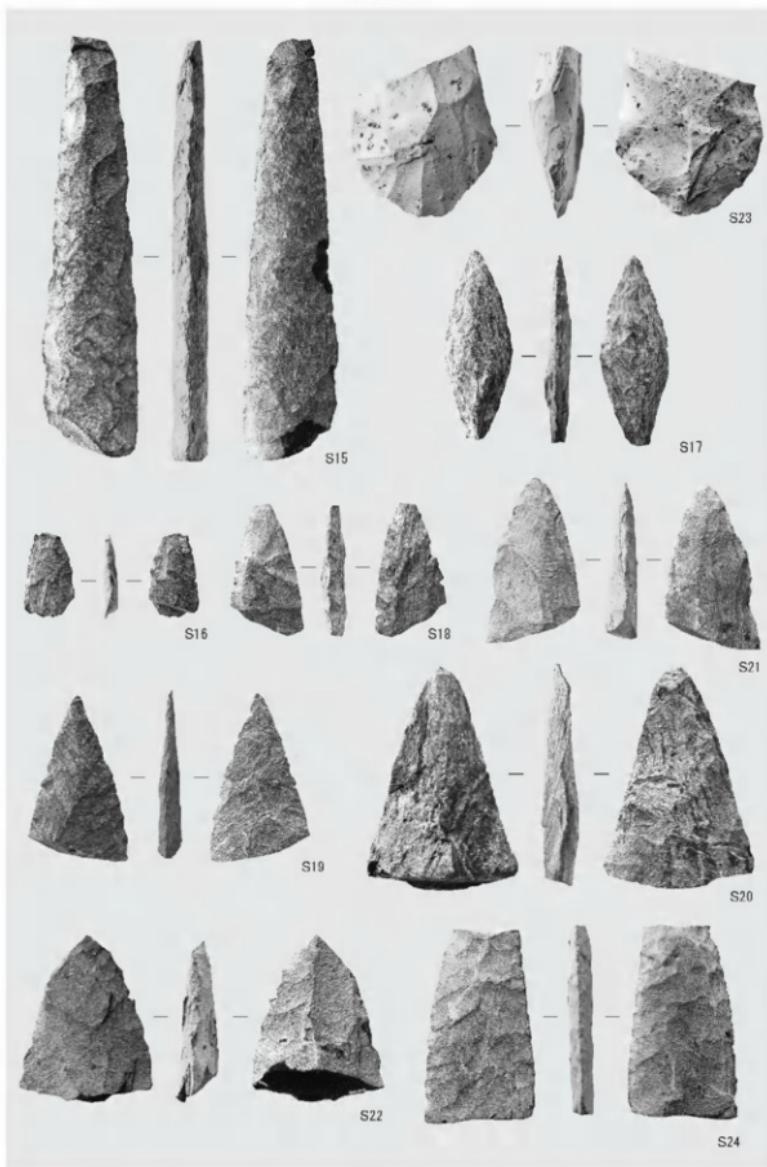
大河内遺跡



縄文時代の石器①

図版15

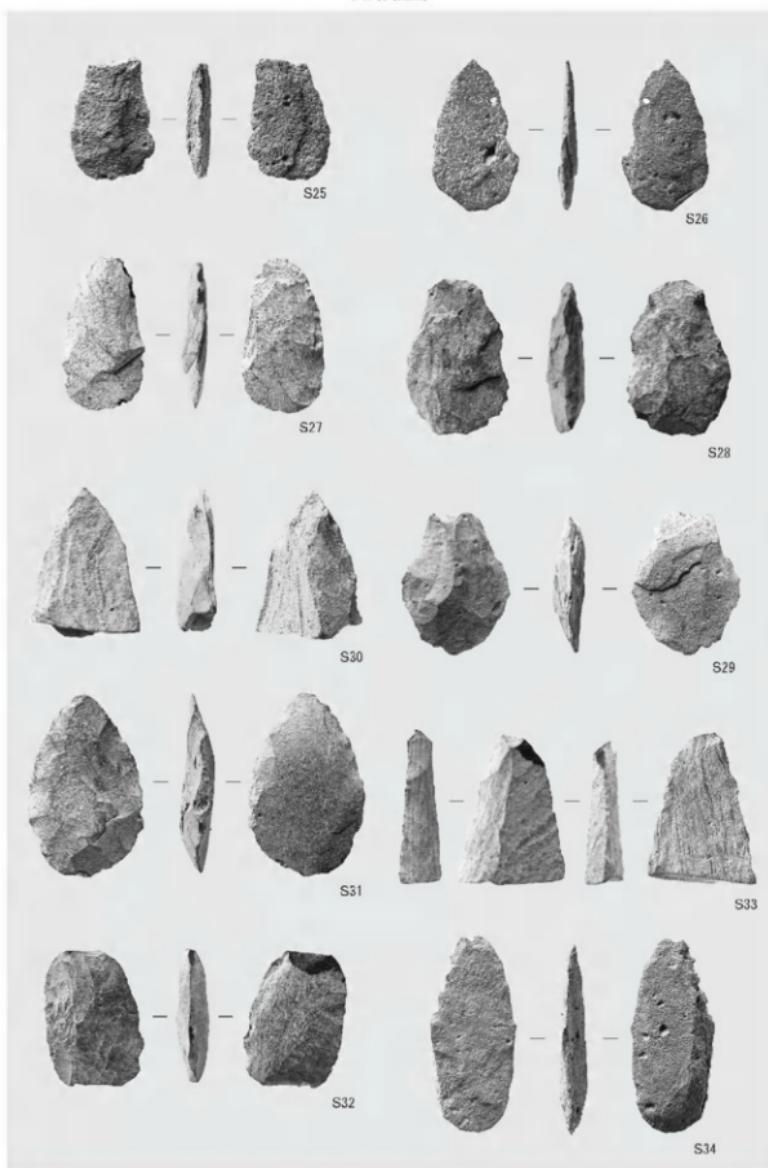
大河内遺跡



縄文時代の石器②

図版16

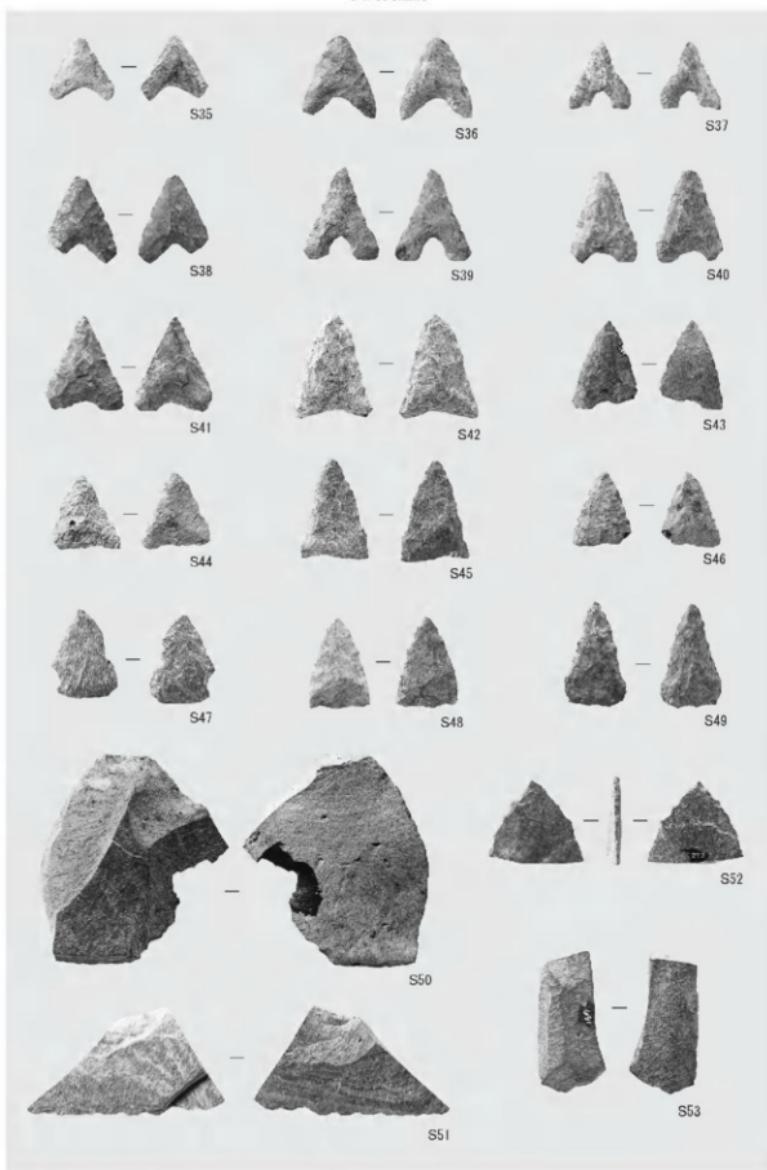
大河内遺跡



縄文時代の石器③

図版17

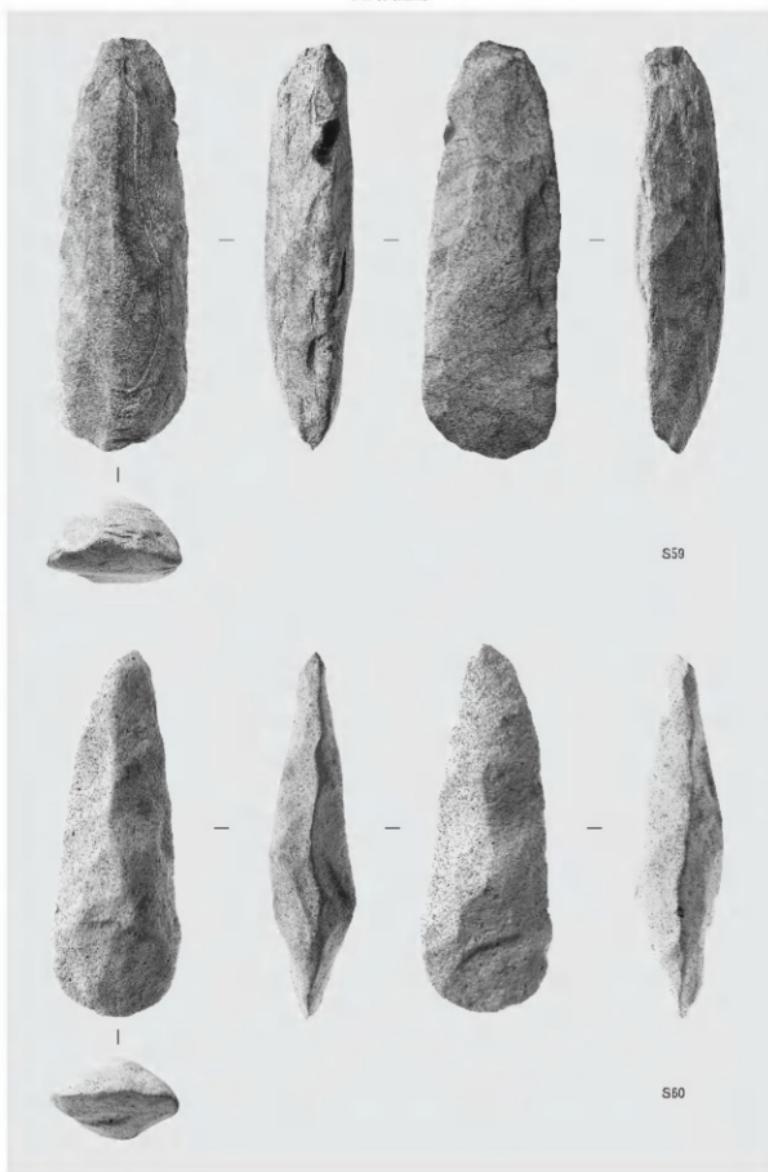
大河内遺跡



縄文時代の石器④

図版18

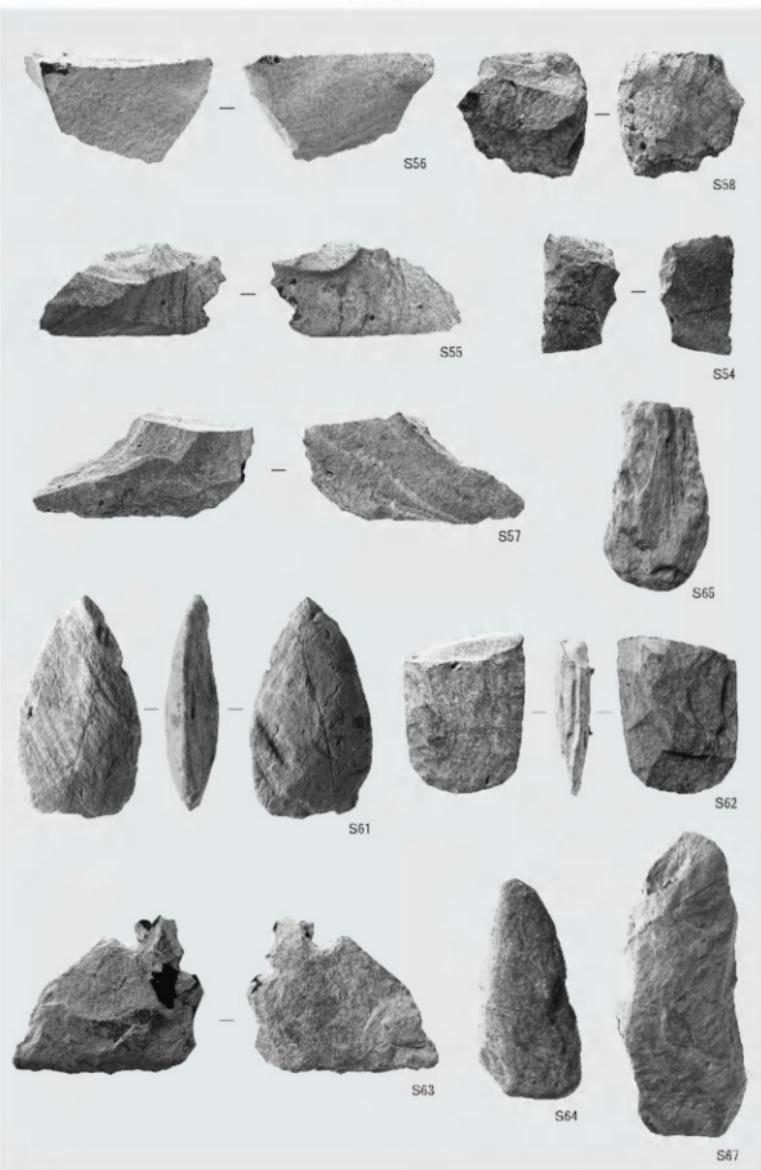
大河内遺跡



縄文時代の石器⑤

図版19

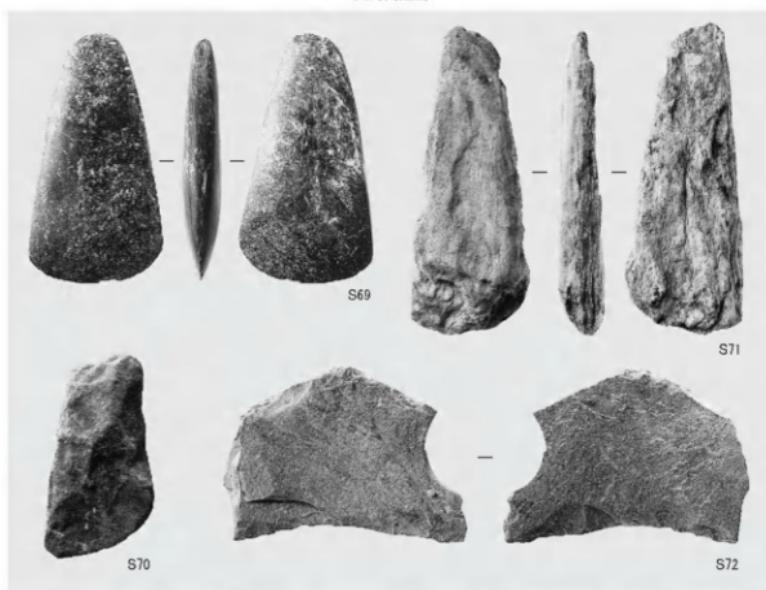
大河内遺跡



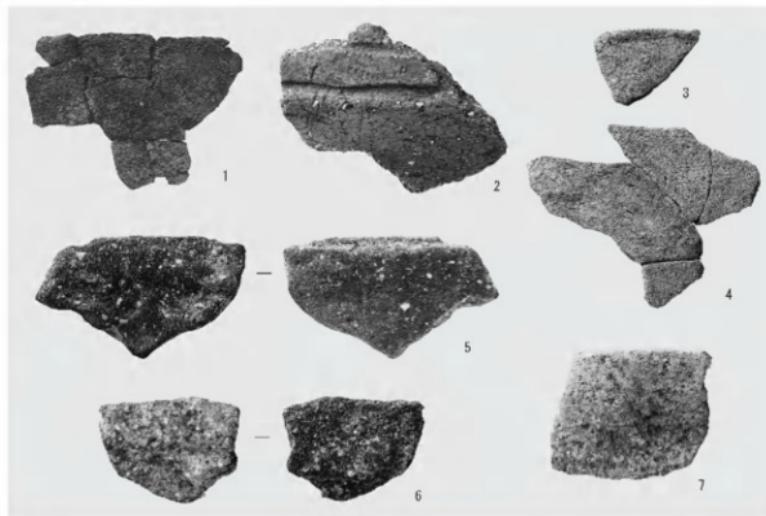
縄文時代の石器⑤

図版20

大河内遺跡

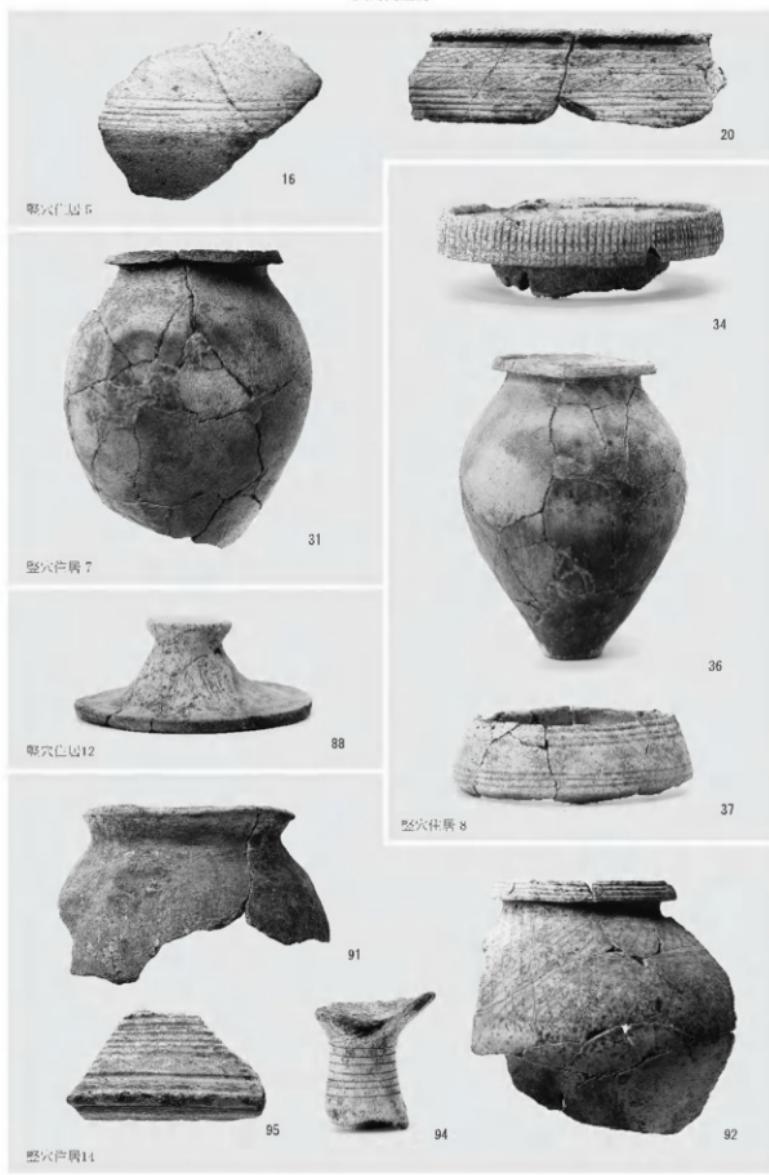


1 純文時代の石器(7)



2 純文土器

大河内遺跡



弥生土器①

図版22

大河内遺跡



48



49



50



51



52

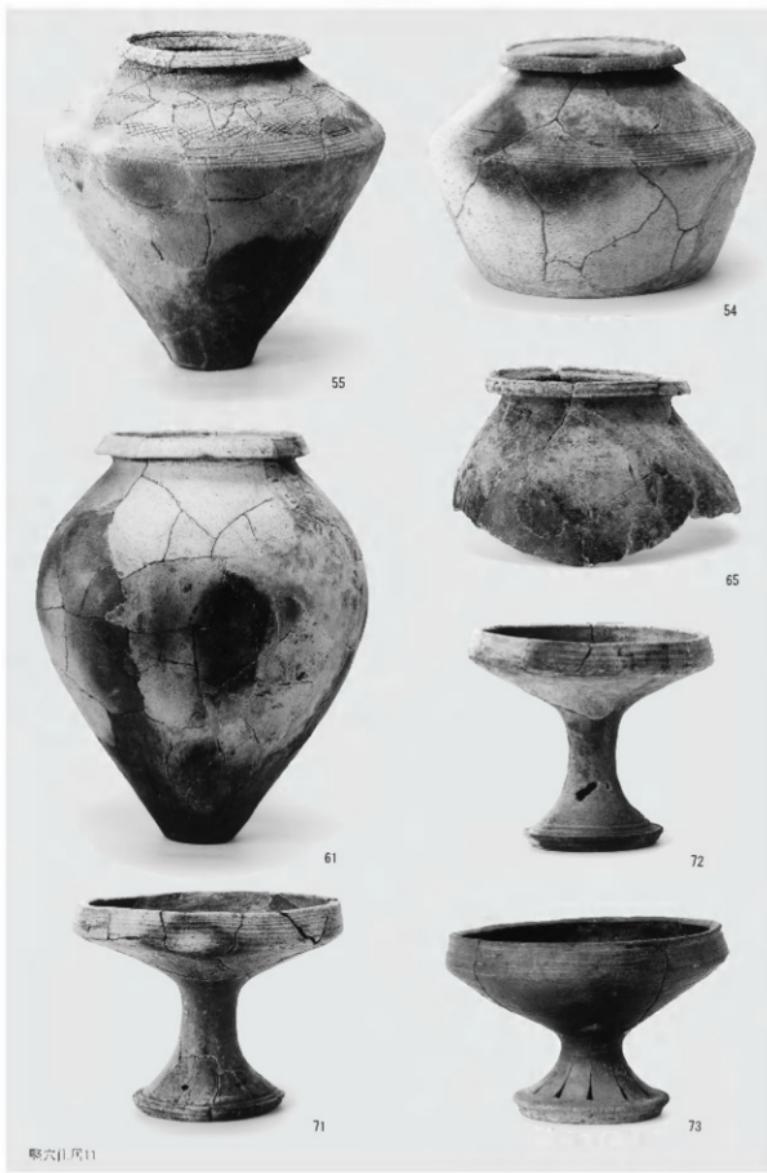


53

整穴住居11

弥生土器②

大河内遺跡



図版24

大河内遺跡



74



76



75



77



駒六目付11

78

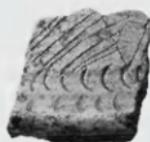


78



駒六目付15

102



103

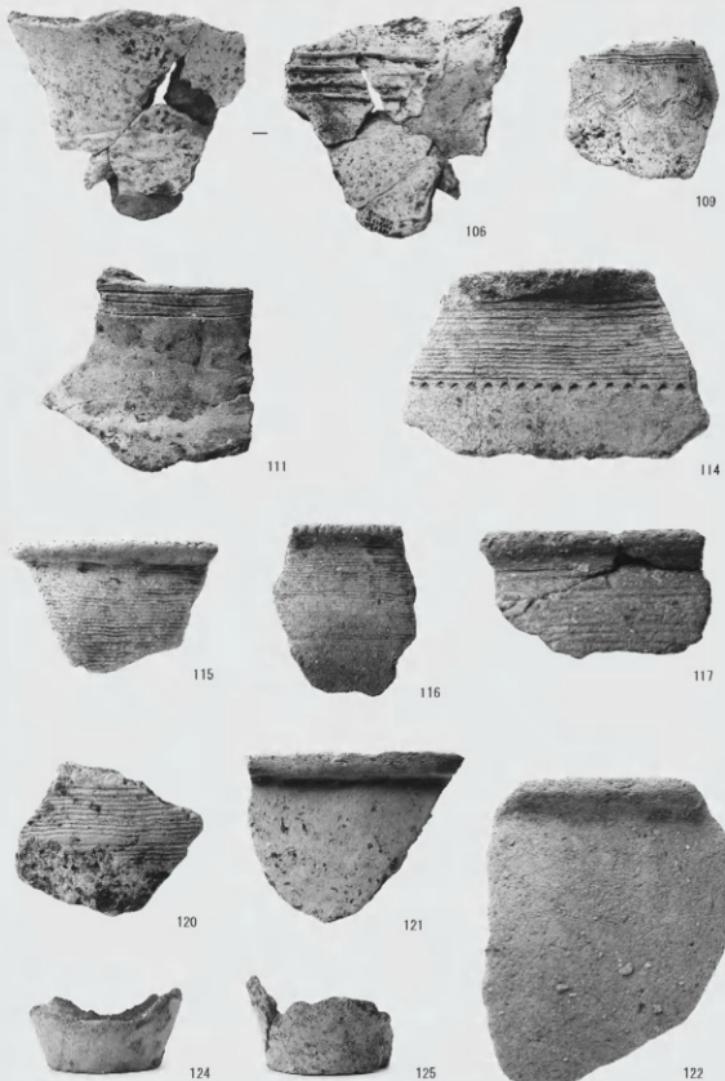


104

弥生土器④

図版25

大河内遺跡

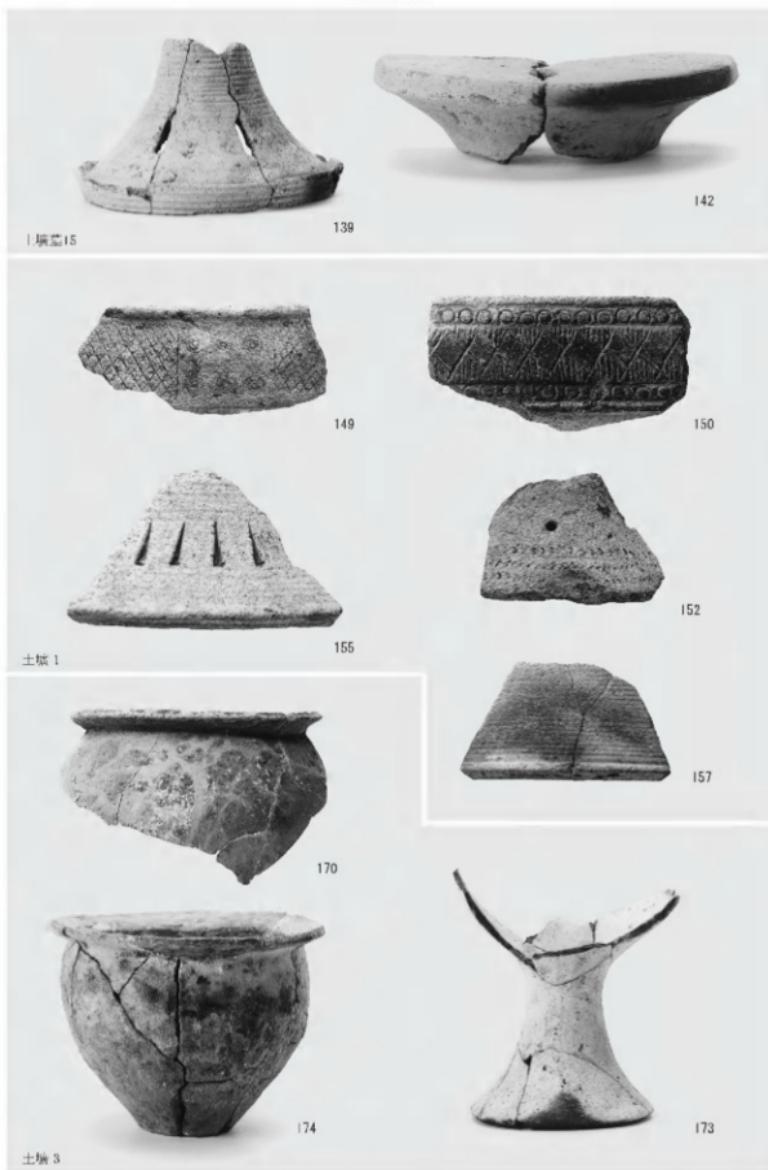


I 墓蓋 1

弥生土器⑤

図版26

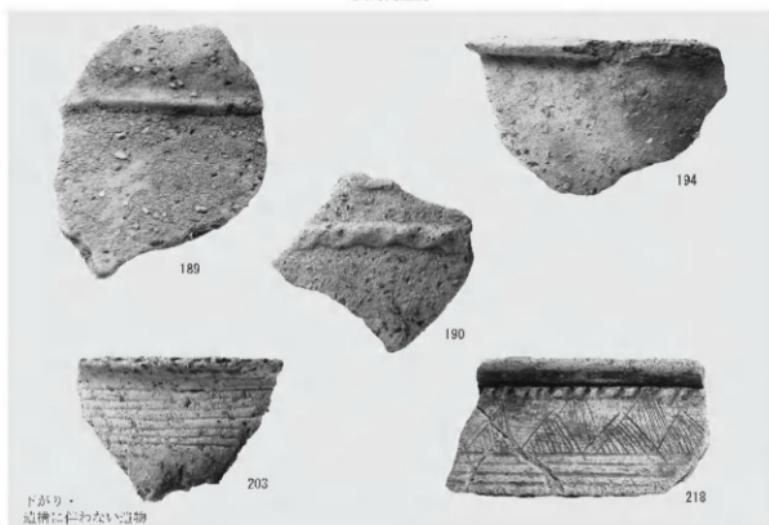
大河内遺跡



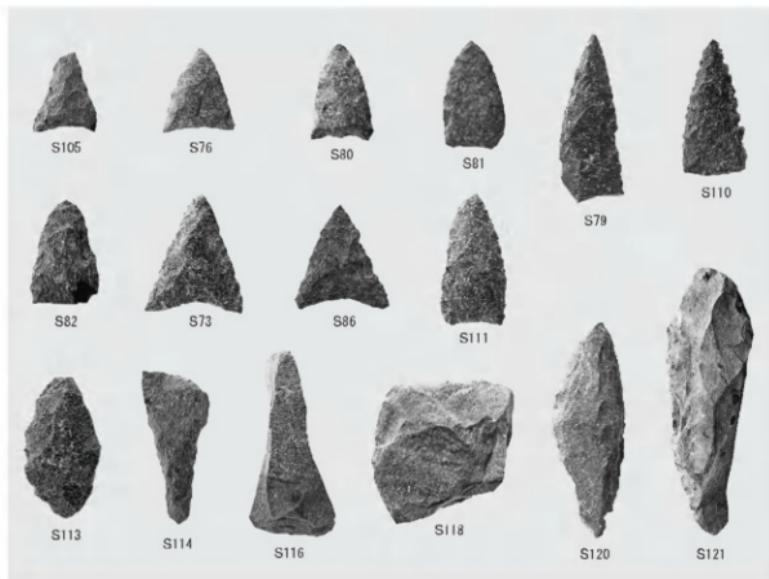
弥生土器⑥

図版27

大河内遺跡



1 弥生土器⑦



2 弥生時代の石器①

図版28

大河内遺跡



S90



S119



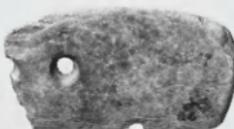
S84



S88



S122



S124



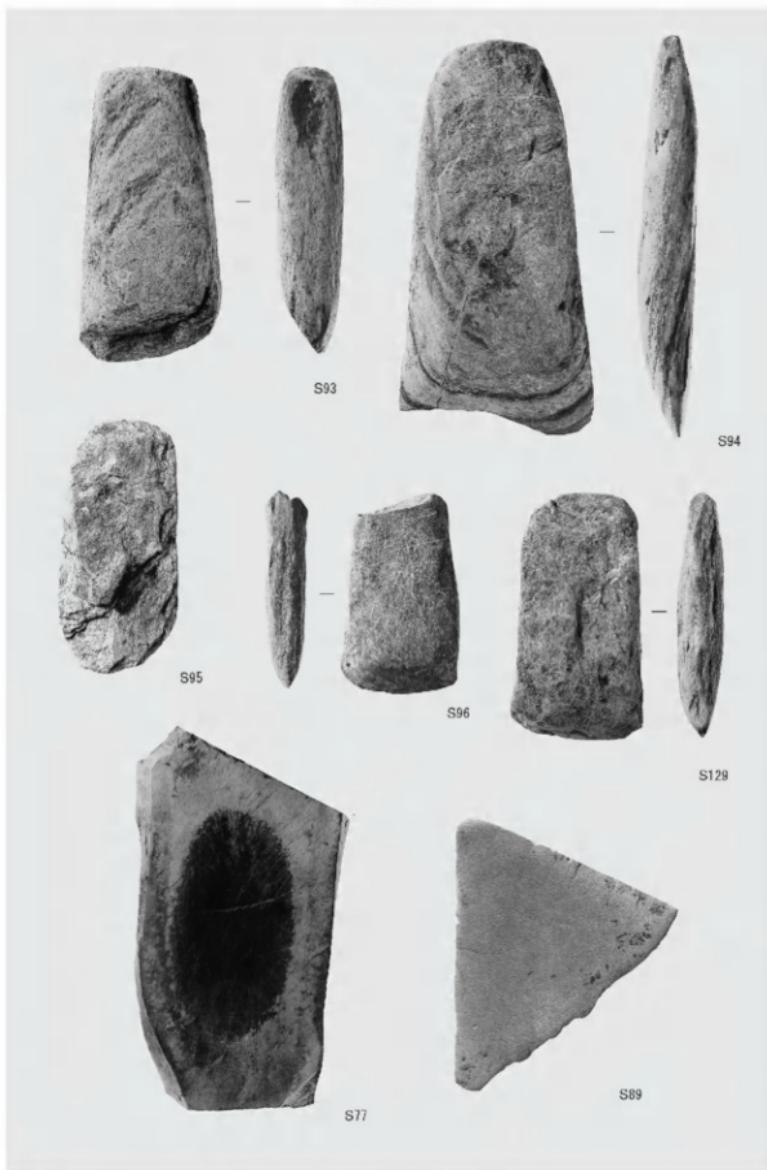
S123



S127

弥生時代の石器②

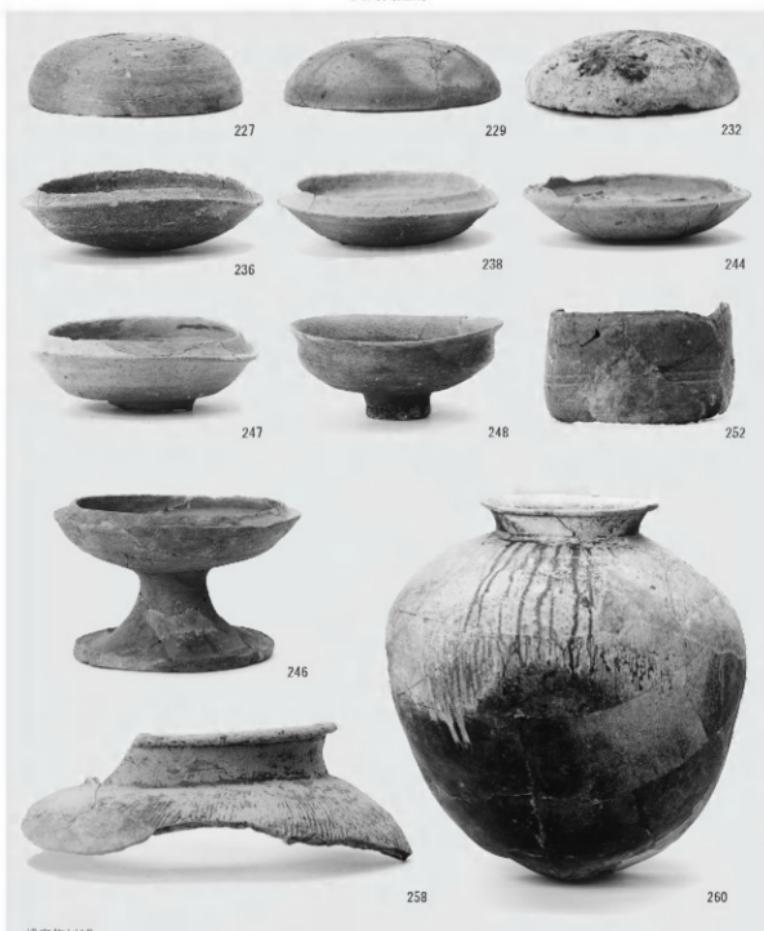
大河内遺跡



弥生時代の石器③

図版30

大河内遺跡



空穴住居17



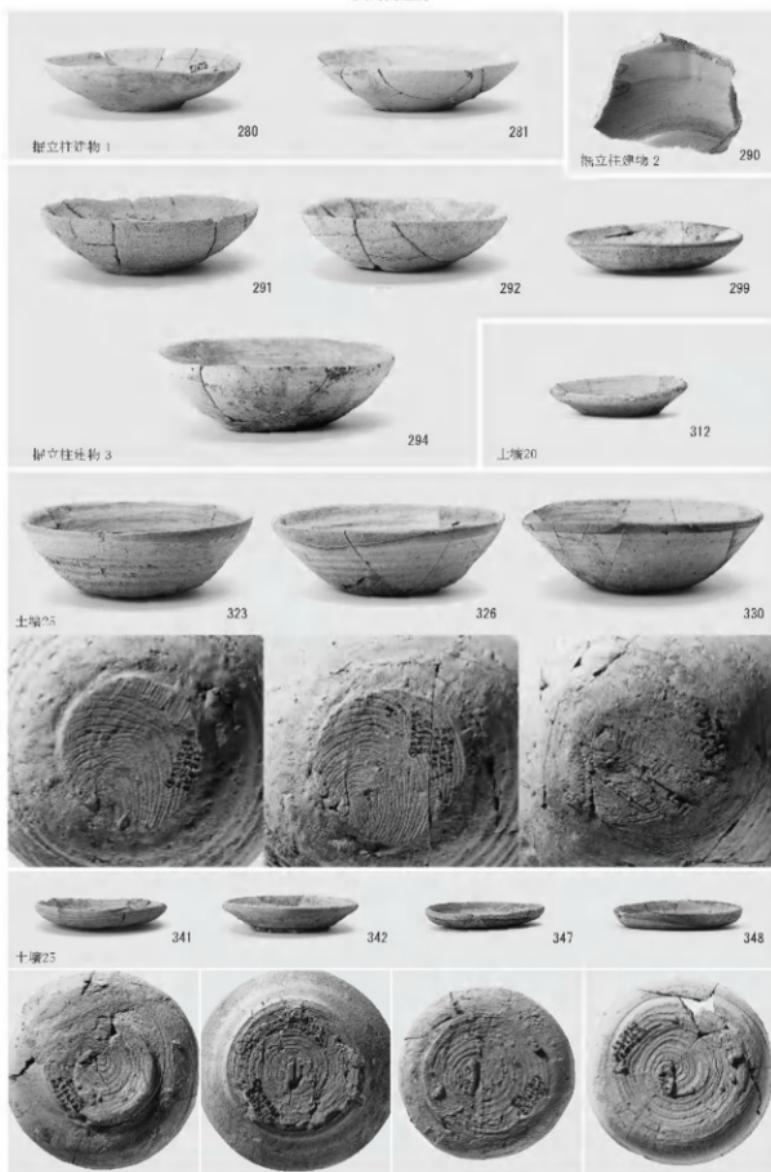
土塼 8

遺構に付かない遺物

古墳時代の出土遺物

図版31

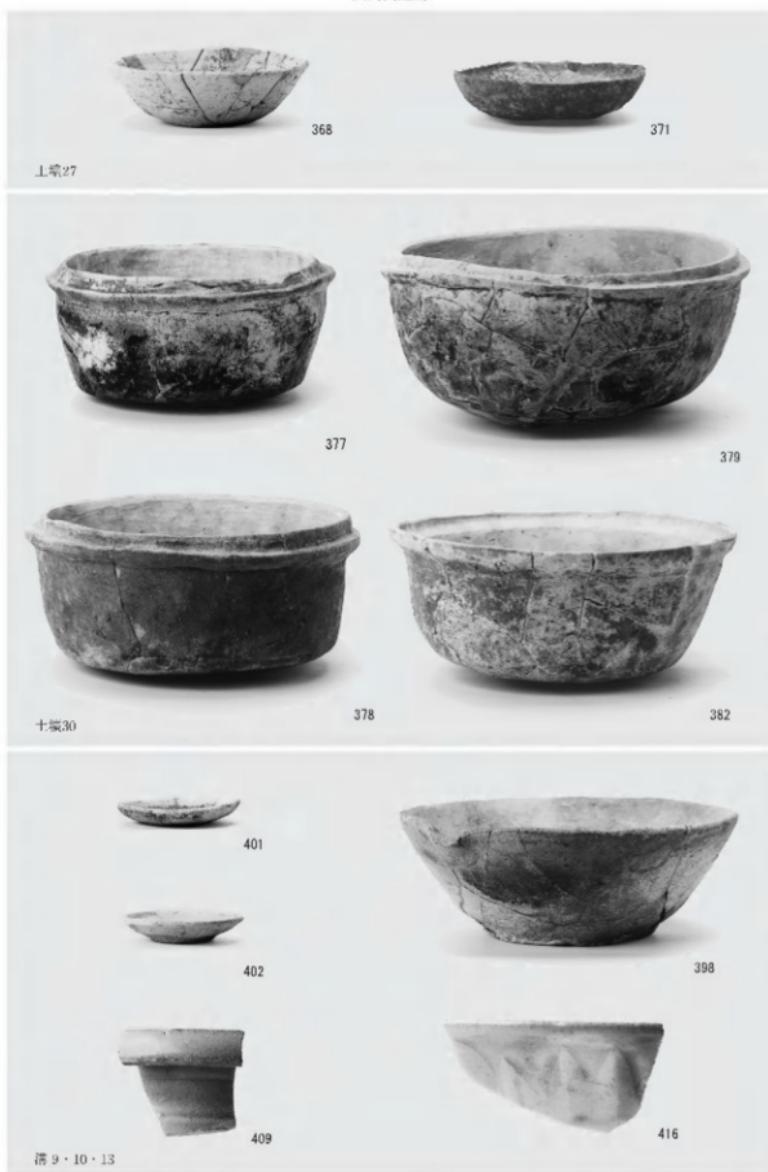
大河内遺跡



中世の出土遺物①

図版32

大河内遺跡



中世の出土遺物②

大河内遺跡



430

431

435



433



438

七穴 1



439

440

459



441

451

461



454



462



466



473



474



475



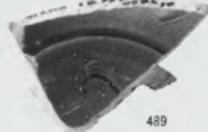
476



477



480



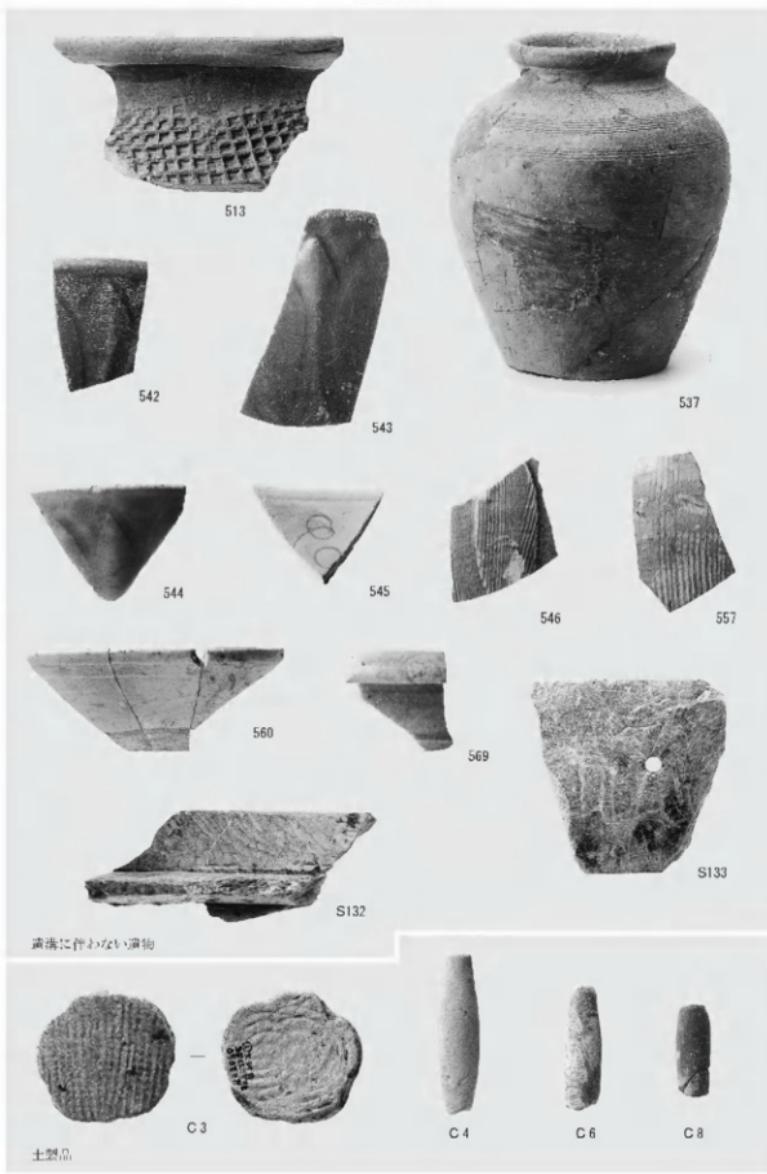
489

その他の七穴

中世の出土遺物③

図版34

大河内遺跡



中世の出土遺物④・土製品

図版35

稻穂遺跡

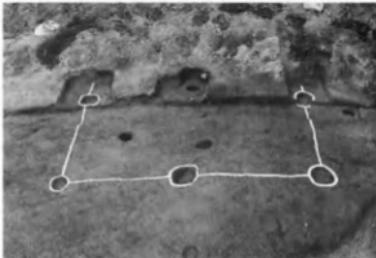
1 遺跡遠景
(南から)



2 北調査区全景 (北から)



3 北調査区 掘立柱建物 1 (南から)



4 北調査区 掘立柱建物 2・3・溝 1 (南から)



図版36

稻德遺跡



1 北調査区
掘立柱建物 3・
溝 1 (西から)



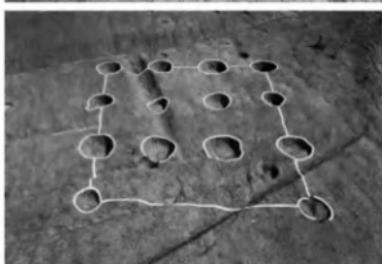
2 北調査区 掘立柱建物 4・溝 2・3 (南西から)



3 北調査区 落ち込み 1 (西から)



4 南調査区
掘立柱建物 7・8
(北から)



5 南調査区 掘立柱建物 8 完掘後 (西から)



6 南調査区 掘立柱建物 5・6 (西から)

稻穂遺跡



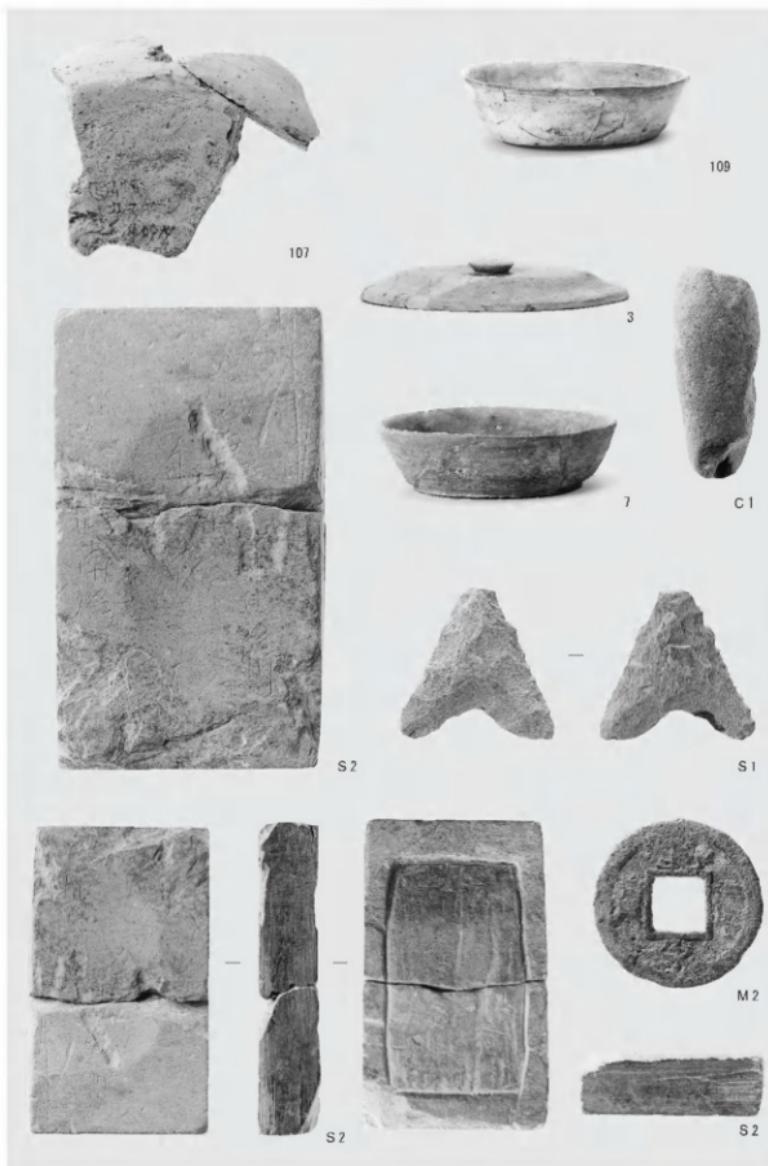
1 南調査区全景（南から）



2 出土遺物①

図版38

稻德遺跡



出土遺物②

下坂遺跡



1 遺跡遠景（西上空から）



2 製鉄炉群全景（南西から）

図版40

下坂遺跡



1 製鉄炉 1 (西から)



2 製鉄炉 1 断面
(北から)



3 製鉄炉 1 に伴う溝
(西から)

下坂遺跡



1 製鉄炉 1 の周溝
(南東から)



2 製鉄炉 2 断面
(西から)



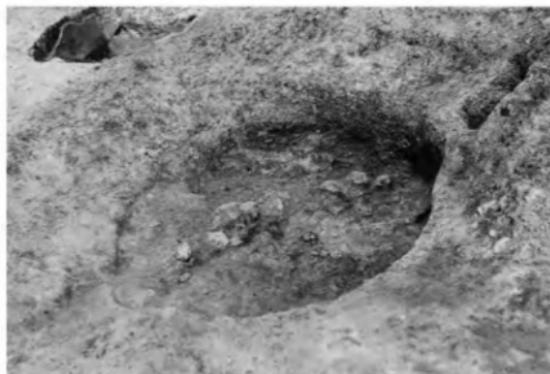
3 製鉄炉 3 焼土
検出状況 (北西から)

図版42

下坂遺跡



1 製鉄炉 3 (西から)



2 土壙 6 (南から)



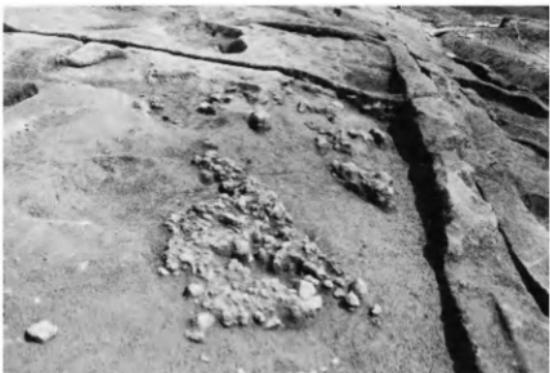
3 鉄滓層断面 (西から)

図版43

下坂遺跡



1 調査区土層断面
(南から)



2 排溝場 (北から)



3 須恵器 (4)
出土状況 (北から)

図版44

下坂遺跡



1 横口付製炭窯 1
(北から)



2 横口付製炭窯 1
煙道 (南から)



3 横口付製炭窯 1
煙出し穴石組の
基部と煙道溝
(北西から)

下坂遺跡



1 横口付製炭窯 I
断面 (南西から)



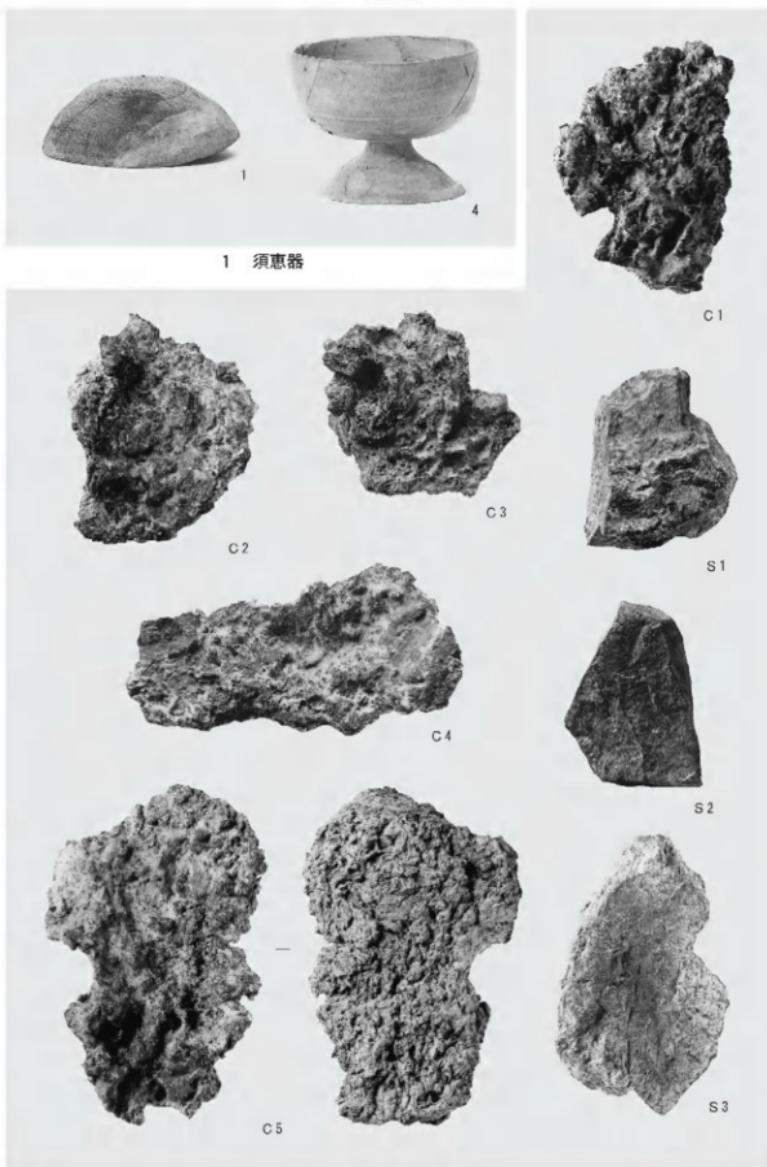
2 横口付製炭窯 I
第4横口断面
(南から)



3 堅穴住居 1
(西から)

図版46

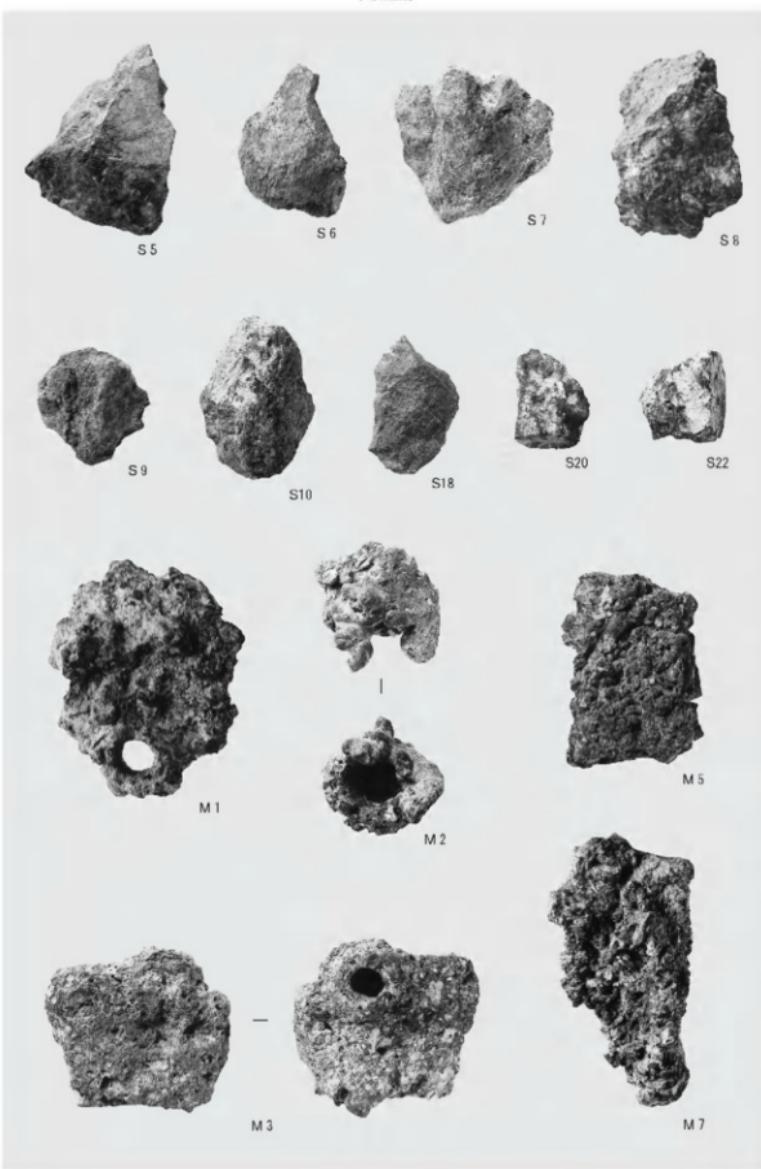
下坂遺跡



2 炉壁・鉄鉱石①

図版47

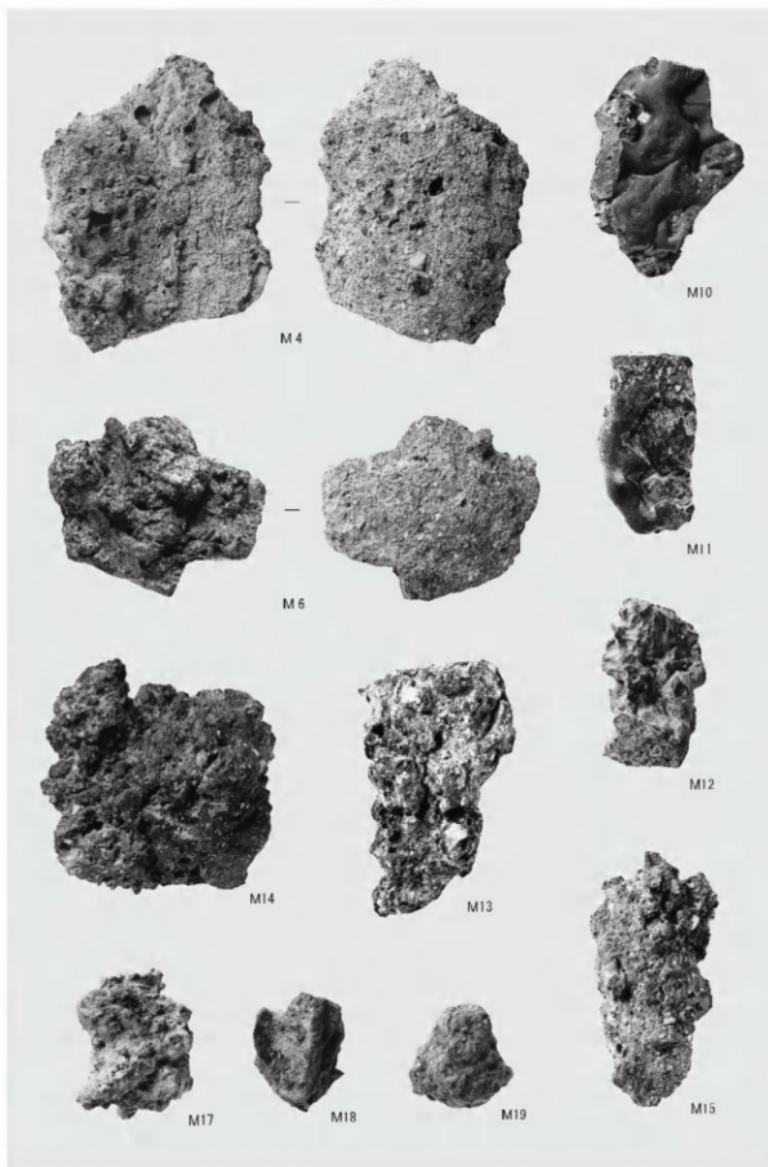
下坂遺跡



鉄鉱石②・鉄滓①

図版48

下坂遺跡



鉄滓②・黒鉛化木炭・鉄塊系遺物

報告書抄録

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 216

大河内遺跡

稲穂遺跡

下坂遺跡

一般国道374号（美作岡山道路）

道路改築に伴う発掘調査 2

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印 刷 山陽印刷株式会社
岡山県岡山市富吉3098-1